

R451.29-Ko13



1200500767075

R451.29  
Ko13  
⑦



始



20-59  
101



# 日本氣象史料

中央氣象臺  
海洋氣象臺  
編纂



R  
451.29  
K013

日本氣象史料

中央氣象臺  
編纂



發行所寄贈本

779  
634

## 序

本邦には地震、氣象等の天災が頗る多い、然れどもこれ等に關する記述は諸種の古記録に散見するのみにして之を一と纏めにしたものは甚だ乏しい、尤も地震に就いては文部省震災豫防調査會編纂の「大日本地震史料」上下二卷があり、略々完璧に近い、氣象に關するものは明治二十七年出版の小鹿嶋 果氏編纂の「日本災異志」と權藤成卿氏編纂の「日本震災凶僅攷」あり、年表としては充分と思はれるが、出來ることならば「大日本地震史料」と同様な氣象史料が欲しいと誰しも思はぬものはない、頃日神戸の海洋氣象臺に於て圖書掛の田口龍雄氏が同臺技師堀口由己博士の指導のもとに氣象史料蒐集の業を起し拮据數年にし漸く成り、茲に『日本氣象史料』と題して刊行することゝなつた、此業を卒るに至れるまでの兩氏の苦心一方ならざるは云ふまでもないが、資料の蒐集には東京帝國大學史料編纂所、帝國圖書館、大阪府立圖書館、神戸市立圖書館の各位の一方ならざる御好意によるところ多し、茲に銘記して感謝の意を表はす。

昭和十四年二月

中央氣象臺長  
海洋氣象臺長

岡 田 武 松

## 例言

田口龍雄

一 小著は日本の往古に於ける氣候並に氣象現象に關する諸般の史料を若干の分類の許に、年代順に編纂せるものである。之が編纂の主たる目的は本邦の歴史時代に於ける氣象及び氣候に關する資料を求めんとするにある。従つて編纂の態度は出來得る限り氣象學及び氣候學上の資料として整備し、併せて之が利用上の便宜に就いても考慮を拂つた。史料中には間々異同、疑義あるものも見受けられ、之等は資料としての完璧を期する爲めには充分な考證、論議を必要とするのであるが、今遽に之を果たし得ない類も多く、未勘のまま採録されたものも少くない。

二 史料蒐集の年代は吾が國建國の古より、統整ある近代氣象觀測事業の確立期たる明治二十年に至る大凡二千五百有餘年を目標とし、又其の範圍は帝國の全領域に亘る事を旨とせられたが、朝鮮、樺太、臺灣等に關するものは便宜に乏しく、今は省略されてゐる。

朝鮮に於けるこの種史料の一部は「朝鮮の災害」(朝鮮總督府發行)の中にも求め得るが都合で今は採録しなかつた。

三 本書に採録せられた氣象現象は左記十五編に大別され而して其の分類要領は大體次の如く定められてゐる。

### 第一編 暴風雨

典型的なものとしては激烈な風雨の竝發現象を指す。但し單に大風とのみ記録され、雨に關する記事を缺くものも參照の便宜を考慮し本編の中に採り入れた。又一地方では大風、他の地方では大雨洪水を主現象として記載された場合も、夫れが關聯有るものと認められる、限り茲に採録した。

大風雨或は大風に關する史料は甚しく多數にのぼり編纂上、之等に若干の制限を加へ選擇を施す事が適切と考へられたので、一般には比較的激烈、優勢なもののみを採る事とし、その程度を推察するの手段として直接的な被害の有無、範圍の廣狹等が可なりに重要視されてゐる。

但し夏秋の候に於けるものに在りては被害の特記なきものも勉めて採録した。之は特に颱風關係史料を洩らすまいとの意圖に出でたものである。所謂暴風雨も其の機巧により氣象學上の術語を以てすれば、更に數種の項目に分類し得るが單に史料の記事に據つては判定に困難有るものも少くないので、今は専ら史料記事の文字に則して概括的に分類した。併し地方的な雷雨に隨伴せる強烈な風雨現象や旋風及び類似現象は本編からは除外した。又難船記事等に關する海上の暴風雨は一般には省略し、陸上の暴風雨に關聯あるものに限り之を蒐集した。

### 第一編 洪水

豪雨にもあれ霖雨にもあれ、若干の被害を惹起せる洪水は總て本編に收めた。但し暴風雨によつて生ぜざるものは前編との重複を避けて省略し、又雷雨によるものも一般には除外するを原則としたが洪水地域が比較的廣大で參照の便宜の多いものは本編中に採つた。總じて風に關する記事を有せぬ、被害を生ぜる程度の洪水が本編分類の骨子となつてゐるが、往時に於ては記載の不統一は免れ得ず、例へば大風雨を指しても、一は其の風力のみを記し、一はその洪水のみを稱せる例が屢見受けられ、從つて此の史料中には暴風雨關係の史料も少からず混入してゐるものと見るべきであらう。地震と併發せるもの、或は降雨についての詳記無き洪水も顯著なものは便宜、採録した。

### 第二編 雷

雷に關する史料は比較的強烈なもののみを選ぶ事とし、大凡次の三種類を其の主要なものと定めた、即ち落雷、電雪を降らせるもの及び被害を惹起せる強風或は豪雨を伴へるもの等である。但し旋風に隨伴せるものは次の第四編へ譲つた。本編には〔附〕を置き「無雲雷」に關する若干例を加へた。

### 第四編 旋風

優勢な旋風現象が本編の主題である。多くは記事の文字に依り分類をなしたが、雷と並發せるもの或は暴風雨中に生ぜるもの等にして甚しく小規模、或は記載の曖昧なものは夫々の編中へ含ましめたものも少數例がある。龍卷は勿論、こゝに分類されてゐるが總べて急激な風雨記事に大蛇、蛟龍等の挿話を持つ類は、龍卷に關聯多きものとして茲に加へた。又「衝風」「一目連」等特殊な暴風も分類上の便宜から此處に加へた。

### 第五編 旱魃

旱魃史料の選定は、月餘或は數月に亘つて降雨なかりしもの、被害の顯著、若しくは相當廣範圍に亘る旱魃を主とし、若干の祈雨史料を加へた。祈雨(雨乞)は、旱魃の參考史料として一應注意に値するが元より不備は免れず、且又其の史料は甚だ多く枚舉に暇のない有様で旁々一般には省略し要用あるものに限つた。

### 第六編 霖雨

霖雨史料は、旱魃に對應する便宜有るものとすべく、月餘以上に亘る降雨、被害を生ぜる長期降雨を主とした。但し霖雨の結果、明かに洪水を現出したものは第二編との重複を避けて省略した。原則として祈晴史料を省いたのは、旱魃史料より祈雨に關するものを省略したのと同様な理由による。

### 第七編 雪

雪の史料は左の四章に細別し夫々、年代順に配列した。

四

## 第一章 大雪

之は被害の事實をも重視したが別に近畿、關東等の地域に於けるものに就いては積雪量に依つても採る事とし一尺程度以上を大雪として採つた。一尺を其の基準としたのは、之等の地域に於いては屢々この程度を以て大雪と呼んでゐる史料記事の態度にならつたものである。比較的多雪地方に就いては勿論右の基準は適用せず、専ら史料記事により判断し、取捨を行つた場合が多い。概して大雪記事の中には、發現の年號のみしか知れないものも多く、之等は年初に起りしや年末に起りしや不明で、又大雪とのみ誌して其の深度、被害を明記せざる類も多く、一般に不備多きものは省略した。

## 第二章 不時降雪

太陽曆日に換算して四月より十月に至る期間の降雪を茲では指してゐる。京都及び東京地方に於ける近代の観測結果では最早及び最晩降雪期節は十一月及び四月となつてあり、この期節以外の降雪を不時とし異常と見做したものである。四月をふくまされたのは雪の終期に關する資料を得る便宜ある爲めである。

## 第三章 異雪

こゝに異雪と呼ぶのは普通の雪色にくらべて異なるものの謂で、紅雪などの類を總稱したものである。

## 第四章 寡雪

異常と考へられる寡雪史料を収めた。一般に之等雪に關する史料中には季節異常に關聯を有するものが多く、参照が必要である。

本編に〔附〕を置き「雪華圖」二葉を掲げた。

## 第八編 雹

雹は雹害を生ぜる場合を主要なものとし、その他特別な撰擇を行はずして史料を蒐集したが雷に隨伴せるもの及び季節史料として採録されたものは除外した。雹の字義は、時に著しく混同し霰、突雪等と明確な區別を失つた例も乏しくない。従つて確然たる分類を行ひ得なかつたものも多い。

霰に關する記録は稍々乏しくて別に編を設けるに至らず、その大きさを主としたものは本編に、他は季節異常關係史料として取扱はれた場合が多い。

## 第九編 霜

霜の史料は、霜害記事及び不時降霜を主眼として選んだ。こゝに不時と呼ぶ期間は五月乃至十月（太陽曆）と定めた。之は京都及び東京の最近半世紀の観測結果に基き、特に霜の初、終日資料を得る便宜をも考慮して定めたものである。

## 第十編 雲

雲の史料としてはたゞ特徴あるものを洩らさない事に努めた。併し、雲と呼ばれたものの中には、稍内容に不適なものも見受けられるが、今は多くは記事の文字により分類する事とした。

## 第十一編 虹及暈

虹と暈とは古記録中には彼我混同した例が甚だ多いので特に編を分たず参照の便宜から一括する事とし第一章を虹、第

五

二章を暈とし夫々年代順に配列した。

## 第一章 虹

多くは記録の文字によつて分類したが、今日謂ふ所の虹以外の光象も可なり多く含まれてゐる。

## 第二章 暈

日月暈に關する史料を集めたものである。兩日或は三日並見の類は、今日の所謂、幻日に當ると解される。惣じて雲、虹、暈等の記録中には意味の混同或は不明のものも多く、特に注意を要する。

本編に〔附〕を置き、歴氣樓の史料兩三種を掲げた。

## 第十一編 霧 及 霾

霧は直接被害をもたらす事稀で特徴ある史料に乏しく、僅かに數記録を得たのみである。霾は今日一般には又黃砂と稱されるものであるが、同じく薄明現象の因を成し往古には屢々霧の名で呼ばれた例も見受けられるので便宜この編に纏めた。

## 第十三編 赤 氣 (極光)

往昔 赤氣と呼ばれた類の中には今日の所謂極光に當るものが含まれると稱せられるので採録した。その際 白氣、黒氣、雲氣等も一應拾ひ採つたが、内容の餘り明瞭でないものも多い。

## 第十四編 季 節

本編は二章から成り、一は景象期日に關するもの、二は季節異常に屬するものである。

### 第一章 景象期日

本章は更に二項目に分たれ (一) 櫻花季節 (二) 初雪期日 となつてゐる。

この兩者を主とした理由は、相當長期に亘る史料が得易く且つ一般にも若干の感興に値すると考へられたからである。櫻花季節の史料中には適切ではないが關聯ありと解されるもの、或は稍々疑はしいもの等も參照の爲め採り入れたものがある。

初雪期日の史料は原則としては初雪と特記されたものを主としてゐるが十一月(西曆)中の降雪も便宜よくましめた。初雪なる呼稱は時に初積雪と同義語として用ひられたと考へられるものも多い。

### 第二章 季節異常

之も大別して二項となつてゐる。一は數日乃至月餘に及ぶ氣温の季節異常、二は動植物景象に於ける季節異常である。氣温の季節異常史料には屢々不時の雪、雹、霜などの史料が加はつて來る。之等を特別な編中に分類するか、本編に入れるかの區別は編者の判断によつたものも少くない。

動植物季節異常は主として植物の狂咲などを採つてゐる。

## 第十五編 惟 雨

一般降水現象に屬さざる異物の降下を假りに惟雨と稱し 一括、本編を成した。尤も天泣、黃雨など惟雨と呼ぶには不適なものも有るが、之は他に適當な分類項目がなかつた爲めにこゝに入れたものである。元來、惟雨記録の中には氣象史料としては不適當なものも多いが、一應蒐集して見たものである。「惟雨」の名は「和漢三才圖會」天象類「惟雨」に據つた



ものである。

四 分類の要は大體以上の如きものであるが、之は勿論、史料索覧上の便利に資せん爲めの處置に過ぎないものである。現象の中には單獨に發現せず、問々數項目にわたる類や、又史料の記事が簡單に過ぎ意味の明確を缺くもの、或は呼稱の不備、不統一より生ずる混亂等の爲めに嚴密な分類の至難な場合も元より少くはない。併發現象は必要に應じ數編へ重複掲載し其他種々の配慮は盡したが未だ全きは期し難い。資料として充分活用する爲めには史料全般に亘つて周到な参照精査が必要である。

右十五編の中 第一編及び第二編は就中最も入念に取扱はれてゐる。之は主として、颱風關係史料を完備せんとする、本編纂の主要なる目的によるものである。一般に暴風雨、洪水等に於ける如く被害の有無、輕重を史料取捨の一條件とした場合にも時代及び地域により必ずしも劃一的な取扱はなせず、比較的上古に屬するもの及び邊境の地域に關するもの等に於ては被害の輕微なるもの或は全くそれに關する記事を缺くものも採録した。この様な手法は史料全般に亘つて採用せられてゐる。氣象史料として採録すべき現象の範圍を定める事には種々な見解が豫想される。例へば火災、疫病、飢饉等も屢々氣象學上の研究對象となつたのであるが、今はそれ等にまでは及んでゐない。

五 本編纂の史料として閱讀、參照せられた史料は約五百種であつて其の概要は卷末の附録中に掲載せられてゐる。元より之等の數は未だ甚だ乏しい憾みあるものであるが、編者の今の立場に於ては殆ど最善を盡したに近いものである。史料の選擇は多く『大日本史料』及び『史料綜覽』（孰れも東京帝國大學 史料編纂所編纂）に準據し、主として神戸市立圖書館所藏書に就き涉獵し 大阪府立圖書館、東京帝國圖書館、東京帝國大學史料編纂所に於て補遺を行つたものである。種々な點で便宜に乏しい所謂地方在住の編者にとつては、手近に充分な史料を求め得なかつた事は、詮ない事ではあるが甚だ心残り多い事で、將來更に之が完成への努力を續けたい覺悟である。又多く復刻、活字本に據つてゐる事とて誤植、其の他による不備からも到底免れ得ないであらうし、或は史料の取扱に關する諸

般の教養に乏しい爲めに思はざる過誤に陥つた點も多々あらうかと考へられ、旁々讀者の御教導を仰ぐ次第である。

六 史料の記載、配列は次の順序に依るを通例とした。即ち (一) 現象日附 (二) 綱文 (三) 史料 の三部分より成つてゐる。夫等に就いては又次の様な配慮が成されてゐる。

(一) 現象日附 これは先づ日本曆で示した。現象が數日乃至數月に亘る場合には特に其の中の顯著な事實に着目して日附としたものも多く頻發現象に於ては簡略に取扱つたものもある。總て年月日に關する干支は省略を通則とし、異同あるものに限りに採録した。日本曆日附に對應する西洋曆日は種々な點で便宜多いものと考へられたので括弧を施して附記した。茲に言ふ西洋曆では西曆一五八二年迄はユリウス曆、其の以後はグレゴリオ曆が採用されてゐる。

この曆日の換算の爲めには次の諸著が隨時使用された。

『三正綜覽』 内務省地理局編纂

『自元祿十三年 陰陽曆對照表』 外務省文書課

『天明五年 陰陽曆對照表』 朝鮮總督府觀測所編纂

『年代對照便覽』 神田 茂編

猶ユリウス曆日をグレゴリオ曆日に換える爲めには左の表を用ひる。(この場合、三月が基準となる)

|    |       |       |               |    |              |               |     |
|----|-------|-------|---------------|----|--------------|---------------|-----|
| 西曆 | 五〇〇—  | 六〇〇年  | ユリウス曆日に加ふべき日數 | 二日 | 西曆一〇〇〇—一三〇〇年 | ユリウス曆日に加ふべき日數 | 七日  |
| 西曆 | 六〇〇—  | 七〇〇年  |               | 三日 | 西曆一三〇〇—一四〇〇年 |               | 八日  |
| 西曆 | 七〇〇—  | 九〇〇年  |               | 四日 | 西曆一四〇〇—一五〇〇年 |               | 九日  |
| 西曆 | 九〇〇—  | 一〇〇〇年 |               | 五日 | 西曆一五〇〇—一五八二年 |               | 十日  |
| 西曆 | 一〇〇〇— | 一一〇〇年 |               | 六日 |              |               | 以後略 |

現象に關する月次のみが知れてゐて日附を關くものは其の月の朔日より晦日に至る西曆日附を與へ、又年次しか知れないものには其の年次の元旦に相當する西曆年次を當てるを原則とした。一般に日附の不備なものは史實も多く不確實を免れないやう

である。

原則として現象の發現日附を採つた事は云ふまでもないが古記録中には該現象に關する報告の日附、或は賑給、救助等に關する日附と混同し夫々の判別の困難な場合も多いので斯様な場合には史料の記載の際に少しく意を用ひて注意を促した。

往時には丑の刻を以て晝夜を分ち、日附を替へる風習のあつた事も考慮し、日附を定めたものもある。

琉球の史籍『球陽』は元來、琉球の年號によつてゐるのであるが之も本邦の年號に統整した。但し月日のみは原書のまゝで、従つて之の部分は當時の支那曆に依つてゐる譯である。

和洋曆日の換算表中『三正綜覽』は甚だ多數の誤記がある。『年代對照便覽』は取扱が最も便利に工夫されてゐるが之にも誤植は見受けられる。

(二) 網文 之は簡明に現象の起つた場所及びその現象の性質、勢力等を摘記した一種の見出しである。

之は原則としては各個の現象に對して附さるゝ例であるが、比較的簡單な同種の現象にあつては數回のものを一括した場合もある。概して現象の性質は、既に分類によつて大體區別されてゐるからさまで重要でなく、簡潔に記事中の文字に則して構成したが、場所に關する部分には稍々注意の要るものがある。特に史籍の原作者が不明乃至は異説あるものなどに就いては、場所の決定が甚だ不確實を免れ得ないであらう。

例へば『當代記』の原著者は『國書解題』にては不明の由であり『史籍叢纂』に於ては伊勢邊に住める人の作かと思えてゐるが『大日本地誌史料』に於ては駿河國府中と推定されてゐる。本書では之にならひ、今は府中として假りに採つた類である。

發現地域は現象の性質により時に廣く時には狭く示した。すべて明治以前は國の名を以てし、以後のものは縣の名を用ひるを例としたが、大體に於て地域の概要を示す事を主眼としたものでその詳細は記事の裡から看取さるべきは勿論である。

地名、國名に關しては『日本地圖帖地名索引』(小川琢治著)が主として参照された。

又移動性ある現象については甲、乙兩地に發現して其中間區域に之が記録を缺く様な場合にも、同様發現の事實は豫想し得るものも有るが、斯くの如き場合にも想像は加へず、記録の存する場所のみ舉げて發現の地域とした。其他相當廣い範圍に同時に發現するを例とする様な類についても取扱は右と同斷である。

(三) 史料 史料は現象を出来るだけ精細に示す爲めに及ぶ限り多く採るやうに努力された。

但し後世に至つて成された編年記類の中には全く原書記事を重複轉載し或は要約せる類も少からず、斯様に何等の新事實をも加ふる事なきものは之が採録を省略し、單に各項の結尾に○記號を附して其の書名のみを掲げた。

史料掲載の配列は現象によつて一定してはゐない。併し大方は最も權威ありと稱さるゝ史籍を先とし、或は最も詳細な記事を有するもの、又移動性ある現象に於ては地域、日附等を勘考し先後を定めた場合も多い。

こゝに採録せられた史料の掲載が、該原書の何巻或は何冊目に在るかを添記する事は原著にさかのぼつて閱讀する際に便宜多しものではあつたが簡單の爲め省略した。之等は概ね日附に依つて充分参照が可能であると考へられたからであるが、それより先き、編者の據つた書籍の權威について誌す事が異本等の多い古典を多く含むこの種の編纂には最も必要とも思はれたので、卷末引用書名索引はこの目的の爲めに比較的詳細に成されてゐる。

史料記事は可成、原書のまゝを採る方針ではあるが總て假名は平假名に統一し返點、調點を省略した。又餘りに不自然な假名遣は之を正し又甚しく難澁な文字は日用語字に代へたものも少しくある。又紙數の著しく嵩む事を避ける爲めには屢々原記事の摘記で満足されたものもある。

校訂本に於ては校訂者の施した種々な註記は悉く用ひる事としその際には特に「」で示した。其の他□□或はママ等の略號もそのまゝ採り入れた事は勿論で、前者は缺文、後者は多く意味不明の部分の傍註に用ひられたものである。

史料として採録すべき限度は、氣象現象記事として必要な範圍を主とし、一般に數量的な記載は概念的なものより著しく高く評價され、災害等に關するものにあつては被害を主として、復興救助等に屬する記事類は多く割愛されてゐる。

いさゝか無稽に失し附會に過ぐる嫌ひあるものと雖も、それが氣象現象に對する當時の智識の程を示す資料ともなる様なものは無下に捨て去る事をしなかつた。但し社寺に關する由緒、縁起中に見受けられる奇瑞、怪異は避けたものも多い。

七 日附、網文及び史料の全般に亘り、總て編者によつて添記された部分には( )記號が附され、片假名が用ひられてゐる。

(参考) とあるのは網文とは直接無関係であるが参照の便宜あるものと解して附記されたものである。

之は殊に「第一編」及び「第二編」等に多く取入れた、その主旨は暴風雨或は洪水の範圍の決定に對し好資料と考へられたからである。

(備考) は多く月次のみ知られてゐる史料で、關係の有無が前の場合より更に不明な場合に用ひられてゐる。

編者註 は異同等に關する編者の所感を述べたものであるが、その事は、飽く迄も正確なる史料を得んとする努力を表はすものである。異同を辨じ正否をたゞす事は併し吾々には早急に成し得べき事ではなく、甚だ疑はしきものも捨てず、却てその疑はしさの故に特に採録し、將來の研究に備へんとしたものである。

八 卷末の附録は史料利用上の便宜を考へ附記したものである。

(一) 「地方別史料索引」は原則として十地方に區分し、現象別に分類したものである。

(二) 「引用書名一覽」はア、イ、ウ、エ、ヲ順ではあるが必ずしも正しい假名遣を嚴守してはない。アウ、オウ、ワウ等はオの音として取扱ふなど、可なり簡単に済まされてゐる。

「藤原軒日録」は「日本天文史料総覽」に於てはオの部にあり「大日本地震史料」に於てはイの部にある。斯様な類は編者の殆ど任意にまかせて處置した類も多い。

異名あるものに於ても編者閱讀の書名のみを掲げた。

直接、閱讀の便宜を得ずして間接に引用されたもの、所謂孫引された類はその旨を明記するやうに工風されてゐる。

(三) 「年號、方位、時刻」等に關する圖表も手近にある事が便宜が多いので加へた。

「正誤表」の必要は、最も厭はしき限りで其の爲め校正の萬全を期したつもりであつたが猶盡さざるもの多く、夫等を一括附記する事とした。前以て正誤を訂正の上、閱讀の事を希望する。

正誤表の完成は短時に成し得ない事情にあり、今は多く第一編を主とした。其の他の部分のものについては適當な機會に之をなす考へである。

以上

## 附記

本編纂達成の爲めには、堀口由己博士の奨励、指導に負ふ所極めて多く編者の最も光榮とし感激に堪えない處である。唯憾むらくは淺學未熟の徒にして良くその期待に副ふを得ざりしは慚愧の至りて、之が大成の爲めには將來とも一層の努力を續けたい希望である。

本書刊行に當つては臺長岡田武松博士より數々の御配慮を忝ふし、又藤原咲平博士よりも種々の助言を賜はつた。録して深甚の謝意を表す次第である。

尙 學兄、同僚、知己各位より直接又間接に激勵を與へられ、教示を受けた事は甚大であつて、編者の忘れ得ぬ悦びとし感謝を禁じぬない處である。

特に史籍の涉獵、閱讀に關し 神戸市立圖書館員各位より多大の便宜を受け 又挿圖に就いては岩下國友君に負ふ處多く、索引年表等には藤尾やす子氏の助力を得た處が甚だ多い。厚く御禮を申述べる次第である。

本書編纂の事業に没頭して以來、既に三春秋は過ぎた。十數年を修史に盡した諸先輩の長き勞苦には比すべくもないが、ひたすら此の道を歩き續けた過ぎ來し方を顧れば、それは必ずしも短い歲月ではなかつた。加ふるにその間、身邊には數次の病患相次ぎ憂愁の日數も過したが 常に、篤い配慮の裡に之が達成を鞭撻、激勵しつゝけたのは故郷の父母であつた。今、本書成るに際し衷心の感謝を以て今日の悦びを分ちたいと思ふのである。

昭和十四年三月

於 海 洋 氣 象 臺

# 日本氣象史料 目次

|     |      |       |     |   |
|-----|------|-------|-----|---|
| 第一編 | 暴風雨  | ..... | 一   | 頁 |
| 第二編 | 洪水   | ..... | 二八四 |   |
| 第三編 | 雷    | ..... | 四〇五 |   |
| 第四編 | 旋風   | ..... | 五〇二 |   |
| 第五編 | 旱魃   | ..... | 五二〇 |   |
| 第六編 | 霖雨   | ..... | 五五八 |   |
| 第七編 | 雪    | ..... | 五六八 |   |
| 第一章 | 大    | ..... | 五六八 |   |
| 第二章 | 不時降雪 | ..... | 五九五 |   |
| 第三章 | 異    | ..... | 六〇七 |   |
| 第四章 | 寡    | ..... | 六〇九 |   |
| 第八編 | 雹    | ..... | 六一四 |   |
| 第九編 | 霜    | ..... | 六三三 |   |

第十編 雲 ..... 六三九

第十一編 虹 及 暈 ..... 六五五

第一章 虹 ..... 六五五

第二章 暈 ..... 六六七

第十二編 霧 及 霾 ..... 六八二

第十三編 赤 氣 (極光) ..... 六八五

第十四編 季 節 ..... 六九九

第一章 景象期日 ..... 六九九

第二章 季節異常 ..... 七二八

第十五編 惟 雨 ..... 七五五

附 錄 一、地方別史料索引

二、引用書名一覽 ..... 八一

三、「方位圖」及「新舊時刻對照」、天皇御歷代順年號一覽表、年號索引 ..... 九四

正 誤 表

日本氣象史料

第一編 暴 風 雨

雄略天皇十七年八月 (四七三年九月八日—一〇月六日)

熊野諸國 大風  
紀南牟婁郡誌 八月 熊野大風 諸木悉倒 熊野年代記

皇極天皇二年四月七日 (六四三年四月三〇日)

大和國 大風雨  
日本書紀 大風雨

天武天皇三年八月二十二日 (六七五年九月一六日)

大和國 大風  
日本書紀 天武天皇四年八月二十二日 大風 飛沙破屋  
編者註 (四年、原本ハ弘文天皇元年ヲ天武天皇元年トセル故 コノ記事ハ天武天皇四年八月二十二日ノ條ニアラナリ)

天武天皇四年八月十八日 (六七六年九月三〇日)

紀伊國 大風雨  
熊野史 大風雨 宮殿破れ民屋悉破れ大杉木廻廊を崩す 落ノ王子 流る 稻流る 年代記

天武天皇八年八月十四日 (六八〇年九月一二日)

大和國 大風  
日本書紀 天武天皇九年八月十四日 大風 折木破屋  
○日本紀略 (九年、前項ノ編者註ヲ參照)



○日本紀略  
編者註 (『日本災異志』ニヨレバコノ記事「分類本朝年代記」ニハ十  
二日ノ事トナス由ナレド誤ナルベシ)

舒明天皇十一年七月十九日 (六三八年九月二日)

大和國 大風  
日本書紀 大風雨

○日本紀略

第一編 暴 風 雨 雄略天皇十七年—天武天皇八年 (西曆四七三—六八〇年)

天武天皇十年七月二十七日 (六八二年九月四日)

信濃、吉備諸國 大風

日本書紀 天武天皇十一年七月二十七日 信濃國吉備國並言 霜降亦大風 五穀不登

(十一年、前項ノ註ヲ參照)

天武天皇十一年九月二日 (六八三年九月二七日)

大和國 大風

日本書紀 天武天皇十二年九月二日 大風

○日本紀略

(十二年、前項ノ註ヲ參照)

文武天皇二年九月七日 (六九八年一〇月一六日)

下總國 大風

續日本紀 下總國大風 壞百姓廬舍

編者註(『東京市史稿』右記事ヲ天武天皇二年ノ事トス 誤ナリ)

大寶元年八月十四日 (七〇一年九月二〇日)

播磨、淡路、紀伊諸國 大風、高潮

續日本紀 八月十四日 播磨 淡路 紀伊三國言 大風潮漲 田園損傷 遣使巡監農桑存問百姓

○日本紀略

大寶元年八月二十一日 (七〇一年九月二七日)

十七箇國 大風

續日本紀 參河 遠江 相模 近江 信濃 越前 佐渡 但馬 伯耆 出雲 備前 安藝 周防 長門 紀伊 讚岐 伊豫

十七國 蝗大風 壞百姓廬舍 損秋稼

○日本紀略

大寶二年八月五日 (七〇二年九月一日)

駿河、下總諸國 大風

續日本紀 駿河 下總二國大風 壞百姓廬舍 損秋稼

編者註(『東京市史稿』ハ右記事ヲ大寶元年八月庚子ノ事トス 誤ナリ)

慶雲元年八月二十八日 (七〇四年一〇月一日)

周防國並九州諸國 大風

續日本紀 周防國大風 拔樹傷秋稼

十二月二十日 太宰府言去秋大風 拔樹傷年穀

○日本紀略

慶雲二年七月二十九日 (七〇五年八月二二日)

大和國 大風

續日本紀 大倭國大風 損壞百姓廬舍

○日本紀略

慶雲三年七月二十八日 (七〇六年九月九日)

九州諸國 大風

續日本紀 七月二十八日 太宰府言 所部九國三嶋 亢旱大風

拔樹損稼 遣使巡省 因免被災尤甚者調役

和銅元年七月十四日 (七〇八年八月四日)

隱岐國 大風、霖雨

續日本紀 七月十四日 隱岐國 霖雨大風 遣使賑恤之

和銅六年八月二十四日 (七一三年九月一八日)

大和國 大風

續日本紀 大風 拔木廢屋

(廢、官本ト本尾本作發)

日本紀略 大風 拔木廢屋

和銅六年十一月一日 (七一三年一月二三日)

伊賀、伊勢、尾張、參河、出羽諸國 大風

續日本紀 十一月一日 伊賀 伊勢 尾張 參河 出羽等國言

大風 傷秋稼 調庸並免 但已輸者 以稅給之

○日本紀略

和銅七年十月一日 (七一四年一月二二日)

美濃、武藏、下野、伯耆、播磨、伊豫諸國 大風

續日本紀 美濃 武藏 下野 伯耆 播磨 伊豫六國 大風廢屋

仍免當年租調

(廢、官本ト本尾本尾本尾本作發)

○日本紀略

第一編 暴風雨 天武天皇十年—天平十四年(西曆六八二—七四二年)

養老元年八月十六日 (七一七年九月二五日)

伊勢國 大風雨水

太神宮諸雜事記 靈龜三年八月十六日 大風洪水 仍豐受神宮之瑞

垣 井御門一字流散 但件水 御正殿之許一文際專不流

寄老天上下涌入也 甚神妙也云々

養老三年一月一日 (七一九年一月二五日)

大和國 大風

續日本紀 大風也

○日本紀略 請遺勅文 扶桑略記

神龜四年十月二日 (七二七年一月一九日)

安房國 大風

續日本紀 十月二日 安房國言大風 拔木廢屋 損破秋稼 上總國

言 山崩壓死百姓七十人 並加賑恤

天平四年八月二十七日 (七三二年九月二〇日)

大和國 大風雨

續日本紀 四日 始大風雨

廿七日 大風雨 壞百姓廬舍及處々佛寺堂塔

○日本紀略

天平十四年九月十二日 (七四二年一〇月一四日)

山城國 大風雨

續日本紀 大風雨 壞宮中屋塔及百姓廬舍

○日本紀略

天平十五年七月(七四三年七月二六日—八月二三日)

上總國 大風雨

續日本紀 八月九日 上總國言 去七月 大風雨數箇日 雜木長三四丈已下二三尺已上 一萬五千許株漂著 部内海濱也

○日本紀略

天平十八年十月五日(七四六年十一月二三日)

日向國 大風雨

續日本紀 十月五日 日向國 風雨共發 養蠶損傷 仍免調庸

大日本史 十月 是月 日向言 風雨損蠶

天平勝寶五年九月五日(七五三年一〇月五日)

攝津國 大風、高潮

續日本紀 攝津國御津村南風大吹 潮水暴溢 壞損廬舍一百十餘區 漂流百姓五百六十餘人 並加賑恤 仍追海濱居民 遷置於京中空地

○日本紀略

天平勝寶六年八月(七五四年八月二三日—九月二〇日)

畿内並諸國 風水

續日本紀 是年八月 風水 畿内及諸國一十 百姓產業損傷 並加賑恤 (二十、一本无)

○日本紀略

類聚國史 十二月二十五日 是年八月 風水畿内及諸國一十 百姓產業損傷並加賑恤

續日本紀(日本災異志)ハ「分類本朝年代記」ニヨリ「八月九日 大洪水復家」トセルモ疑多シ

天平實字三年八月二十九日(七五九年九月二四日)

九州諸國 大南風

續日本紀 九月十三日 太宰府言 去八月二十九日 南風大吹 壞官舍及百姓廬舍

天平實字三年十月(七五九年一〇月二六日—十一月二三日)

大和國 大風

續日本紀 十一月二日 詔曰 如聞 去十月中大風 百姓廬舍並被破壞 是以爲修其舍 免今年田租

○日本紀略

天平神護二年六月三日(七六六年七月一四日)

日向、大隅、薩摩諸國 大風

續日本紀 六月三日 日向 大隅 薩摩三國大風 桑麻損盡 詔勿收糧戶調庸

○日本紀略

天平神護二年九月五日(七六六年一〇月一三日)

伊勢、美濃諸國 大風

續日本紀 九月五日 勅 比見伊勢美濃等國桑 爲風被損官舍數多 非但毀頽亦亡人命

寶龜四年三月五日(七七三年四月一日)

近江、飛騨、出羽諸國 大風

續日本紀 三月五日 近江 飛騨 出羽三國 大風人飢 並賑給之 大日本史 是歲 參河 近江 飛騨 出羽 大風並賑贖之

寶龜六年八月二十二日(七五五年九月二一日)

伊勢、尾張、美濃諸國 大風雨

續日本紀 八月二十二日 伊勢 尾張 美濃三國言 九月日 異常風雨 漂流百姓三百餘人 馬牛千餘 及壞國分寺並諸寺塔十九 其官私廬舍不可勝數 遣使修理伊勢齋宮 又分頒案檢諸國被害百姓 (九月日、三字疑衍 紀略无)

○日本紀略

寶龜六年十一月七日(七五五年十二月四日)

日向、薩摩諸國 大風雨

續日本紀 十一月七日 太宰府言 日向 薩摩兩國風雨 桑麻損盡 詔不問寺神之戶 並免今年調庸

寶龜七年八月十三日(七六六年八月三一日)

大和國 大風

續日本紀 戊辰 大風

○日本紀略

編者註(日本災異志)ハ右記事ニ關シ「八月伊勢美濃大風 官舍毀頽人亦死之」トセリ 八月トセルハ原書ノ文意ヨリ推察セルモノカ)

寶龜元年一月二十一日(七七〇年二月二〇日)

九州諸國 大風

續日本紀 一月二十一日 太宰府管内大風 壞官舍並百姓廬舍 一千册餘口 賑給被損百姓

○日本紀略

寶龜元年六月八日(七七〇年七月五日)

志摩國 大風

續日本紀 六月八日 志摩國大風 賑給被害百姓

○日本紀略

寶龜二年九月二十二日(七七一年一月三日)

伊勢國 大風、洪水

太神宮雜事記 大風洪水 仍瀧原宮祭使 並内人物忌等 不堪參宮矣 於逢鹿瀨西間 彼御幣祭乃 悠恭御膳次第 御神態直會勤奉仕了

寶龜三年八月六日(七七二年九月七日)

大和、河内諸國 大風雨

續日本紀 是日 異常風雨 拔樹發屋 卜之 八月 是月 自朝日雨 加以大風 河内國茨田堤六處 澁川堤十一處 志紀郡五處並決

○日本紀略

第一編 暴風雨 天平十五年—寶龜七年(西曆七四三—七七六年)

編者註(日本災異志)ハ「續日本紀」ニ據リ八月十四日トス  
月、朔ハ丙辰ナル故 戊辰ハ十三日ナリ

寶龜七年閏八月二十八日(七七六年一〇月一四日)

壹岐島 大風

續日本紀 閏八月二十八日 壹岐嶋風 損苗子 免當年調

寶龜八年七月(七七七年八月八日—九月五日)

土佐國 大風雨

續日本紀 寶龜九年 土佐國言 去年七月 風雨大切 四郡百姓  
産業損傷 加以人畜流亡 廬舍破壞 詔加賑給焉

寶龜十年四月十九日(七七九年五月九日)

大和國 暴風雨

續日本紀 夜 暴風雨 折木廢屋

(廢、官本作發)  
○日本紀略

延曆四年七、八月(七八五年八月一〇日—一〇月七日)

遠江、下總、常陸、能登諸國 大風

續日本紀 十月 遠江 下總 常陸 能登等國 去七八月大風 五  
穀損傷 百姓飢饉 並遣使賑給之

延曆四年九月(七八五年一〇月八日—十一月六日)

伊勢國 大洪水

太神宮諸雜事記 九月 太神宮御遷宮也 而依大風洪水難 以十八

延曆十四年閏七月十一日(七九五年八月二九日)

山城國京都 大風

日本紀略 閏七月十一日 大風 官舍京中屋破壞

(閏七月、今推補)

編者註(日本災異志)ハ七月十一日トス 原書 閏ヲ脱シタルヲソ  
ノ儘探レル誤記ナルベシ 典據ヲ「日本後記」トスル事モ疑  
多シ

延曆十六年八月十四日(七九七年九月九日)

京都 大風

類聚國史 地震暴風 左右京坊門百姓屋舍 倒仆者多

延曆十七年八月九日(七九八年九月二三日)

京都 大風

日本紀略 大風 壞京中百姓廬舍

(備考)

類聚國史 延曆十七年 是歲 備中風旱

十八年七月二十三日 免備中國去年租以風旱爲災五穀不  
登也

延曆十八年九月七日(七九九年一〇月一〇日)

京都 暴風

日本後紀 暴風 京中屋舍倒壞者多

○日本紀略

日本後紀 大風 破京中廬舍

十三日 被風損者 給米有差

○日本紀略

弘仁七年八月十六日(八二六年九月二日)

京都並近國 大風

日本紀略 夜大風 倒羅城門 京中諸國亦多被害 賜諸衛見侍祿

天長四年八月二十一日(八二七年九月一日)

京都 大風

日本紀略 大風 屋宇顛覆

天長九年八月二十日(八三二年九月一七日)

河内、攝津諸國 大風雨、洪水

日本紀略 大雨大風 河内 攝津國 洪水汎溢 堤防決壞

九月七日 賑給攝津國逢洪水百姓

(備考)

皇年代私記 八月 洪水 河陽橋流

承和元年八月二十一日(八三四年九月二七日)

京都 暴風雨

續日本後紀 暴風大雨相并 折拔樹木壞民廬舍 由是走幣畿内名神

祈止風雨

二十二日 夜裏風雨猶切 達且不罷 城中人家往々倒壞

○日本紀略

(備考)

日本後紀 十一月八日 免淡路國今年調庸 以風水爲災 百姓被害  
也

延曆二十三年八月十日(八〇四年九月一七日)

京都並諸國 暴風雨

日本後紀 暴雨大風 中院西樓倒 打死牛 又墮壞神泉苑左右閣

京中廬舍 諸國多蒙其害

○日本紀略

大同四年七月十九日(八〇九年八月十七日)

京都 大風

日本紀略 七月十九日 大風

八月五日 大風

大同四年八月二十六日(八〇九年一〇月八日)

伊勢國 風雨、洪水

宇治山田市史 風雨の爲に洪水あり 宮川堤が潰れた 伊勢國諸國書

大同四年九月五日(八〇九年一〇月一七日)

京都 暴風

日本紀略 暴風倒屋 壓折太上皇之輿

弘仁二年九月十二日(八二一年一〇月二日)

京都 大風

第一編 暴風雨 寶龜七年—承和元年(西曆七七六—八三四年)



承和三年五月十八日 (八三六年六月五日)

京都 大風雨

續日本後紀 夜裏 大風 暴雨交切 折樹發屋 城中人家不壞者希

○日本紀略

(備考)

神戸市史 五月 入唐使船輪川泊に寄宿せる時大暴風雨あり

承和三年八月十九日 (八三六年一〇月三日)

攝津國 暴風雨、洪水

西成郡史 八月丙辰 暴風大雨 河水汎溢 橋津志

承和四年十二月十一日 (八三八年一月一〇日)

京都 大風

續日本後紀 自旭旦至戌時大風 京中屋舍往々破壊

○日本紀略

承和五年八月二十日 (八三八年九月二日)

京都 暴風雨

續日本後紀 暴風大雨 壤民廢舍

○日本紀略

承和十二年九月二十一日 (八四五年一〇月二五日)

京都 大風雨

日本紀略 暴風大雨

承和十四年六月三日 (八四七年七月一八日)

京都 大風雨

續日本後紀 大風 發屋折木 雨亦降 入夜彌猛

○日本紀略

嘉祥三年五月二日 (八五〇年六月一五日)

京都 大風

文德實錄 大風 折木拔草 記異也

(按、一據作重讀本作殺、異、諸本作災)

○日本紀略

仁壽元年八月三日 (八五一年九月一日)

伊勢國 大風雨、洪水

太神宮諸雜事記 終日 大風吹洪水 卽國內堂塔倒伏 人宅損亡

牛馬共斃畢

仁壽二年七月二十八日 (八五二年八月一七日)

京都 暴風雨

文德實錄 暴風雨 傷禾稼

○日本紀略

仁壽二年閏八月十二日 (八五二年九月二八日)

京都 大風

文德實錄 大風 發屋拔木

十六日 以廣院米 賑給京師被風災者

○日本紀略

仁壽三年八月二十八日 (八五三年一〇月四日)

伊勢國 大風雨

太神宮諸雜事記 大風洪水間 月夜見伊奈奈岐宮等神寶物御裝束 玉

垣瑠垣門等已流失 并正殿二字 同以流亡御畢

勸仲記 (弘安十年二月二日ノ條)

仁壽三年八月廿八日 大風洪水 月夜見伊奈奈岐兩宮正

殿顛倒之間御裝束種種神寶皆悉流失給 何況重々御垣御門

鳥居雜舍 拂地皆悉流失已了

仁壽三年九月一日 (八五三年一〇月六日)

京都 大風

文德實錄 大風 發屋拔木

○日本紀略

齊衡元年七月二十七日 (八五四年八月二四日)

京都 大風雨、洪水

文德實錄 暴風 發屋拔木 須臾甚雨 洪水汎溢 當時有識甚疑恠

○日本紀略

齊衡二年三月十七日 (八五五年四月七日)

京都 大風雨

文德實錄 大風雨

天安二年一月二十八日 (八五八年二月一五日)

京都 暴風雨

第一編 暴風雨 承和三年一貞觀二年(西曆八三六—八六〇年)

文德實錄 暴風大雨

天安二年五月一日 (八五八年六月一五日)

九州諸國 大風雨

文德實錄 六月廿日 太宰府言 去五月一日 大風暴雨 官舍悉破

青苗朽失 九國二島盡被傷

(五、據諸本紀略補 二島、丹本朝本紀略作一島)

○日本紀略

天安二年六月二十一日 (八五八年八月三日)

京都 大風

文德實錄 暈明 揚霧濛々 無雲而雷 大風

貞觀元年八月十二日 (八五九年九月二日)

京都 大風雨

三代實錄 大風雨交接 京師人居被風壞者多

○日本紀略

貞觀元年九月九日 (八五九年一〇月八日)

京都 大風雨

三代實錄 此日 大風暴雨 發屋折木

○日本紀略

貞觀二年七月二十一日 (八六〇年八月二日)

京都 大風雨

三代實錄 大風暴雨

○日本紀略

貞觀二年九月十四日 (八六〇年一〇月二日)

近畿諸國 大風雨洪水、高潮

三代實錄

大風 折樹發屋 京師百姓廢舍破損者甚多  
十五日 風雨未止 都城東西兩河洪水 人馬不通 諸國濱海之地 潮水漲溢 人畜被害

○日本紀略

貞觀二年十一月十七日 (八六一年一月二日)

京都 大風

日本紀略

十六日 是日烈風雷雨  
十七日 風不止 多壞人舍

貞觀三年七月十一日 (八六一年八月二日)

京都 大風雨

三代實錄

○日本紀略

貞觀五年二月十四日 (八六三年三月七日)

京都 大風

三代實錄

○日本紀略

貞觀五年四月十一日 (八六三年五月二日)

京都 大風

三代實錄 天寒大風

貞觀五年七月二十一日 (八六三年九月七日)

京都 大風

三代實錄

○日本紀略

貞觀七年六月十六日 (八六五年七月二日)

京都 大風雨

三代實錄

大風暴雨 壞廢舍折樹木 建禮門扉二枚仆

貞觀七年七月十七日 (八六五年八月二日)

京都 大風雨

三代實錄

○日本紀略

貞觀九年九月十四日 (八六七年一〇月二日)

京都 大風雨

三代實錄

○日本紀略

貞觀十一年七月十四日 (八六九年八月二日)

肥後國 大風雨、高潮

三代實錄

風雨 是日肥後國大風雨 飛瓦拔樹 官舍民居顛倒者多 人畜壓死不可勝計 潮水漲溢 漂沒六郡 水退之後搜流

官物 十失五六焉 自海至山 其間田園數百里 陷而爲海

○日本紀略

扶桑略記

貞觀十一年八月二十六日 (八六九年一〇月五日)

京都 大風雨

三代實錄

夜 大風暴雨 拔樹發屋 城京邑損傷甚多

日本紀略 (大意同前) (城京邑宮城京邑トセリ)

貞觀十四年三月十日 (八七二年四月二日)

京都 大風雨

三代實錄

○日本紀略

貞觀十四年八月四日 (八七二年九月一〇日)

京都 大風雨

日本紀略

大風雨 多壞民人廢舍

三代實錄

○日本紀略

大和因幡兩國 當年田租不收四待

貞觀十五年八月十三日 (八七三年九月八日)

伊勢國 大風雨、洪水

太神宮諸雜事記

大風洪水間 豐受宮重々御垣流失 件水正殿之許一

第一編 暴風雨 貞觀二年—貞觀十六年(西曆八六一—八七四年)

貞觀十六年八月二十四日 (八七四年一〇月八日)

京都 大風雨、洪水

三代實錄

大風雨 折樹發屋 紫宸殿前樓 東宮紅梅 侍從局大梨等 樹木有名皆吹倒 內外官舍 人民居處 罕有全者 京邑衆

日本災異志

伊勢大風洪水 豐受大神社層門倒 中外院殿舍及倉庫流

失皇繼年序

丈不審志天 如井志天 地底流入 其奇異也 件河東西人家 牛馬多流失了

水長七尺八尺 水流迅激 直衝城下 大小橋梁無有孑遺 朱雀大路 豐財坊門倒覆 抱關兵士并妻子四人壓死 東西

河汎溢瀉々 百姓及牛馬沒溺 死者不知其數 與度渡口四 邊三十餘家 山崎橋南四十餘家流 土人居屋中隨流而去者

甚多 一婦人提携兩兒 在小倉中排扉隨河水而流下 舉手 招呼岸上人云 來救我 人々號哭百方相計 水勢奔湧 遂

不能授手 至觸橋柱 倉壞人沒 權律師法橋上人位宗叔豫 造御願寺 在山城國愛宕郡栗栖野 堂舍顛覆 佛像元在

北山高峯寺 貞觀十三年 大雨水 自然以大巖石 塞其道 行人不通 去高峯寺 移立於栗栖野 又去年京師大雨

雹 時人皆曰此三度災彼像而發焉 是日 班幣畿內諸神 祈止風雨 時論或云 今年洪水 增於嘉祥元年六尺有餘

九月七日 東西京被風水損尤甚者 三千百五十九家 開倉 廩賑給之

(長、恐作誤、云、據一本內本補、我、同上補、授、朝本作授)

○日本紀略 一代要記 皇年代私記 皇年代略記

(參考)

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

貞觀十五年八月十三日 參河因幡兩國秋風水 免當年租五分

大日本史 是歲 但馬水 伊勢風水

元慶二年八月十八日 (八七八年九月一八日)

京都 大風雨、洪水

三代實錄 大風雨 流潦泛溢 頗損田疇

○日本紀略

元慶七年三月二十七日 (八八三年五月七日)

京都 大風雨水

日本紀略 三月二十七日 大風雨水 賑給西東飢民

元慶八年四月十四日 (八八四年五月二日)

京都 大風雨

三代實錄 大風雨

○日本紀略

仁和元年閏三月二十日 (八八五年五月八日)

京都 大風雨

三代實錄 天風暴雨

(天、或ハ大カ)

編者註(日本災異志)ハ三月二十日ノ事トス 閏ヲ脱シタルニヨル誤記ナルベシ)

仁和二年八月七日 (八八六年九月八日)

京都 大風雨、洪水

三代實錄 自去四日霖雨 至此大風雨洪水

仁和三年八月二十日 (八八七年九月二日)

京都 大風雨、洪水

三代實錄 自卯及酉 大風雨 拔樹發屋 東西京中居人慶舍 顛倒甚多 被壓殺者衆矣 內膳司檜皮葺屋顛仆 采女一人宿其中 避寇免害 時人奇之 鴨水葛野河洪波汎溢 人馬不通

○日本紀略 扶桑略記

寬平三年三月二日 (八九一年四月一四日)

長門國 大風雨

日本紀略 三月二日 長門國言 爲大風雨 官舍顛倒

昌泰二年六月十五日 (八九九年七月二六日)

京都 大風雨

日本紀略 大風雨 折木發屋

昌泰二年九月八日 (八九九年一〇月一六日)

京都 大風

日本紀略 大風

延喜六年七月十三日 (九〇六年八月五日)

隱岐國 猛風

日本紀略 七月十三日 隱岐國云 從坤方 猛風高吹

延喜十年四月二十二日 (九一〇年六月二日)

京都 大風雨

日本紀略 風雨猛烈 多損京中舍宅 及廿三日不休

延喜十年七月十八日 (九一〇年八月二五日)

京都 大風雨

日本紀略 風雨 發屋拔樹 梁柱摧折

○扶桑略記 一代要記 仁壽錄

延喜十年八月一日 (九一〇年九月七日)

京都 大風

日本紀略 大風

延喜十三年八月一日 (九一三年九月三日)

京都 大風

貞信公記 大風猛烈 公私屋舍多顛倒 二日 今日有勅 遣使左右京 令檢被損風宅 爲賑給六位以下

○日本紀略

日本紀略 從申刻大風吹 折樹木破舍屋

扶桑略記 五日 風損人宅給物 依仁壽二年閏八月十二日例也

五日 依仁壽二年閏八月十二日例 計遇害者 凡一千五百十七人 賜物有差

○一代要記 諸道勅文 皇年代略記 皇年代私記

河海抄 大風 古來相傳云 千今未有如此之大風

延喜十三年十一月七日 (九一三年二月七日)

京都 大風

第一編 暴風雨 元慶二年—延喜十八年(西曆八七八—九一八年)

延喜十六年 (九一六年)

京都 大風雨

西宮記 十六年 大風 遺諸衛官人 注人家破損給物 大三斗中二斗 小不給 (五月ノ項ニアリ)

○大日本史

延喜十八年八月十六日 (九一八年九月二三日)

京都 大風雨、洪水

日本紀略 八月 京都 大風雨洪水 本朝年代記

延喜十八年八月十六日 (九一八年九月二三日)

京都 大風雨、洪水

扶桑略記 自暹明至十七日晚 風雨猛烈 樹木舍屋摧損 澁河水如海 牛馬人物漂沒尤多 雨不經數日忽成此災 鴨河水車馬不通 溺死者又多云々

延喜十六年 (九一六年)

京都 大風雨

日本紀略 大風雨 折木發屋

延喜十六年 (九一六年)

隱岐國 猛風

日本紀略 七月十三日 隱岐國云 從坤方 猛風高吹

延喜十年四月二十二日 (九一〇年六月二日)

京都 大風雨

日本紀略 大風猛烈 左馬寮顛倒 人死

延喜十年七月十八日 (九一〇年八月二五日)

京都 大風雨

日本紀略 風雨 發屋拔樹 梁柱摧折

○扶桑略記 一代要記 仁壽錄

延喜十年八月一日 (九一〇年九月七日)

京都 大風

日本紀略 大風

延喜十三年八月一日 (九一三年九月三日)

京都 大風

貞信公記 大風猛烈 公私屋舍多顛倒 二日 今日有勅 遣使左右京 令檢被損風宅 爲賑給六位以下

○日本紀略

日本紀略 從申刻大風吹 折樹木破舍屋

扶桑略記 五日 風損人宅給物 依仁壽二年閏八月十二日例也

五日 依仁壽二年閏八月十二日例 計遇害者 凡一千五百十七人 賜物有差

○一代要記 諸道勅文 皇年代略記 皇年代私記

河海抄 大風 古來相傳云 千今未有如此之大風

延喜十三年十一月七日 (九一三年二月七日)

京都 大風

第一編 暴風雨 元慶二年—延喜十八年(西曆八七八—九一八年)

十七日丁巳 晚從河水如海岸流 人者共屋流死 獸者溺斃  
其日 山崎橋南端入水二間許  
編者註(十五日、恐ク十六日ノ誤記ナルベシ)

○皇年代略記

延喜二十年 (九二〇年)

京都 風水

日本紀略 七月旱魃 又今年春夏間 喉病風水 仍無相撲節

延長二年八月四日 (九二四年九月五日)

京都 風雨

扶桑略記 風雨猛烈 公卿不參 往還煩

延長四年七月十九日 (九二六年八月二九日)

京都並大和國 大風

貞信公記 十八日 彼夕風吹 終夜不休

十九日 風雨 大吹

(彼、恐クカ從カ)

日本紀略 十九日大風 此日大和國長谷寺山崩 至干椿市 人烟悉流

延長六年一月一日 (九二八年一月二六日)

京都 大風

扶桑略記 儀式如例 俄風吹倒承明門東扉一枚

延長七年七月二十六日 (九二九年九月二日)

京都 大風雨、洪水

扶桑略記 從午後 大風暴雨 終夜殊烈 京中損壞不可勝計 鴨  
河葛川邊 人物流亡 鴨河堤潰斷 未流入東京 舍屋類溺  
損尤多 山崎橋六間斷壞了 昔大同仁壽比 雖有此災不  
及此云々

扶桑略記 大風雨通宵 川流水溢 天下多被風水損 民烟人畜穀稼損  
害甚多

○日本紀略

(備考)

神皇正統錄 七年己丑歲 菅承相靈之祟 依 王城洛中大 雷電而雨  
荒風烈而世界聞之如 大洪水出 家々 漂 京白河 人民多  
以溺死

承平五年九月十四日 (九三五年一〇月一四日)

伊勢國 風雨、洪水

宇治山田市史 十四日夜 風雨の爲 五十餘川汎溢し神御衣祭に奉仕  
した宮司以下退散するを得ずして宮中に宿番した 神皇正統文

天慶元年六月二十日 (九三八年七月一九日)

京都 大風雨、洪水

貞信公記 十九日 風大吹 從暮雨快降

廿日 鴨河水入京中多損人屋舍雜物 西堀河以西如海 不  
能往還 是左右看督使等所申也

日本紀略 廿日 鴨河水大溢入 京師多漂人屋

天慶三年八月 (九四〇年九月五日—一〇月三日)

京都 風雨、飢饉

日本紀略 大風

編者註(日本災異志)「日本紀略」ニ據リ一月二十五日ノコトトセ  
ルハ誤ナリ)

天曆元年七月三日 (九四七年七月二三日)

京都 大風雨、洪水

貞信公記 從午後 風雨猛烈 舍屋顛倒

日本紀略 今夜 大風猛烈 京中舍或顛倒或破壞 就中宮內省南門  
大藏省後廳掃部寮西屋 左馬寮造酒司南門 典藥寮東楡皮  
葺屋等顛倒 又河水漲溢

(今、久本作去)

編者註(史料綜覽)及「古事類苑」等ハ「日本紀略」ニ據リ四日ノ  
事トセリ 「新訂增補國史大系」ハ三日トス 之等ノ異同ハ本  
文刊頭ニ「四日、今夜云々」トアリ 今ノ字、或ルモノニ於  
テハ去トアル爲メニ生ゼルモノナリ 「貞信公記」ニヨレバ三  
日ノ事トスル方正シキガ如シ)

天曆元年閏七月十九日 (九四七年九月六日)

京都 大風

日本紀略 自日中 大風吹

天曆二年七月十五日 (九四八年八月二二日)

京都 大風雨

日本紀略 大風大雨

天曆二年七月二十七日 (九四八年九月三日)

京都 大風雨

扶桑略記 八月 有風雨災 年穀不登 人庶大飢

天慶五年八月十一日 (九四二年九月二三日)

京都 大風雨

日本紀略 風雨 大發屋舍摧木及數處 仍止定考

後愚昧記 大風暴雨 如延喜十三年八月一日 延長七年七月廿六日  
並兩京破損不可勝計

○河海抄

天慶七年九月二日 (九四四年九月二日)

京都並諸國 大風雨

日本紀略 夜 大風暴雨 諸司官舍京中廣舍顛倒 不可勝計 信濃守  
從五位下紀朝臣文朝 爲舍被打壓卒去

(轉、幹)

扶桑略記 天下大風 京洛官舍門樓 多以顛倒

後愚昧記 今夜 大風暴雨 藻壁 殷富 朱雀 東西坊門十二宇 圖  
書寮弘徽殿顛倒 諸司諸家諸寺舍屋 京中破損不可勝計

北山抄 大風之後 秋霖難晴 祈晴

天慶八年七月二十七日 (九四五年九月六日)

京都 大風雨

本朝世紀 從早朝大風暴雨 午後天晴

○西宮記

天慶九年二月二十五日 (九四六年三月三〇日)

京都 大風

第一編 暴風雨 延喜二十年—天曆二年(西曆九二〇—九四八年)

貞信公記 夜 大風雨 屋舍多顛倒 死人有數  
日本紀略 夜 暴風忽雨 京中舍屋顛倒 壓死者有數  
廿八日 合實檢風損官舍  
(忽、或作忽)

天德元年六月二十五日 (九五七年七月二四日)  
京都 大風雨  
日本紀略 暴風大雨

天德元年十二月二十日 (九五八年一月二日)  
京都 大風雨  
日本紀略 今夜 疾風暴雨 發屋折木 古今未聞之事也

天德三年八月八日 (九五九年九月一三日)  
京都 大風  
日本紀略 大風

天德四年八月十八日 (九六〇年九月一日)  
京都 大風  
扶桑略記 有大風

應和元年七月一日 (九六一年八月一四日)  
京都 大風  
日本紀略 二日 去夜 京師大風

應和二年八月三十日 (九六二年一〇月一日)  
天祿三年九月 (九七二年一〇月一〇日—一月八日)  
京都 大風  
日本災異志 京都 大風 倉務  
編者註(史料綜覽)ハ右ノ記事ヲ載セズ

天延元年五月十七日 (九七三年六月二〇日)  
京都 大風雨  
日本紀略 午時 大風暴雨 宮中舍屋 顛倒破損  
續本朝通鑑 大風 木工寮屋舍顛倒 詔問賀茂保憲 乃獻勘文

天延三年七月二十九日 (九七五年九月七日)  
東國 大風  
日本紀略 東國民烟 爲風多損 信濃御坂路填  
如是院年代記 九日 大風  
日本運上錄 天延三七九日 大風 (堀史科)ニ據ル

貞元元年二月十二日 (九七六年三月一五日)  
京都 風雨  
日本紀略 風雨殊甚 內藏寮雜舍一字顛倒 男女二人壓死  
貞元元年六月十一日 (九七六年七月一〇日)  
京都 大風  
第一編 暴風雨 天德元年—水延元年(西曆九五七—九八七年)

天延元年五月十七日 (九七三年六月二〇日)  
京都 大風  
日本災異志 京都 大風 倉務  
編者註(史料綜覽)ハ右ノ記事ヲ載セズ  
(如是院年代記 日本運上錄爲九日 蓋其本據之書脫廿字故也)  
編者註(日本災異志)ガ「日本紀略」ニ據リ「七月十三日 東國大風」トスルハ右記事ノ誤記ナルベシ

大和、近江諸國 大風雨  
日本紀略 今日大風雨 大和近江等國 官舍及神社佛寺損壞 東大寺  
扉三間 力士大門等 興福寺維摩堂一字 幢一基新藥師寺  
七佛藥師堂一字 并數字雜舍 西大寺食堂一字 調寺講堂  
一字 及自餘諸寺 并人宅等 多以顛倒 京中無殊愁

康保二年八月二十八日 (九六五年九月二五日)  
京都 大風雨、洪水  
日本紀略 今日大風 諸司并京中舍屋破損  
冊日 爲大風 洪水溢  
(備考)  
禁秘抄 八月 是月 祈止風  
○三代御記

安和二年七月二十二日 (九六九年九月六日)  
京都 大風雨  
日本紀略 今夜 大風暴雨 發屋折木  
廿三日 風猶不止 厨家南門內豎所應 兵庫南門 典藥  
寮南門 式部省錄曹司 神祇官舍二字 大炊大膳雜舍悉以  
顛倒

貞元元年九月五日 (九七六年九月三〇日)  
京都 大風  
日本紀略 大風  
天元三年七月九日 (九八〇年八月二二日)  
京都 大風雨  
日本紀略 午後 大風暴雨 宮中樹木諸門 羅城門等顛倒 東西京人  
宅多以破損  
扶桑略記 天下大風 羅城門 美福門 皇嘉門 達智門 並諸司諸堂  
皆悉吹倒  
○百鍊抄 東寺王代記 興福寺略年代記 十三代要略 皇  
年代私記 皇年代略記 神皇正統錄

天元五年八月二十日 (九八二年九月一〇日)  
京都 大風  
日本紀略 依風 談天門顛倒  
百鍊抄 乾風吹來 談天門顛倒  
立川寺年代記 大風吹 五穀皆損  
永觀二年八月 (九八四年八月二九日—九月二七日)  
京都 大風  
永延元年七月二十九日 (九八七年八月二六日)  
京都 大風雨

康保二年八月二十八日 (九六五年九月二五日)  
京都 大風雨、洪水  
日本紀略 今日大風 諸司并京中舍屋破損  
冊日 爲大風 洪水溢  
(備考)  
禁秘抄 八月 是月 祈止風  
○三代御記  
安和二年七月二十二日 (九六九年九月六日)  
京都 大風雨  
日本紀略 今夜 大風暴雨 發屋折木  
廿三日 風猶不止 厨家南門內豎所應 兵庫南門 典藥  
寮南門 式部省錄曹司 神祇官舍二字 大炊大膳雜舍悉以  
顛倒  
貞元元年九月五日 (九七六年九月三〇日)  
京都 大風  
日本紀略 大風  
天元三年七月九日 (九八〇年八月二二日)  
京都 大風雨  
日本紀略 午後 大風暴雨 宮中樹木諸門 羅城門等顛倒 東西京人  
宅多以破損  
扶桑略記 天下大風 羅城門 美福門 皇嘉門 達智門 並諸司諸堂  
皆悉吹倒  
○百鍊抄 東寺王代記 興福寺略年代記 十三代要略 皇  
年代私記 皇年代略記 神皇正統錄  
天元五年八月二十日 (九八二年九月一〇日)  
京都 大風  
日本紀略 依風 談天門顛倒  
百鍊抄 乾風吹來 談天門顛倒  
立川寺年代記 大風吹 五穀皆損  
永觀二年八月 (九八四年八月二九日—九月二七日)  
京都 大風  
永延元年七月二十九日 (九八七年八月二六日)  
京都 大風雨

日本紀略 已刻 風雨大甚 拔樹登屋

永祚元年八月十三日 (九九九年九月一日)

京都並諸國 大風雨洪水、高潮

日本紀略 西成刻大風 宮城門舍多以顛倒 承明門東西廊 建禮門  
弓場殿 左近陣前軒廊 日華門御輿宿 朝集堂 應天門  
東西廊卅間 會昌門 同東西廊卅七間 儀鸞門 同東西廊  
卅間 豐樂殿東西廊十四間 美福 朱雀 皇嘉 儀鸞門建  
智門 眞言院 并諸司雜舍 左右京人家顛倒破壞 不可  
勝計 又鴨河堤 所々流損 賀茂上下社御殿 并雜舍 石  
清水御殿東西廊顛倒 又祇園天神堂同以顛倒 一條北邊  
堂舍 東西山寺 皆以顛倒 又洪水高潮 畿内海濱河邊民  
烟人畜田畝 爲之皆沒 死亡損害 天下大災 古今無比  
(聖下門字當削)

扶桑略記 夜 天下大風 宮城關門樓閣堂舍殿廊及諸司 舍屋垣門  
萬人家宅諸寺諸社皆以顛倒 無一舍立 拔樹頽山 又有洪  
水高潮 畿内海邊河邊 民烟畜田 爲之皆沒 死亡損害  
天下大災 古今無雙 平城京藥師寺金堂 上層重閣 爲大  
風被吹落矣  
(永祚二年十一月七日 改爲正曆元年由去年大風 改元也)

帝王編年記 夜 亥時以後至丑時 大風洪水火災 ○以下大略同前  
如是院年代記 大風 自戌時至子  
立川寺年代記 亥時丑時至大風吹 朱雀摩天會昌門倒 希代未聞事也  
今昔物語 今昔 比叡の山の東塔に大鐘有り 高さ八尺廻り也 而る  
間 永祚元年八月十三日 大風吹て所々の堂舍 寶塔門々  
戸々を吹倒しけるに 此の大鐘を吹てはして 南の谷に吹落

日本紀略 大風 自寅及未 破損之屋甚多

長德二年二月八日 (九九六年二月二九日)

京都 大風

日本紀略 大原野祭 大風吹 社樹之間摧折并打壓牛馬

京都 大風

長德二年閏七月二十一日 (九九六年九月六日)

京都 大風

日本紀略 大風吹 損諸司並大小舍屋 或以顛倒

京都 大風

日本紀略 自卯至亥時大風 宮中諸司多以顛倒 武德殿御書所 顛  
倒了

諸道勅文 亥時 大風 宮中諸司 多以顛倒  
編者註(日本災異志)長德三年八月二十日トシテ載セルモノハ是  
ノ記事ノ誤ナリ

寬弘七年一月二十一日 (一〇一〇年二月七日)

京都 大風

日本紀略 一月二十一日 大風

寬弘七年 二月二十六日 (一〇一〇年三月二〇日)

京都 大風雨

日本紀略 二月二十六日 大風雨

權 記 閏二月二日 甚雨暴風

してけり 最初の房の棟板敷を打切て谷様に迄て次々の  
房共同じく打抜つゝ七つの房を打倒して南の谷底に落入  
にけり

○百鍊抄 愚管抄 神皇正統錄 歷代皇紀 皇年代私記 續  
本朝通記 一代要記 兵範記 皇代記 諸道勅文 東寺王  
代記 皇年代略記 興福寺略年代記 皇代略記 法隆寺  
別當次第 見聞私記 本朝通記 十三代要略  
日本災異志 永延二年八月十三日 京都及諸國大風損害多  
百鍊抄 大日本史(按分類年代記又云永祚二年二月三日大風洪水)  
編者註(右記事ハ永祚元年八月十三日ノ重複誤記ニシテ永祚二年云  
々ニモ不審多シ)

正曆元年八月二十八日 (九九〇年九月一日)

京都 大風雨、洪水

小右記 自未時許 風威猛烈 就中 入夜極猛  
本朝世紀 天陰降雨 自申刻風吹 大風終夜不止 諸司所々屋等 或  
顛倒或破損 洪水具之  
○日本紀略

正曆二年二月三日 (九九一年二月二〇日)

大和國 大風

長谷寺靈驗記 大風吹て當寺の觀音堂前に大なる楡木在り傍なる木  
に共磨して火出て觀音堂に付て切て取たる様に禮堂計り  
燒て正堂には付かず

正曆五年七月二十日 (九九四年八月二九日)

京都 大風

寬弘七年七月七日 (一〇一〇年八月一日)

京都 風雨

日本紀略 六日 大雨洪水  
七日 風雨

寬弘八年十月二十四日 (一〇一一年二月二日)

京都 大風、洪水

日本災異志 京都 大風洪水 分國本朝年代記  
日本災異凶謹攷 京都 大風雨洪水 本朝年代記  
編者註(史料綜覽)十月二十四日ノ記事ニハ「廿四日大敵ヲ行フ  
是日 大嘗會祭庭並ニ小忌所ノ役ニ隨フ者ヲ宣下ス 冷泉上  
皇崩御アラセラルト誌シ 風雨ニ關シテハ誌ス所ナシ 本朝  
年代記ニ誤アルカ)

長和三年八月二十一日 (一〇一四年九月一日)

京都 大風

日本紀略 大風 諸司京中舍屋 多以顛倒

埴史料 廿一日又(日本紀略)云申時大風(下略)  
按又見和漢合符又按如是院年代記爲廿二日 日本運上錄爲廿三日

長和四年八月九日 (一〇一五年九月二四日)

京都 大風

日本紀略 大風 殷富門顛倒  
○扶桑略記

長和五年八月十一日 (一〇一六年九月一日)

京都 大風

日本紀略 今日 風雨殊甚

寬仁三年二月二十三日 (一〇一九年四月一日)

京都 大風

日本紀略 今日微風忽吹 日華門顛倒

寬仁四年七月二十二日 (一〇二〇年八月一三日)

京都 大風

日本紀略 夜 大風吹 壇內裏所々 左近陣前軒廊 朱器殿 左衛門陣北舍一字 春華門陣舍東一字 修明門陣舍一字 右衛門陣舍宜秋門一字 八省院東廊廿餘間 延祿堂 左近衛府西門一字 侍賢門 藻壁門 殷富門 修理職西門 織部司大炊舍一字并倉一字 大膳職倉一字 兵庫倉一字 其外不可勝計

○百續抄

寬仁四年八月二十二日 (一〇二〇年九月一二日)

京都 大風雨

扶桑略記 夜 大風 內裏門廊 多以顛倒

日本紀略 夜 大風雨

○仁壽鏡 諸道勅文

治安二年 (一〇二二年)

諸國 大風

立川寺年代記 此年七月八月霖雨長降 後大風頻吹 人民多斃死 天

下一同之飢饉也

萬壽三年八月十七日 (一〇二六年九月三〇日)

京都 大風雨

左經記 頃之風雨殊甚 所々多以破損

日本紀略 大風 左衛門陣大梨樹并諸司等 同以顛倒

萬壽四年五月十四日 (一〇二七年六月二〇日)

京都 大風

日本紀略 大風

萬壽四年九月十三日 (一〇二七年一〇月一五日)

京都 大風

日本紀略 大風 京中舍屋顛倒

長元元年五月八日 (一〇二八年六月三日)

京都 風雨

左經記 天陰降雨 入夜風雨殊甚

九日 天陰降雨 或人云 法興院新立堂 爲去夕風顛倒

長元元年八月九日 (一〇二八年八月三一日)

京都 大風

左經記 天陰 從今晚大風 及乘燭之間休 但雨不降 今日少稻花 定有損歟

續本朝通鑑 八月 備前國言 備前美作兩國大風 寺社官舍顛倒

(備考)

左經記 八月八日 天陰降雨(中略)及申刻退出 降雨殊甚

九日 天陰 自昨日降雨之中 終夜終日殊甚 定有田舍

愁歎 及晚景 自晨風漸扇 入夜 東風大吹 所々舍屋并

中門等 多以損破 及夜半之間 風成巽 其勢甚盛 樹

木中門屏所々雜舍 悉以顛破 成人之後 未見如此之風

及曉成南風 其勢漸休

十日 天陰 人々云 京條大小屋舍 顛破殊甚 又諸司

所々如此 人畜之類 多以被打死云々(中略) 禁中損壞

不可勝計 此中陣前軒廊 御子宿 春興殿 月華門 進物

所等顛倒(中略) 八省堂二字 巽角廊五十餘間 應天門

并東西廊顛倒 豐樂院 清暑堂并豐樂殿東廊 儀鸞門東西

廊顛倒 又美福門 皇嘉門 建智門 都芳門 除左衛門

之外 五衛府廳并雜舍 天膳 掃部等舍屋 皆以顛倒云々

十二日 天晴 人々云 大風夜洪水 淀山崎 河尻 長

洲邊人畜屋財 多以損死 又諸國之船同流云々

戊時大風吹 內裏殿舍大垣并美福門 皇鑿門 應天門八

省院 豐樂院內堂廊 穀倉院等顛倒了

(備、恐甚)

扶桑略記 大風 宮城殿門 京師舍屋 大半顛倒 時人比之永祿大風

○百續抄 兵範記 神皇正統錄 諸道勅文 十三代要略

編者註(日本災異志)「日本紀略」(左經記)ニ據リ「六年八月九日

京都大風」トセルハ本記事ヲ誤レルナリ)

長久元年六月 (一〇四〇年七月一二日一八月一〇日)

京都 大風

史料總覽 六月 是月 大風天稼を害す 事記

春 記 六月大風 田畠皆損害 今年更可無術計云々 貧者彌以

大日本史 八月 是月 備前大風 寺社官舍悉壞

日本災異志 八月二十三日 備前大風 寺社官舍悉壞 小石記 大日本史

(二十三日、據分列年代記)

長元元年九月二日 (一〇二八年九月二三日)

近畿諸國 大風雨、洪水

左經記 天陰終日雨 亘八月終日降雨 大風二度 京畿諸國多逢風

水損之由云

三日 天晴 從昨日未刻及申大風 京中屋舍多以破損云々

富小路以東如海 上東門院并法成寺水入云

日本紀略 申刻 大風大雨洪水 諸國多遭此災

長元三年八月九日 (一〇三〇年九月九日)

京都 大風

兵範記 (仁安二年七月 軒廊顛倒例)

長元三年八月九日 大風 陣前軒廊顛倒

(備考)

日本災異志 八月 京都洪水 今本本朝年代記

長元五年四月二十二日 (一〇三二年六月二日)

豐前國 大風

日本紀略 七月廿日軒廊御下 宇佐宮寶殿 去四月廿二日 依爲大風

顛倒事也

○百續抄

長元七年八月九日 (一〇三四年九月二三日)

京都 大風雨

第一編 暴風雨 寬仁三年—長久元年(西曆一〇一九—一〇四〇年)

無術計了 亂代之如此 無術計也

關者註(春記)方載スル六月中ノ天候ハ左ノ如シ

|      |        |           |           |          |    |
|------|--------|-----------|-----------|----------|----|
| 六月一日 | 天晴     | 二日        | 天晴        | 三日       | 天晴 |
| 四日   | 天晴     | 五日        | 天晴        | 六日       | 天晴 |
| 七日   | 天晴     | 八日        | 天晴        | 九日       | 天晴 |
| 十日   | 天晴     | 十一日       | 天晴        | 十二日      | 天晴 |
| 十三日  | 天晴     | 時々陰翳小雨澆落  | 早稲往々有其愁云  |          |    |
| 十四日  | 天晴     | 十五日       | 天晴        |          |    |
| 十六日  | 天晴     | 午時已後陰翳時々  | 雨降 然而不及   |          |    |
| 十七日  | 天晴     | 申以後雨降入夜又晴 | 十八日       | 天晴       |    |
| 十九日  | 天晴     | 廿日        | 天晴        | 申時許及夜發大雨 |    |
| 廿一日  | 天晴     | 夜雨云々      | 廿二日       | 天陰雨降     | 夜雨 |
| 廿三日  | 雨降     | 廿四日       | 天晴時々微雨    |          |    |
| 廿五日  | 雨降     | 廿六日       | 早且大雨午後止   |          |    |
| 廿七日  | 雨降終日不止 | 廿八日       | 天晴午時許暴雨乃止 |          |    |
| 廿九日  | 天晴     | 卅日        | 天晴寅時暴雨云々  | 乃止       |    |

右ニ依レバ補記セラレタル如キ大風ニ當ル記事ヲ求メ難シ  
大風成ハ京都ニ非ザルカ)

長久元年七月二十六日 (一〇四〇年九月五日)

伊勢並近畿諸國 大風雨、洪水

太神宮諸雜事記 夜子時 西風俄吹 豐受太神宮正殿東西寶殿 瑞垣

御門等拂地顛倒給既畢(中略) 洪水洗山西 西風拂地大

春 記 敢人馬往反不通

廿六日大風終夜不休 但大非猛烈 同廿七日午刻許豐受宮

神人奔來告云 此宮正殿並東西寶殿 去夜子刻許顛倒者

即乍驚馳參之間 河水汎溢 往還不通 其流如射 舟船

不能 仍更經海路逃參着

長曆四年八月四日丙戌 祭主 神祇權少副大中臣 永輔實上

七月廿七日夜 大風間 豐受太神宮正殿并東西寶殿顛倒事

勸仲記 (弘安十年二月二日ノ條)

長曆四年七月廿六日 豐受太神宮正殿并東西寶殿爲大風

顛倒 依御體露顯 翌日祭主官司司禰宜等相共 且奉還御體

於御膳殿 且上奏子細

百練抄 大風 伊勢豐受太神宮正殿并東西寶殿 瑞垣悉以顛倒 八

省舍嘉堂 同顛倒

大日本史 京師大風 八省院舍嘉堂倒 是日 豐受太神宮正殿寶殿悉倒

古事談 二十七日夜 大風大雨之間 子刻許 伊勢太神宮正殿及東

西寶殿神宮瑞垣御門等皆悉顛倒 已如掃地云々

長久元年九月 (一〇四〇年一〇月九日—一二月七日)

京都 大風

日本災異志 按分類年代記 九月大風 拔木

關者註(九月、大風ノ記事 京都ニハ非ザルカ 疑多キモノナリ

京都、是歲九月毎日ノ天氣ハ「春記」ニヨルニ左ノ如ク大風ヲ

記サズ)

|      |        |     |    |     |    |
|------|--------|-----|----|-----|----|
| 九月一日 | 雨降午後復休 | 夜晴  | 二日 | 天晴  |    |
| 三日   | 天晴     | 四日  | 天晴 | 五日  | 天晴 |
| 六日   | 雨下     | 七日  | 天陰 | 八日  | 天晴 |
| 九日   | 天晴     | 十日  | 天晴 | 十一日 | 天晴 |
| 十二日  | 天晴     | 十三日 | 天晴 |     |    |

扶桑略記 三月太宰府官上 宮崎宮濱殿 大風顛倒 其中有人死之怪

治曆四年一月三日 (一〇六八年二月八日)

伊勢國 大風

太神宮諸雜事記 大風吹 所々人家吹倒

延久元年九月七日 (一〇六九年九月二四日)

近畿並出雲諸國 大風雨

東要記 申刻大風 俄吹 東寺灌頂院顛倒(中略)

扶桑略記 今月七日大風 三字堂舍一時顛倒 悲哉々々

十月十九日 依出雲國解□□□本令奉納丈六千手觀音

御頭中佛舍利香藥等 件佛并寺 去月七日 大風破壞顛倒

十月 去月七日 大風破壞顛倒

歷代皇紀 九月九日 大雨大風 洛中小屋 多以顛倒

(九、七ノ誤記カ)

應德元年八月二十二日 (一〇八四年九月二四日)

京都 大風

魚書愚鈔 平野社 注進 雜舍損色等事

舞殿一字 三間一面檜皮葺 已破損

內侍着舍一字 五間檜皮葺 損北二間南一間

戶津居殿一字 八間板葺 已破損

雅樂舍一字 五間一面板葺 半損

司御馬立舍一字 五間一面板葺 半損

行事所舍一字 五間一面板葺 所々破損

北面築垣一町 蓋板 半破

永承二年九月八日 (一〇四七年九月二九日)

京都 大風

扶桑略記 夜 大風

永承六年七月七日 (一〇五一年八月一五日)

京都 大風

百練抄 大風

永承六年九月十四日 (一〇五一年一〇月二二日)

伊勢國 大風、洪水

太神宮諸雜事記 自十三日雨降十四日大風洪水所々道橋流浮 郡々ノ

驛家不著

○伊勢公卿勅使雜例

康平二年七月十二日 (一〇五九年八月二二日)

京都 大風

百練抄 大風起雲飛揚 左近陣廊八間以下諸司舍屋多顛倒

康平七年三月 (一〇六四年三月二二日—四月一九日)

筑前國 大風

第一編 暴風雨 長久元年—應德元年(西曆一〇四〇—一〇八四年)



右爲去應德元年八月廿三日 大風倒木破損者  
注進如件

應德二年正月廿七日 福宜藤井信季

(三、コノ字ノ傍ニト小字ヲ添ヒセリ)

除目大成抄 (應德二年正月廿七日平野社申文)

去年八月 大風之時 樹木折落 舞殿顛倒 其外舍屋又以  
破損

大日本史 廿六日 大風 平野社樹折 神殿損壞

編者註(廿六日、誤記カ)

應德二年八月二十六日 (二〇八五年九月一七日)

京都 大風

天台座主記 夜 大風起 四王院顛倒 御造之

(備考)

本朝通紀 八月 大風

寛治五年一月十二日 (二〇九一年二月三日)

京都、奈良 大風雨

中右記 今日 大雨 入夜大風 小屋等皆悉以破損 八省西廊顛倒  
云々 十七日參詣 春日社去十二日爲大風 御社頭數十尺  
靈木以僅 古老云縱雖大風之時未有如此之事 甚以爲怪樹  
木已及三分之一也

扶桑略記 大風 大極殿西廊二十三間顛倒

○百種抄 歷代皇紀 一代要記 皇年代私記 皇年代略記  
皇代略記 如是院年代記 十三代要略

寛治五年八月十日 (二〇九一年九月二五日)

京都 大風

史料雜覽 大風 金山寺禮堂倒 二條御通記 中右記

(備考)

中右記 寛治七年三月八日 近日 因幡國解狀云 有大榎木三圍  
去寛治五年八月爲大風被吹僵

寛治六年八月三日 (二〇九二年九月七日)

伊勢並諸國 大風、高潮

扶桑略記 大風 諸國洪水 高潮之間 民烟田畠多以成海 百姓死亡  
不可稱計 伊勢太神宮寶殿一字並四面廊等 皆爲大風顛倒  
勸仲記 (弘安十年二月二日ノ條)

寛治六年八月五日(中略)親定朝臣言上云 今月四日 二

宮禰宜等書狀云 爲今朝大風 太神宮 西寶殿顛倒 其角  
瑞垣同顛倒 自餘御門殿舍等傾倚 四面玉垣荒垣等并損  
又豐受宮外幣殿 瑞垣御門 四御門并齋王 御輿宿廳舍  
等皆顛倒者

十三代要略 十三日祭主親定言上 去四日大風太神宮西寶殿豐受宮東  
西寶殿顛倒

○百種抄

編者註(三日、四日ノ二説アレド 時ノ推歩ヲ異ニスル爲メカ)

寛治六年九月一日 (二〇九二年一〇月四日)

京都 大風雨

後二條師通記 晴陰 卯刻雨降 響東川 謝北辰 先是平張爲大風被  
吹倒也 萬人物笠吹放地上 早々歸宅 參高陽院 其雨無  
極 坂東人民愁歎交深 爰時吹大風 雨脚無音

嘉保元年八月十日 (二〇九四年九月二三日)

伊勢國 大風

勸仲記 八月十六日 伊勢太神宮司言上云 依今月十日大風 一宮  
并諸別宮殿舍等 破損顛倒者

中右記 大雨 近日數十日間 多以雨下 有秋霖愁 午後雨止 風吹

承德元年八月五日 (二〇九七年九月一三日)

京都 大風

中右記 朝間大雨 午後風大吹 京中雜舍 多以顛倒 樹木皆折  
左近府屋顛倒之間 府生季吉被打殺 又吉上一人被損 圓  
乘寺顛倒 此外所々舍屋 多以破損 大風民戶成憂云々  
(中略)賀陽院西對并廊共 近日爲皇居被念作間 一日上棟  
了而爲大風被吹僵又如本諸國構立云々

石清水八幡宮記 大風洪水 別當頼清建立大乘院 爲大風顛倒 佛  
師一人被打殺畢

朝野群載 被備明日釋奠供祭 件廟器等被渡盛殿之間 彼屋同日爲大  
風顛倒 所注進廟器等破損已畢

大日本史 風壞孔廟屋舍

日本災異志 四日 京都及諸國洪水 大山崩太多 分類年代記

(備考)

立川寺年代記 承德元年 洪水出 國土損事無限

承德元年十二月十二日 (二〇九八年一月一七日)

京都 大風雨、光耀有り

中右記 爰時許 頗以大風大雨 空有光耀 若是何徵哉

第一編 暴風雨 應德二年(天永二年(西曆一〇八五—一一二年))

康和四年七月二十七日 (二〇二二年九月一日)

筑前國並京都 大風

石清水文書 康和四年十月太宰府言上云(中略)同(七月)廿八日棟備  
被早遣下實檢使 勘注損色 令本所探國々造立 爲昨日大  
風顛倒殿并御寶殿神殿等 如此顛倒之時注損色

中右記 夜半許 大風 及曉更

康和四年十二月二十九日 (二〇三三年二月七日)

京都 大風

中右記 大風 欲倒日華門頗東傾 早直立

康和五年一月二十一日 (二〇三三年三月一日)

京都 大風

本朝世紀 丑時 日華門爲風傾頽

天永元年六月二十一日 (一一〇〇年七月九日)

京都 大風雨

史料雜覽 大風暴雨 永昌記

(備考)

續本朝通鑑 六月 大水 飢饉

山 槐記 是歲 飢饉 洪水

天永二年四月九日 (一一〇一年五月一八日)

京都並伊勢國 大風雨

中右記 裏書云 九日早且卯辰刻 俄大風大雨 後閉 依件風 伊

勢豐受藤垣御門顛倒 又賀茂上御社齋王着給神館舍二字并  
鳥居内柳樹一本顛倒 又春日御社一鳥居中林之木 七十餘  
本顛倒

永久元年八月四日 (一一一三年九月十五日)

伊勢國 大風雨

長秋記 大風雨 内宮瑞垣御門 蕃垣山垣四御門凡別宮月讀宮伊羅  
宮悉有破損云々  
(凡、及力)

永久元年八月二十日 (一一一三年一〇月一日)

京都 大風雨、洪水

殿 曆 天陰雨下(中略)堀河西洞院水増云々 今日風雨尤甚  
二十一日 天晴(中略) 宇治橋流破了云々 十五間云々  
鳥羽殿人々宿所御堂等 築垣破壞云々 河邊庄商皆悉損云

長秋記

九月廿日(中略) 去八月二十日 大風 平野御殿上大樹顛  
懸 然猶依不及御殿損件皆上奏

永久二年二月三日 (一一一四年三月一日)

京都並近國 大風雨、洪水

殿 曆 三日 天晴陰雨  
六日 從春日御社有社解云 去三日大風に御社林木百五  
十本顛倒者 召陰陽師下策處  
中右記 雨頻下 風頗吹 別記 三日 終日大雨大風 宮川大出  
不歸離宮 入夜雷鳴 今日春日御社樹木三百餘本顛倒云

天承元年七月三日 (一一一三年七月三日)

伊勢國 大風雨、洪水

神宮雜例集 大風洪水 外宮正殿下深二尺八寸也 天平賀四百八口塌  
七口 瑞垣内正殿 東南西方流寄也 其中廿九口破損荒  
垣廿三間 柱八本流失 八間廳舍一字葺板破損 敷板長押  
下桁流損  
豐受宮神主等今月廿三日注文備 從今月二十三日午後  
暴風吹大雨降 同日丑魁洪水溢滿 禰宜等參集且致祈請  
且雖如實檢 迄于廿三日辰時 依水未干正殿下心御柱不  
出見者也 及巳時奉拜見之處 同殿下水深二尺八寸許也  
彼殿下之所在天平賀并塙等 所流寄瑞垣内正殿東西方也  
(中略) 又彼荒垣本自傾傍破損之上 依大風洪水彌以損  
失也

保安四年八月廿二日 (一一一三年九月一三日)

伊勢國 大風雨、洪水

神宮雜例集 大風洪水 外宮正殿下深二尺八寸也 天平賀四百八口塌  
七口 瑞垣内正殿 東南西方流寄也 其中廿九口破損荒  
垣廿三間 柱八本流失 八間廳舍一字葺板破損 敷板長押  
下桁流損  
豐受宮神主等今月廿三日注文備 從今月二十三日午後  
暴風吹大雨降 同日丑魁洪水溢滿 禰宜等參集且致祈請  
且雖如實檢 迄于廿三日辰時 依水未干正殿下心御柱不  
出見者也 及巳時奉拜見之處 同殿下水深二尺八寸許也  
彼殿下之所在天平賀并塙等 所流寄瑞垣内正殿東西方也  
(中略) 又彼荒垣本自傾傍破損之上 依大風洪水彌以損  
失也

大治二年七月十九日 (一一一七年八月二九日)

京都 大風雨

中右記 七日 大風雨事  
十九日 大雨大風 河水大出 道路不通

大治三年八月二日 (一一一八年八月二九日)

京都 大風雨

百練抄 暴雨大風 陽明門顛倒  
中右記 陽明門顛倒  
○十三代要略

大治五年九月十二日 (一一三〇年一〇月一五日)

第一編 暴風雨

永久元年一康治元年(西曆一一三一—一一四二年)

(大、水力)

永久二年八月一日 (一一一四年九月一日)

伊勢國並京都 大風雨

宇治山田市史 一日 大風あり外宮正殿及寶殿の千木が折れ瑞垣御  
門が顛倒した  
門が顛倒した

殿 曆 二日 天晴(中略) 今夜子時許大風  
中右記 二日 夜半 大風吹 雨脚下

永久五年九月一日 (一一一七年九月二八日)

京都 大風雨

殿 曆 天陰雨風尤甚 所々吹損(中略) 午刻許風止 東三條樹木  
多以破損云々 又勸學院梅社顛倒 又法興院釋善寺顛倒云  
々 新内裏棟上屋十六字顛倒

元永二年十一月二日 (一一一九年二月五日)

京都 大風雨、光有り

中右記 入夜 俄大雨大風 當北方有光耀 誠神慮有恐歎  
編者註(日本災異志)「十月二日夜大風(中略)トスルハ本記事ノ誤  
記ナルベシ」

保安元年十二月二十日 (一一二二年一月一〇日)

京都 大風雨、光有り

中右記 寅刻許 俄大風雨 或有光耀 及卯時則止之  
(順、細カ)

河内國並諸國 大風

河内國小松寺緣起 天下大風吹 國々里々山々寺々 堂舍僧坊 無不  
吹崩 而殊當寺之金堂已下 塔婆鐘樓經藏大門等 皆悉吹  
崩了 其跡如夢云々

天承元年七月三日 (一一一三年七月三日)

京都 大風

長秋記 七月三日 大風雨  
八月二十五日 大雨大風

長承三年六月十四日 (一一三四年七月七日)

京都 大風雨

長秋記 自朝雨下(中略) 御靈渡御間大風雨 後聞 鴨川橋破 大  
政所第二神輿投川一町流下 村間人入河荷上之云々 希  
代事也

長承三年九月十二日 (一一三四年一〇月一日)

京都 大風雨

中右記 終日雨降 晚景雨頻降 風大吹 京中舍屋散々 今年洪水  
大燒亡 風災  
百練抄 大風殊甚 拔樹顛屋 諸司官舍 京中人屋一字不全 今年  
風水火三災並起

康治元年九月二日 (一一四二年九月二三日)

京都 大風雨、洪水

台 記 一日 去夜大雨 因今朝洪水 水升宿所緣 平地二許尺  
二一七

二日 今朝 大風雨發屋 人為異 水昇板敷 因渡棧敷屋 鳥羽 朱雀大路 如大河 築垣悉崩 父老云 如此年來之間三

本朝世紀 二日 從昨日大雨 去曉以後大風 河邊民戶多以流亡 日來所被掘之鴨川淵 變為瀾了 徒費役夫 已無所成 又八省會昌門以西廻廊顛倒之間 役夫等壓死

康治二年二月三日 (一一四三年二月一九日)

京都 大風

本朝世紀 今日 太政官西廳 為大風顛倒

天養元年七月七日 (一一四四年八月七日)

京都 大風

台 記 大風

久安元年一月五日 (一一四五年一月二九日)

京都 風雨

台 記 入夜大風 發屋雨瀝

久安元年八月十四日 (一一四五年九月二日)

京都 大風雨

台 記 入夜大風 拔樹發屋

十五日 自去夜大風 今日不休 自未刻許雨下 風彌甚

久安元年九月七日 (一一四五年九月二五日)

京都 大風雨

本朝世紀 大風雨甚 終日不休

久安三年九月十一日 (一一四七年一〇月七日)

京都 大風雨

台 記 自夜 大風雨

久安四年三月二十九日 (一一四八年四月一九日)

京都 大風

本朝世紀 大風 折木

久安五年六月二十三日 (一一四九年八月二九日)

伊勢國 大風雨

勸仲記 (弘安十年二月二日ノ條)

六月廿三日 廿七日 大風大雨之間 殿門鳥居築垣等顛倒 破損之事并豐受太神宮禰宜等言上去六月廿三日夜大風事 當宮内外殿舍御門御垣并別宮御垣等顛倒破損事等也

久安六年六月二十一日 (一一五〇年七月一七日)

京都 大風雨

台 記 大風雨

久安六年八月四日 (一一五〇年八月二七日)

京都 大風雨

本朝世紀 雨降 午刻大風折木 終日不止 下人小屋等戶以被損 又大内裏中 仁壽殿顛倒

百練抄 大風 大學廟堂前舍一字顛倒 今日釋奠也 又大内仁壽殿

本朝世紀 朝間雨降 巳午兩刻 暴風拔木 頃之止

山槐記 天陰大風 法勝寺御賀云 有御幸云

兵範記 朝間小雨風吹 午後天晴雲靜

仁平三年九月二十日 (一一五三年一〇月九日)

京都 大風雨

本朝世紀 終日暴風大雨(中略) 暴風大雨 其勢力猛烈 高野川葺屋 皆以顛倒 野宮舍屋 多以顛倒 賀茂別雷社前大木顛倒

打損舍屋數間云

百練抄 大雨大風 齋宮野宮并西川葺屋顛倒 新造土御門内裏南殿 顛倒 又賀茂社内大樹顛折 損御料屋渡殿中門廻廊等

台 記 自昨日甚雨 自酉刻大風 折木發屋 人民驚駭

○兵範記

平治元年六月 (一一五九年七月一七日一八月一四日)

京都 大風洪水

圓太曆 六月 是月 大風洪水

長寬元年八月 (一一六三年八月三十一日一九月二九日)

京都 大風

本朝世紀 秋八月 大風

永萬元年八月一日 (一一六五年九月七日)

京都 大風

百練抄 大風 會昌門顛倒

顛倒 台 記 終日 大風雨 人為異

○興福寺略年代記

久安六年八月二十日 (一一五〇年九月二日)

京都 大風雨

台 記 終日 大風雨

仁平元年七月八日 (一一五一年八月二日)

京都 風雨、洪水

本朝世紀 七日 終日大雨 至夜殊甚

八日 雨止 終日大風 今晚洪水 塚山覆陵 近年殆無比

類云 宇治橋流了

仁平元年八月 (一一五一年九月二日一〇月二日)

紀伊國 大風

熊野史 八月 大風 宮殿破南門崩

仁平元年九月二十九日 (一一五一年一月九日)

京都 大風

本朝世紀 自曉大風 終日不休

仁平二年八月十六日 (一一五二年九月一六日)

京都 風雨

嘉應元年二月九日（一六九九年三月九日）

京都 大風

百練抄 大風 折木發屋

大日本史 大風 折木發屋 賀茂上下社館舍倒

嘉應二年八月八日（一七〇〇年九月一九日）

京都 大風

百練抄 大風 鳥羽北樓門顛倒

承安三年九月十一日（一七三三年一〇月一九日）

京都 風雨

五葉 暴風大雨 又時々日景見

安元元年九月二日（一七五五年九月一八日）

京都 大風雨、光氣了り

山槐記 雨下 自去夜至今朝大風 日向遷任功宮城西面瓦垣三町令取損色 今夜天有光氣

五葉 一日 終日甚雨 入夜大雨 終夜不止

二日 大風尙不止 未刻以後 風止天晴

安元元年九月十二日（一七五五年九月二八日）

京都 大風

五葉 入夜大風 夜半之後風止

十三日 依去夜風 京中洛外 小屋莫不被損

山槐記 天陰 自亥終刻至于丑終刻大風 京中舍屋 無一全

百練抄 十三日 丑刻大風 宮城并京中舍屋樹木 多以顛倒 橫川

相顛倒

（三、一本傍書云二イ）

○一代要記 歷代皇紀 皇年代私記 皇年代略記 皇帝紀 抄 皇代略記 帝王編年記 續本朝通鑑

安元二年七月五日（一七六六年八月二日）

京都 大風雨

五葉 四日 入夜大風 終夜不止

五日 天陰 大風甚雨 近年無如此事 終日不止

治承三年五月（一七九九年六月七日—七月六日）

京都 大風

本朝通鑑 五月 洛中大風 倒人家

續本朝通鑑 是月 洛中大風 宮門甲第民屋 多顛倒

治承四年八月二十六日（一八〇〇年九月一七日）

京都並鎌倉 風雨

山槐記 大雨大風 晚頭風雨止

香妻鏡 廿七日 朝間小雨 申刻已後 風雨殊甚

壽永元年二月二十五日（一八二二年三月三日）

伊勢國 大風

勤仲記（弘安十年二月二日ノ條）

壽永元年七月四日 被行軒廊御下 是豐受太神宮離宮内

奈良 大風雨、洪水

五葉 大風 御山樹 多以顛倒 又鹿一斃了云々 可慎可恐歎

中臣結重記 大風大雨 以外水出 奈良屋共吹損 御山木臥五十六本

文治三年七月十三日（一八七七年八月一八日）

伊勢國並京都 大風雨

勤仲記（弘安十年二月二日ノ條）

文治三年九月十五日 被行軒廊御下 太神宮去七月廿日注

文稱 今月十三日大風 當宮殿舍御垣 別宮荒祭月讀宮等

瑞垣板等或破損或破壞顛倒 或傾倚破損事也

五葉 風雨 甚烈

文治四年二月十四日（一八八八年三月一三日）

鎌倉 風雨

香妻鏡 其雨降 遷鶴岳宮 被行問答講 其最中 大風拔樹 依之

正殿御戶動搖顛倒

文治四年三月十八日（一八八八年四月一六日）

奈良 大風

五葉 十八日 入夜大風

十九日（前略）所置南都之下人馳來申云 去夜爲大風雨

圓堂黒木屋顛倒云 相次僧正告示同事

文治五年八月二十日（一八九九年一〇月一日）

京都 大風雨

五葉 廿日 雨降 入夜大風

廿一日 依昨夜大風 京中人屋 多以損亡 東北院半作堂

院御殿一字 去二月廿五日 爲大風顛倒事也

（參考）

五葉 二月廿五日 雨下 入夜雷鳴

元曆元年七月十五日（一一八四年八月三日）

京都 風雨

山槐記 七月十五日 夜半大雨風

八月十七日 風雨殊甚 臨夕陰晴不定 風止

（參考）

五葉 七月十五日 晴

文治元年二月十八日（一一八五年三月二日）

瀬戸内 大風

保曆間記 範頼 義經 渡部 神崎に着く 義經は阿波國に渡り 範

頼は山陽道を長門へ向ふ 義經は梶原と逆櫓の事口論て梶

原我手をば引分て留にけり 大風なりけれども 我舟五艘

を出て 義經は被渡けり 残りの舟は梶原に恐て出さず

三日に渡る處を 只三時に阿波の國 八間の浦にぞ吹付た

る

續本朝通鑑 十七日 南風乍歇 官軍將發 北風急起 技木揚砂 驟

雨怒浪 諸軍未能發 獨義經將發 舟子食曰 當此大風

發船則船必破矣（中略）與義經之船 唯五艘相連而發 時

天未明（中略）自神崎至阿波海路三日程也 時順風太急

帆機如飛 食頃到尼子浦

○本朝通記

文治二年八月二十三日（一一八六年一〇月七日）

第一編 暴風雨 嘉應元年—文治五年（西曆一一六九—一一八九年）

顛倒 又法成寺破損殊太  
仲實王記 大風事殆技木云々 神祇官外官廳門顛倒云々 此外諸司少  
々顛倒事云々 可尋記又諸社多破損 其中 廣田社 樓門  
顛倒之由言上

(參考)  
吾妻鏡 廿一日 甚雨暴風 追泰衡 令向岩井郡平泉給  
○如是院年代記

建久元年八月十七日 (一一九〇年九月一八日)

近畿、關東諸國 大風雨、洪水

五 葉 暴風大雨 自曉更殊太 終日不止 鴨川桂川 各以洪水  
近年少比類 此日有霖雨御下

吾妻鏡 甚雨 入夜暴風穿入屋 洪水額河岸 相模河邊 民屋一字  
流寄河尻 宅内男女八人 皆以存命 各居棟上云々

續本朝通鑑 暴風大雨 鴨河桂河大水 鎌倉亦洪水 民屋多敗壞  
如是院年代記 十六日 洪水

(備考)  
興福寺略年代記 九月 洪水 天下損亡  
(九月、八月ノ觀記カ)

建久六年九月六日 (一一九五年一〇月一〇日)

近畿諸國 大風

五 葉 入夜大風 成勝延勝寺南大門顛倒畢云々  
史料雜覽 大風 神宮殿舍鳥居及成勝寺延勝寺の南大門倒る

玉葉 勅記 高野山皇院雜覽記

(備考)  
勸仲記 (弘安十年二月二日ノ條)  
建久六年九月卅日 被行軒廊御下 是太神宮殿舍鳥居等  
依大風顛倒事也

正治元年九月二十四日 (一一九九年一〇月一五日)

伊勢國 大風

類聚大補任 依大風 外官殿舍御垣等顛倒破壞  
○字治山田市史

正治二年三月三日 (一一二〇年四月一七日)

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 甚雨終日 如拔樹大風相交 今日鶴岡法會 羽林欲有御參  
之處 依風雨命止給

正治二年八月十一日 (一一二〇年九月二〇日)

伊豆國 大風

走湯山上下諸堂目安 大講堂 大風吹倒さる

建仁元年八月十一日 (一一二〇年九月九日)

關東、近畿諸國 大風雨

吾妻鏡 甚雨 午尅大風 堀里穿屋 江浦覆船 鶴岳宮寺廻廊八足  
門以下 所々佛閣塔廟顛倒 凡萬家一字無全所云々 下總  
國葛西郡海邊 潮來入屋 千餘人漂没

鶴岡社務記 大風 前代未聞事也  
走湯山上下諸堂目安 大風に大講堂吹倒す 中堂は上葺許吹剝かす

建永元年八月十一日 (一一二〇年九月一五日)

鎌倉 大風雨

分類本朝年代記 鎌倉大風雨 堂舍悉顛倒浦々 大船小船覆暫時 下  
總國海邊 潮波漂死人不知數 此年五  
月廿五日(二日)

總國海邊 潮波漂死人不知數 此年五  
月廿五日(二日)  
編者註(コノ大風雨「史料雜覽」ニハ載セズ 或ハ疑ハシキモノカ又  
ハ建仁元年八月十一日ノモノノ誤記ニ非サルカ)

承元元年七月五日 (一一二〇年七月三一日)

京都 大風雨

明月記 天陰 小雨間瀝 大風猛烈 折木發屋 夜大雨  
仲實王記 今日 大風深雨也

承元元年七月十九日 (一一二〇年八月一四日)

京都並鎌倉 大風雨

明月記 天晴 未後大風雨(中略) 未時以後 風雨猛烈 折木發屋  
揚沙石 年來之間 所不見聞也 荒屋皆破損 更非筆端所  
及 入夜々止

猪隈關白記 陰 未刻許 大雨大風 經二時  
吾妻鏡 雨降 午未雨 大風 御對面所顛倒 比須未者二人 被打  
損云々

○仲實王記

承元三年八月二十二日 (一一二〇年九月二三日)

京都 大風雨

猪隈關白記 廿三日 去夜終夜 大風大雨

猪隈關白記 去夜大雨 今日又同 但晚景天霽 今朝大風  
三長記 大風甚雨  
類聚大補任 大風洪水

建仁元年八月二十三日 (一一二〇年九月二二日)

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 甚雨大風 如去十一日 依兩度暴風 於國土損亡五穀 於  
庫倉不納一物

建仁三年七月二十二日 (一一二〇三年八月三〇日)

京都 大風雨

明月記 廿日 天晴 入夜大風  
廿一日 天晴 風烈

猪隈關白記 廿一日 去夜終夜大風小爾 今日又同  
廿二日 晴 午時許 大風小爾 京中多破損

(參考)  
業實王記 九月一日 年預茂平來云 去兩度 大風之間 伊勢内外宮  
及舍屋等破損

元久二年三月 (一一二〇五年三月二二日一四月二〇日)

近畿諸國 大風

本朝通紀 春三月 畿内大風 洛中流言 榮西新唱禪宗 其徒衣服  
異裂 大風恐依西者乎と 巷議喧達天聽

西成郡史 (分類本朝年代記) 三月 畿内諸國大風 損害多

編者註(日本震災因縁致「コノ大風ヲ元久元年ノ事トス誤ナルベシ」)

第一編 暴風雨 建久元年一承元三年(西曆一一一九一一二〇九年)

今朝風雨共止 人屋多破損  
百練抄 廿三日 霖雨御祈

承元三年九月二十二日 (一二〇九年一〇月二日)

近江國 大風

天台座主記 聖眞子後相木 爲大風 顛倒打壞殿 御躰奉渡大宮神殿  
歷代皇紀 廿三日 聖眞子後相 爲大風顛倒 打破寶殿 御躰奉渡大  
宮云々  
編者註(史料雜覽)「(聖眞子後相)爲大風顛倒」ニヨリ寶殿破壞ヲ二十三  
日ノ事トス 但シ寶殿破壞ニ關シ大風ノ事ハ明記セズ

建曆元年八月四日 (一二二一年九月二日)

百練抄 甚雨大風

編者註(日本災異志)右記事ヲ五日ノ事トス 誤記ナルベシ

建保二年五月 (一二二四年六月一〇日—七月八日)

京都 大風

如是院年代記 五月 朱雀門 爲大風所吹倒  
武家年代記 五月 朱雀門爲大風吹倒  
立川寺年代記 九月 大風吹 朱雀門倒  
編者註(九月 五月ノ誤記ナルベシ)コノ大風ハ「史料雜覽」ニハ載セ  
ズ

建保二年八月十日 (一二二四年九月一五日)

京都 大風雨

百練抄 天陰雨降大風吹 洛中舍屋 破損顛倒 不可勝計 尊勝寺

南大門顛倒

○皇代略記 皇年代略記 皇代略記

建保三年八月十八日 (一二二五年九月一三日)

鎌倉 大風

吾妻鏡 甚雨午後大風 鶴岡八幡宮鳥居 顛倒  
鶴岡八幡宮社務職次第 建保二年八月十八日 午刻大風 濱大鳥居  
顛倒 鎌倉中堂悉吹破 (中略)  
午刻大風之間 濱大鳥居顛倒 鎌倉中社壇堂塔 佛閣寺院  
以下 悉皆吹破事 不可勝計者也  
編者註(二年、「大日本史料」ハ三年ノ誤記トセリ 今ソレニ從フ)

建保三年八月二十八日 (一二二五年九月二三日)

京都 大風

史料雜覽 京都大風 外記顛倒す 皇代略記 建保三年記  
皇代略記 大風 外記顛倒官廳已下顛倒

建保四年七月十日 (一二二六年八月二四日)

京都 大風

仁和寺御日次記 今夜 大風之間 棟木傾落 今夜 南殿櫻南大枝  
折落了

建保四年八月二十八日 (一二二六年一〇月一日)

京都 大風雨、洪水

百練抄 被立止雨二社奉幣使  
今日大風 堂塔舍屋多以破損 樹木顛倒 外記顛倒樹被吹  
倒 官廳南門大炊寮門等顛倒

承久元年七月二十一日 (一二二九年九月一日)

京都 大風

百練抄 自辰大風 神祇官南廳 右近馬場之屋顛倒了

承久元年十一月二十一日 (一二二九年二月二九日)

鎌倉 大風

吾妻鏡 陰 寅刻大風 已刻風休止之後 相州新造亭顛倒 卜筮之  
所告顛不快  
○續本朝通鑑

承久二年七月三十日 (一二三〇年八月二九日)

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 晦 自去夜半雨降 辰刻風雨尤甚 鎌倉中人家 或爲風顛  
倒 或依水流失 同溝邊下居之輩多死亡 近來無比類  
○續本朝通鑑 本朝通紀

承久二年八月五日 (一二三〇年九月三日)

京都 大風雨

五 霖 大雨大風洪水 一人不通

承久二年十二月 (一二三〇年十二月二七日—一二三一年一月二四日)

鎌倉 大風

日本災異志 鎌倉 大風地震 民屋顛倒 分類本朝年代記  
編者註(コノ大風地震ハ「史料雜覽」ニ載セズ 「大日本地震史料」ハ  
「十二月二日鎌倉地震」ノ事ヲ載スレド大風ハ載セズ)

建保五年八月十七日 (一二二七年九月一九日)

奈良 大風

興福寺略年代記 十七、八日 大風  
史料雜覽 十七日 大風 延曆寺楞嚴三昧院頽廢す 興福寺略年代記 嵐山記

建保五年九月三日 (一二二七年一〇月四日)

京都並鎌倉 大風雨

百練抄 雨降大風 朱雀門并左近府南門顛倒  
私山記 子時大風 倍以前兩度舉破口諸堂 大破如無云々  
仁和寺御日次記 四日 自昨日大風雨 今曉 朱雀門神祇官南門 左  
近府 南面八足等顛倒 所々過半損亡云々  
武家年代記 四日夜大風 北野社一夜吹顛 今毘沙門堂本尊御木是也  
吾妻鏡 四日 雨降 午刻大風 御所東西廊已下 鎌倉中舍屋 大  
略顛倒  
○興福寺略年代記 皇代略抄 皇年代略記 皇年代略記  
一代要記 續本朝通鑑

承久三年九月十二日 (一二二二年九月九日)

京都 大風雨

壬生文書 住吉社司言上云 今日未刻依暴風甚雨 宿院左方廻廊皆悉顛倒 立入彼宿院之輩數人死去之間 祭庭令汚穢  
石清水皇年代記 依鴻水高橋流失 御殿水入滿 仍御馬廄宜屋立之

元仁元年八月十八日 (一二二四年一〇月二日)

土佐國 大風

百練抄 十月六日 或人云 土佐國一宮去八月十八日以後至廿二日 大風 大木等顛倒也 此日神殿已下不殘一字顛倒云々  
編者註『史料雜覽』ハ日附ヲ明記セズ『是月』トシテ探レリ

嘉祿元年三月二十三日 (一二二五年四月二日)

京都 大風

明月記 一日 大風發屋 終日不休  
廿日 大風更起 雨猶交 塔垣摧破 室內動搖

嘉祿元年八月十五日 (一二二五年九月一八日)

肥前國 大風、高潮

明月記 九月九日 覺法眼來談 肥前國 八月十五日 大風高懸昇 住人百餘人牛馬數百漂沒 大略向後十餘年 難興復 大損亡云々 凡鎮西云國云莊 多以損亡云 亡國之殃至極之道理歟 (大日本史料二卷)

如是院年代記 八月 大風

編者註『大日本史』ハ「明月記」ニ據リ肥前國大風ヲ二年八月十五日ノ事トセリ 恐ラク誤ナルベシ

嘉祿二年一月十五日 (一二二六年二月一三日)

京都 大風

明月記 大風發屋

嘉祿二年五月七日 (一二二六年六月三日)

京都 大風

明月記 午時許 大風發屋

嘉祿二年八月十六日 (一二二六年九月九日)

京都 大風雨

明月記 十六日 自夜雨降 已後大風 未後又甚雨 又風

安貞元年二月三日 (一二二七年二月二〇日)

京都 大風

明月記 大風發屋

安貞元年三月十七日 (一二二七年四月二日)

京都 大風

明月記 三月十七日 蓬漢清明 或颶或大風 永日徒暮  
四月二十七日 天晴 已後忽陰 大風起 雲飛揚 終夜大風 雨間斷

安貞元年十二月十六日 (一二二八年一月九日)

京都 大風

明月記 一日 大風發屋

十六日 晚後大風又發屋

安貞二年七月二十日 (一二二八年八月二日)

京都並近國 大風雨、洪水

百練抄 風吹雨澤洪水泛溢 四條五條等末橋流了漂沒之輩數輩云々  
廿一日 甚雨 賀茂社瑞垣流損 費布禰社拜殿令流失云々  
皇帶紀抄 廿日 自去夕大雨降 賀茂邊在家多流失 人多流死 永承以後第一洪水云々

祐茂記抄 廿日 京都大雨 鴨河出天橋流人數百人死 六波羅西門依大水顛倒 假屋流

天台座主記 廿一日 寅刻大雨洪水 大行事後北谷河水流溢于本社頭二宮十禪師大行事 寶殿拜殿小社等流損 泥水充塞內外兩社以下諸神御體奉渡大宮寶殿

○一代要記 歷代皇紀 皇年代略記 皇代略記

安貞二年十月七日 (一二二八年十一月五日)

京都並鎌倉 大風雨

百練抄 朝間 東風吹雨降 及未尅 坤風猛也 折樹木破舍屋 法勝寺九重塔九輪北方珍皇寺塔顛倒 平野舍中門一字 神祇官御幣殿 眞言院四足等顛倒了  
皇帶紀抄 神祇官顛倒 又陽明門內榎木 多以顛倒 又□□寺九重塔九輪 彌指北傾了 珍皇寺新造塔被吹倒  
歷代皇紀 大風 自申刻及酉刻 京中民屋大破損 就中愛宕堂顛倒  
民經記 天陰雨濺 午刻以後風漸荒雲正懸 及黃昏之間 頻射被窓

第一編 暴風雨 承久三年—寬喜二年(西曆一二二一—一二三〇年)

編者註『大日本史』ハ「明月記」ニ據リ肥前國大風ヲ二年八月十五日ノ事トセリ 恐ラク誤ナルベシ

嘉祿二年一月十五日 (一二二六年二月一三日)

京都 大風

明月記 大風發屋

嘉祿二年五月七日 (一二二六年六月三日)

京都 大風

明月記 午時許 大風發屋

嘉祿二年八月十六日 (一二二六年九月九日)

京都 大風雨

明月記 十六日 自夜雨降 已後大風 未後又甚雨 又風

安貞元年二月三日 (一二二七年二月二〇日)

京都 大風

明月記 大風發屋

安貞元年三月十七日 (一二二七年四月二日)

京都 大風

明月記 三月十七日 蓬漢清明 或颶或大風 永日徒暮  
四月二十七日 天晴 已後忽陰 大風起 雲飛揚 終夜大風 雨間斷

安貞元年十二月十六日 (一二二八年一月九日)

後愚昧記

唯叫孤寢 民戶人家皆以拂地 衆人周章之外無他 凡永許以後如此事邂逅歟 匪直也事也 可驚可恐爲之如何  
八日 依昨日大風 神祇官顛倒 陽明門內榎木顛倒云々  
法勝寺九重塔九輪殊損北傾訖 珍皇寺新造塔被吹倒 京中人家多以破損

吾妻鏡

雨降 自戌尅至于時大風 御所侍中門廊 竹御所侍等顛倒 其外諸亭破損不可勝計 披其葉棟 吹弃于路次往反之類 爲之少々被打殺云々

○續史愚抄 皇代略記 皇年代略記  
編者註『皇年代私記』ノ安貞元年十月七日トシ「一代要記」ノ十月十日トセルハ孰レモ本記事ノ誤記ナルベシ

寬喜元年九月十日 (一二二九年九月二八日)

京都 大風

明月記 天晴 已後大風忽起發屋 恐落帽 日徐暮 風不止

寬喜元年十月五日 (一二二九年一〇月二三日)

京都 大風

明月記 天晴 申後大風又發屋 夜雨降  
六日 天晴 風猶不止

日本災異志

十月 對馬大風 破屋崩山 本州龜裂  
編者註『十月』、『大日本史料』ニ於テハ之ヲ寬喜二年九月八日大風雨ノ記事ノ結尾ニ置ケリ

寬喜二年閏一月五日 (一二三〇年二月一日)

京都 大風

明月記 入夜 大風猛烈

寬喜二年五月二十一日 (一二三〇年七月三日)

京都 大風雨、洪水

明月記 午後許 大風雨瀝 夜前鴨水溢 人難渡

○續本朝通鑑

寬喜二年八月八日 (一二三〇年九月十六日)

九州諸國並京都、鎌倉 大風

藤崎社文書 暴風俄吹 靈木盡倒之 刺神殿以下 具屋併以顛

明月記 朝陽間晴 陰雲未散(中略) 被出門之後不獲 大風折木

少雨間交入夜止

吾妻鏡 申尅甚雨大風 及夜半休止 草木葉枯 偏如冬氣 椽穀損

亡

立川寺年代記

八月一日 大風大雨 天下一同不熟 人民道路路迷 餓死者不知數 人骸骨多

○武家年代記 歷代皇紀

編者註(一)、『大日本史料』八日、カト疑ヒテ註セリ

寬喜二年八月二十八日 (一二三〇年一〇月六日)

紀伊國 大風雨

熊野史 二十八日より九月三日まで大風雨 俗に石破風と云ふ

寬喜二年九月八日 (一二三〇年一〇月一日)

近畿、關東諸國 大風雨

破壇塔垣 未後大風彌猛烈 匪直也事 極以怖異

三日 風適休 朝間小雨 已後止 未時天晴

寬喜三年八月八日 (一二三一年九月五日)

諸國 大風、飢饉

類聚大補任 自坤方 大風吹 天下一同大飢饉也

○續本朝通鑑

編者註(『史料綜覽』ハ本記事ヲ載セズ)

寬喜三年九月四日 (一二三一年一〇月一日)

京都 風雨

明月記 自夜雨降 終日不止 入夜大風

貞永元年六月七日 (一二三二年六月二六日)

鎌倉 大風

史料綜覽 鎌倉大風 西書編

編者註(『經濟雜誌』社『續國史大系』外一編ノ「吾妻鏡」ニ據レルモ今求メ得ザリキ)

貞永元年六月十九日 (一二三二年七月八日)

京都 風雨、洪水

洞院攝政記 十七日 天陰時々小雨(中略) 入夜風烈

十八日 雨下(中略) 今日參内(中略) 入夜歸家 于時

南風頻扇雨□ 子刻許大雨忽降如沃

十九日 天彌陰 雨脚暫不休(中略) 傳聞 鴨川水出又

今年中不越前々云々

百練抄 終日雨降 入夜大風 天下損亡過半云々

皇帶紀抄 大風雨之間 伊勢太神宮内外院前□ 并殿舍等顛倒

明月記 終日入夜猶雨降 甚不便 漸及深更 雨猶如沃 夜大風發

屋 風雨連々 諸國損亡之間 逐日滿耳

吾妻鏡 自申一尅 至寅四點 大風殊甚 御所中已下人家 多以破

損顛倒

(備考)

勘仲記 正應元年正月十日(中略)

寬喜二年九月十二日 祭主神祇權大輔大中臣隆通朝臣實上

云依去夜大風 豐受太神宮内院所在大松一本顛倒間 正殿

千木一支鞭懸木二支打折 御垣顛倒破損者

○續本朝通鑑 皇年代私記 皇年代略記 皇代略記

寬喜三年一月一日 (一二三一年二月四日)

京都 大風

明月記 一日 黄昏以後 大風猛烈

五日 朝雲漸散 已時雨又降 日午天晴 入夜又大風 發

屋

(參考)

民經記 二月十五日 天晴風荒 抑自今年正月一日至今日 頗風聲

荒是如何 風以不鳴枝爲豐年 而閑日頗稀 拂屋扇梢事尤

連々也 爲之如何

寬喜三年三月二日 (一二三一年四月五日)

京都 大風雨

明月記 通夜 大風雨降 荒屋破壞(中略) 連日大風 摧折花樹

貞永元年八月八日 (一二三二年八月二五日)

京都 大風雨

民經記 半夜鐘以後雨荒風甚 陰雲漸明之程 大風殊甚 破屋拔樹

誠是爲秋霖 彌有異損之愁歎 歎而可歎者也 日出以後

風聞雲收者也

貞永元年閏九月十日 (一二三二年一〇月二五日)

奈良 大風

春日社神事日記 夜依大風 四御殿北面千木落御言上子細了

天福元年一月十二日 (一二三三年二月二三日)

京都 大風

明月記 午後 大風發屋

天福元年三月二十九日 (一二三三年五月九日)

京都 大風雨

百練抄 晝有風吹 入夜猛也 法成寺藥師堂廻廊等顛倒 又藻壁門

顛倒畢 春日山樹木多以顛倒 萬人驚遽云々

明月記 朝陰 已後大風甚雨 申時以後風彌猛烈 入夜之後舍屋

悉動搖 其響如雷 雨脚又甚 怖畏尤切 築垣假葺皆吹損

三十日 自曉風聊休 天猶陰(下略)

民經記 雨殊甚 入夜大風沃屋拂樹 人家如塵 可驚云々

卅日 大風猶如沃 雨又時々瀝

天福元年六月二十三日 (一二三三年七月三一日)

京都 大風



明月記 天晴 終日風吹 旱天大風彌損草木 四條京極邊 馳不  
開目

天福元年十月十八日 (一二三三年一月二日)

京都 大風

明月記 大風發屋 時小雨

曆仁元年閏二月三十日 (一二三八年四月二六日)

京都 大風

百練抄 大風 法成寺步廊顛倒了

編者註(大日本史)ハ右ノ大風ヲ二十九日ノ事トス

曆仁元年三月二十三日 (一二三八年五月八日)

京都 大風雨

吾妻鏡 雨降 未三點大風 人屋皆破損 庭樹悉吹折 申刻屬晴

西風又烈

(三、大日本史料ニ作レリ)

仁治元年二月十二日 (一二四〇年三月七日)

京都 大風

平戸記 自今慶甚雨如注 自已刻漸止 大風人家皆損 終日不休

不能差出戶外

編者註(史料綜覽)ハ右ノ大風ヲ記載セズ

仁治元年八月七日 (一二四〇年八月二五日)

鎌倉 風雨

吾妻鏡 甚雨暴風 自二所御下向之間 路次煩也 隨兵以下供奉人  
皆不及取笠濕衣裝云々

仁治元年九月十四日 (一二四〇年九月三〇日)

伊勢國 大風雨、洪水

延應二年記 依大風洪水 延引太神宮御衣神事

仁治二年四月三日 (一二四一年五月一日)

鎌倉 大風、地震

吾妻鏡 霽成刻大地震 南風 由比浦大鳥居內拜殿 被引潮流失  
着岸船十餘艘破損

仁治三年五月二日 (一二四二年六月一日)

京都 大風雨

平戸記 自曉甚雨 自未刻後大風(中略) 晚景退私 自此間大風彌  
猛 多破人家倒樹木 入夜漸止

百練抄 終日 雨降大風

仁治三年七月十日 (一二四二年八月七日)

奈良 風雨

興福寺略年代記 大雨大風 南圓堂頂上佛面阿彌陀 落前机上 不破  
損 不思議也

仁治三年七月十九日 (一二四二年八月一六日)

建長元年四月十八日 (一二四九年五月三一日)

紀伊國 大風雨

紀州災異年表 寶治三年四月十八日 大風雨 由良にて難破船二七隻  
死者五三三三三等

建長三年三月六日 (一二五一年三月二九日)

鎌倉 大風雨

鶴岡社務記錄 六日より至于廿三日 大風大雨 若宮小宮後崩 木一  
二本倒

建長三年五月十九日 (一二五一年六月九日)

京都 大風

百練抄 入夜甚雨 夜半大風 民屋多破損

建長三年八月一日 (一二五一年八月一九日)

鎌倉 風雨

吾妻鏡 七月三十日 雨降 凡此間風雨涉日  
八月一日 天晴 南風惡 今夕於由比浦被行風伯之祭

建長六年七月一日 (一二五四年八月一五日)

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 甚雨暴風 人屋顛倒 椽毀損亡 古老云 廿年以來無如此  
大風云々

建長六年九月四日 (一二五四年一〇月一六日)

伊勢國 大風

宇治山田市史 大風あり 外宮の松樹が倒れて西寶殿を破つた事蹟

(參考)

歷代皇紀 十七、八日 大雨洪水

○皇代略記

編者註(日本災異志)ガ「皇年代略記」ニ據リ六月十七、八日 京都  
大雨洪水トセルハ右記事ノ誤ナルベシ

寬元三年十一月二十九日 (一二四四年二月二日)

京都 大風

平戸記 十一月二十九日 朝晴 自已初許陰 日道如暗夜 及午  
漸有晴隙而俄大風 終日不休 人家多破損 酉刻許休止

(日道、四邊カ)

十二月十三日 此兩三日大風 今日殊猛

寶治元年九月一日 (一二四七年一〇月一日)

鎌倉 大風

吾妻鏡 自家一刻至寅四點大風 佛間人家多以顛倒破損云々  
二日 子姓 大風猛不休 樹木皆吹拔云々

寶治二年九月八日 (一二四八年九月二六日)

奈良 大風雨、洪水

百練抄 大風雨 洪水過法云々 春日社鳥居顛倒云々  
興福寺略年代記 依大風春日二鳥居顛倒 無先例云々

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 降雨大風 已尅休止 連日雨 國土損亡之間 被行止雨御

康元元年八月六日 (一二五六年八月二十七日)

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 甚雨大風 河溝洪水 山岳大頽毀 男女多積死云々  
八月八日 依去六日大風 田園作毛等 悉損亡之由 近國  
申之

正嘉二年八月一日 (一二五八年八月三〇日)

近畿、關東諸國 大風雨、洪水

百練抄 雨降大風 所々顛倒破壞 不可勝計 安嘉門顛倒云々  
神明鏡 大風 二日 大洪水 天下大飢饉 人民死亡畢  
類聚大補任 當年風水度々 其中八月一日大洪水并乾風過法之間 諸  
國作物一同不熟  
吾妻鏡 暴風烈吹 甚雨如注 昏黑天顔快晴 諸國田園悉以損亡云

北條九代記 大風 天下損亡 依之將軍家御上洛延引

○武家年代記 關東評定傳 帝王編年記 見開私記

正嘉二年九月二日 (一二五八年九月三〇日)

鎌倉 風雨

吾妻鏡 終日終夜雨降 暴風殊甚

文應元年六月一日 (一二六年七月一〇日)

鎌倉 大風雨、洪水

吾妻鏡 疾風暴雨洪水 河邊人屋大底流失 山崩人多爲磐石被壓死

文應元年八月五日 (一二六〇年九月二日)

近畿、關東諸國 大風雨

續史愚抄 大風雨 自晡至戌刻 壞人家 京畿諸國同  
吾妻鏡 晴申尅甚雨大風 人屋多以破損 戊尅風休 地震

文應元年八月十四日 (一二六〇年九月二〇日)

京都 大風

如是院年代記 大風

弘長元年八月二十九日 (一二六一年九月二五日)

京都 大風

如是院年代記 大風

○續史愚抄

編者註(史料綜覽)「是月大風」トス

弘長三年八月十四日 (一二六三年九月一七日)

近畿諸國並鎌倉 大風

續史愚抄 大風發屋 諸國傷稼 八幡山木二千餘株及高良社樹倒 壓

一得要記 未刻大風 八幡宮高良社頭大木顛倒 打殺人二人 一人宮

籠 一人參詣者云々

大日本史 京師諸國大風 發屋傷稼

吾妻鏡 自朝天陰雨降 雷鳴數聲 則南風烈 雨脚彌甚 午尅 大

風拔樹 民屋大略無全所 御所西侍顛倒 棟梁桁等吹拔之  
亦由比濱着岸船數十艘 破損漂沒

○關東評定傳 北條九代記 續本朝通鑑 見開私記

弘長三年八月二十七日 (一二六三年九月三〇日)

鎌倉 大風雨

吾妻鏡 天晴 申尅以後風雨 入夜大風 由比浦船船沒 彼死人寄  
波 彼是不可勝計 又鎮西乃實運送船六十一艘於伊豆海  
同時漂没云々

文永三年八月十八日 (一二六六年九月一八日)

近畿、西國諸國 大風雨

天台座主記 大風 山上諸堂多以破損 先仰執當法眼源全被巡見注進

經藏 上座日如 文殊樓顛倒 佛子被壓死 法花堂 戒壇  
中門 政所 大藏 總持院內真言堂 灌頂堂寺大破 西塔橫

河堂々等無殊事 社頭塔下半作塔顛倒 風損之様付帥中  
納言經俊卿 内々奏聞

續史愚抄 大風 大學寮廟堂陰陽寮社壇 及延勝寺文珠樓戒壇中門廻

廊等倒 總持院大破 又西國寂被害云 天台座主記  
外記日記 天陰雨 自午刻及申時大風 樹木舍屋等多以轉倒 外記  
屋并西祭廊轉倒又天台文珠樓戒壇院門等轉倒云々(史料  
本二五五)

(轉ハ並ノ字ニ來註サレタルモノ 祭ハ登ノ來註ナリ)

增 鏡 (北野の雪) 又そのころ 大風ふきて人々の家々そこな

はれうする事かすしらぬ中に明堂殿もまるびぬ この内  
には木にて人形をつくりて宮殿を金にてつくりて入たる

第一編 暴風雨 康元元年—文永十一年(西曆一二五六一—一二七四年)

實あり眼あて、は見ぬ物なり をのづからもあやまりて  
見つる人は目のつぶれけるぞおそろしき 陰陽寮の守護  
神の社もまるびぬ 山の文珠樓 いなりの中の宮なども  
吹きそこなひて すべてきしかた行くすゑもためしあり  
がたきかぜなり 西國のかたには人の家をさながら吹あく  
れば内なる人はちりのやうにおちてしにうせなどしける  
ぞめづらかなる あまりにかくおびたゞしき風なれば御  
占をこなはれけるにも おもき人の御つゝしみかるから  
ぬなど奏しけり  
(も、據大本補 つくりて、據大本補 り、原作を一據大本  
改)

編者註(文永四年ノ條ニアルナリ)

文永八年四月十五日 (一二七一年五月二五日)

京都 大風

續史愚抄 大風

歴代皇紀 大風

文永八年八月十六日 (一二七一年九月二一日)

京都 大風

一得要記 大風

○續史愚抄

文永十一年四月十二日 (一二七四年五月一九日)

關東諸國 大風

關東評定傳 大風 草木枯  
北條九代記 大風 草木枯

文永十一年十月二十日 (一二七四年一月一日)

筑前國 大風

史料雜覽 蒙古の兵 上陸して百道 赤坂 佐原 箱崎に迫りて矢砲を放つ(中略) 會大風起り蒙古戰艦二百餘艘を漂没す  
編者註(三編四編災異誌)ノ右記事ヲ十一月二十日トセルハ誤ナリ

建治元年四月十二日 (一二七五年五月九日)

鎌倉 大風

武家年代記 大風  
史料雜覽 鎌倉大風(武家年代記)

弘安四年閏七月一日 (一二八一年八月六日)

近畿、九州諸國 大風雨

一代要記

甚雨大風 九日宰府飛脚到來云 去朝日大風頓吹 而異國兵船悉以漂没

勘仲記 閏七月(端缺)(二日カ)

去夜 終夜風雨太 今日天氣快晴

十四日 自宰府飛脚到來 去朝日大風動 彼賊船多漂没云

宇治山田市史 七月廿九日 大風西に起つて砂塵を揚げ巨樹を倒した  
八幡愚童記 去七月晦日の夜半より戌亥時まで風おびたしく吹て

マルコ・ポーロ旅行記

この島(ジバング島)の富が斯くまで偉大なことは今上皇帝忽必烈陛下の御心に同島を征服して其の領土に併合したいとの欲望を燃えしめた そして其の目的を達成するために陛下はアツバカタン(阿婁罕)及びヴォサンシン(范文虎)と云ふ二人の優秀な將軍を司令官として大艦隊を整備し大軍隊を解纜せしめた 遠征軍はサイ・ツン(泉州府)及びキン・サイ(抗州府)の諸港を出發して中間の海を横きり日本島に安着した(中略)  
それから暫くすると素晴らしく猛烈な北風が吹いて来て海岸近く碇泊してゐた幾艘の軍船を飄蕩して互に衝突させた そこで軍船に乗つてゐる軍の首領部は軍議を開いて危険だから海岸を離れる事に決し上陸してゐた兵員が乗船を終るとともに直に沖合めがけて出航した ところが暴風は吹きつゝのばかりであつて多數の軍船は難破してしまつた(中略) このことが有つたのは一二七九年である

(譯者、深澤正策氏註)南章及び本章にある元寇の記事は 當時元の民間に行はれてゐたゴシップを採録したのであらう 對島壹岐を劫掠した文永の役(一二七四年)と弘安四年(一二八一年)の來襲とを混同したからである

弘安五年七月一日 (一二八二年八月五日)

京都 大風

如是院年代記 大風

弘安七年六月二十三日 (一二八四年八月五日)

伊勢國 大風

第一編 暴風雨 文永十一年—永仁三年(西曆一二七四—一二九五年)

關七月一日賊船悉く漂蕩して海に沈みぬ  
豫章記 弘安四年蒙古襲來す(中略)  
夜半程に折節大風吹きて三韓の船共悉吹被歸大半破損し浪に漂ふもあり島陸へ吹寄する船に生残りたる者は降を乞ふも不救

日本災異志 七月一日 筑前大風 皇年代略記  
増 鏡 (老のなみ) 弘安も四年になりぬ(中略) そのころ(夏)蒙古おこるとかやいひて世中さはぎたちぬ(中略) 七月一日おびたしき大風吹きて異國の船六萬艘 兵のりて筑紫へよりたるみな吹破られぬれば あるいは水にしづみをのづからのこれるも なくく 本國へ歸りにけり  
(六、前本无)  
(七月、總テ閏七月ノ誤記ナルベシ)

天地根元歷代圖 弘安三年七月晦日大風雨 賊船一千七百餘艘悉漂没  
(三年、四年ノ誤記ナルベシ)

武雄社本紀 八月一日 大風鼓海浪滔天 賊船漂没生還者僅三人  
元史日本傳 七月至平壹島 移五龍山  
八月一日 風破舟  
(八月ハ閏七月ニ當ルベシ)

元史范文虎傳 七月軍至平壹島 遇颶風壞舟 文虎被溺漂流一晝夜 幸附敗板得生 遂擇堅艦乘之 棄士卒十餘萬于五龍山下 盡 爲日本所獲逃歸者僅三人

續史愚抄 六月二十四日 昨今伊勢大風 兼神代記 康富記  
七月十三日 祭主神祇權大副定世朝臣云 去六月廿三日 廿四日 伊勢大風 外宮西寶殿北方千木折斷 同泥障板破損 及正殿檢東方大床際東柱朽損倒 因橋傾寄 重々神垣等顛倒者

弘安九年六月十二日 (一二八六年七月五日)

京都 風雨

一代要記 新院寺日吉社即還御 依其雨洪水暴風 經四條橋臨幸北野

○續史愚抄

弘安十年一月二十四日 (一二八七年三月九日)

伊勢國 大風

勘仲記 二月三日 勘祭主神祇權大副大中臣定世朝臣言上 太神宮禰宜等注進 去月廿四日夜大風間 別宮月讀宮御殿顛倒例事

○新抄 續史愚抄

正應元年八月六日 (一二八八年九月三日)

京都 大風

勘仲記 大風大雨 七日 天猶陰雨未休 此間雨風 天下之異損 民間之苦患 有其聞 所驚存也  
○續史愚抄

永仁三年七月十九日 (一二九五年八月二日—二月八日)

近畿諸國 大風雨

四五

如是院年代記 七、八、九月 大風  
熊野史 八月 大風雨 關御井堂崩  
續史愚抄 九月 大風雨云 如是院年代記

正安三年七月 (一三〇二年八月五日—九月二日)

紀伊國 大風洪水

熊野史 七月 大風洪水 宮殿南門悉く破崩す

正安三年十一月二十一日 (一三〇一年十二月二日)

薩摩國 大風

北條九代記 異國舟若干着薩摩國飯島 大風吹 賊舟逐電訖

乾元元年七月八日 (一三〇二年八月二日)

近畿諸國 大風雨、洪水

興福寺略年代記 大雨大風 泉木津橋流落了

同日長谷寺觀音堂外房舍多分流失云々 言語道斷次第也

○續史愚抄

乾元元年八月八日 (一三〇二年八月三日)

京都 大風

續史愚抄 大風折樹

嘉元元年五月二十日 (一三〇三年七月五日)

鎌倉 大風水

日本災異志 鎌倉 大風水 分類本朝年代記

關者註(コノ記事ハ「史料綜覽」等ニハ載セズ 恐ラク疑ヒ多キモノカ)

嘉元二年八月七日 (一三〇四年九月七日)

奈良 大風雨、光物飛了

興福寺略年代記 夜 大雨大風之最中 自春日山光物五着乾方飛去

其光如日輪

(着、差カ)

續史愚抄

十七日 今夜大和大風雨間 自春日社山 靈火出 如松明火不  
燃者五出云云 指西或西飛 或作七日

關者註(日附ニ附アルカ如シ 今ハ「興福寺略年代記」ニコレリ)

德治元年 (一三〇六年)

對馬國 大風

日本災異志 是歲 對馬島 大風 本州編註

延慶元年閏八月二十九日 (一三〇八年一〇月一四日)

京都 大風雨

史料綜覽 大風雨 河北風

延慶二年五月十日 (一三〇九年六月一八日)

京都 大風

續史愚抄 大風 公秀公記

(備考)

日本災異志 二年 是歲諸國大風 和漢合符

延慶三年七月 (一三〇一年七月二七日—八月二四日)

京都 大風

立川寺年代記 大風吹 天下損亡

延慶三年八月二十八日 (一三〇一年九月二日)

伊勢國 風雨、洪水

宇治山田市史 風雨洪水の爲 外宮心御柱絹布が流失した 特伊郡類

應長元年一月五日 (一三二一年一月二五日)

京都 大風

續史愚抄 大風 發屋揚砂

正和二年八月二十三日 (一三二三年九月一四日)

京都 大風

花園院御記 朝間天晴 自中尅雨降 及晚大風大雨

繼應記 朝間晴 自未尅雨下 及哺甚雨 西尅暴風甚雨(中略)

後開暴風之程 自黑雲之中 裸形女形女房着紅袴落入地

中 其響太猛 見物之輩多見之 就中武家之者面見之云

續史愚抄 此日大風 折木發屋 又有女形 手裏持 自黑雲中墮于池水 時

響甚 人多見云

續本朝通鑑 八月 親王量仁始行啓于禁中(中略)

時暴雨烈風 折樹發屋 都下訛言 有女見於黑雲中 裸襠

元亨元年四月三十日 (一三二一年五月二七日)

第一編 暴風雨 正安三年—正中元年(西曆一三〇一—一三二四年)

京都 風雨

花園院御記 陰雨降 未尅許風雨晦冥 樹木多折枝 大木或根拔顛倒

人屋破壞云々 須叟風力止 雨脚漸弱

元亨元年八月十五日 (一三二一年九月七日)

京都 大風

武家年代記 夜半大風

元亨二年八月十五日 (一三二二年九月二六日)

鎌倉 大風

史料綜覽 鎌倉 大風 續史愚抄

續史愚抄 鎌倉 大風 武家年代記

關者註(「史料綜覽」ハ「續史愚抄」ニ據リ 又「續史愚抄」ハ「武家年代記」ニ據リ 然レドモ「武家年代記」ニ此ノ

記事ナシ 恐ラク「續史愚抄」ハ元亨元年八月十五日ノモノヲ 誤レルモノカ)

元亨三年七月十四日 (一三二三年八月一六日)

京都 大風雨

史料綜覽 京都 大風雨 花園院御記

正中元年七月十六日 (一三二四年八月六日)

京都 暴風雨、洪水

花園院御記 終夜大風雨 發屋拔樹所々皆破損 今夜風雨洪水 四十

年來未曾有云々 或云建保以後無如之洪水云々 諸河溢流

民屋多以流失 人馬死者不知數云々 鳥羽門顛倒 比叡山

諸堂多顛倒之由

正中元年八月十六日 (一三二四年九月五日)

京都 大風雨

續史愚抄 大風 外記廳倒 駒牽延引敷 馬依大風 不入京故也

花園院御記 八月十六日 終夜大風雨 (史料稿本) ニ推レバ以下七月十

六日ノ記事ト何文ヲ載ス少シク不審ナリ

建武二年八月三日 (一三三五年八月二日)

鎌倉 大風

太平記 相模次郎時行是を開きて (中略) 名越式部大輔を大將と

して東海東山兩道を押して攻上る 其勢三萬餘騎 八月三

日鎌倉を立んとしける夜俄に大風吹きて家々を吹破りけ

る間 天災を避んとて大佛殿の中へ逃入り各身を縮めて

居たりけるに大佛殿の棟梁微塵に折れて倒れける間 其

内に集り居たる軍兵共五百餘人 一人も残らず壓にうた

れて死にけり

○續史愚抄 鎌倉大風 大佛殿壞

○東京市史稿 編者註 (史料編覽) ニハコノ大風ハ載セズ

延元三年九月十一日 (一三三八年一〇月二四日)

伊豆國 大風

南方紀傳 東國下向舟共 於伊豆崎遭大風 船漂没數千

大日本史 進至伊豆崎 遇颶風 義良親王船漂至後島

(參考)

太平記 九月十三日の宵より風やみ雲收て海上殊に静りたりけれ

ば舟人觀をといて萬里の雲に帆を飛す 兵船五百餘艘 宮

の御座船を中に立て 遠江の天龍灘を過ける時に海風俄

に吹あれて波浪忽に天を卷翻す 或は楫を吹折られて彌

帆にて馳る船もあり 或は梶をかき折て廻流に漂ふ船も

あり

○續史愚抄

延元四年八月六日 (一三三九年九月九日)

鎌倉 大風雨

鶴岡社務記録 大風雨 所々山木崩倒了

○後記

興國六年三月七日 (一三四五年四月九日)

大和國 大風

續史愚抄 昨今大風 春日末社白乳明神社倒 卽社司令賞檢 國太曆

國太曆 春日社司等言上 七日巳刻 當社小神白乳明神御寶殿令顛

倒給

編者註 (國太曆) ハ大風ニ關スル記事ヲ掲ゲズ 或ハ疑ハシキモノ

正平元年九月十三日 (一三四六年九月二八日)

京都 大風雨

國太曆 大風甚雨也 但入夜休 明月良辰頗如空 今日大風頗絶常

篇歌 山上諸堂已下顛倒 又仁和寺雙岡松樹多顛倒或折了

○續史愚抄 後記

正平二年四月二十日 (一三四七年五月三〇日)

京都 大風

師守記 天陰雨下 及晚止雨

今日未刻 官朝所爲風顛倒

正平四年八月六日 (一三四九年九月一八日)

京都並伊勢國 大風

續史愚抄 大風發屋

史料編覽 颶風あり 京都民屋被害多し

豐受太神宮正殿瑞垣等亦壞る 國太曆日録

正平五年五月二十三日 (一三五〇年六月二八日)

京都 大風

嘉元記 廿三日夜 大風法に過て寺山木多吹たをす 小家多たをる

康富記 廿四日 大風

○續史愚抄 後記

正平五年七月八日 (一三五〇年八月一日)

京都 大風雨、洪水

嘉元記 大風大雨大水四十年以後 此程之大水無之云 所々橋流

人々多死云

○續史愚抄 後記

正平五年八月一日 (一三五〇年九月三日)

第一編 暴風雨 正中元年—正平八年 (西曆一三二四—一三五三年)

京都 大風雨

國太曆 午後大風 颶風

史料編覽 京都大風雨 國太曆日録

正平七年八月十七日 (一三五二年九月二五日)

京都 風雨

匡遠記 雨降風吹 晴時以後風雨休

○續史愚抄

正平七年十一月二十二日 (一三五二年二月二九日)

京都 大風

証園執行日記 一、百度大路大鳥居南柱 依大風顛倒 此鳥居は元徳

二年爲廣峯所役晴喜造進了 (大日本史料) 二推ル

正平八年三月三日 (一三五三年四月七日)

山城、大和諸國 大風雨

國太曆 天陰 自去夜或雨 猛風吹起 凡近來旱水風損 年而不絶

(下略) (大日本史料) 二推ル

春日若宮神殿守記 文和二年三月三日 大風大雨ふる 但宮社の二

のとりいを東むきにふきたをす 又興福寺の南大門の西

のわきのひやう糸のものを 西むきにふきたをす

○續史愚抄

正平八年四月五日 (一三五三年五月八日)

京都 大風

東寺長者補任 依大風 眞言院顛倒

○東寺王代記 續史愚抄

正平八年八月十五日 (一三五三年九月一三日)

京都 大風

立川寺年代記 大風吹 天下損亡

○後醍醐

正平九年八月十六日 (一三五四年九月三日)

鎌倉 大風雨

鶴岡社務記録 大風雨

正平十年六月十九日 (一三五五年七月二八日)

京都 大風

圓太曆 大風 折木發屋

正平十年七月二十六日 (一三五五年九月三日)

京都 大風

圓太曆 天晴 但自晚頭陰 乘燭程雨甚 又大風以外也

廿七日 天晴 今曉卯刻 西車宿 爲風被吹倒 大納言綱

代車 西園寺毛車 以下三四兩打損 不便々々 二大日本史 料二條之

正平十一年八月十四日 (一三五六年九月九日)

近畿、東海諸國 大風雨

續史愚抄 大風雨 官廳四足門倒 廣義門院自伏見殿下御所幸上御所 依洪水溢也 宇治橋落柱流 榎島大略潰 石山座主益守

僧正坊後山崩水涌門流 其外所々 山崩水涌出云

瑠璃山年錄殘篇 強風吹

圓太曆 八月十七日 天晴 今日春日前神主師俊進使有申旨

彼使云 先日洪水 宇治橋落了 至橋柱悉流失

又眞木崎三分二流失云々 又石山座主僧正坊後山崩 門流

失 頻々蛇出歟(中略)

傳聞 伏見殿洪水珍事 今日 女院俄渡御上御所 下御所

者 大略成水底下訖 彼邊蛇出 凡所々多有此事云々 二大日本史料二條之

○歷代皇紀 皇年代私記 皇年代略記

正平十一年八月二十四日 (一三五六年九月一日)

京都 大風

曆仁以來年代記 大風

正平十一年九月八日 (一三五六年一〇月二日)

京都 大風

續史愚抄 大風云 續史愚抄

史料總覽 京都大風 續史愚抄

正平十四年五月二十七日 (一三五九年六月二三日)

京都 大風雨

延文四年記 入夜 暴風雨 六條若宮并祇園大路 北島居顛倒了 西院梅二本大枝吹折了

○後醍醐

正平十四年七月二十三日 (一三五九年八月一七日)

正平二十年六月十三日 (一三六五年七月二日)

奈良 大風雨

春日若宮神殿守記 大風吹 大雨ふり

史料總覽 京都 大雨洪水 續史愚抄

正平二十一年六月十三日 (一三六六年七月二日)

京都、奈良 大風

皇代記 大風 永祚以後者在今年云々 眞言院顛倒了

神木御動座度々大亂類聚 自曉暴風至晝 暴吹伐木發屋 舊人未覺悟

云々 作毛田高損失不可說之

師守記 貞治六年 神祇官北廳去年六月十三日顛倒間 被儲假屋 續史愚抄

春日若宮神殿守記 貞治四年六月十三日 大風吹 大雨ふり 續史愚抄

(四、五カ)

正平二十四年九月二日 (一三六九年一〇月三日)

京都並鎌倉 大風雨

後愚昧記 二日 入夜 大風雨又降 後聞 依此風 仁和寺 圓宗寺 本寺 觀音院 太政官廳東門 眞言院 去年十二月崩落 等顛倒

鎌倉大日記 三日 大風 鎌倉佛殿顛倒

○南方紀傳 續史愚抄 後醍醐

建德元年八月二十日 (一三七〇年九月一〇日)

東海道、關東諸國 大風、洪水

續史愚抄 昨今 駿河以東諸國 大風損禾稼 相模洪水 漂沒飯島孤

京都 大風雨

延文四年記 大風雨

正平十五年八月三日 (一三六〇年九月一三日)

鎌倉 大風

鎌倉大日記 延文五年八月三日 大風 極樂寺二王堂顛倒

○後醍醐

正平十六年八月十七日 (一三六一年九月一六日)

京都 大風

異本太平記 十七日戌刻より 大風吹て 人屋を覆へし 繪壁を崩裂せし

むる上 嚴重大洪の最中 燈明を吹滅 大棧を吹卷 爐

壇の火も吹散す 先代未聞の珍事 殊に阿闍梨の御座と見

べし 亦其風に多の人民牛馬の損ぜし事數知れず

續本朝通鑑 大風 殿傾壁壞 燈明爐火皆消 洛中洛外 人馬多死

衆皆謂 修法招禍也 尊道被嘲

○後醍醐 大業院日記目錄

歷代皇紀 十九日 大風

續史愚抄 同前 圓者註(日附ニ兩種アリ 大風三日ニ互レルヲ謂フカ成ハ執レカニ 誤記アルカ)

正平十八年十一月十日 (一三六三年二月一五日)

京都 大風

東寺執行日記 今夜終夜大風 多住屋散失 越常稿矣

○後醍醐

第一編 暴風雨 正平八年一建德元年(西曆一三五三—一三七〇年)

島人家三百餘宇 後愚昧記  
編者註『史料綜覽』ニ此ノ項ヲ置カズ 重複錯誤ノ疑多ク九月二日及  
二十日ノ項ヲモ参照サルベシ

建徳元年九月二日 (一三七〇年九月二日)

東國 大風

空華日工集 夜四更定起 燒燬點榜伽經畢 此時人多聒噪 蓋海颶  
作崇 關左之一路殘破者多矣

後 鑑 是夜 東國大風

史料綜覽 相模海濱れ飯島の民舎三百餘戸を流す 空華日工集  
後愚昧記

建徳元年九月二十日 (一三七〇年一〇月一〇日)

關東諸國 大風

空華日工集 大風俄作 人畜驚散 余急僧奴作防風之計 相陽城中  
鎌倉諸谷 無一不破壞摧折者 土人墜死者往々有焉 然獨

吾山中殿宇房舍 總無損傷者

後 鑑 關東大風

〔按後愚昧記 以此爲八月事云 行算語云 去月十九日 廿日兩日東國  
關東大風 無比類 田島悉吹損 相模國大水 四十年來未有如此之  
事〕

史料綜覽 駿河以東諸國大風 屋を發き禾を損す 空華日工集  
後愚昧記

建徳二年八月十九日 (一三七一年九月二八日)

越前國 大風

日本災異志 大風 郡山古記

文中二年九月二日 (一三七三年九月一八日)

近畿諸國 大風雨

續史愚抄 大風 皇代略記 土御門里内高倉面棟門及太政官廳倒 又皇代略記  
別雷  
社一鳥居蓋木墮 太田社替及拜殿等壞 是山樹倒故云  
皇代略記 自申始終夜至卯一點大風 所々堂舍 佛閣門以下 或顛倒  
或破 更不及注 折木目前不知其數者也

大業院日記目錄 大風 皇代略記 永祚以後無其例

後愚昧記 三日 雨猶下 所々人屋 佛閣悉莫不破壞 洛中邊土皆無  
逃此災之所驚目駭耳者也 禁裡高倉面棟門顛倒 又官廳顛  
倒云

妙法寺記 四日 大風

○南方紀傳 後鑑 皇年代略記 皇年代私記 武家年代記  
如是院年代記 皇代記

文中二年十月二日 (一三七三年一〇月一八日)

京都 大風

花營三代記 大風

○後鑑

天授三年八月二日 (一三七七年九月五日)

京都 大風

三貨圖彙 武家盛衰記云(中略) 應安十年八月二日 大風吹て神社  
佛閣民屋等 ことごとく顛倒し無爲なるは希なり 二日

未刻より吹立て翌三日巳の刻まで夥しく吹きけり

編者註『史料綜覽』ハコノ大風ヲ載セズ

天授三年八月二十日 (一三七七年九月二三日)

京都 大風

後愚昧記 子刻終 大風 折木發屋

○後鑑 續史愚抄

天授四年八月十三日 (一三七八年九月五日)

京都、奈良 大風

後愚昧記 自未刻許風吹 入夜大風 折木發屋 卯刻已刻休止

續史愚抄 大風 折木發屋 春日社大木倒 一切經廊上 太刀辛屋神

宮寺東廻廊破壊 異日社司言 續史愚抄

大業院日記目錄 夜 大風

編者註『日本災異因縁及ハハ後愚昧記』ニ據リコノ大風ヲ三年ノ事  
トス 誤ナリ

明德四年八月二十九日 (一三九三年一〇月五日)

京都 大風

野 史 大風 後愚昧記

應永五年二月四日 (一三九八年二月二日)

京都 暴風

續史愚抄 今夕 暴風倒今宮拜殿 後愚昧記

應永九年八月十四日 (一四〇二年九月二日)

伊勢國 大風雨

吉田家日記 雨降風吹 入夜以外狼藉

十五日 颶更風吹 忽破人屋 超過去年七月大風云々

第一編 暴風雨 建徳元年一應永十三年(曆一三七〇一四〇六年)

(去年七月、今ニ求メ得ズ)

應永九年八月十九日 (一四〇二年九月一六日)

京都 大風

石清水文書 後愚昧記 大風吹て社頭東御前の御前五葉松たをれ候 此松は  
義清の植申され由緒ある歟

應永十年九月二十二日 (一四〇三年一〇月八日)

伊勢 大風雨

史料綜覽 伊勢大風雨 吉田家日記

應永十二年二月十三日 (一四〇五年三月一三日)

若狹國 大風

若狹國守護次第 天風吹て遠敷二宮樓門吹倒畢

若狹國稅所今富名領主代々次第 下宮樓門大風に被吹倒了 同日八  
幡宮大鳥居 大風に被吹倒了

○續史愚抄

應永十二年八月 (一四〇五年八月二五日一九月二三日)

諸國 大風

立川寺年代記 八月 大風吹 天下損亡 人民多渴死

○後鑑

應永十三年八月二十四日 (一四〇六年一〇月六日)

京都 大風雨

教言卿記 廿五日 晴 去夜丑刻より大風 卯一點まで吹 無是非事也 凡此風に官司顛倒 北山殿惣門花山四足其外諸家車宿以下對屋等破損 希代事也 初丑寅風 後東風也

東寺王代記 夜半已後大風 卯刻北山外門顛倒 并北野森木大杉數十本 絶根吹抜云 其外諸方住屋門已下不知其數顛倒 前代未聞希代事也

續史愚抄 今夜 大風自北朝 太政官廳悉倒 入道前太政大臣義隆 北山第惣門花山院大納言忠定 第四脚門及諸家車宿對屋等多倒 北野社樹因北 北野社樹 因北樓倒 賀茂山樹舍屋等多倒 吉田社破壞 頃或作廿二日

立川寺年代記 廿二日、廿三日、廿四日三日間 大風大雨降 大洪水 出 五穀損亡 人畜多死

武家年代記 廿四日 夜大風 北野林木摧折 拱比樓倒 大日本史 大風 北野社林木摧折 拱比樓倒和名

(参考) 〔東寺長者補任 保十四年〕 ○和漢合符 如是院年代記 皇代略記 野史 續本朝通鑑 ○野史 本朝通鑑

南方紀傳 五日 洪水大風 拱比樓吹倒 編者註(五日、京都地方ニ大風洪水アリシ事ハ『教言卿記』等ヲ按ズルニ甚ク疑ハシキ事ナリ 誤記アルカ)

(備考) 熊野史 八月 大風洪水 七人衆の川船九艘流 宮石垣の大楠倒れ 中に入る

極性寺歷代略記 秋のころ洪水大風未曾有にて諸人かなしめり

言上

事山 右今日十二日自即朝太 若宮神殿御棟木千木榿木已刻仁落御井内院殿 大杉等吹倒 瑞籬等令破損訖 仍言上如件 應永十五年八月十二日 若宮神主 中臣連祐光

(備考)

東寺執行日記 十二月 去八月□□夜 大風頻に吹て洛中洛外の房舎佛閣數萬顛倒 是希代事也

續史愚抄 八月 大風 洛中洛外舍屋佛閣數萬倒 東寺鎮守八幡宮壞 立川寺年代記 八月 大風吹 大飢饉

應永十七年八月一日 (二四一〇年八月三〇日) ○後 繼

京都、奈良 大風

南方紀傳 大水大風 堂塔破崩者多 春日若宮記 卯刻 以の外の大風也 山木多く顛倒畢 若宮の一重社吹倒す 次二寶殿を吹倒す

○續史愚抄 後繼 野史

應永十八年十一月十二日 (二四二一年二月二六日)

京都 荒風

應永十八年古曆裏書 荒風吹 ○後 繼

應永十四年八月二十四日 (二四〇七年九月二〇日) 九月十九日 大風吹 大飢饉

京都 大風 八月二十四日 大風 咳病 九月十九日 大風吹 大飢饉

應永十五年七月十九日 (二四〇八年八月一〇日)

京都 大風雨

教言卿記 夜大風雨 廿一日 山科郷の辻鳥居 十九日大風に顛倒云々 今日注進也

續史愚抄 今夜大風 山科郷辻鳥居倒云續史愚抄

應永十五年八月十二日 (二四〇八年九月二日)

奈良 大風雨

若宮殿臨時御遷宮日記 大雨 大かぜに若宮どの、御うしろたつみ角の大刀辛をの御うしろの瑞籬の内 大すぎ二本連ねの木ふき倒とき 御むね木にかゝりて御むねぎ落給畢 先代未聞の重事也

同き玉かきの南面 東のはし杉木をくる時 土居共に持上る 東面南のはし四間打やぶり畢

一、同風に本社の御うしろの杉六本北へ吹たをす 北方ついで打やぶる 南總官師盛どの祐主どの長者殿下このえどのへ御申あり(中略)

一、神主どの、奏狀案

應永十九年七月三日 (二四二二年八月一〇日)

京都 大風

神明鏡 大風 應永二十年七月三日 (二四一三年七月三〇日)

關東諸國 大風

南方紀傳 關東大風 由井濱鳥居笠木吹落 ○續史愚抄 野史

應永二十一年五月二日 (二四一四年五月二〇日)

京都 大風雨

石清水文書 大雨大風上大坂くつれ候 四郷山上衆交野者大坂つく

應永二十二年六月十三日 (二四一五年七月一九日)

京都 大風雨

滿濟准后日記 大風雨 大風雨方々吹損 珍事々々 皇代略記 大風暴雨 人屋樹木顛倒

如是院年代記 日吉神輿依入洛 大風大雨 ○南方紀傳 野史

甲斐國 大風

應永二十五年九月十日 (二四一八年一〇月九日) 妙法寺記 大風 諸國大木等折るゝ也 (參考) 滿濟准后日記 天晴



應永二十六年二月五日 (一四一九年三月一日)

京都 大風

續史愚抄 大風 圓禪神社倒

滿濟准后日記 天晴 寒風

應永二十六年八月 (一四一九年八月二日—九月一日)

九州諸國 大風

南方紀傳 八月 異國凶徒 襲來於對馬浦 兵船五百餘艘 爲風波一時漂沒畢

看聞御記 八月十一日 抑唐人襲來去六月廿六日於對馬小貳大反菊地以下合戰(中略) 大風吹 唐船數多破損入海了

○續史愚抄 野史

應永二十六年十月 (一四一九年一〇月一日—十一月七日)

關東諸國 大風

喜連川判鑑 十月 大風 大木折れ 人屋破損す 大旱魃

○野史

應永二十七年九月十日 (一四二〇年一〇月一七日)

伊勢國 大風

續史愚抄 伊勢大風 內宮破壞由 後日大官司大中臣長盛言之

○南方紀傳 野史 宇治山田市史

康富記 晴

(參考)

應永二十八年十月十八日 (一四二一年一月一三日)

京都 暴風雨

史料雜覽 暴風雨 石清水八幡宮鳴動す 看聞日記

應永二十九年九月六日 (一四二二年九月二日)

京都 大風

史料雜覽 大風 看聞日記

應永三十年五月九日 (一四二三年六月一七日)

京都並讃岐國 大風雨

滿濟准后日記 降雨大風 東寺東の不開門の扉 爲大風開 希代事歟 關木碎けて金物等拔落云々 京中築地覆少家等大略吹損云々 相國寺大塔足代木吹落 其に當る力者法師等於當座四人被打殺云々 不便々々 醍醐邊はさまで不大風歟 山上木少々吹たをす 坊々のやね吹まぐる計と云々 山下又同前弘法印新造大智院坊裏殿 去月十四日立柱上棟 未及上葺 今日大風に顛倒了

○兼宣公記 後編 續史愚抄

應永三十年七月二十二日 (一四二三年八月二日)

奈良、京都 大風雨

滿濟准后日記 廿三日 去夜風雨に大洪水 八幡通路諸人以舟往反云々

續史愚抄 廿三日 今晚大風 春日社東杉樹倒 一切經廊悉倒 樓門東西妻壇及東向廻廊倒 此外一御殿殿木折旨 此日權神主師盛言之

讚岐國大日記 大雨大風

應永三十四年七月一日 (一四二七年七月二四日)

京都 大風雨、洪水

滿濟准后日記 大風雨 今日風雨大洪水 三條以下河原邊小家數十間流失云々 不便々々 先度水に今五尺増云々 希代事也

應永三十四年八月二十日 (一四二七年九月一日)

京都 大風雨、洪水

滿濟准后日記 降雨 風雨洪水 廿一日 昨日 風雨 八幡以外大水云々 山下まで舟往反云々

應永三十四年九月三日 (一四二七年九月二三日)

近畿、關東、奥羽諸國 風雨、洪水

滿濟准后日記 三日 今日又風雨 但不如去月廿日也 四日 晴 八幡邊 昨日風雨に以外洪水 去月廿日大水に今二尺許増云々 八幡の所々橋流失 人も一兩流死云々 自社務田中方内々中 珍事々々 此邊は風雨共無殊事 如去月廿日

喜連川判鑑 九日三日 大風洪水 (日、月カ)

塔寺長帳 四日 洪水 人民多く死す

野史 十三日 洪水 配符 (十三日、別ノモノカ 又ハ三日ノ誤記カ)

應永三十二年七月二日 (一四二五年八月一日)

京都 大風

日本災異志 大雨風 續史愚抄 今年大風 圓禪神社倒

編者註(續史愚抄)十一月十八日ノ條ニ「圓禪神社延引齋院日記」ト下アレド是歲顛倒ノ記事ナシ 或ハ疑シキモノ歟

應永三十二年七月七日 (一四二五年八月二〇日)

京都 大風

薩戒御記 未終已後 雨風烈 入夜大風

應永三十二年七月十七日 (一四二五年八月三〇日)

京都 大風雨

滿濟准后日記 風雨 醍醐灌頂院土の廊顛倒

第一編 暴風雨

應永二十六年—應永三十四年(西曆一四一九—一四二七年)

五七

正長元年九月一日 (二四二八年一〇月九日)

京都 大風

正長元年記 一日 天雨風  
二日 天晴 昨日大風 山中諸坊 數ヶ所吹破 其外清瀧宮邊 杉檜松以下大木百本過顛倒 雖然社頭拜殿并諸堂不苦 希代事歟

永享二年八月十八日 (二四三〇年九月五日)

京都 大風雨

滿濟准后日記 大雨大風以外方々破損云々  
當寺諸院不及吹損 山上山下無爲 珍重々々 大風半午歟 止了 五靈祭禮無爲云々 公方様御見物云々 六條八幡宮 御油神人清水寺參詣 歸路於五條橋上逢大風 自橋被吹落 主從二人沒了 不便々々 其外如此類所々在之云々 官廳二門顛倒云々 相國寺邊以外吹損云々 細川右京大夫亭祇園御棧敷 一二町他所へ吹落云々 十間計歟云々  
廿日 十八日大風 大和近江國等には不吹云々  
廿五日 御陵木 去十八日大風に少々顛倒  
○如是院年代記 南方紀傳 武家年代記 續史愚抄 野史

永享七年七月十三日 (二四三五年八月七日)

京都 大風雨

如是院年代記 大風雨  
○南方紀傳

永享八年三月六日 (二四三六年三月二三日)

京都 大風

藤原軒日錄 八月 今月六日 及昏大風 吹倒西廊之事披露之 續本朝通鑑 大風 相國寺西廊倒  
○後記

永享十一年七月十六日 (二四三九年八月二五日)

京都 大風

藤原軒日錄 九月八日 七月十六日大風起而倒清見寺殿堂之事披露之

永享十一年八月十六日 (二四三九年九月二四日)

岩代國 大風雨

會津藩事土直考 大風雨

永享十二年八月十四日 (二四四〇年九月一〇日)

京都 大風

南方紀傳 大風吹

永享十二年八月二十二日 (二四四〇年九月一八日)

伊勢國 大風雨

宇治山田市史 暴風雨あり 内宮樹木三十餘株 外宮樹木六百餘株を 倒し月讀宮が顛倒した

嘉吉元年八月二十五日 (二四四一年九月一〇日)

京都 大風

續史愚抄 二十五日 大風 吹倒廿六日

文安二年六月二日 (二四四五年七月六日)

京都、奈良 大風雨

東寺執行日記 大風 寺家の塔二三重 高欄 五角吹落 東山の栢岩 寺三重塔婆悉破了 香隆寺 うづまさ寺塔九輪計悉落 寺家鎮守後の檜皮一間計破  
大業院日記目録 大風 藥師寺金堂以下顛倒 在々所々破損 希代事也云々 春日大鳥居之内下松顛倒了 鬼蘭山城陣屋共如 其也  
如是院年代記 大風雨 此時青岩寺塔吹倒 其外家々數不知 續史愚抄 大風倒屋 賀茂別當社殊損由社司言之 藥師寺金堂青岩寺塔等倒 及諸寺塔婆損或九輪落  
○立川寺年代記 歷代皇紀 南方紀傳 武家年代記 後醍醐仁以來年代記

文安三年七月二十日 (二四四六年八月二日)

京都 大風

史料雜覽 大風 新撰和漢合編

文安四年六月二十二日 (二四四七年八月三日)

伊勢國 大風

神宮年代記 大風 伊勢神宮御山杉百餘本倒  
○後記

(參考)

南方紀傳 大風

文安四年七月二十五日 (二四四七年九月五日)

南方紀傳 廿六日 大風吹

史料雜覽 廿五日 大風 東寺執行日記 南方紀傳

嘉吉二年八月十九日 (二四四二年九月二三日)

奈良並紀伊國 大風雨

史料雜覽 十九日 奈良大風 續史愚抄  
康富記 十九日 雨下 入夜風頻吹  
熊野史 二十日より二十五日迄大風雨 假殿宮殿廻廊悉く破崩 大洪水 庵主堀内に水入雨の山より螺出川口に入川口七つにきれる 雷落ち小島を崩し流る 前代未聞の事共也

嘉吉三年六月二十四日 (二四四三年七月二日)

京都 大風

康富記 雨下風吹 入夜暴風 處々吹破云々 茅屋上吹破了  
如是院年代記 夜半 大風

嘉吉三年九月四日 (二四四三年九月二七日)

京都、奈良 大風

看聞御記 雨降 大風吹 所々聊吹破  
六日 晴 具侍者參 一昨日大風 伏見以外吹 大光明寺 惣門顛倒 松原大本共甘本計吹倒 指月之塔小家等吹破 散々式云々 寶殿院も吹破 當年境内損亡 希代事也 洪水出云々 (史料雜本二卷九)  
康富記 雨下 晴時暴風頻吹 後關正親町京極口殿池之汀大木吹倒云々  
春日社舊記 春日社司言上惟異吉凶 今月四日迄暴風大風若宮社大社大社 (史料雜本二卷八) 倒屋倒屋大社并并倒屋倒屋 (史料雜本二卷八)

岩代國 大風雨

會津舊事土直考 大風雨  
塔寺長機 大風吹て鳥居ゆがむ  
會津舊事雜考 大風雨 塔寺華表倒

寶徳元年一月 (一四四九年一月二五日—二月二二日)

京都 大風

南方紀傳 正月 大風

○續史愚抄

寶徳元年三月十五日 (一四四九年四月七日)

伊勢國 大風雨

内宮氏經日次記 大雨風 北御門御戸顛倒之由 當番宮守物忌父弘憲  
予之館ニ注進<sub>下依</sub> 則令注進長官畢 其後同物忌父弘憲來依  
然風御鐘打立を吹抜 顛倒之間 拵直奉御戸納之由申之 神  
妙之由返答

寶徳二年七月一日 (一四五〇年八月八日)

周防、長門諸國 大風

康富記 後日傳聞 今日周防 長門兩國有暴風 吹損人屋城郭草木  
等 希代大風也 傳聞 永祚風豈如之哉云々

○後編 續史愚抄

寶徳二年七月十六日 (一四五〇年八月二三日)

越中國 大風雨、光物了り

康富記 後日 人々語説 今日於越中國有不思議 大風大雨之中

長祿二年記 入夜 大風雨

長祿三年六月十九日 (一四五九年七月一八日)

鎌倉 大風

東京市史稿 鎌倉大風 續實大日記

長祿三年九月十日 (一四五九年一〇月六日)

京都、奈良 大風雨、洪水

如是院年代記 大洪水 同大風 處々家門吹倒不知數  
大業院寺社雜事記 雨下 卯魁より大風 當院破損 惣而院家僧坊在  
家以下損亡 不及言詞云々 大安寺金堂の廻廊西 吹たを  
了

東大寺法堂要錄 八月十日に大風吹て そこはくの坊舎在□吹損す  
事申に及ず 吉野川大水風と□出て 川つらの家ながるゝ  
事は皆々ながれて死□三百五十人と云り 言語道斷事也

碧山日録

九日 終日雨 戊而大風  
十日 大風怒号未止 竹樹拔其根株而倒如散芥也 刈稻以  
曝原野者 爲大水所漂皆失之 萬室愁之  
十二日 鴨河大漲 民家潰流 往來者多溺死

○續史愚抄 後編 和漢合符

寛正元年二月十七日 (一四六〇年三月一〇日)

大和國 大風

大業院寺社雜事記 十八日 夜前國中大風云々 大和社鳥居吹たをし  
了云々 其外小家小堂所々破損了 於奈良中者さして不吹

第一編 暴風雨 寶徳元年—寛正六年(西曆一四四九—一四六五年)

牛嶽と云所より光物出 其體雲中鬼形有之 指良飛行 其  
間十里許也 (山河草木悉損失云)

續史愚抄 越後大雨 ○以下大意同前

續史愚抄 越後、恐ラク越中ノ誤カ)

寶徳二年八月二十七日 (一四五〇年一〇月二日)

伊勢國 大風

史料總覽 伊勢烈風 皇太神宮荒祭宮忌火屋等破壊し人畜死す 武野記  
宇治山田市史 寶徳元年八月二十七日夜列風あり 内宮正殿千木折れ  
その他殿舎の壞倒多く巨樹百餘株を倒した 續紀年

續史愚抄 (元年、恐ラク二年ノ誤カ)

享徳元年八月二十五日 (一四五二年九月八日)

丹波國 大風雨

東寺百合文書 抑當年御領<sub>丹波</sub> (中略) 八月廿五日、六日 大風大  
雨により候て 作毛事外損候

長祿元年八月二十一日 (一四五七年九月九日)

京都 大風

立川寺年代記 夜 大風吹 天下大木悉吹倒 恰如永祚風

續史愚抄 (野史) 七月二十一日 是夜諸國大風云々トセルハコノ  
大風ノ誤ナルベシ)

長祿二年八月二十四日 (一四五八年一〇月一日)

京都 大風雨

者也

寛正元年六月十九日 (一四六〇年七月七日)

京都 大風、洪水

續本朝通鑑 大風洪水

寛正元年八月十八日 (一四六〇年九月三日)

京都 大風雨

碧山日録 午而風起雨下 多敗民家

寛正元年八月二十九日 (一四六〇年九月一四日)

近畿諸國 大風雨洪水

讚岐國大日記 大風 由是無稻實  
立川寺年代記 夜 大風吹大雨降 洪水出 天下一等損亡  
碧山日録 終日大風 黎首爲稻根憂之  
大業院寺社雜事記 晦日 雨下 大風且暴也 所々破損

○續本朝通鑑 後編

寛正四年閏六月二十四日 (一四六三年八月九日)

鎌倉 大風雨

續本朝通鑑 鎌倉大風雨 鶴岡若宮寶殿壞

寛正六年三月六日 (一四六五年四月一日)

京都 風雨

大業院舊記 大雨大風(中略) 桂河之浮橋流落 公方引馬河に流上

下迷惑以外事也

親元日記 雨降 花御覽 大原野

寛正六年六月一日 (一四六五年六月二四日)

伊勢國 風雨、洪水

宇治山田市史 風雨の爲 五十鈴川氾濫して風日祈宮が漂流して宇治橋に懸つたので同橋も中絶した

寛正六年八月十五日 (一四六五年九月五日)

京都 大風雨、洪水

如是院年代記 大風大洪水 路次往反人吹流

藤原軒日録 十八日 前十五日 八幡疾風暴雨 人家共流没 四百

年來先此例也

大乗院日記目録 大雨大風 淀橋流了 國々損亡

齋藤親基日記 自申刻俄大風大雨 山中鳴動(中略) 風雨彌倍増無比

類(中略) 大水出来

十六日 寅刻 大水出 溢山城半國 放生川如大海

續史愚抄 此日 大風雨 破稻荷旅所御輿屋 洪水云

○後記 大乗院寺社雜事記 親元日記 續本朝通鑑 曆仁以來年代記

編者註(野史) 寛正五年八月二十二日 大風洪水 人多漂没

寛正五年八月二十二日 大風ノ記事ハ(如是院年代記)ニ無シ

旁々併記セル所以ナリ

文正元年閏二月二十四日 (一四六六年四月九日)

鎌倉 大風雨

鎌倉大日記 大風雨破土坂 鶴岡若宮寶殿崩倒 小蛇走入御池 同瀬戸社廢没

應仁元年八月 (一四六七年八月三〇日—九月二八日)

北海道 大風、洪水

新北海道史 松前年代記曰 秋八月 洪水大風

蝦夷年代記 八月 大風水 松前沖にて破船多し

應仁二年七月二十日 (一四六八年八月八日)

岩代國 大風雨、洪水

異本塔寺長帳 大風雨洪水

(參考)

續史愚抄 廿六日 大風洪水

○續本朝通鑑 野史

應仁二年八月四日 (一四六八年八月二日)

伊勢國並鎌倉 大風

宇治山田市史 大風あり 内宮大庭の老樹顛倒して扇尾館三字を壞

鎌倉大日記 壽福寺十三重塔倒 同夜大風 極樂寺十三重塔顛倒

所々佛寺 神社民屋以下破損不知數

○續史愚抄

○蝦夷年代記

新北海道史 松前年代記曰 是歲春夏大風飢饉 人死者甚多矣

文明元年四月八日 (一四六九年五月一日)

京都 大風

見聞雜記 八日夜 大風吹了 東方の高せいろ吹破了

大乗院寺社雜事記 九日 京都去朝日大風 天狗所行敷 此外希代事

共在之云々

八日 東方高倉二

文明元年八月十一日 (一四六九年九月一日)

伊勢國 風雨、洪水

宇治山田市史 風雨洪水して宇治 今在家 岡田等の民屋數十戸及び

宇治假橋も流失した

(備考)

史料綜覽 八月 是月 大和 伊勢霖雨暴風

續本朝通鑑 八月 洪水 人畜舍宅流失

文明三年八月七日 (一四七一年八月二二日)

京都、奈良 大風雨

經覺私要鈔 自且雨下風吹 及日中大風吹了 所々舍屋破損云々

申下刻霽

八日 今日 風以外大風也 下所吹破了 南都は殊大風

大乗院寺社雜事記 八日 大風

親長卿記 八日 風雨甚 晚晴

文明四年七月二十日 (一四七二年八月二四日)

第一編 暴風雨

寛正六年—文明七年(西曆一四六五—一四七五年)

京都、奈良 大風

東大寺法花堂要錄 夜大風吹 住家をく損す

大乗院日記目録 廿一日 夜前大風 一言主社并拜殿大杉顛倒之間

打破之 以外事 如此例無之云々 當宮棟木秘事云々 神

體南因堂に飛給了 其時自然に南圓堂南方門開了 此外在

所々破損 不及是非 社頭大木共顛倒了 元興寺新金堂

顛倒 本尊破之 龍蓋寺 塔婆顛倒云々 爲寺門之

不吉事也 但久女以下所々塔婆顛倒云々 不限一所歟

大乗院寺社雜事記 廿一日 昨夜大風以外事也 當院在々所々吹了之

御領内者共悉以召出之 一言主社并拜殿破損無形云々 大

杉二本令顛倒故也 大石動上云々 爲寺門不吉珍事云々

經覺私要鈔 夕少雨風吹

一、自亥刻風烈吹号増聲次第吹増て 此草庵上大略吹破了

言語道斷次第也 仍舊在所無可居所之間 北向居了 無程

夜明之間聞所々儀以外風也云々

一、廿日夜風に寺中一言主社後木折打破了 將軍塚社顛倒

云々 自禪定院申送云 廿日夜前風に自一言主火五南圓堂

を指上處南戸開聲爲之 則此火入内了 後大風吹云々 爲

實事者不思儀事也

一、岡寺塔も顛倒云々 塔風に顛倒事未聞及事也 南都邊

事外破損云々

(五、出力)

東院年中行事記 廿一日 今晚自後夜之時分大風起 至晨朝之時分

止了 當堂倉并經藏築地覆等吹損了

文明七年二月十九日 (一四七五年三月二六日)

京都 大風雨、光有り

實隆公記 雨降 入夜暴風吹雨  
親長卿記 今夜 風雨頻 後或人語云 自北野御旅所光物飛行 北野  
本社方云々  
○續史愚抄

文明七年六月六日 (一四七五年七月八日)

岩代國 大風  
會津藩事土直考 大風吹

文明七年八月六日 (一四七五年九月六日)

近畿諸國 大風雨、光物アリ

親長卿記 六日 細雨下 入夜大風吹 構中諸屋有顛倒 近年無如  
此風 近邊民屋 大略顛倒云々 内侍所之上吹落

大乗院寺社雜事記 十四日 去六日京都大風 兩陣破損無是非 山城  
下泊邊猶以大風云々 和泉郡高野打入 在家數千間 船數  
百艘 人民數百人 被引大流 無跡形失了 及數百歲不聞  
先例 希有事也云々 無爲民屋財寶悉以損了 濱在家は大  
略京都没落人 大舍人織手師法花宗僧共也云々 不便不便  
天王寺は在家一二字相殘 悉以被引鹽云々

言國卿記 大風雨 大木 堂など吹たを了了 夜前夜半許 風雨以外  
の事也 二時計也 此大たけ八王子大宮 同社頭より大と  
り居まで 光物つゞき 皆湖水へ入とみへし山沙汰也

長興宿禰記 今夜子刻 雨降大風吹 人屋吹損 森鳥死事 不知數  
以外大風也

歷代皇紀 夜大風 内侍所吹損 遷坐中門廊  
續史愚抄 大風 倒屋 林鳥死 櫻津尼崎波濤上陸云

續史愚抄 大風發屋 稻荷中社倒 因奉遷神體於上社 又二階旅所等  
倒

京都御所東山御文庫記 續史愚抄 大風發屋 稻荷中社倒 因奉遷神體於上社 又二階旅所等  
倒

十五日 大風

十七日 雨

十八日 雨

十九日 夜に入て 大風雨ふる 四あしのもんそ  
のほかふきやふる ちかき程の風なり せけんは猶さかな  
らすふきやふるよしきこゆる

後法興院政家記 自己刻雨下 自酉刻風吹 入夜大風吹 處々吹破  
以外事也

大乗院寺社雜事記 大雨下 風

(備考) 妙法寺記 此年大風度々吹 作毛因 飢渴也

○親長卿記 長興宿禰記 後隆

文明十四年閏七月二十五日 (一四八二年九月八日)

信濃國 風雨

守矢滿實書留 御射山上増大雨降 夜入て御上有 次日も大雨大風吹  
未時迄皆々宿吹破 社參人馬かよも絶 皆々里より下向  
然共日照上御手高御座有 又其夜 計より大風大雨降  
下増の日山御座後木吹さき候 丑寅へまろふ様々 山より  
は大祝殿祝達 晦日には千野迄御下有御宿候 祝達少々田  
澤宿 五日市十日市は 大町大海と成 郡内海原と様々

文明十四年閏七月二十八日 (一四八二年九月十一日)

京都、奈良 大風雨

第一編 暴風雨 文明七年一文明十八年(西曆一四七五—一四八六年)

大乗院日記目録 近國大風大水 大和國一切不吹 希有事也  
實隆公記 宿雨吹晴(中略) 自亥刻計高風怒号 起於東南 所々廢壞  
合北之老梅 社頭之古檜等悉穿地顛倒 人民之周章失墜幾  
多乎 可歎々々

鎌倉大日記 大風 攝州難波浦大鹽滿上 尼崎難波人多死

和漢合符 八月 自三日至十五日 連雨不休 洪水 往々家流入溺

(備考) 武藏國龍淵寺年代記 大風

相良家年代記 大風

○後隆 續本朝通記 野史

文明十二年二月十一日 (一四八〇年三月二日)

京都 大風

續史愚抄 大風發屋 慶雲院在相國寺倒 實隆公記  
長興宿禰記 雨下風吹雷鳴

文明十二年八月二十六日 (一四八〇年八月三〇日)

京都 大風

野史 大風 殿屋顛倒 實隆公記  
編者註(日本實業因難致)一本記事ヲ十一月八月二十六日トス

文明十四年閏七月十九日 (一四八二年九月二日)

近畿諸國 大風雨

資益王記 今日風雨 入夜亥刻大風 齋屋屏以下所々吹損 北小路西  
堀出之藥師堂屋上中將方庭上口吹入了 惣而所々破損 言  
語同斷次第云

親長卿記 入夜 大風甚雨 處々又吹損 超過十九日  
後法興院政家記 降雨 曉更風雨甚及天明猶吹 處々吹損云

大乗院日記目録 大風大雨

文明十五年八月二十日 (一四八三年九月二日)

奈良 大風

大乗院日記目録 大風

文明十六年七月二十七日 (一四八四年八月一日)

岩代國 大風

塔寺長帳 大風夜半ふき候て八幡之御前のいとさくら折失候 會津  
内にてんはた(田島) そうして一夜の内おれ候て諸人め  
いわく仕候

(備考) 大乗院寺社雜事記 廿七日 風

文明十八年八月四日 (一四八六年九月一日)

近畿、東海諸國 大風雨

宇治山田市史 大風雨あり 内宮の大樹倒る 兵衛日記記

實隆公記 雨降 及曉大風 但不及損物

妙法寺記 風吹 世間半分代の中也

文明十八年九月二日 (一四八六年九月二九日)

京都 大風雨 耀物アリ

親長卿記 三日 依去夜風雨 内裡北門 外様番業所等顛倒 此外  
處々 端板築地覆諸門上等吹破了 其外民屋諸家公家家々

六五

破損了  
後閑 去夜大風之時分 八幡山兩度鳴動 有燐物  
長興宿禰記 晴陰 入夜子刻大風吹  
今夜大風 洛中所々破損 內裏北棟門吹破顛倒 其外清涼  
殿南殿素吹破 御輿宿殊風損了

(參考)  
大乘院寺社雜事記 二日 夜大風  
○續史愚抄 後深 實隆公記

長享二年四月四日(二四八八年五月一日)

京都並武藏國 大風

薩涼軒日錄 終日 有風雨  
史科繪覽 武藏大風 船舶を壞つ 梅花無盡藏  
梅花無盡藏 孟夏四日 大風俄起 及拔樹拔屋 伊陽之商船繫品河之濱者數艘 纜斷折損矣 舟艘數千斛波浪底 余物稱是 余聽之漫作是什云  
幾艘商船漫度春 大風吹破品河濱  
數千斛米浪花底 縱引揚米味苦辛

長享二年九月(二四八八年一〇月五日—十一月三日)

武藏國 大風雨

梅花無盡藏 九月且 至晚間疾風甚雨 遂及夜 逆旅之茅堂 其壁破而簷破矣 避漏痕處々移床 老妾就爐舂 吹品字之薪纒取 明而已 子美云 床々屋漏無乾處 坡老亦云 破屋常持傘 分兩翁之意 或謂案或捕影 戲作一絕 投天府文云

逆旅滯留東耐言 連朝風雨獨消魂 只今破屋持無傘 處々移床避漏痕

○東京市史稿

延德二年八月二十二日(二四九〇年九月六日)

京都、奈良 風雨、洪水

實隆公記 雨降風吹 抑今日上乘院下向坂本 及晚歸路於北白川洪水 鶴松丸生年十八歲 壽阿子息男廿八歲 下部一人 以上三人忽溺 死云々 言語道斷次第也 雖然主人悉之條可謂高運哉 (悉、悉力)

大乗院寺社雜事記 廿二日 雨下大風 夜明方雷光

延德二年八月二十五日(二四九〇年九月九日)

京都 大風雨

實隆公記 雨降 未刻暴風拂地所々損失 言語同斷云々 不能述筆舌 也 廢口之體 可歎々々 (口、廢力)

○續史愚抄 大乗院寺社雜事記

明應元年八月十七日(二四九二年九月八日)

京都、奈良 大風雨

延德記 今月十七日 風雨刻 奉吹放雲形文小壁板落懸而見給并三 鳥居令顛倒事 雖爲風雨刻 其外之鳥居四宇御門瑞垣玉垣 荒垣東西寶殿 外幣殿 次々御倉等令損失給上者是皆御遷 宮延引之故也、殊又正殿之千木堅魚木覆 左右板御葺葺等 悉令損落地上

明應四年八月十五日(二四九五年九月三日)

鎌倉 大風

東京市史稿 鎌倉大風 高代寺日記  
大地震洪水 鎌倉山比濱 海水到千度壇 水勢入大佛殿 破堂舍 溺死二百餘 鎌倉大日記  
細香註(大日本地實史料)ハ(大日記、コノ震災ヲ四年ニ揭ゲ且八月 十五日ト爲ス 並ニ誤レリ)トナシ 右ヲ七年八月二十五日 ノ項ニ置ケリ)

明應五年八月十七日(二四九六年九月二三日)

近畿、東海諸國 大風雨、洪水

拾芥記 風雨 自四時分 就風大吹 入夜罷 洪水云 (就、本ママ)  
妙法寺記 十六日 大水又大風吹て作毛悉損る也  
後法興院政家記 十七日夜來降雨 自申刻大風吹 入夜止

明應六年九月六日(二四九七年一〇月一日)

鎌倉 大風雨

史料繪覽 相模 大風雨 鎌倉大日記

明應七年六月二十八日(二四九八年七月一七日)

伊勢國 大風雨

宇治山田市史 大風雨 宮川汎濫の爲に山田人民は宮山井に高宮地 に避難した 御願文

明應七年七月十四日(二四九八年八月一日)

後法興院記 十六日 晴陰時々小雨下 終夜風雨  
十七日 早且大風吹雨又下 風無程止  
薩涼軒日錄 天起風雨  
大乗院寺社雜事記 雨下 大風  
明應二年七月一日(二四九三年八月二日)  
京都 風雨  
薩涼軒日錄 今夜 暴風暴雨

明應四年七月十三日(二四九五年八月三日)

甲斐國 大風

妙法寺記 大風吹 作一本も實不入 飢饉寸

明應四年八月八日(二四九五年八月二七日)

伊勢國 大風雨、洪水

內宮子貢館記 九月九日 菊の御饒延引事  
八月八日の大風に忌火屋殿大杉ころび懸り打破る間 御殿も未作 御欄以下不調により十六日に調進申  
天粟噎零記 大風洪水 內宮杉樹 倒破忌火屋殿 風祭宮大橋落 民屋五十四宇流

河崎氏神宮年代記 大風洪水 岡田の家九十餘流 人多流死  
宇治山田市史 風雨洪水り 五十餘川が溢れて風宮宇治雨橋墜落し 岡田郷の民屋五十餘戸流失し 溺死者五十餘人あつた 二百年表

○後 鑑

第一編 暴風雨 長享二年—明應七年(西曆一四八八—一四九八年)

京都並遠江國 大風雨、洪水

史料綜覽 京都 遠江 暴風雨洪水 御湯殿上日記 長崎日記 宮田日記 御湯殿日記

明應七年八月二十八日 (二四九八年九月二四日)

甲斐國 大風雨

妙法寺記 大雨大風無限 申尅當方の西海長濱大田輪大原悉壁にお  
されて人々死事大半に超えたり あしたわ小海の巖 皆  
流て白北と成る

(備考)

史料綜覽 八月 是月 陸奥 甲斐 大風雨 妙法寺記 塔寺八幡宮長崎

明應九年五月十八日 (二五〇〇年六月一四日)

甲斐國 大風

妙法寺記 大風吹

明應九年九月二日 (二五〇〇年九月二五日)

近畿諸國 大風

續史愚抄 大風 發慶舎 此日 内宮故殿倒壊 山後日社司云和長崎記

文龜元年閏六月十四日 (二五〇一年七月二八日)

京都 大風雨

史料綜覽 京畿 大風雨 大徳院日記 長崎日記 實徳公記 宮田日記

文龜二年八月二十九日 (二五〇二年九月三〇日)

近畿諸國 風雨、洪水

續史愚抄 雨水 宮田日記

拾芥記 雨降 大風洪水

(備考)

妙法寺記 此年は世中凶 惡風八月吹て耕作殊の外也

永正二年八月十三日 (二五〇五年九月一〇日)

京都 大風

續本朝通鑑 大風 五穀不熟

永正七年九月二十九日 (二五二〇年一〇月三一日)

奈良 東風大雨

多聞院日記略 二十九日夜の半より東風大雨 奈良中方々大破に  
合と 舊記に在之心細き者也

永正八年八月十九日 (二五二二年九月一一日)

九州、近畿、奥羽諸國 大風雨

滿願寺歷代并諸記 十八日 大風 あそ山本堂傾損

後法成寺尚通公記 十八日 雨下 寅刻に大風吹 少々愚亭吹破  
十九日 雨下

實隆公記 雨降 入夜暴風 折樹摧屋 言語道斷也

廿日 雨 枕髪 昨夜風 日花門廊倒 小御所上吹損  
築垣掩所々損失云云 惣而人屋等破損云々(中略)

抑今夜西築垣五間餘顛倒 土豹連々穿下之處 連雨洪水滿  
堀之間如此 無與無極

史料綜覽 諸國暴風洪水 本朝通鑑 長崎日記 實徳公記

皇年代略記 暴雨洪水

永正十五年七月十三日 (二五二八年八月一一日)

甲斐、岩代諸國 大風

妙法寺記 大風吹て作毛悉損す

塔寺八幡宮長帳 十四日大水 はんけの薬師堂のはしらはん分まで  
みすつき申候

○會津舊事土江考 續本朝通鑑

永正十六年二月二十五日 (二五二九年三月二五日)

京都 大風

嚴助往年記 大風一通 清瀧宮後大杉顛倒 吉凶之由不審也

○續史愚抄

永正十六年九月一日 (二五二九年九月二四日)

京都 大風雨、洪水

嚴助往年記 大風雨 自卯刻吹初至亥刻 上醍醐 松杉檜顛倒數百本

永祿年代記 八月晦日夜半九月一日申刻大風雨 處々大木吹倒 洪水  
人死

○後鑑 續史愚抄

永正十七年三月七日 (二五三〇年三月二五日)

京都 大風

二水記 入夜風緊吹 禁中築地所々及破損

京都並遠江國 大風雨、洪水

史料綜覽 京都 遠江 暴風雨洪水 御湯殿上日記 長崎日記 宮田日記 御湯殿日記

明應七年八月二十八日 (二四九八年九月二四日)

甲斐國 大風雨

妙法寺記 大雨大風無限 申尅當方の西海長濱大田輪大原悉壁にお  
されて人々死事大半に超えたり あしたわ小海の巖 皆  
流て白北と成る

(備考)

史料綜覽 八月 是月 陸奥 甲斐 大風雨 妙法寺記 塔寺八幡宮長崎

明應九年五月十八日 (二五〇〇年六月一四日)

甲斐國 大風

妙法寺記 大風吹

明應九年九月二日 (二五〇〇年九月二五日)

近畿諸國 大風

續史愚抄 大風 發慶舎 此日 内宮故殿倒壊 山後日社司云和長崎記

文龜元年閏六月十四日 (二五〇一年七月二八日)

京都 大風雨

史料綜覽 京畿 大風雨 大徳院日記 長崎日記 實徳公記 宮田日記

文龜二年八月二十九日 (二五〇二年九月三〇日)

史料綜覽 諸國暴風洪水 本朝通鑑 長崎日記 實徳公記

皇年代略記 暴雨洪水

永正十五年七月十三日 (二五二八年八月一一日)

甲斐、岩代諸國 大風

妙法寺記 大風吹て作毛悉損す

塔寺八幡宮長帳 十四日大水 はんけの薬師堂のはしらはん分まで  
みすつき申候

○會津舊事土江考 續本朝通鑑

永正十六年二月二十五日 (二五二九年三月二五日)

京都 大風

嚴助往年記 大風一通 清瀧宮後大杉顛倒 吉凶之由不審也

○續史愚抄

永正十六年九月一日 (二五二九年九月二四日)

京都 大風雨、洪水

嚴助往年記 大風雨 自卯刻吹初至亥刻 上醍醐 松杉檜顛倒數百本

永祿年代記 八月晦日夜半九月一日申刻大風雨 處々大木吹倒 洪水  
人死

○後鑑 續史愚抄

永正十七年三月七日 (二五三〇年三月二五日)

京都 大風

二水記 入夜風緊吹 禁中築地所々及破損

大永五年九月五日 (一五三五年九月二日)

鎌倉 大風雨

積本朝通鑑 鎌倉大風雨 圓覺寺 壽福寺壞 河水溢漲 山岳滅沒 人畜多死

(參考)

二水記 四日 夜風烈 終日猶不休

實隆公記 霽(中略) 洪水

八幡宮長帳續 八月廿七日 大風雨 日本惡作

編者註(八月廿七日、『史料稿本』左ノ如キ註記アリ)  
〔按鎌倉大風雨、他書所見ナシ疑フ可シ、然レドモ、積本朝通鑑、歴然之ヲ是日ニ揭ク、當サニ據アルヘシ、今之ニ從フ一八幡宮長帳續、往々信ス可カラス、故ニ此ニ附載シ別掲セス〕  
四、五兩日ニ京都 寛天ノ史料アル故、五日、鎌倉風雨ノ事ハ有リ得ベキ事カ)

大永五年十一月十一日 (一五三五年十一月二日)

京都 大風

二水記 今日風烈以外也 薄暮大風起 禁中所々及破損 私宅各吹破 近年之風也 時又珍敷事也 傳聞 在家大畧 無事家無

○續史愚抄

天文三年八月三日 (一五三四年九月一〇日)

京都 大風雨

言繼卿記 二日 晴 七時分雨下 五時分歸宅 大風に北之壁十間許吹臥候了 所々屋上壁等 吹破候了 毎家之馳走近來

事也 谷之城 今日之風雨にやくら壁等吹破云々 仍今夜落候了

三日 曇四過時分より雨下 七時分より至夜半過 大風雨及曉天

公卿補任 大風雨 洪水流 風雨損

野 史 大風雨洪水 記事 年代略記卷八十月十日

天文四年二月五日 (一五三五年三月八日)

京都 大風

後奈良院宸記 大雨 自辰刻晴

今夜初夜時分 大風起 所々吹破 日華門同廊顛倒 言語道斷也 可懼可欽々々

續史愚抄 今夜大風 壞康舍 又日華門及同廊等倒 或云六日

言繼卿記 六日 雨下風吹 夜入大風雨甚

七日 天晴 去夜大風に禁裏日華門顛倒云々 不怪事也

編者註(續史愚抄)ノ註記ニ見ル如ク「言繼卿記」ハ六日トセリ  
イブレカ日附ノ推歩ヲ誤レルガ如シ「公卿補任」ハ日華門顛倒倒ヲ五日ノ事トセリ

天文四年三月 (一五三五年四月三日一五月一日)

甲斐國 大風

妙法寺記 三月 大風吹て皆家を損さし申候

天文四年八月三日 (一五三五年八月二日)

京都 大風雨

天文九年八月十一日 (一五四〇年九月二日)

近畿、關東、中部、奥羽諸國 大風雨

鹿苑日錄 十一日 大風吹

吹倒 十二日 玉泉寺 玉潤吹破所々築地奪之 鹿苑柏樹三本

二條寺主家拔華 大雨風烈 城州八幡塔上重吹落 其外所々破損云々 春日本宮獄五町計崩

長享年後畿内兵亂記 十日 大風

快元僧都記 戊刻大風吹 社頭山之木并四十本計吹倒 大木之梢吹折 社中に充滿 雖然樓門拜殿之上には不懸 其當亂滿

惣而武相之間 草木悉損了 建長寺惣門倒 正統庵滅却 寶泉庵 向上庵 鹿山庵 大都次倒畢 國中小堂一字も

不殘 洪水過例年 諏訪神使御頭之日記

十一日之酉時のさかりより南大風出 雨共に戊刻迄吹候

南風しづまり半時計候て北より大風吹出子刻迄ふき候

何も近年になき大風 とりわけ北風つよく候て宮々の古木大木吹折候(中略)

如此の風はむくり風にても候かと申候 昔のしはまくり

風にもをとらず候 風しつまりて大水來 大町家十計流人

も三人夜半水に候 總而十一日酉の頭にしづの湯山にあ

たりをひたゞしくなりさて酉の刻のをはりに風吹出候

大水は五十年前に只今の水にもまし候て出候由申傳候

風は五百年以前のしはまくり風も是ほどはあるまじきか

と風聞候 塔寺長帳

夜 大風吹て古木大木ふきたをして五こく地のそこまで

かせにあい申候

後奈良院宸記 七月十三日 大風雨

祇園執行日記 八月三日 大風大水也

編者註(日本災異志)ハ「記事年代略記爲八月十日」ヲ註テ附セドソ  
ハ天文三年八月三日ニ關スルモノ、誤記ナルベシ

天文四年八月十一日 (一五三五年九月九日)

陸前國 大風

登米郡史 大風吹き民屋悉吹破るとあり

天文五年一月十四日 (一五三六年二月五日)

甲斐國 大風

妙法寺記 夜 大風吹候而皆々家を損し申候

天文七年一月十七日 (一五三八年二月一六日)

甲斐國 大風

妙法寺記 夜大風吹候而後二月三月大風度々吹申候

天文八年七月十一日 (一五三九年八月二四日)

日向國 大風、洪水

日向記 七月十一日 夜大風洪水

八月四日 夜又大風洪水

天文八年十二月十五日 (一五四〇年一月二三日)

甲斐國 大風、洪水

妙法寺記 大風吹候而大水出て候



會津藩事土直考 十一日夜 大風吹 粟木倒

高田宮林及千本倒 諏訪華表倒

○殿助往年記 後編 續史愚抄 登米郡史

天文九年八月十六日 (一五四〇年九月一六日)

紀伊國 大風雨

熊野史 大風大雨 七人衆の川舟皆流す 在々浦々流る 人も死す

天文十年八月十日 (一五四一年八月三日)

近畿、東海道、奥羽諸國 大風雨、洪水

熊野史 十日 大風吹大洪水 本宮へ水入 新宮石階水こす 町に

水入る 子供十一人女五人流る 王子も流る

公卿補任 十一日 大風 宮中宜陽殿陸軍長柄車寄内侍所崩 軒廊

日華門 其外所々顛倒

殿助往年記 十二日 大風雨 前代未聞 禁中所々顛倒 陸軍宜陽殿

近那月華門車寄外様番所以下 所々顛倒散之

洛中洛外都鄙在家 竹木山林顛倒 言語同斷次第也 大財

川渡 世多渡 水吹上之人渡川 前代未聞珍事也

二條寺主家拔萃 十一日 自寅刻大風 六時分迄吹了 春日御間木

倒 石燈以下亡 其外御拜殿上 拜屋上 大宮殿御廊坤角

木倒懸并民屋僧房以下令破損 奈良中田舎人多死了

長享年後畿内兵亂記 十日夜大風 内裏 公方 建仁 相國伽藍吹倒

其外民屋倒

妙法寺記

八月十一日の暮程に大風吹候而 亥刻迄三時吹申候 大海  
端は皆浪に引れ 山家は大木に打破られ 堂寺宮悉吹たふ  
し申候 地下の家は千に一 萬に一御座候 鳥獸皆死申候  
世間の大木は一本も無御座候 去程に世中の事申に不及

候 殊のほか物一向無御座候 淨泉寺も吹たふし申候  
諏方の鳥居をも吹たふし申候 諏方の松をは一萬本許と  
承候

登米郡史 十一日 大風

○皇年代私記 皇年代略記 續史愚抄 續本朝通記 後編  
高代寺日記 本朝通記

天文十一年八月 (一五四二年九月一〇日—一〇月八日)

石見國 大風雨

鳥根縣史要 八月 大風雨にて銀峯山一面 洪水滔天 山崩れ谷潭が

り 天地鳴動して溺死者千三百名を數ふるに至る

(備考)

妙法寺記 此年秋世中一向悪く候而大風三度迄吹申候 人々餓死候  
事無限

天文十三年七月九日 (一五四四年七月二八日)

近畿、東海道諸國 大風雨、洪水

言繼卿記 八日 大風雨

九日 大風雨

早朝禁裏邊其外室町小路東之河原大水之間 廣橋父子 予

極痛父子 白光院等合同道見物了 後禁中以外水之由候

間白衣にて見舞に參

廣橋父子 藤中納言 萬里小路父子 予 町薄 庭田等

參 何も白衣也 臺屋中間迄水入 車寄迄水付 御門之前

五尺計也 自武家大館左衛門佐 富山上野介 細川三郎四

郎 伊勢守以下諸奉公衆 奉行衆 同朋衆悉不殘三四百人

參 自身各普請方々土い堤被切落 則水引了 於車寄各一

簡井飯田の諸將 各力を盡して是を妨ぐ 諸國も亦然り

野史 洪水 四條五條橋墜 祇園社鳥居流失 水澄皇宮 西垣門

塔壇 幕府出兵警衛四門 東寺南門至四堀 行舟往來 近

江日吉大宮橋壇 叡山坊舎數字 僧兒流亡者死 死尸漂至

淀島羽

武德編年集 五畿七道洪水 陸地に船を浮ぶ 參州の民家悉く漂蕩

し人畜多く没死す

長享年後畿内兵亂記 大洪水 山岳崩裂

○皇年代私記 續本朝通記 殿助往年記 後編 公卿補任

皇年代略記 龜苑日記 家忠日記增補追加 本朝通記

天文十五年七月十五日 (一五四六年八月一日)

甲斐國 大風

妙法寺記 夜大風吹候而 作毛悉吹こほし申候 去程に世間悉致餓死

候而不及言語に去共賣買安し

天文十八年九月八日 (一五四九年九月二八日)

京都 大風雨

言繼卿記 七日 大風雨

八日 自曉天大風之間 早々禁中見舞申候了

御學問所之前之板櫃三四間吹破了

(檢、檢力)

天文十九年七月十八日 (一五五〇年八月三〇日)

京都 大風雨

言繼卿記 十七日 從未刻雨降

大日本傳皇代記 大洪水 洛中室町人多溺死 山王のみつ橋 高雄橋  
ながる 東寺の南大門に船をつなぐ 寺中へは水不入  
黒谷の鎮鳥羽までながる 山法師十六人 其内御見三人な  
がる

簡井家記 山城大和大雨洪水して陸地に船を行が如し 大和にては

十八日 風雨 自曉天大風 以外風吹了 曉天見廻之處 方々破損 議定所之西壁 六間 損之 御懸之東はた板 其外六七ヶ所損了 今夜當番無之 御添番 予 四辻黃門 伯二位等也 番衆所障子破雨入之 間御三間に紙候了 十九日 風雨 自己刻晴

○續史愚抄

(備考)

妙法寺記 七月八月 大雨大風吹候而 世間致餓死の事無限

天文廿三年八月十三日 (一五五四年九月九日)

甲斐國 大風

妙法寺記 夜 爰社より丑の時迄 大風吹候而 十分の世中一切皆無 御座候 家を皆吹たふし人馬を皆打殺し申候 吉田は千軒の在所に直くなる家一も無御座候

弘治元年六月 (一五五五年六月一日—七月一八日)

京都 大風

嚴助往年記 六月 大風事有之

○續史愚抄

弘治元年八月十九日 (一五五五年九月四日)

岩代國 大風雨

會津八幡宮年日記 大風雨 大地震

弘治元年九月十九日 (一五五五年一〇月四日)

京都 大風

東寺執行日記 ひる時分より大風吹候て夜初時分迄吹 竹木を吹折 家なども吹やぶり 又は吹つふし 一段つよき風也 南大門破損 博已下悉吹散す也 方々堂舎破壞其間あり 長享年後畿内兵亂記 暴風大起 法輪寺 同塔婆吹倒

編者註(續史愚抄)ハ「東執記」ニヨリ八月十九日トセルハ誤記ナル

弘治二年八月十三日 (一五五六年九月一六日)

京都 大風雨

續本朝通鑑 大風雨 人多多死 田畝損亡

弘治二年八月二十三日 (一五五六年九月二六日)

鎌倉 風雨

續本朝通鑑 鎌倉 風雨 鶴岡鐘樓倒

弘治三年八月十四日 (一五五七年九月六日)

陸前國 大風雨

登米郡史 夜 大風雨にて引續き二十四日洪水大饑饉あり

弘治三年八月二十六日 (一五五七年九月一八日)

近畿諸國 大風雨、高潮

細川兩家記 始東風吹て後 南風吹高潮上り 尼崎 別所 難波 鳴尾 今津 西宮 兵庫 明石の間浦々へ上る 取分 尼崎にて六十一人流死すと云ふ也 仍之里々堤は平等に成たり むかしこの浦高沙の上る事

永祿九年二月五日 (一五六六年二月二四日)

京都 大風

永祿九年記 雨 今夜大風吹損事有之

言繼卿記 雨

永祿十一年六月二十四日 (一五六八年七月一八日)

京都、奈良 大風雨、洪水

言繼卿記 廿四日 自夜中風 折草木枝深雨

廿五日 雨晴 陰 大洪水

葉室令同道水見物に罷向 廿五年以前のみに少淺云 従大井川西七條如海

多聞院日記 廿三日 昨夜雨下了 日中後大雨風了

廿四日 一日大雨風了 著尾の屋吹倒了 山本方々倒了 近來の大風也 愚坊の築地北西のやね吹下了

續史愚抄 二十四日 昨今 大風 東執記

元龜元年七月十四日 (一五七〇年八月一五日)

岩代國 大風

日本災異志 岩代會津 大風 會津八幡宮

元龜元年八月五日 (一五七〇年九月四日)

甲斐國 大風

妙法寺記 大風

元龜元年八月二十一日 (一五七〇年九月二〇日)

參河、遠江諸國 大風雨

七五

八十三年に當るなり

河崎氏神宮年代記 宮川堤切 久留二俣人民家流 並木水流

足利季世記 先東風頻りに吹後には南風 大洪水にて攝州 尼崎 別所 鳴尾 今津 西宮 兵庫 難波 明石の浦に津浪高壘

上り人民悉く亡命す 昔文明七年八月六日 大洪水にも此浦々へつなみ打けるとかや今八十余年に當つて如此と故

き人は申しける

續應仁後記 朝には東風頻に起て夕には大雨風に吹かへ急雨益蓋を傾たるか如く蓑笠を打撤し國々數多洪水す

中にも攝州 尼崎 別所 鳴尾 今津 西宮 兵庫 難波 須磨 明石の浦々え 大浪打かけ高壘さし上げ浦々の

民屋悉く引流され死亡の者 幾千萬と云數を不知 去る

文明七年八月六日の洪水にも如此有ける由 古老の者共

云合けるか 其よりして今年迄は八十年に當ると云へり

長享年後畿内兵亂記 廿五日 大風洪水

(廿五日、時ノ推歩ヲ別ニセル爲カ)

○後編 續本朝通鑑

永祿元年八月五日 (一五五八年九月一六日)

甲斐國 大風

妙法寺記 大風吹申候

永祿三年 七月四日 (一五六〇年七月二六日—二九日)

京都 大風

續史愚抄 七月四日 大風云 東執記

八月 大風云 東執記

第一編 暴風雨 天文二十三年—元龜元年(西曆一五五四—一五七〇年)

武徳編年集成 暴雨烈風して參邊二州殊に家數大破し作毛皆損す  
(備考)  
逸史 八月 大風 拔屋敗稼 遠參尤甚 大君令三奉行巡視 購  
郵有差 百姓始苗

元龜二年八月八日 (一五七一年八月二八日)

京都 大風

續史愚抄 大風云 考記

元龜二年八月二十日 (一五七一年九月九日)

近畿、東海道諸國 大風

信長公記 廿日之夜 大風生便敷吹出 よこ山之城塙矢藏吹落し候へ  
つる

言繼卿記 廿一日 雨降 自戊刻大風雨

當代記 廿一日 夜大風 六十年已來に無之と云

元龜三年六月十四日 (一五七二年七月二三日)

京都 大風雨

後 鑑 大風雨 年代記抄

元龜三年七月廿八日 (一五七二年九月五日)

近江國 大風

北陸七國志 (信長) 江州柳瀬村に陣せらる

此日大風吹き出でて大木を吹き折り民家を吹破る 是に  
由て陣屋も悉く破損せり

天正元年八月二十九日 (一五七三年九月二五日)

京都 大風

續史愚抄 廿九日 昨今大風 拔木倒屋

永祿以來年代記 廿九日夜 大風 上京中の家 小屋千間許 吹倒す

當代記 廿八日 大風

○皇年代略記

天正二年八月二日 (一五七四年八月一八日)

尾張國 風雨

信長公記 二日之夜以外風雨候

○逸史

天正三年八月十五日 (一五七五年九月一九日)

伊勢國 風雨

信長公記 以外雖風雨候(下略)

○續本朝通鑑

天正五年七月八日 (一五七七年七月二三日)

京都 大風

續史愚抄 大風云 東鑑記

天正六年八月二十八日 (一五七八年九月二九日)

駿河國 大風雨

家忠公記 其雨烈風

天正十年五月五日 (一五八二年五月二六日)

近畿諸國 大風

高野春秋編年輯錄 大塔表柱折倒墜良方 依大風也

文祿三年七月二十六日 (一五九四年九月一〇日)

諸國 大風

當代記 夜 俄に大風 諸國損亡 不可勝計

○松平家忠是時江戸ニ在レバ即チ江戸ノ記事ナルベシ

文祿三年九月九日 (一五九四年一〇月二二日)

江戸 大風雨

東京市史稿 家忠日記云ふ 九日 同日迄雨降 大雨風吹 家かたふ

慶長元年 七月三日 (一五九六年七月二〇日)

京都 大風

日本災異志 七月三日 京畿大風

閏七月十八日 大風 考略記

慶長元年八月五日 (一五九六年九月二六日)

近畿、東海道諸國 大風

言繼卿記 五日晴 小動 未刻より丑刻まで大風雨(大日本地誌史料(二) 四九)

義演准后日記 六日 晴 今夜戌刻より丑半刻まで大雨大風 小座敷

こけら葎吹破 洪水 (大日本地誌史料(二) 四九)

續史愚抄 大風 災異志 見前記

伊勢國 大風雨

應永以來外宮注進狀 五日寅之初刻 俄大風猛雨出来 正殿御葺葺悉

退落地上 御朽損既過 所及御願倒 神宮一同致恐怖 奉

途注進

○宇治山田市史

天正十二年八月 (一五八四年九月五日—一〇月三日)

伊勢國 大風

宇治山田市史 八月 大風あり 山田の民屋破損し外宮の樹木が倒

れた 神皇正統記

天正十三年六月二十日 (一五八五年七月一七日)

京都 風水

永祿以來年代記 大水出 大風風水

(備考)

和歌山市要 六月 大風洪水

野史 六月 大水 天正年代記

會津舊事土直考 六月 大水

天正十三年八月二十八日 (一五八五年九月二二日)

武藏國 大風、洪水

新選和漢合圖下書續 武州 大風洪水

家忠日記 廿六日 雨降

廿七日 雨大風家ぞんし候

文祿三年七月二十三日 (一五九四年九月七日)

第一編 暴風雨 元龜二年—慶長元年(西曆一五七二—一五九六年)

當代記 入夜大風 諸國損亡す

○半亮百福日記

慶長三年三月 (一五九八年四月六日—五月五日)

江戸 大風

當代記 江戸大風 高棟之家損 城之北門吹倒 此時 自關東上り 船 或は荷物をはね或は破船 五百餘艘之内 百艘計 無異議云

慶長三年七月二十七日 (一五九八年八月二八日)

駿河國 大風雨、洪水

當代記 夜半より大風洪水 五穀損亡不可勝計

(參考)

御湯殿上日記 雨ごとくしく降て けふのみねいりのびて正ごゐいの御寺へくもじなる 風雨おびたしくする

慶長四年六、七月 (一五九九年七月二二日—九月一九日)

關東諸國 大風

當代記 下總上總武藏 切々大風吹 夏秋凶 遠州此夏中三千人餓死 關東中も餓死あり

慶長七年八月二十八日 (一六〇二年一〇月一三日)

關東諸國 風雨、洪水

當代記 二十八日の風雨 關東は夥しく所々水入 大凶年也

慶長八年六月二十七日 (一六〇三年八月四日)

江戸 大風

慶長日件録 午刻已後大風 黒戸之前柳吹折

慶長九年四月二十三日 (一六〇四年五月二日)

關東諸國 大風雨、洪水

當代記 關東大風雨洪水 上方はさして不降

慶長九年七月十三日 (一六〇四年八月八日)

土佐國 大風雨、洪水

阿闍梨曉印置文 不時頓に大風吹來り洪水湧 山之竹木を吹倒し諸之作物根葉を枯し家微塵に吹なし 山は河となし淵河は山と埋れ 人之首も吹切るほどの大風なれば深山幽谷之民等土木におされて死るもあり 或は半死半生の消息 凡國土の人民 何計萬無計

慶長九年八月四日 (一六〇四年八月二八日)

四國、東海道諸國 大風

阿闍梨曉印置文 大風洪水 濱の砂を吹上 閏八月廿八日に又大風洪水す

時慶卿記 雨止 晚大風

當代記 西の時より大風 誰そ時迄は雨少降時も在之 戌刻より雨不降 風計也 諸國尖毛 不可勝計

○徳川實紀

慶長九年八月十四日 (一六〇四年九月七日)

近畿、東海道諸國 大風

慶長十一年五月廿五日 (一六〇六年六月三〇日)

近畿、東海道、關東諸國 風雨、洪水

當代記 夜に入大風 三川國關東 等麻爲之損 同大水

上方は廿年以來洪水 美濃尾張は此水無指儀 三川は所々堤切る、關東も水は無指儀

五月廿五日之大風に 自伊豆國江戸へ石運送之船數百艘 破損

鹿苑日録 廿三日 自朝雨天 昨夜洪水 渡川不成と云々

廿四日 自朝雨天 洪水萬階前日と云々 洪水故 出京不成

廿五日 自朝雨天 洪水 昨夜深雨故 萬階前日(中略) 雨又降

凡 今日迄七日 晝夜不止降

○徳川實紀

慶長十一年八月二十一日 (一六〇六年九月二三日)

京都 風雨

義演准后日記 大風 常御所やね 書院の棟瓦等 悉吹落了

言經卿記 子刻より風雨

鹿苑日録 自朝雨天 風頻吹 田地等少痛 自申刻止

(參考) 當代記 午巳刻より申刻迄 大風

(備考) 武徳編年集成 八月 四國 中國大風吹て田園損亡す

慶長十一年九月一日 (一六〇六年一〇月二日)

當代記 伊勢 美濃者大風 山城大和畿内此風不吹 三川もさして不吹

徳川實紀 伊勢尾張美濃近江等 大風

伊勢の長島は高波にて堤をやぶり暴漲田圃を害す

慶長九年閏八月五日 (一六〇四年九月二八日)

伊勢、美濃、尾張諸國 大風

當代記 美濃 尾張 伊勢大風 然共至て無尖毛之儀 長島伊勢浦 近邊は強風に付て損毛也

慶長九年閏八月二十八日 (一六〇四年一〇月二二日)

土佐國 大風、洪水

阿闍梨曉印置文 大風洪水

日本災異志 八月二十八日 土佐大風洪水

編者註(日本災異志)ノ八月トセルハ閏ヲ脱シタル疑多シ 今茲ニ併記スル所以也

慶長九年九月二十一日 (一六〇四年十一月二日)

陸奥國 大風

津輕藩記 大風

慶長十年八月十日 (一六〇五年九月二二日)

關東諸國 大風、大水

當代記 關東大風大水 老人不覺洪水と云 去夏中干魃 此年大凶

年と云 此水は關東中迄也 上方は不出

四國、中國、近畿、東海諸國 大風雨

鹿苑日録 昨夜晦日 自子刻及寅刻 風甚して雨頻 屋上吹破 垣とも倒却す 今年及兩度風吹 田地等甚痛也

當代記 八月廿九日之夜より朝日已刻迄大風 美濃近江伊勢大風也 尾州より東は少之儀也 四國中國は大風 濱邊は鹽所々へ入 北伊勢も鹽所々へ入 長島へ鹽不入 大島へは鹽入

○梵舜日記 義演准后日記 言釋朝記 慶長日作録

慶長十二年三月九日 (二六〇七年四月五日)

駿河國 風雨

當代記 前夜より雨 今朝殊に風烈して大雨也 城の塙亦是下民家破損

慶長十二年七月十四日 (二六〇七年九月五日)

北海道 大風

蝦夷年代記 大風

慶長十二年八月十四日 (二六〇七年一〇月四日)

東海諸國 風雨、洪水

當代記 十四日 夜風雨 十五日 朝大雨

美濃國米野と云所 去夏旱魃之比 爲可取用水を入戸として木曾川を懸入たり 此度の大水に入口四百間程切れ水押入 加納城堀の水と入相兼て 水入之所は不及申 其外何も如海 又川戸河無際限出 川上より家流堤切たり 尾州三河も同前 矢作川橋落 所々堤切る 中にも米津水

押入 暫不引 西美濃より近江畿内はさして此水不出と云 關東も此水不出

慶長十三年四月二十一日 (二六〇八年六月三日)

近畿、東海諸國 風雨、洪水

當代記 當月中旬より雨頻降

廿一日 駿河府中風烈して庶民家屋少々倒る

此日 美濃尾張 大水

梵舜日記 廿日 及夜以外大雨降 洪水也

廿一日 雨降

廿二日 神宮寺乾方之土井昨日之大雨崩 路次已下散々損了

慶長十三年六月二十四日 (二六〇八年八月四日)

近畿諸國 大風雨、高潮

春日社司祐範朝臣記 雨風 此中十日餘 晝夜大風 古今無之

當代記 晚より又日々雨 廿五、六、七日 南風烈 西國は高鹽にして船多破損と云々

○續史愚抄

慶長十三年八月十三日 (二六〇八年九月二三日)

駿河國 風雨洪水

當代記 大雨 丑刻より大風洪水

慶長十四年八月九日 (二六〇九年九月七日)

近畿、東海諸國 大風雨

當代記 申刻より大風 及家刻休止 畿内諸國田畠損毛 不可勝計 但遠江より東者さして此風不强 去年の風より強吹ける 間家屋或は破損或は顛倒 其費無限事歟 此風さして作毛に不當山 後に聞ゆ 此風に奈良の神木六千本倒と云々 昔年應永十二乙酉年 春日神木六千枯又永正三年丙寅奈良神木七千本餘枯と也

○時慶朝記 續史愚抄

慶長十六年七月七日 (二六二一年八月一四日)

駿河國 風雨、洪水

駿河遺事 駿州清水 美濃輪の和泉殿川大雨水十分にして村松三ツ山の御關船藏へ水著き 御藏の内御船浮けると也 三保貝島の御濱御殿の富士見櫓も過半損しけると 從此時卷崎も段々滅したりと云 風は東風吹ききたり 三ツ山の小落民部屋敷損云

駿河國巡村記 卷崎崩れ初しは慶長十六年七月七日 大風雨の時 洪浪立 庵崎も半崩と一書に見えたり

慶長十七年六月二十二日 (二六二二年七月二〇日)

近畿、東海道、奥羽諸國 大風雨

當代記 大水 朝東風甚烈 午刻より申の終迄大風 但此大風 伊勢美濃尾張三ヶ國 強く吹 東はさして不吹 此時の風に伊勢尾張海にて破船三十三艘 又伊勢海より大坂へ兵糧賣舟 熊野浦にて七八十艘破船と云 中國西國の浦々も數多破船と云 奥州會津も大風 同大水なり 關東は旱也

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

名古屋市史 暴風雨あり 藩領の海邊に破船三十四艘を生ず 鹽田の

堤防切れて津島に河水浸水す 古蹟

(参考)

梵舜日記 風雨以外也

慶長十七年七月五日 (一六二二年八月一日)

西國 大風

日本災異志 近江國以西大風 西國傳

慶長十七年七月二十九日 (一六二二年八月二五日)

駿河、美濃諸國 風雨、洪水

駿府記 自昨夜大風雨 壞倒屋壁云々

晦 連雨不霽

當代記 八月一日 阿都川洪水

八月一日 昨今の雨に今朝大水 美濃國曾爾堤切大垣へ水入 大垣の下の堤も切たる間 翌日大垣水漸引

慶長十七年九月二日 (一六二二年九月二六日)

近畿、東海道諸國 大風雨

當代記 夜前丑刻より大風 今日未刻西返殊強 則休止 但水は不出

從去月長雨 于今不止 近江伊勢美濃尾張は 此風強吹 從遠州東は少吹 伊賀國上野城古の殿守をこぼち 新殿守を立けるか 五重塔の上の重計葺 惣は未辨も不出來に右之西の風に倒

大工并手傳の者百八十人倒死 此外手負も少々有とかや

大工并手傳の者百八十人倒死 此外手負も少々有とかや

當代記 四日 伊勢國 南風甚 昨日三日西國風烈して長崎より上る糸井唐物積たりし船十五艘潮入

慶長十八年八月九日 (一六二三年九月二三日)

近江國 大風

當代記 近江北風頻扇 湖磯波烈して商人舟十艘餘破船 此風他國不吹

慶長十八年八月二十六日 (一六二三年一〇月一〇日)

紀伊、駿河諸國 大風雨

德川實紀 今夜 紀伊國大風 且にいたる

されども禾稼を害するに及ばざりしとぞ 令體記 當代記

駿府記 廿七日 卯刻大雨風 近邊士民家屋破壊 及申刻止云々

當代記 廿六日 夜半丑刻 大風大雨 翌朝辰巳刻まで吹 宵に聊風可吹無様様 俄以如此 作毛に不當と云

慶長十九年七月十七日 (一六二四年八月二三日)

駿河國 大風雨

日本災異志 駿河大風雨 西國傳

慶長十九年八月六日 (一六二四年九月九日)

三河國 大風

德川實紀 けふ未申の刻 三州吉田大風にて 寺院民屋を吹上て二里外に落し 人毀傷有りとぞ

當代記 六日 未刻より大風雨 此日風 三河より東駿河國までは指て不吹 雨は稠く降

美作國此時大水出 城近邊にて三千程人死 其外彼國中にて二千餘 都合五千程死と云 同午馬同前 洛中はさして不吹 として草木に何の國も不當と云

義演准后日記 大雨大風 常御所吹破 大道掃除 依大雨止之

春日社司祐範記 午未姓大風雨 大宮殿瑞籬邊 杉吹折之 金龍殿并登廊以下破却了 其外僧坊在家破損 不及是非候 舍宅一圓顛倒數多也

公室年譜略 伊州大雨 申の姓に至て旋風 益々強く頻にして天守の三重目を崩して巽の方へ墮す

○春日若宮記 高山公實錄

(備考)

三川記 秋八月 大風吹て民屋を破損し 大木を抜き 熟禾を偃たり 尾州は義直の領國也 大風無心元とて駿府へ使者を遣し 災異を問ふ 大御所其の使者を召出し 御子の國なれば先づ尾州の様を問玉ふ 使者 民屋破損の由を申す 大御所重て問せ玉ふは 芋の葉を吹破候やとの玉ふ 此使者 物馴れたる者なれば 能見謀て吹破らざる由を申す さては 尾州は心やすし 田畠は損せじ 大風なりと云へとも 芋の葉に當らねは 風上を吹故に田畠にさはらぬと悦はせ萬民の憂苦を心に思召すこと有難けれ

(八、九カ)

慶長十八年八月三日 (一六二三年九月一七日)

肥前、伊勢諸國 大風

本光國師日記 九月初日 河井喜左衛門下志摩殿 八月五日之狀來 八月三日之大風見廻之書中也 唐津廻 壁屋ね損 船共うせ候由之書中也

日本災異志 駿河大風雨 西國傳

(参考)

孝亮宿禰日記 大風雨有之

慶長十九年八月二十八日 (一六二四年一〇月一日)

近畿、東海道、關東諸國 大風雨、洪水

時慶卿記 雨天又風 北より荒 下は洪水

孝亮宿禰日記 廿七日 入夜風雨以外也

春日社司祐範記 廿六、七日 大雨洪水 方々舍宅 人民田畠損失 不知數

駿府記 九月四日 自京飛脚到來 去月廿八日大雨洪水 山城河内 近江方々堤崩 百姓流家溺死多云々

名古屋市史 暴風雨 本丸の東北の石垣八十餘間崩る 德川實紀

東京市史稿 伊勢太神宮從野上山 山田へ遷宮 雷鳴大風吹 不思議也 數見記

當代記 十八日より又霖雨

廿七日大雨 廿八日大洪水 去春夏大水より高し 寅刻より北西の大風吹 中にも伊勢國大水也

河邊は家流 入馬以下流死 上方も大水にて山城國井手の里の家舟餘宇流 大坂森口此度又堤切 飯盛山の麓より 近邊如湖水 知行十六萬石之通徒成海 伏見京橋水越町 中家 五尺水有 大坂天満の橋落

同廿八日未刻 關東江戸大風 大名小名屋形一字も不全 其内に顛倒の屋形多之 民屋以下可察之 伊達政宗松平筑前守千疊敷の家 同門已下倒 況哉其外の家屋不可勝計

五十年已來之大風と云 其中に酒井與四郎家門 不殘倒  
駿河遠州參河は風不吹  
愛宕山權現堂前の杉倒 同鐵鳥井倒 江州も風強して大  
木吹折 根堀に倒るゝもあり 朝妻前原舟付の家共 水に  
浸付て五十餘退山際に居住す 此程町中は成舟道 京邊土  
堤町人に宛被爲築  
關東中大風大雨 上野國一本木家四十間流 依爲利根河  
際江下へ運送材木檢已下置彼地所に悉流  
廿八日 未刻大風 増上寺山門 誓願寺山門倒れ 人家損  
十 品川九品寺五重塔倒る  
○續史愚抄 玉露殿 慶長見聞集 東京市史稿 西成郡史

元和元年四月十七日 (一六一五年五月一四日)

陸奥國 大風雨

工藤家記 大風雨にて苗大方滑へ東上 東風續く故一向生立不申

元和二年十二月一日 (一六一七年一月八日)

奈良 大風雨

東大寺雜事記 終日大風雨 何方も家おしく損す 先年の大風七年

元和三年二月十三日 (一六一七年三月二〇日)

江戸並京都 大風

徳川實紀 申刻大風 砂塵を吹たてすべて闇夜のごとし 江戸 京と  
もに民家若干吹倒す 版上權現堂 關原  
東京市史稿 申刻大風吹 世間黒闇入 洛中も江戸も家とも吹倒

關原雜事記

元和三年四月十一日 (一六一七年五月一五日)

關東、奥羽諸國 大風雨

徳川實紀 十日 昨夜より大風雨 所々暴漲す  
十二日 風雨猶やまず この日日光山御參詣の御首途あ  
り入馬川洪水して千壽の大川みなぎり 大橋も既におし  
ながされんとす 小石を苞とし數萬依透間なく橋下に備  
へしかばさはりなく御通行あり  
御跡よりまかりたる牧野織部成常等十三騎 水にながされ  
しが からうじて泳ぎあがる 人馬溺死するものあり 又  
昨日 御先に器械もまかりし下部等の中には 千壽 草  
加兩驛の間にて 風雨に咽て死する者十三人とぞ ほとん  
ど未曾有の大風雨とて衆人驚愕す 續史愚抄 關原雜事記

東京市史稿 十日 大雨降 大水出る

十一日 大風雨 近年無比類

孝亮宿禰日次記 十一日 就大風雨 今日逗留宇都宮

十二日 晴 今日出宇都宮 著日光山 大風有之(中略)

伊達治家記録 十日 午下刻より少々雨 入夜甚雨大風

十一日 昨夜の大風雨に依て午刻より廣瀬川暴漲す 御  
城下の大橋并に花壇の橋等 皆漂流す 其外所々被損夥し  
殊に所々の郷邑に水押し揚げ溺死する者あり  
十四日 嗣君へ御書を以て今度風雨洪水の様子仰進せら  
る左に載す  
急度申遣候 爰元去十日晝過よりそろ／＼と雨降出 夜に  
入大風大雨にて十一日晝時分より大水出爰元城下之大橋  
花壇之橋落 所々被損無正候 其上所々郷村共は水押し入

人屋押流され溺死八十人馬牛馬其數を知らず

(町井町前津留清武、ママ)

元和四年五月十一日 (一六一八年七月三日)

京都 大風雨、洪水

時慶卿記 大風雨 終日不止 後に開水洪に出候  
土御門泰重卿記 昨夜より大雨 今朝大洪水 市中大河起波瀾也 東  
河平等大水 田地損畢  
梵舜日記 大雨降 以之外大洪水 領内河原 田地共流也

元和四年八月 (一六一八年九月一八日—一〇月一八日)

紀伊國 大風、洪水

熊野史 八月 大風洪水 禮殿崩 東の門崩

元和五年八月十日 (一六一九年九月一七日)

近畿並諸國 大風雨、洪水

土御門泰重卿記 九日 雨天 戌刻雨に又風出也  
十日 大風大雨 洛中舍宅破損不斜候  
春日記録 十日 以外風雨 田畠損亡と云々  
西下刻より止了  
和歌山市要 大風吹  
東京市史稿 十日 天下一統洪水 田畑大損亡 民屋漂流 人民牛馬  
雞犬溺死夥 故飢死者滿街 元和且記

○續史愚抄 孝亮宿禰日次記 義演准后日記 梵舜日記  
關原註(西成郡史) 一八月十五日全國大風ニテ稼穡ヲ損シ人畜流  
亡領學術ニ充滿セリ 續史愚抄(關原雜事記) トスルモノハ恐ラク八月十  
日ノモノノ誤記ナルベシ)

少々百姓も死候 乍去城之石垣其外不苦候  
卯月十四日 政 宗

松平美作守殿

東藩史稿 大風暴雨 洪水溺死あり

二十四日又洪水あり

○元和小説 元和年錄

(参考)

資藤卿記抄 十一日 大雨降大風也(中略)夜に入て雨晴申候

十二日 晴已刻より大風也

(上、より力)

元和三年四月二十二日 (一六一七年五月二六日)

京都 大風

土御門泰重卿記 風吹如寒天 大風屋壁破損 入夜雨降京中騒動也

元和三年七月五日 (一六一七年八月六日)

京都 風雨

土御門泰重卿記 大雨大風 穿屋壞壁以外也

元和三年九月七日 (一六一七年一〇月六日)

京都並日向國 大風、洪水

土御門泰重卿記 入夜大風 爰刻大風驟吹倒事 家々屋吹まくり又  
はふたと吹落 洛中鳴動不斜候

日向記 飯肥領 大風甚雨洪水して後町井町前津留清武は石切町

元和七年八月三日（一六三二年九月一八日）

江戸 大風

徳川實紀 大風 増上寺門を吹倒す

○東京市史稿

寛永元年七月（一六二四年八月一四日―九月二日）

陸前國 大風

東藩史稿 七月 大風あり饑ゆ

寛永三年閏四月七日（一六二六年六月二日）

讃岐國並京都 大風雨

香川縣史 七日 大風雨

土御門泰重卿記 七日 雨天晚より風雨 夜半過大風 洛中大小共室

屋上に九は破損 其内顛倒 又やね天井など轟吹落も有之也 人なども死亡 五十年以來不覺大風之由老人申所也

孝亮宿禰日次記 八日天晴 自昨日有大風雨 所々全破損 今曉之風 雜舎一字吹倒

寛永三年五月七日（一六二六年六月三〇日）

京都 大風

野 史 大風 愛宕山 杉木倒

寛永四年六月三日（一六二七年七月一五日）

江戸 風雨

徳川實紀 大風雨

寛永四年六月十二日（一六二七年七月三日）

京都 大風

野 史 六月十二日 大風

日本災異志 七月十二日 大風

寛永六年八月五日（一六二九年九月二日）

京都 大風

野 史 大風

寛永七年六月十九日（一六三〇年七月二八日）

京都並越前國 大風雨、洪水

野 史 大風雨洪水 越前大水 死亡二百數十人

續史愚抄 賀茂川洪水 三條橋石柱拔出云

寛永八年八月十四日（一六三一年九月一〇日）

九州諸國並紀伊國 大風雨、洪水

史料綱文 十四日 肥後筑前筑後大風

熊野史 十五日 熊野大風洪水

享祿以來年代記 八月 大風壞屋 抜木

武江年表 八月 大風家屋を壊ち樹木を折る

寛永八年九月十八日（一六三一年一〇月一三日）

京都 大風

日本災異志 二十三日 京都大風雨

編者註（二十三日大風雨ノ事）續皇年代略記ニ求メ得ズ 誤アルカ

寛永十一年七月二十五日（一六三四年八月一八日）

筑後國 大風

福岡縣災異誌 大風秋作損毛

寛永十二年五月十九日（一六三五年七月三日）

京都 大風雨

資勝卿記 十九日 雨天 坤風大吹 入夜又大吹降也

廿日 晴 亥刻又雨降 過夜の雨風にて木下宮内家流 三

條橋へ流かり 橋中間十五間流うせ候也 五條橋も少損

し申候由也 又小川家流 亭主親子下女流死申也

大内日記 十九日 大風雨

○續史愚抄 寛永日記

寛永十二年六月十三日（一六三五年七月二六日）

東海道近海 大風

武江年表 大風 遠州豆州渡海の船 八百艘破損す

東京市史稿 大風三日吹 遠州豆州邊 渡海船八百艘破損 人死五千

人 江崎年表

寛永十二年七月二十七日（一六三五年九月八日）

筑前、筑後並諸國 大風

福岡縣災異誌 大風 此の大風は百年已來の大風 諸國江戸大阪共に

同前の由 箱崎松原の内 大木の分二千本餘吹倒

近畿、關東、奥羽諸國 大風、洪水

續史愚抄 大風 抜木壞屋 平野小社倒

續日本王代一覽 十九日 關東大洪水 堤押し切り人畜多く溺死す

會津藩事土直考 十九日 會津洪水

（備考）

東藩史稿 九月 霖雨洪水

○徳川實紀

寛永九年八月五日（一六三三年九月一八日）

因幡、土佐諸國 大風

因幡年表 西風大いに吹起り大樹を倒し人屋を剥ぎ檣壁を破る

史料綱文 六日 土佐大風

寛永九年八月二十三日（一六三三年一〇月六日）

筑後國 大風、高潮

福岡縣災異誌 大風 海邊高潮 潰家多し

寛永十年八月十日（一六三三年九月一三日）

近畿諸國 大風雨、洪水

續史愚抄 暴風雨 損舎屋 淀大橋流

大阪府誌 十日 大和川及び石川の水暴漲し南河内郡柏原村に於い

て堤防三百間 道明寺村大字船橋に於いて三十間 同村大

字國府に於いて五十間を破壊し柏原村の民家流損するも

の五十軒 死亡者三十六人を生じ田畝二百石荒蕪に歸す

（備考）

第一編 暴風雨 元和七年―寛永十二年（西曆一六二一―一六三五年）



大風勢しく吹けるが梅田の社前にありし數十本の大松  
及社外に在りし大松も 皆此時の風に折れたり云ふ石巻志

寛永十三年八月五日 (一六三六年九月四日)

江戸 大風

昨日より大風 寅刻地震 諸大名まうのぼり御けしき伺ふ  
兼て二丸にて申樂命せられしが これも大風によりて停  
めらる日記

寛永十三年八月十三日 (一六三六年九月二日)

京都並近江、尾張諸國 大風雨、洪水

資勝卿記

朝晴 巳刻已後風雨甚 巽長成風強成 晴 但小雨 入夜  
賀茂川上堤切 水 菊亭中山前へ 大河程流候(中略)

鳥丸通 室町通 如河流中候

十四日 晴陰不定 大水出て三條橋 柱三本ころひて橋か  
たふき候て人を通し不申候

十五日 一昨日之風雨にて多賀今度立申候宮寺吹倒 杉  
多折不動院の寺も損候由也

大内日記 十三日 うちつゝき雨ふり申候て 今日晝時分一時はかり  
大風吹 大雨にて八ツ時分より雨風やみ申  
候處に俄に鴨河出堤切れ候て 柳原筋より室町鳥丸石橋  
通大水出 町中へ入 禁中 仙洞御築地の前も 少々水流  
申候 三條石柱も六七本倒れ申候 木津河出 淀大橋も五  
十七間流申候 大坂堤はさして切れ不申候

名古屋市史

十三日 暴風のために城中に被損を生じ熱田海岸の堤  
防決壊す歌

編者註(=嵐史風抄)ハ「資勝卿記」ニ據リ 寛永十二年八月十三日ノ

事トシテ右ノ大風雨ヲ揭ゲタリ 恐ラク誤記カ)

寛永十四年八月七日 (一六三七年九月二五日)

東海道、關東諸國 大風雨、洪水

德川實紀 此日 大風雨 日記 人見私記

九日 先日大風雨により惣曲輪の石垣土居崩れせし各所  
松平伊豆守信綱 阿部豊後守忠秋して巡視せしめらる  
城東淺草邊洪水 荒川利根川秋漲さかんなるよし郡代伊  
奈半十郎忠治注進し 該府よりは七日の大風にて城中の  
塀並民屋百三十軒餘吹倒したるよし注進す

東京市史稿 七日 此日 大風雨(中略) 淺草邊洪水  
廿日(中略) 且又大風雨に付 上方關東筋作毛見分四人  
被仰付 人見私記

寛永十五年一月一日 (一六三八年二月一四日)

江戸並筑後國 大風

山鹿兼行先生日記 大風吹塵 不見人面目

東京市史稿 此日丑刻より酉刻迄 烈風轟轟人見私記

江戸自曉天乾風木折に吹て立土烟似闇夜 飛石 砂 打面  
微塵入眼 不能見咫尺 然とも御禮如式年 大名扈從陪臣  
横面傾頭不如而已 大雨甚 古老曰如斯大風 百年以來  
未聞傳 破損塔屋 上下及雜儀 天宮書院

福岡縣災異誌 未明より乾まで風吹き木を折り 土砂を吹立暗夜の  
如し 恒の如く嘉例御禮相濟 石原私記

○續日本王代一覽 三賀圖案

寛永十五年四月十七日 (一六三八年五月三〇日)

熊野史 くまの大風 權現の松大杉こくる

寛永十八年八月一日 (一六四一年九月五日)

江戸 大風

武江年表 大風 數十艘の石船 品川沖に沈む

後進人 この所を根と號し漁獵に幸ありとす 一説に慶長十一年  
五月五日 伊豆國根府川より大石を積廻したる船沈没せし處を根  
と號くるとも云

(参考)

東京市史稿 按ずるに 大猷院殿御實紀 曾我日記を引て「八月朔日  
當賀例の如し 酒井讚岐守忠勝の別業へならせられ 能三  
番羅八番あり 夜に入て花火御覽せらる」と記す

大風吹きたりとも思はれず 他に所見なければ眞偽知る  
可からざれども姑く記して再考を待つ

寛永二十年八月 (一六四三年九月一三日—一〇月二二日)

筑後國 大風雨、高潮

福岡縣災異誌 暴風雨あり 海岸破壊し 海濱起り溺死者多し 續年表

正保元年七月二十九日 (一六四四年八月三一日)

伊勢國 大風雨

皇年代私記 夜 伊勢國疾風甚雨 兩太神宮山松杉多顛倒 正殿葺葺  
高欄等破損 風宮被壓大木顛倒

續史愚抄 伊勢大風 兩宮正殿葺葺高欄等破損 風宮爲大木被壓倒  
即奉遷神休於御倉又神路山木多倒 後日禰宜等言

德川實紀 八月初日 この日 終日甚雨

八九

寛永十七年九月五日 (一六四〇年一〇月一九日)

羽後國 大風

北羽發遣史 酉刻より秋田領大風 翌六日巳刻に至て最甚しく爲に  
穀菜多く損亡す

寛永十八年二月十一日 (一六四一年三月二二日)

紀伊國 大風

第一編 暴風雨 寛永十三年—正保元年(西曆一六三六—一六四四年)

寛永十六年七月二十五日 (一六三九年八月二四日)

筑後國 大風

福岡縣災異誌 大風 近年珍敷大風 寺社家中町在大分破損 所々  
大木吹倒 石原私記

江戸 大風雨

德川實紀 この夜 大風雨 日記

五日 三家使もて御けしき伺はる 昨夜 大風雨により  
てたり

○東京市史稿

寛永十七年九月五日 (一六四〇年一〇月一九日)

寛永十六年八月四日 (一六三九年九月一日)

江戸 大風雨

東京市史稿 十七日 權現様まつり可被成候とある時に 殊之外大風  
雨ふり候て無之候 方々そん不及申候 大なる水出申候  
いやしき者に而候へ共 籠やの帯刀死申に付而 風吹申  
候かとも申事に候 續年表

大風にて人屋草木顛倒 人見私記

寛永十六年七月二十五日 (一六三九年八月二四日)

筑後國 大風

福岡縣災異誌 大風 近年珍敷大風 寺社家中町在大分破損 所々  
大木吹倒 石原私記

正保元年八月十九日 (一六四四年九月一日)

伊勢國 大風

日本災異志 伊勢又大風

編者註(他書ニコノ大風ヲ求メ得ズ願書ナラザリシカ成ハ誤アルカ)

正保元年八月二十五日 (一六四四年九月二日)

伊勢國 大風雨、洪水

宇治山田市史 二十五日及び廿九日に大風雨あり 宮川堤が三百間計

切れ 山田 中川原 新町 高柳 走下邊の民家多く流れ

溺死人もあり外宮の殿舎樹木の被害も多くあつた

日本災異志 二十八日 伊勢大風雨 山田洪水 家多流人死

正保二年七月二十七日 (一六四五年九月十七日)

九州、中國、北國、出羽諸國 大風

徳川實紀 この日 中國 九州 北國并出羽國 大風にて城郭多く破

損せりとぞ

正保三年八月一日 (一六四六年九月一日)

江戸 大風雨

徳川實紀 けふ大風雨

御部屋日記 夕方 大風雨

正保四年二月二十四日 (一六四七年三月三日)

日光山 大風

徳川實紀 廿六日 日光山中 この廿四日大風吹きおこりて大木を

吹倒し 御殿 坊舎 市屋 所々破損の注進あり

正保四年四月二十五日 (一六四七年五月二九日)

京都 大風

日本災異志 京都大風

正保四年五月十四日 (一六四七年六月一日)

江戸 大風

天享香妻鑑 大に南風吹 俄に曇る

正保四年八月十六日 (一六四七年九月四日)

江戸並陸前國 大風雨、洪水

徳川實紀 今夜 大風雨

東藩史稿 大雨洪水 溺死三人あり

正保四年八月二十五日 (一六四七年九月二三日)

江戸 風雨

徳川實紀 今夜 烈風雨

慶安元年七月十三日 (一六四八年八月二日)

江戸並陸前國 大風雨洪水、高潮

御部屋日記 十二日之夜より十三日晝迄大風雨也

人見私記 十三日 甚雨風烈 未の上刻風雨止

徳川實紀 十四日 きのふの風雨に六郷橋三脚をしながし往還を得

ざるよし注進す

東藩史稿 仙台大風雨 名取宮城海溢る 人家七十余流亡す

慶安三年七月二十七日 (一六五〇年八月二四日)

近畿諸國 風雨、洪水

山鹿素行先生日記 山城攝津河内洪水 淀川逆流 京中水溢 風雨

甚 止林之雀鳥多死

徳川實紀 八月三日 京邊は去月廿七、八日の夜風雨烈しく加茂 淀

川邊暴漲のよし注進す

四日 淀伏見 大阪高槻より 所々洪水のよし注進あり

(備考)

熊野史 八月大洪水 石橋不渡水越す 町に水入

慶安三年八月十六日 (一六五〇年九月一日)

九州、中國諸國 大風雨、高潮

福岡縣災異誌 暴風海浦襲來す 領内田地損害五萬石 浸水家屋三

千三百軒 溺死者百七十余人 悉く對岸肥前寺井早津江

に打流さる

長崎年表 高潮 海邊家屋床上を浸す事三尺

徳川實紀 十二日 風雨に長崎 天草の海邊潮入て民屋を流し其外九

州田畝損害

(十二日、不審多し)

山鹿素行先生日記 十六日風雨に播州 石州はじめ中國邊損害する所多し

十七日夜大風 十七日雨止

慶安四年十月十三日 (一六五一年一月二五日)

江戸並近國 大風雨

第一編 暴風雨 正保元年(西曆一六四四—一六五三年)

慶安四年十一月二十日 (一六五二年一月一日)

江戸 大風

寛天摘要 今日乾の風烈く吹出 砂塵を吹上て四方虚空を覆ひ日の光

も不能見 雖白晝如闇夜 諸人大に恐る 然とも無異事

承應元年二月十日 (一六五二年三月一日)

紀伊國 大風

徳川實紀 この十日 紀伊の國 大風ありて新宮湊の泊舟 三十七

艘くつがへり 舟人三百人ばかり溺死のよし注進あり

熊野史 九日 熊野川大水 川口へ大船四十八艘流れ 二百余人

水死す

承應元年八月二十九日 (一六五二年一月一日)

江戸 大風雨

徳川實紀 夜に入大風雨 城中各所破損す

○東京市史稿

編者註(續日本王代一覽)廿八日夜ノ事トス

承應元年十二月十一日 (一六五三年一月一日)

出羽國 大風雨

徳川實紀 十一日、十二日 大風雨にて出羽庄内の城櫓土屋等過半

破損せし旨 酒井攝津守忠富より注進す

承應二年六月六日 (一六五三年六月三日)

紀伊並東海道諸國 大風雨

徳川實紀 六日 大風雨にて 紀州熊野浦にかゝりし買米の船五艘  
その外浦々の船二百五十艘やぶれ 材木六萬千八百本流  
失し 紀勢兩州民家千五百三十崩れ 毎川出水し堤防四  
千五百五十間壞れ 男女二十七人溺死せし注進あり 三三三  
名古屋市史 六日の夜半より翌朝に至るまで 烈風吹き續き 城中天  
守の白壁落ち 矢倉多門壞る 民屋の倒るゝもの二萬二  
千軒に及ぶ 被害の民に材木を給す 五事記  
御部屋日記 七日 早朝より大風雨 晝時上る

承應二年八月六日 (一六五三年九月二七日)

諸國 大風、洪水

續皇年代略記 諸國 大風洪水  
(備考)

熊本市史 八月には俗に「岩刺り」と云ふ大暴風が吹き(下略)

承應三年四月二十一日 (一六五四年六月六日)

江戸 風雨

徳川實紀 この夜 風雨(下略)

承應三年七月二十八日 (一六五四年九月九日)

日向國 大風雨

徳川實紀 八月 伊東大和守祐久所領日向の地も去月廿八日 大風  
雨により水出て屋舎四千軒そこなはれ 城郭も破壊せしよ

承慶三年八月二十六日 (一六五四年一〇月六日)

江戸 風雨

徳川實紀 このほど霖雨 かつ昨夜風雨烈し

明暦元年八月十日 (一六五五年九月九日)

東海道諸國 風雨

徳川實紀 この日 大風雨  
十四日 駿府よりこの十日大風雨にて城内破損せし注進あり

山鹿素行先生日記 十日 大風雨 大島雲八來話

三遠武相大風 雷落吉田城中砲臺矢庫 西國大風

編者註(向東京市史稿)「徳川實紀」ニ據り八月ノ事トス 誤ナルベ  
シ

明暦元年八月二十八日 (一六五五年九月二七日)

紀伊國 大風

徳川實紀 此程 紀伊國 大風ありて民屋二千余軒 堤一萬間余崩倒  
し材木七萬本余流失したる旨 注進あり

明暦二年七月二日 (一六五六年八月二日)

肥前國 大風

徳川實紀 此二日 肥前長崎の邊 大風にて唐商の船二三艘破損の  
注進あり  
此月初旬 奥州も大風の注進あり

明暦二年七月十五日 (一六五六年九月三日)

西國 大風

續史愚抄 西國大風 宣明朝記

明暦二年八月十五日 (一六五六年一〇月二日)

筑前、武蔵、陸奥諸國 大風

徳川實紀 この日筑前の國 大風にて民家八千余 傾覆せしよし  
福岡縣災異誌 大風吹き國中倒家八千四百余 船の覆る事六十余艘  
溺死者五十人也 田高損毛多し 延寶編年表

柳營日記 十六日 昨夜烈風

津輕藩記類 十六日 大風 樹木を倒し田畑損毛 山鹿素行先生日記

明暦二年八月二十二日 (一六五六年一〇月九日)

關東諸國 大風

山鹿素行先生日記 午後大南風 家屋悉破損 三十年來無之風吹暫  
時而江戸中家宅無不破損 自遠州見付西方不吹 駿河  
小田原 江戸 川越 古河 宇都宮城地各大破 此日饗  
應公家衆 有猿樂 因大風猿樂止

五露叢 巳の刻より烈風吹出づる 尤も諸國も大風なり 依りて  
諸侯の居城及び堂塔神社佛閣悉く大破せしむ

榎本氏覺書 廿二日の午刻に駿河國あたりより大風吹出申候 晝時  
程大也 下野國うつつの宮あたり迄 大につよし(中略)

江戸の町大方吹はぎ申候故杉一夜之内に一ばいにね段上  
り申候(中略) 御城之内やぐらの上のしやちほくもおち  
たるも多く候 御天しゆは何ともなく候上り舟 江戸新

野史 廿八日 江戸大風 肥事廿二日丁酉  
(廿八日、恐ラク不備アルベシ)

續史愚抄 徳川實紀 皇年代私記

明暦二年九月十八日 (一六五六年一二月四日)

江戸 大風

天享香妻鑑 大風

明暦二年十二月二十九日 (一六五七年二月二日)

江戸 大風

慶延略記 北戌亥風勢吹出 従是日々無止事 燒煙のごとし  
徳川實紀 三年一月十八日 この晩より乾の風 甚しく塵土を吹あ  
けて咫尺もみえわかす夜あけてもなほ夜のごとし  
○山鹿素行先生日記

明暦三年七月二十一日 (一六五七年八月二日)

江戸 大風雨

徳川實紀 七月二十二日 昨夜大風雨

柳營日記 九月二十二日 南風甚 殿中別條無之

萬治元年二月十三日 (一六五八年三月一六日)

日光山 大風

徳川實紀 かの地(日光山)大風にて各所破損

山鹿素行先生日記 十四日日光山大風 五十年五月廿

(十四日、一日相違アリ)

萬治元年六月二十七日 (二六五八年七月二十七日)

長崎 大風雨

徳川實紀 七月 去月廿七、廿八兩日 長崎の港大風雨にて數船破損し三十人ほど踪跡しれずと注進あり

萬治元年七月十七日 (二六五八年八月十五日)

美濃國 大風、洪水

徳川實紀 十七日 大風により美濃國洪水のよし聞ゆ

萬治元年七月二十六日 (二六五八年八月二十四日)

九州諸國 大風

山鹿素行先生日記 西國大風 平戸邊家二千五百軒破損 死人百五十人 舟百五十余艘破

(備考)

久留米小史 七月 霖雨洪水 小瀬川 人馬流失す

萬治元年八月三日 (二六五八年八月三十一日)

近畿諸國 大風雨洪水、高潮

皇年代私記 夜 大風大雨 賀茂川堤切 東川原洪水

徳川實紀 八月十三日 この三日、四日兩日の大風雨にて大坂 駿河その他 攝河播丹の公料田 高鹽をし入 洪水にて田圃屋舎破損の注進あり

十四日 三四兩日の風雨つよく 洛の中外 淀 伏見洪水のむね 京職より注進あり

山鹿素行先生日記 三日、四日 丹波龜山邊 播州尼崎 播州明石洪水 京都鴨川堤破損 水入禁裏 洛中洪水 淀城邊洪水

凡今年七月下旬已後 霖雨不止 人皆思來歲飢饉之事

熊野史 四日大水 石橋水越す 舟町船にて通る 小舟町に上る 流木一貫八百目請る

○續史愚抄 野史 皇年代略記

萬治元年八月十九日 (二六五八年九月一日)

九州、四國諸國並江戸 大風雨、洪水

徳川實紀 八月 この十九日、廿日の大風雨にて 肥後豊後の邊 洪水のよし聞ゆ

颱風調査報告 十九日 二十日幡多郡に大風雨洪水があつて八千余石の損田で 男女十二人死し三百四十七軒の流家 六百八十四軒の潰家があつた 皇年代略記一ノ四八

慶延略記 廿一日 大風雨 夜中より江戸洪水 川筋船舟等流 下谷筋洪水

(備考)

米府年表 八月大風

大阪府誌 八月 三島郡島飼村大字島飼八丁に於ける安威川の堤防決潰し同郡三箇牧村より味生村に至る耕地一圓浸水して稲作皆無に歸す

萬治二年七月二日 (二六五九年八月一日)

關東諸國 大風雨、洪水

諸國 大風、洪水

寛天摘要 諸國大風洪水

○玉露叢 野史

編者註(徳川實紀)ハ「七日、大雷雨にて大廣間に出たまはず」ト(註セリ)

萬治三年七月二十三日 (二六六〇年八月二日)

江戸 風雨

柳營日記記 南風吹 辰后刻雨甚其儘止 未上刻雨 其儘止 大水 上る 大壩

萬治三年七月二十九日 (二六六〇年九月三日)

近畿、關東諸國 大風雨、洪水

續史愚抄 京師洪水 此日 伊勢大風洪水 宮川邊小社兩三及彌

徳川實紀 伊勢國 廿九日洪水にて民屋二百軒流失し 溺死者二

百人餘なりと聞ゆ

宇治山田市史 廿八日より廿九日にかけて大雨洪水となり五十餘川

柳營日記記 廿九日其雨未風吹 已后刻より東風止眞南風吹 午上刻

萬治三年八月二十日 (二六六〇年九月二日)

近畿、東海道、關東諸國 大風雨、洪水

九五

武江年表 大風雨洪水 後醍醐天皇二使水使らよ

徳川實紀 二日 大風雨

三日 大水にて府内各所の橋を押流し往來を得ず 船にて行人を渡す

四日 この朝日二日 大風雨にて日光山所々破損の由 注進あり

この二日 大雨風のころ上州館林 城下士民屋舎百四十軒

にはかに顛倒す 龍の所爲といへり

柳營日記記 二日 夜中時々雨 卯刻より終日 東南風 甚雨車軸流

申刻より洪水家内滿 道は河水多漫入股 未刻より鹽引

南風戾刻止

三日 今西刻深川兩國橋之通無之 假橋大水に而六十間余押流

人之通無之付而船に而渡す 洪水家内へ滿る 終日不引

○玉露叢 續日本王代一覽

萬治二年七月十五日 (二六五九年九月一日)

江戸 大風雨

徳川實紀 十六日 昨夜 大風雨

萬治三年五月五日 (二六六〇年六月二日)

江戸 風雨

徳川實紀 四日 南風甚し

五日 南風暴雨あり

萬治三年七月七日 (二六六〇年八月二日)

第一編 暴風雨 萬治元年—萬治三年(二六五八—二六六〇年)

熊野史 大風吹 那智濱の宮社堂を崩す

皇年代私記 自丑刻 大風大雨 洛中洪水 淀橋大路三橋堤切 淀大

橋流 木津宇治邊洪水 越宇治橋 諸國所々洪水

徳川實紀 けふ大風雨にて城中各所壞崩す 家門 諸大名より使奉り

御けしき伺ふ また 東海道は勢州まで 關東は奥州まで

洪水のよし聞ゆ

大坂より この月十七日甚雨 十八日城中正曲輪加番小屋

の後 青屋口より南方の石垣四十二三間 土崩れ 石垣

驛とも頽壞せし注進あり

廿七日 京よりこの廿日 大風雨出水し木津川大橋七十間

餘落て同所并に淀 宇治の堤 破壞せし注進す

柳營日記 廿日 子日 夜風雨 子雨時々 辰下刻より大風雨 御

城其外大破損

○野史 續史愚抄

(備考)

大阪府誌 八月 安威川暴漲し三島郡味生村大字新在家堤防決壊す

萬治三年九月二十日 (一六六〇年一〇月二四日)

四國、近畿、東海道、關東諸國 大風雨

颱風調査報告 國中大風雨があつて人民死傷し其他損害があつた

皇年代私記ノ五二

宇治山田市史 大風あり 内宮の松樹倒れ民屋の被害も多かつた

續史愚抄 此日 大風折木 武藏江戸岡之云

殿中日記 雨 已下刻より甚雨風 未上刻より雨止時 酉刻風止

徳川實紀 大風雨 この大風雨により諸國に大洪水 勢州尤甚し 豆

州下田浦にて舟百五十艘くつがへり 江戸邊までの浦々

にて百五十艘 其他を合して七百艘やぶるといへり

寛文二年六月十三日 (一六六二年七月二八日)

日光山 大風雨、洪水

徳川實紀 日光山 この八日より十三日までの大風雨にて山水押

出し石垣崩壊し目付小屋壓倒され 目付代奉りし使番田

中三左衛門高成 同心十人溺死し 寺一字にて九人 山

麓の市中にては百四十餘人壓死したるよし

この外東海道 關東 大水の開きあり

玉露叢 六月十三日に野州日光甚雨疾風 去る八日より今日に至

りて雨脚少しも止むことなし依つて稻荷川増水して山崩

る(中略) 日光町屋九十餘軒流失す 水死の者都て百三

十人の由注進なり

皇年代私記 日光山大洪水 川邊在家三百軒餘 流死七十餘人 馬九

疋流死云

○續史愚抄 野史 續日本正代一覽

寛文二年六月二十九日 (一六六二年八月一三日)

土佐、駿河諸國 大風雨、洪水

颱風調査報告 二十九日及七月二日 風雨洪水があつて田畠四萬餘石

損毛した 皇年代私記ノ五三

玉露叢 晦日 大風に依つて駿州久能山崩れ 其の上高波打ち上

げて流家十餘軒「總じて今年は津浪の上る年なり」と諸人

囁きけり 其の謂れを聞けば 古老の曰く「當年は殊の

外在々町々へ蟹多く遣ひ上りけり 其の年は必ず津浪打

ち上りけり」と語りけるが 果して高潮揚げてけり 誠に

かゝる舊例も覺え置くべき事なり

編者註(日本災異志)「土佐御當家年代略記」(寛文四年六月

二十九日 土佐、大風雨洪水)トセルモノハ本記事ノ誤記ニ

非ヤトノ聲多シ 若シ 月日ヲ同ジフシテ二年後ニ起リシ

モノナラバソレガ西曆年月日ハ一六六四年八月二〇日ナリ

寛文三年七月二十六日 (一六六三年八月二八日)

九州諸國 大風雨

徳川實紀 八月 先月廿六日 三時ほどが間 九州大風雨 薩肥こと

さらはげしく長崎にては人家傾倒し唐商の舟も損ぜしよ

し

石原家記 大風

寛文三年八月二十二日 (一六六三年九月二三日)

江戸 大風雨

山鹿兼行先生日記 大風雨 午後晴

寛文四年七月三日 (一六六四年八月二三日)

京都 大風

日本災異志 京都 大風 續皇年代略記

編者註(編者方國讀セル「續皇年代略記」ハ右ニ關スル記事ナシ

或ハ疑多キモノカ)

寛文五年八月二十九日 (一六六五年一〇月七日)

江戸 大風雨

山鹿兼行先生日記 大風 日二十五日大風雨 今又大風 町中破損多 比丙

申八月二十二日之大風劣

柳營日記 西北甚風雨(中略) 九月六日 今度大風に付 外曲輪所

破損に付 修復之御普請奉行當座被仰付之

國史館日録 迅風大雨 滿城大屋小屋 或壁倒屋破 樹木折損 余本

第一編 暴風雨 萬治三年一寛文六年(西曆一六六〇一六六六年)

宅亦破損 此岡中水満如川

寛文六年五月二日 (一六六六年六月四日)

江戸並常陸國 大風雨、洪水

柳營日記 二日 昨夜より甚風雨 風烈甚

三日 頃日打被雨天故 淺草川甚水増 兩國橋之杭柱

中程押流し横山町三丁之者石七依橋之上悉積仍爲見聞

山鹿兼行先生日記 二日 自辰 中大雨 初聞子規 今年子規 大風雨樹木顛

倒 殆如二八月

徳川實紀 水戸の地 五月二日大雨にて中川久慈川出水し 橋七十

堰水門等二千五百をしやぶり 田畠これが爲に損害

(其、蕪)

寛文六年六月一日 (一六六六年七月二日)

水戸 大風雨

徳川實紀 水戸の地 大風雨 城邊あまた破壞

寛文六年六月八日 (一六六六年七月九日)

江戸 大風雨

山鹿兼行先生日記 大風雨 恰如十月

寛文六年七月三日 (一六六六年八月三日)

四國、九州諸國 大風雨、洪水

徳川實紀 七月三日四日兩日 松平左近將監忠昭が封地 豊後國府内

大風雨にて民屋五百三十軒顛倒

山内修理亮忠直所領 土佐中村の地 七月四日、十一日、

十五日洪水 田畝三萬石水害を蒙り 男十人女廿七人 牛馬五百七十九疋溺死し民屋二千三十七軒 船十七隻亡

玉露叢

三日四日五日兩三日 土佐の國又甚雨強風に付いて 損田五千石餘あり並に家數八百三十軒流亡 船數七十三艘破損なり 溺死五十二人 井川除堤大破 五百廿ヶ所なり 右の洪水に付いて山内修理亮居所の畑も 總地形よりは一丈餘り水かさ上り 侍屋敷並に民屋の棟の上を一面に水突揚げて田畑損亡夥しき事なり

四日 豫州加藤出羽守居城大洲 甚雨疾風に付き大水出で高潮押込み城廻の石垣百間ほど突崩し其外家中の家々並に民屋大半破損せしめ候山注進なり 三日より四日迄 豊後の府内 松平將監領知 是れ亦大雨疾風に付いて 家數五百三十軒餘吹倒すの由注進なり

讃岐災異年表

三日 大風

福岡縣災異誌 三日 大風

○颱風調査報告

寛文六年七月十日 (一六六六年八月一〇日)

土佐國 大風雨

玉露叢 十日 十一日 土佐又々風雨夥しくして田畑損亡し人馬死するとなり

十四日 十五日 此兩日右同斷なり 然れども松平土佐守よりは今に注進はなけれども 是れ隣國よりの沙汰なり

寛文六年九月 (一六六六年九月二九日—一〇月二七日)

江戸 風雨、洪水

柳營日記 九月 江戸風雨洪水 西丸下石垣其他崩壞す

編者註(山鹿素行先生日記)ハ一見今月之内 十五日雨天ニ又九月十日三日大雨終日等ヲ誌セド別而大風アリシヲ書カズ

寛文七年七月二十八日 (一六六七年九月一六日)

陸奥國 大風雨、洪水

八戸藩史稿 前夜來の大風雨にて 諸川洪水し 馬淵川大橋中央より左右五十間餘流失 十日市橋 新井田川橋は全部流失せり 八戸市街諸士屋敷の塀垣破壞多く城内の後方土居塀十七間餘崩壞せり

寛文七年九月二十七日 (一六六七年十一月三日)

江戸 風雨

國史館日錄 自夜中至今夜 大雨且風 聖堂瓦壁又壞 殿中日記 夜中より甚雨終日不止

寛文八年五月四日 (一六六八年六月一三日)

播磨國 大風雨

山鹿素行先生日記 大雨暴風 自謫居終無如此之暴風雨 於前宅若有此暴風雨 則無所可安居 殆如有天祐之

寛文九年三月十三日 (一六六九年四月一三日)

播磨國 大風雨

山鹿素行先生日記 大風雨 災異之

寛文九年五月十三日 (一六六九年六月二一日)

奈良 大風

登米郡史 三日 四日風雨 北上川大洪水 在德重記

寛文十年 六月 六日 (一六七〇年七月三日)

江戸 風雨

殿中日記 六月六日 昨夜大風雨 七月二十九日 昨夜より甚風雨 早且雨即晴

寛文十年八月十二日 (一六七〇年九月二五日)

紀伊國 大風

熊野史 十二日大風 宮の屋根を破り西の門を崩す 番屋鐘樓堂を崩す

寛文十年八月二十三日 (一六七〇年一〇月六日)

播磨國 大風雨、高潮

山鹿素行先生日記 暴風 自攝大坂至明石 大風雨高潮 數十年無之大坂破船七千三百二十三艘 死人二千四百四十三人 富田龍溪於九條島水死 尼崎 兵庫 明石流家死人有之 大風 拔木壞廢舍 攝津雨土及自西海濱上陸至枚方人多死

玉露叢

播州明石 疾風大雨によりて破損所々 一、矢倉四ヶ所大破 門七ヶ所大破 塀百九十間餘倒 一、潰家五百軒 給人より足輕以下迄 一、町家七十八軒潰る 一、死人男 女十一人 一、獵船百九十二艘破損 右の外小破の處々夥し

○皇年代私記 德川實紀 攝陽奇觀 三貨同慶 續日本王代一覽 野史

續史愚抄

此日 南都大風 若宮内院北杉大倒 因通合社拜屋一等壓倒 廊瑞籬等損本社已下由 十四日社司云

(參考)

殿中日記 十三日 早且より曇 未後刻より甚雨降

寛文九年八月十一日 (一六六九年九月六日)

九州、山陽諸國 大風雨、洪水

德川實紀 熊本の地 大風雨洪水 屋舎千四百三十二戸 船十六艘流失し 男女十一人 馬二匹溺死し 其他崩破 又肥前島原も同日の風雨にて屋舎九百廿三 本丸二三の丸破損 (豊前) 十二日の夕より大風にて水かさそひ 士民屋舎六十餘流失し 男女十三人溺死

石原家記 十一日 大洪水 上郡村々竹野郡早田村杯 別而洗崩す

米府年表 十一日 大雨洪水 人馬流失多し

山鹿素行先生日記 十一日 十二日 此風自西國至播明石 攝州以東不然 肥後肥前 豊前筑後大風雨洪水 水田白田損毛 人馬多死船破

御徒方萬年記 十三日 風雨

○續日本王代一覽 野史 玉露叢

寛文十年六月三日 (一六七〇年七月一九日)

關東、陸前諸國 風雨、洪水

德川實紀 下總關宿并に相模の地 この三日風雨にて洪水 慶延略記 三日 戊の刻より夥敷風雨にて御城破損す 御本丸之崩卅間餘倒 其外大名小名の屋形町屋大破す

第一編 暴風雨 寛文六年—寛文十年(西曆一六六六—一六七〇年)

(備考)

武江年表 八月大風

編者註(一)關西風災異誌(二)寛文九年八月廿三日 暴風雨(三)大風  
潮水流 難波海邊之家打崩れ溺死數千人と申來る(下略)ト  
アレドコレニ當ルモノナシ 恐ラテ寛文十年八月二十三日ノ  
モノノ誤カ)

寛文十年九月二十三日 (一六七〇年十一月五日)

大坂 大風雨、高潮

玉露叢

一、廿三日に松平新太郎光政母儀へ御合力米千俵を給ふ  
同日と去る廿九日と右兩度大坂表風雨なり 取分け廿  
三日の辰の下刻より午の刻迄 甚雨疾風にて大坂御城中の  
小屋竝に明家悉く大破損大いなり 木津川口 四宮島川口  
へ高潮上り 御船藏八軒倒る 御船も破損に及ぶ 且又高  
林又兵衛森川六左衛門與力四人 水主九人次に與力の召仕  
の男女水主の妻子都べて百廿三人溺死す尤も與力水主の  
家 其外海邊に居住の民等 一字も残らず押並べて漂流の  
皆なり

右の烈風強雨高潮上るに依りて損失する故に高林又兵衛  
森川六左衛門に金子二百兩づつ與力へ廿兩づつ同心に七  
兩づつ拜借なり  
尼ヶ崎へも城の二の丸 三の丸へ潮水差込の由

西成郡史

此時木津村は 潮入にて當年不作なりしかば減免あり  
編者註(一)日本災異志(二)日本震災因縁考(三)の孰レモ「玉露叢」ノ記  
事ヲ採リ一分別年代記八月二十三日トセルモノハ是月ノモノ  
ノ誤カト疑ヒテ註セリ シカレド八月二十三日ニ大坂地方  
ニ大風雨アリシトハ確カナル故コレハ又別ノモノト考ヘル

天享吾妻錄

朝辰之刻より 西風吹起り其後戌亥の風に替り夥しき  
大風にて煙塵天に亘り偏に出火の如し

寛文十二年五月五日 (一六七二年五月三日)

江戸 風雨

徳川實紀

この日 大風雨洪水して六郷の假橋やぶれをちたり  
殿中日記 早且より甚雨 少水出也

延寶元年八月九日 (一六七三年九月一日)

駿河、武藏諸國 大風雨

徳川實紀

此日 暴風甚雨 申刻より西刻にいたる  
十三日 駿府よりこの九日 大風雨にて城内多く破損の  
注進あり  
十七日 この九日の大風雨にて町奉行の兩願破壊せしか  
ば 修理費として銀廿貫目づつ下さる  
○續史愚抄 東京市史稿

延寶二年八月四日 (一六七四年九月三日)

因幡國 大風

因府年表 大風吹きて禾稼を損傷す

延寶二年八月六日 (一六七四年九月五日)

下總國 大風雨

香取郡誌

本郡地方大風雨 須賀山村諏訪神社城内松樹折損するも  
の五百餘株

延寶二年八月十六日 (一六七四年九月一日)

第一編 暴風雨

寛文十年一延寶三年(西曆一六七〇—一六七五年)

ガ至當ナルベシ又「玉露叢」ノ本記事ヲ「大坂市風水書誌」ハ八  
月二十三日ノモノトシテ取扱ヘリ 今若干ノ疑アリト別ノモ  
トシテ掲載セリ)

寛文十一年七月 (一六七一年八月五日—九月二日)

紀伊國 大風

熊野史 七月 大風 處々大破損也

寛文十一年八月二十七日 (一六七一年九月二九日)

關東諸國 大風雨、洪水

武江年表

廿九日 南大風雨洪水 津波下り小川向岸等處に人家床上へ水の上る本所通  
徳川實紀 廿八日 昨日 大風雨にて脚力をはせて日光山のさまを  
尋給ふ

徳川實紀

廿九日 一昨夜の大風雨により淺草川出水したるをもて  
昨夜 久世大和守廣之井に町奉行 勘定頭 兩國橋 巡視  
にまかりしに今朝に至り いよ／＼洪水に及へは官船をい  
だし本所の地住居のものを救はしめらる  
晦日 東海道洪水にて六郷橋押流したるよし注進あり  
九月三日 琉使前月廿七日 伊勢の桑名渡海する折から  
大風にあひ 船とも勢尾の海浦各所へ漂着せしかど皆つ  
ゝかなきよし注進あり  
十日 近日の風雨にて 水府の地八萬石ばかり其害を蒙  
る由注進す

○玉露叢 野史 續日本王代一覽 東京市史稿

寛文十二年二月一日 (一六七二年二月二八日)

江戸 大風

九州、四國、關東、北陸、奥羽諸國 大風雨

徳川實紀

大風雨 水戸の領内 田圃若干損失  
十六日 常州大風にて利根川洪水  
豊前小倉の所領 この十六、七日大風にて石垣橋梁屋舎  
若干破損

松平安蔭守綱長永井市正直時 小笠原内匠頭長勝 水野  
民部勝種 松平市正英親 一柳對馬守末禮が各領 十六  
日大風にて洪水城内へ漲り入田圃も多く損失

松平謙岐守頼常が所領 この十七日大風雨にて田圃損害  
中國九州各大風高潮 唯肥前佐賀無別事

東國十八日 大風 津輕邊亦五十年來無之  
夏有洪水 秋有大風 來年必可爲飢饉 當作毛天下大損  
亡 今月連日雨 東海道又洪水

石原家記 十七日 午の刻より子の刻迄大風

田平氏雜記 五月不雨 六七月涼敷

八月十八日夜大風吹 作毛甚惡敷 明年に至り金澤米石  
に付七十七八匁 越能米六十六七匁商賣す

延寶三年六月三日 (一六七五年七月二五日)

江戸並美濃國 風雨

柳營日記 今晚より風雨

山鹿素行先生日記 朝露 自午前雨不止 著綿衣 凡自去月迄今日  
不歴十日而大雨 不驟雨 如秋春之霖雨

玉露叢 永井伊賀守領地 六月三四日の大風雨にて過半水損に依  
りて銀五百貫目拜借を仰付けらる

延寶四年七月四日 (一六七六年八月一三日)

近畿、東海道、關東諸國 大風雨、洪水

續史愚抄 大風 折木倒小屋 甚害

武江年表 四日、五日 風雨 關東洪水

德川實紀 尾張中納言光友卿所領 この四日 大風洪水にて田十四

萬二千六百三十四石間二千廿三町 その害をかむり屋舎

二千四百十七流失し男女十八人馬三十疋溺死

山鹿素行先生日記 大風雨 今日諸國大風 五畿内 播州 讃州 各

大風洪水 津輕 大風

○野史 續日本王代一覽

延寶四年八月十二日 (一六七六年九月一日)

江戶並東海諸國 大風雨

山鹿素行先生日記 十二日 雨 及夜大南東風雨 江府大小名門閥之長屋

有野史 延寶四年八月 此風 三遠驛相朝吹 但三遠驛者 自未

刻迄 西風云々 □州亦甚

(口、尾カ)

柳屋日記 十三日 晴 夜前風雨甚 戊刻大風に而護國院破損

○德川實紀 玉露叢

延寶四年十月三日 (一六七六年十一月八日)

陸奥國 大風雨

津輕藩日記 青森今日暮時分より疾風暴雨及翌朝 三日未刻洪水出

堤町 たばこ町 博勞町 舘町 此四箇所水深は四五尺

淺所三尺水つき大破

延寶五年八月六日 (一六七七年九月二日)

江戶 大風雨、高潮

武江年表 大風雨 木挽町芝邊所々高潮上る

備考 關者註(山鹿素行先生日記ハ六日 曇雨不用下ノミアリ)

政隣記 今年夏 能州虛空に大鼓之聲二十日程不止 秋大風 五

前田氏家乘 秋 大風害を爲す 牧納米三千九百石を翌年に延納を

許さる

延寶五年十月三日 (一六七七年一〇月二九日)

日向國 大風雨、洪水

德川實紀 秋月佐渡守種信所領 日向高鍋 大風洪水 田畝人畜損

害し 松平大隅守光久日向の所領並に伊東出雲守祐實所

領日向飲肥もこの害にかゝる

延寶六年七月十八日 (一六七八年九月三日)

土佐、伊豫、豐前諸國 大風雨

德川實紀 松平土佐守豐昌所領 土佐國高知 大風雨にて支封山内

大膳亮豐明が所領をかけて民屋三千九十五戸頽廢し堤防

八百間 船廿艘損ず

伊豫の松山は十八日の大風にて城下市邑八百三戸 郷里千

五百九十四戸潰たり

伊豫の地 十八日風雨にて堤防二百五十五間 潰濱二百

八十六間 新田堤八百六十間破れ 民屋二百九十三軒倒る

松山畫談 松山大風雨 民家千七百九十三軒破損

續日本王代一覽 土佐 伊豫 豐前 大風洪水

○野史

延寶六年八月四日 (一六七八年九月一日)

九州、四國、東海諸國 大風雨、洪水

德川實紀 京 大坂 此四五日大風雨 鴨 淀 桂 宇治 大和河

洪水

五日 九州大風雨 福岡 佐賀 熊本 柳川 久留米 島

原 小倉 唐津 平戸 天草等の地 大に頽破し長崎も

出島はじめ 土人の屋舎そこなはる

豊前的小倉 此五六日大風雨 田圃八百十町 海堤一萬百

十四間 屋舎二千八百四十二戸損害

伊豫の地 この五日六日の風雨にも堤二百七十八間 屋舎

二百七十七戸頽廢

四日より六日まで 尾濃兩州 大雨洪水 尾張黃門封地田

畝八萬五千六百石餘 大堤三百四十三間 小堤二千二百

十二間 家屋六十八戸損害し 男女三人 馬三匹溺死

石原家記 五日 西の刻より丑刻迄 大風

玉露叢 五日 筑後柳川領水損 所謂 一、高四萬四百廿石餘潮

入 一、堤一萬五百六十九間崩る 一、倒家二千七百二

十九軒 内三十六軒は侍屋敷 八軒は寺社 四十軒は足輕

以下 二千六百四十五軒は町人百姓 一、流死男女共に

七人 一、馬十七匹

一、同日に肥後熊本領水損 所謂 一、田畑總高七萬六

千五百七十石餘 一、塘六萬一千八百九十五間 八里餘なり

一、井樋二一、船大小二百三十二艘

一、潰家一萬三千三十九軒 一、溺死三人 流馬三匹

第一編 暴風雨 延寶四年一延寶七年(西曆一六七六一一六七九年)

一、同日、豐前小倉水損 所謂 一、潮入田畑百十町八

反 一、海濱の土手一萬十四間 一、潰家二千八百四十

二軒 城廻り破損

山鹿素行先生日記 四日 雨終日不止 五日 大雨終日不止 六日

大南風有雨 四日 五日 六日 此間西國四國洪水大風

延寶七年七月十日 (一六七九年八月一日)

播磨、備前諸國 大風

山鹿素行先生日記 十日 雨不止 午後屬晴 南風甚 甚蒸暑

二十五日 去る十日 申刻赤穂大風 堤二千餘間破 潰家

百餘軒 無雨而有風 高物甚損(中略)

凡去月今月 西國 中國 北國洪水 東海道亦然 奥州早

十日及び二十一日兩度の大雨あり 國中の損害合して

概ね左の如し 國中(二十一日ノ項参照)

延寶七年七月二十一日 (一六七九年八月二七日)

播磨、備前並關東諸國 大風

山鹿素行先生日記 八月二十日 去月二十一日晝大風 播州赤穂自

申刻及曉 二十二日江戸大風 自夜中及巳刻 凡百里而

其所達如此

岡山市史 十日及び二十一日兩度の大雨あり 國中の損害合して

概ね左の如し

一、岡山城廻り破損 一、本島島石原領

一、田地壞捨八萬餘石 一、寺社破損十四ヶ所



- 一、浦々破損船百六十八艘
- 一、死人二十三
- 一、堤切れ一萬七千七百九十間餘
- 一、畑夏物捨り五萬二千六百石餘
- 一、潰家二千八十六軒
- 一、倒木九千六百本餘
- 一、死牛三十四

御徒方萬年記 二十二日 大風

山鹿素行先生日記 二十二日 風雨 辰刻南大風甚 殆不異辰年八月

十二日之大風 巳刻風少止 午刻已後風漸漸靜 夕雨止

德川實紀 廿二日 風雨にて水戸の封内 田圃五萬八千石餘損害し

民家堤防 橋梁も若干損破し大木三百五十倒れたり

延寶八年七月二十五日 (二六八〇年八月九日)

下野、越中諸國 大風雨、洪水

宇都宮市史 大風雨ありて町中洪水せり 小門町にて流失家屋十三

戸 田川筋にては十一戸 合せて二十四戸押し流さる

越中善事記 神通川 常願寺川等諸川一時に大水(中略) 富山御城下

過半水也

延寶八年八月六日 (二六八〇年八月九日)

江戸並陸奥國 大風雨、洪水

宇都宮市史 暴風あり 江戸淺草見付御門四尺程傾斜せり

津輕歴代記類 大風雨にて洪水

延寶八年八月二十一日 (二六八〇年九月三日)

江戸 大南風

山鹿素行先生日記 二十二日 自昨夜大南風 至今日不止 及暮而風

止 甚快霽

晦 九州初八月二十一日 洪水 然不如當方 依之西國

滿作之山

(備考)

熊野史 八月 大風 神樂屋寺門も崩す

讀破災異年表 八月 大水

延寶八年閏八月六日 (二六八〇年九月二日)

東海道、關東諸國 大風雨、高潮

武江年表 大風雨 深川 本所濱町 靈岸島 鐵砲洲 八丁堀海水

漲り上て家を損し人溺る 兩國橋損じ往來止る 谷中法恩

寺本堂梁折れて半傾く 東海道筋 所々潰波あふれて民家

を溺らす

德川實紀 六日 昨夜 大風雨やまず 晝より黃蝶かすしらすむららが

り飛で 夜におよんで散せず また南風はげしく 城中諸

門の瓦をおとし壁を落す まして武家 商屋 傾覆すること

と數しらす 地震ひ海鳴こと甚し芝浦のあたりより高潮

をしあげ深川 永代 兩國邊水涯の邸宅 民屋悉破損し溺

死のもの多し

九日 駿府より六日の風雨 所々破壊のむね注進あり

十六日 遠州横須賀の地この六日暴風雨のため城の櫓一

士民の家六千餘なかれうせ溺死のもの三百人餘

山鹿素行先生日記 朝亦風起之處 自東方東南風到 甚溫暖如當炎風

辰刻雨次第に風雨甚 到巳刻迅風甚雨如瀑 天甚暗家屋之

木片揚飛而覆天 午後未止 未刻風少靜 夕時 午刻汎亦

滿庭 今日江戸中之大風 六十年前難波役前年有此風云々

三日 十四日大風甚雨なり

淺間文書纂 五ツ時分より九ツ時分迄大風大雨 社中少も破損無之

御林之松杉大分風折 在所々町中不殘破損す 於吉原

風之折節 津波打家不殘流 旅人並在所之者三百餘死す

柳營日記 六日 昨夜半過甚雨 以後風吹 辰中刻より甚 未刻至

而南風故 高鹽上る 江戸中家破損家 溺死之者も多し

(備考) [家、流字脱略]

天享香葉鑑 十三日 江戸又大風

十四日 今朝 大風雨

(備考)

前田氏家乘 八年 狂風暴雨交々至る 河川漲溢 水損夥多

越中記 八年も大惡作其上實入濟大風吹候に付御領内の見立御用

拾米一萬二千二百石餘

天和元年一月二十三日 (二六八一年三月一日)

江戸 大風

山鹿素行先生日記 晴 自昨夜南大風 今日甚大也 自昨夜八月

北揚塵而不見 大日敷之大風 東西南

天和元年六月二十日 (二六八一年八月三日)

美濃國 大風雨

大垣市史 延寶九年六月二十日晚景に及んで風雨烈しく夜に入

りて大風大雨あり

丑の刻 風雨漸く止む 大垣の内にて崩家士族屋敷二百

九軒 町屋百四軒 大垣領内三千餘 死人十一人馬二疋

城内外 在々破損所 其の數を知らず

鐵砲洲邊大瀾 水上座敷上 永代嶋邊死人甚多 江戸中騒

動 本所之士民工商等 皆悲歎而遁去云々 營中外郭甚損

大名高家之家宅 屋上皆破損 津輕主 大村主 松浦主

等各發使价防風破

七日 晴爲香昨日之大風雨 到淺野内匠頭亭 家宅甚損潰

晦日 今月六日之津波 江戸御入國以來無之 深川邊之家

屋皆潰流 凡死人三千餘 町中七百人 代官方千七百餘人 寺社民家方

海邊之者云 六日之朝 南風之節 津波二打通 其餘波入

江戸表云々 此二波到三遠

三州吉田西尾田原甚高波 遠州横須賀濱松等甚夥 兎井御

番所無事其外皆潰潰云々 横須賀二部<sub>地</sub>上尤永水上る

死人五六百人 潰家三四十軒云々 吉田亦然 死人少 駿

州吉原原宿入水下 死人不知數 船涉屋上凡十餘日間皆

以舟渡之 崩家流亡富士根方云々 中國五日洪水 奥州秋

田津輕邊 初八月二十五日洪水 當月十四日又大雨洪水

上方亦十四日洪水云々

五露 巳刻より風雨 午の刻より未刻迄強風甚雨なり 因つて風

破水損夥し 江戸中吹倒したる家三千四百二十軒餘 本所

深川方々に溺死七百餘人 濡米二十萬石餘也

本所 深川 木挽町 築地 芝へ向つて高潮のあたる事

所により家の床より四尺五尺或は七尺八尺也 又は床の上

五寸三寸もあり 前代未聞の沙汰なり 東海道是亦同じ

遠江掛川領五千七百石餘水損 二千七百九十四軒 民家潰

る 參州吉田に倒家千六百九十九軒 村數四十 死人三十九人

遠州濱松にては本丸 天守 一の丸 三の丸等構破損也

潰家屋敷町屋まで三百五十八軒也 在所々潰家 高潮に

溺死の民 數を知らず 原 吉原 潰家溺死夥し 所々の

委しき事舉げて 記すに限りなき故略し畢んぬ 東國は十

天和元年七月十日 (一六八一年八月二三日)

近畿諸國 大風

山鹿素行先生日記 二十五日 去る十日 伊勢山田大風洪水大火事  
云々  
二十九日 凡今月九日十日 上方風

天和元年七月二十日 (一六八一年九月二日)

伊勢、尾張、越中諸國 大風

鹽 尻 暴風洪水の時 洪濤陸を浸し築出しの民戸は押流し跡か  
たなし (享保七年八月十四日ノ條ニアリ)  
山鹿素行先生日記 二十日 晴 南風甚暑 今夜南風甚 當年無此風  
二十九日 二十日勢州大風洪水火事 此風尾勢及大坂邊  
大風云々

前田氏家乘 二十一日 大風樹木を抜き石を飛ばす

越中舊事記 大風 作毛白枯に相成 過分の風損

(備考)

名古屋市史 七、八月數次の暴風雨あり 田畑ために害を蒙り 牧種  
例年の半に足らず 前略 尾張實記

天和元年八月七日 (一六八一年九月一八日)

江戸並北國 大風雨

山鹿素行先生日記 七日 朝曇大雨甚不止 及夜而甚大風雨 當年  
不知之  
晦 北國邊 七日大風云々

天和元年八月十四日 (一六八一年九月二五日)

伊勢、讃岐並北國諸國 大風、洪水

宇治山田市史 風雨洪水にて宮川西岸の堤切れ 山田市中に水入り  
外宮一鳥居邊亦洪水した 萬里記

山鹿素行先生日記 疊 刻已後大雨南風 其七日之風雨  
晦 今月陰雲久 七日之夜 十四日大風雨 諸國此風雨或  
吹或不吹

北國邊七日十四日大風云々

讃岐災異年表 十六日 大風雨 死者以百數 去年申歲洪水 今年酉  
歲亦洪水 因之民今謂之中西洪水也

(備考)

徳川實紀 八月廿一日 松平佐渡守康尙所領 勢州長島 大風雨にて  
田圃損亡するゆへ 銀二百貫目恩借せらる

天和二年八月 (一六八二年九月二日九月三日)

紀伊國 大風

熊野史 八月 大風 護摩堂を破る

天和二年九月十三日 (一六八二年一〇月一三日)

江戸 風雨

山鹿素行先生日記 午後南風暴雨 近日無之

天和二年十一月一日 (一六八二年一二月二九日)

江戸 大風雨

山鹿素行先生日記 從昨夜雨不休止 今日大雨北風 登城之大小名供  
奉悉淋雨 暴風 民屋多損

(備考)

凡今年豐饒 四海同一 無大風無大水

天和三年八月十五日 (一六八三年一〇月二二日)

江戸 大風雨

山鹿素行先生日記 十五日 雨 終日不休止 午後大風暴雨如瀧

二十二日 夜中甚雨大風

二十三日 雨 北風甚 終日不休 翌年不  
變之

貞享元年五月二十五日 (一六八四年七月七日)

下野國 大風雨

宇都宮市史 廿五日より廿六日まで大風雨あり

貞享元年八月二十日 (一六八四年九月二九日)

伊勢國 大風雨、洪水

宇治山田市史 風雨洪水で宮川常水より高きこと三丈 堤防が切れ  
て 山田 河崎 船江までも浸水し安全な所は僅に五分一  
ほどであつた 小笠原長政日記

(備考)

西成郡史 貞享元年 大風あり 木津村唯専寺鐘樓破壊す 同寺  
鐘樓

貞享元年九月 (一六八四年一〇月九日一二月六日)

江戸 大風

武江年表 九月 大風家屋を吹倒す

山鹿素行先生日記 九月晦 秋中世上無大風雨 甚豊年

編者註(兩書記ス處相異其レク不審多シ)

貞享二年三月八日 (一六八五年四月二日)

江戸 風雨

山鹿素行先生日記 大雨南風 瀑水漫々 去年今年  
同之

貞享三年七月二十五日 (一六八六年九月二日)

讃岐、因幡諸國並京都 大風雨、洪水

讃岐災異年表 烈風大水

〇讃岐通史

因府年表 大雨頻りに降り注ぎ申の刻より北風大いに吹起り洪水す

續史愚抄 大風 發賣舎

(備考)

大阪府誌 三年 三島郡島飼村大字島飼八丁 俗に不明池と稱する安  
威川の堤防決す

貞享三年八月十七日 (一六八六年一〇月四日)

因幡國 大風

因府年表 大風吹く

貞享四年八月二十七日 (一六八七年一〇月三日)

江戸 風雨

柳營日記 昨夜甚風雨

貞享四年九月九日 (一六八七年一〇月一四日)

四國、近畿、北陸、關東諸國 風雨、洪水

颱風調査報告 大雨ありて沿岸津浪打入り損害があつた 御前氏代記  
治政略誌

讃岐災異年表 大風洪水 城東西堤潰

宇治山田市史 八日 風雨洪水 宮川増水三丈餘 山田半は浸水し

岡山市史 大風雨 封内損害あり 左の如し

- 一、潰家一萬二千七百四十九軒
- 一、川堤切口七千三百三十三間在 小川共
- 一、波留堤切口一ヶ所
- 一、波留堤切口二千六百三十二間
- 一、在 潰橋大小三百九十ヶ所
- 一、死牛馬五
- 一、破損船三百七十四艘
- 一、同破損二萬四千五百八十二間同上
- 一、造堤切口二千六百三十二間
- 一、同堤破損一萬七千四百八十八間
- 一、死人三十八

續史愚抄 大風 抜木壞處舎 賀茂貴布禰等社損 春日社大木倒 又

徳川實紀 この九日 京 南都大風雨にて加茂 貴布禰 稻荷山 祇

破損船浦手形のひかへ

口 上書

- 一、木津屋忠五郎船大坂舟宿 木津屋三郎兵衛方に於勢州尾州へ拾荷物仕立 當六日に大坂を出帆 紀州小嶋が沖より天氣惡敷御座候に付 替せの風を難儀に存致出戻 攝州神戸浦にかゝり 居申處に八日より九日の裏迄大風を色々としのき居申候得共 餘波風つよく御座候に付 荷物打申候 殘る荷物も大浪つ打込候故 荷物濡申候(下略)

貞享四年卯九月十六日 木津屋忠五郎 手形之事

一、播州大津浦太郎兵衛舟三人乗 九月七日に當浦へ參

舟かゝり居申處に 同九日の南大風に舟破損仕 船頭太郎 兵衛相果被申候 然とも死骸見へ不申候 爲後日手形如件

(下略)

萬巻昌興日記 當夏より度々洪水 且又九月九日之大風に御領國中在

家等四千餘軒破損 田畑損亡之事未詳に雖不相知有増注進之趣今朝戸田山城守殿迄被仰達 委細者追而被遂御吟味 御老中方へ可被仰達候旨也

上田源助善記 九月九日大風潰家等覺

- 一、千三百九十五軒 熊栗郡
- 一、内四十一軒半潰 九百九十一軒九潰 三軒強燒小屋
- 一、六百九十七木 たふれ木 内七本脇木
- 一、六百九十木 並木 内三本杉
- 一、三艘 外海船引船舟
- 一、六人 病人、一、二人男女死人
- 一、一匹 痛馬
- 一、五百九人 石川郡潰
- 一、(八、軒カ)
- 一、七百本程 並木 一、二人死入男女
- 一、四軒 加賀郡潰家
- 一、十四本 たふれ木 並木 堤松 官林共

當九月九日大風に而石川郡等潰家等有之 金澤町端より 大聖寺御領境迄 往還並松千四百七十本吹倒

久夢日記 九日 大風ふき しょくはそんなひたし 家おしく ふきたをし 大木とろふきをり またゝをる、

柳營日記 十日 昨夜風雨

○續皇年代私記

貞享四年九月二十九日 (一六八七年十一月三日)

越中國 大風

富山市史 大風

元祿元年八月十九日 (一六八八年九月一三日)

美濃國 大風雨、洪水

大垣市史 十八日より豪雨

- 十九日 大風雨 此日洪水 大垣領内郷村不農 浸水田 畑高一萬七百石餘 堤切所二十ヶ所 惣間數三百五十八間
- 流家五軒 潰家二十九軒

(備考)

東藩史稿 七月八月並に封内大風雨 海水溢れ田を害し屋を發く

元祿元年九月二十九日 (一六八八年一〇月二二日)

越中國 大風

前田氏家乘 九月 大風 稻田を害す 爲めに二千石を免除せらる

元祿二年七月十七日 (一六八九年八月三一日)

因幡國 大風

因府年表 南風強く吹く 二百十日の前なり 之に依て當年大凶作とならん

(案一本文も舊記に見へたり然るに同鑑には此大風を泄せるのみならず新穀價甚だ賤し 他日尙可考)

元祿三年八月十日 (一六九〇年九月一二日)

京都 暴風雨、天色赤シ

第一編 暴風雨 貞享四年一元祿六年(西曆一六八七一一六九三年)

續史愚抄 曉 暴風雨間 天色赤如火映云

元祿四年八月二日 (一六九一年八月二五日)

四國並京都 風雨

讃岐災異年表 大風雨

日本災異志 京都大風 續皇年代私記

元祿五年九月二十一日 (一六九二年一〇月三〇日)

北海道 大風雨

新北海道史 大風暴雨 破船多矣 有古例 不免破船調

○北海道史

元祿六年一月二十七日 (一六九三年三月三日)

京都近國 大風

續日本王代一覽 大風 淀川の舟破損す

○野史 泰平年表

元祿六年六月十一日 (一六九三年七月一三日)

伯耆國 大風雨

因府年表 夜 伯耆國 大風雨にて民屋多く吹倒され 會見郡日吉津村にては女一名牛一頭即死せしと聞ゆ

元祿六年六月二十五日 (一六九三年七月二七日)

筑後國 大風

石原家記 六月 當年別て暑氣強く廿五日申の刻より大風 大木吹倒多し 本町破損 近來の大風なり

元祿六年七月三日 (一六九三年八月四日)

紀伊國並京都 大風

熊野史 三日より五日まで大暴風あり 御領分家屋六百軒倒潰し色川垣内村十三人死亡 此年貢御免 續史愚抄 四日 昨今俱 暴風雨云

元祿六年九月十三日 (一六九三年一〇月二日)

福岡並江戸 大風

福岡縣災異誌 福岡 大風吹く 城下の第宅多く壊倒す 同月志賀社神樂堂 御興堂 御供所等修補を加へらる 主記 續持院隆光僧正日記 十三日 早天より雨降 暫時も不止 九ツ時より大風吹

元祿六年九月二十一日 (一六九三年一〇月二〇日)

北海道 大風雨

新北海道史 松前廣時日記曰 秋九月二十一日 暴風毀壞船五拾有餘 船 北海道史 日本文書に五年六月に暴風を記す所は此の風也

元祿七年七月十七日 (一六九四年九月六日)

紀伊國 大風雨

紀州災異年表 大風雨 田邊にて屋根飛び松倒れ小家七百軒潰る 田邊

元祿八年七月十四日 (一六九五年八月二三日)

陸奥國 大風雨

元祿十年五月十三日 (一六九七年七月一日)

因幡國 大南風

因府年表 夜 南風強く吹き所々破損多し

元祿十一年八月十九日 (一六九八年九月二三日)

陸奥國 大風

奥南盛風記 大風 田名部の内佐井湊にて諸國の商船破損二十七艘 死亡五十七人

元祿十二年七月二十一日 (一六九九年八月一六日)

陸奥國 大風雨

八戸藩史稿 此年春季以來天候不良之上七月下旬より風雷雨害交々至りて諸作稼らすして大飢饉となる 十月に至りて幕府への損毛報告左の如し 覺

- 一、高二萬石之内損毛高 七千石餘 三戸郡之内 五千石餘 九戸郡之内 都合一萬二千石餘

右之通私領分當春より天氣不順に而夏中殊之外冷申候に付不作仕其上當七月廿一日之風雨田畑へ當り一切實入無御座候由百姓共申候に付 爲相改申候處右之通御座候 御訴申上候

元祿十二年八月十五日 (一六九九年九月八日)

關東諸國 大風雨

譜國院日記抄 御禮如常 月見之御能如例 晝時分より風起 次第 第一編 暴風雨 元祿六年一六九三年(西曆一六九三一一七〇〇年)

自然未聞記 元祿八年は土用中暑も薄く陰々として當年(すべて寶曆五年を指す)の様に冷り 一日晴天静日と申は一ヶ月の漸一兩日あらんか 殘暑も無之 日々辰巳又は未申の方より風吹出 何の當年に不替氣候に而備盆十三日より辰巳申未の方風吹交り 曾而大風雨十四日迄大あらし此節 稻の花不殘吹散夫より次第に冷しく成候由

元祿八年七月二十一日 (一六九五年八月三〇日)

四國、山陰諸國並京都 大風雨

讃岐災異年表 廿日 大風洪水 穀不登

香川縣史 廿一日 大風洪水 穀登らず

續史愚抄 廿一日 暴風 發屋 甚害甚記

因府年表 廿二日 晚天北風強く吹起りて甚雨頻りに沃き屋宇を剝ぎ輪壁を倒し 府下に全き家なし 稀代の洪水にて賀露の海口十町餘りに廣まると言ふ

因伯雜記 廿日の夜北風甚しく 廿一日因伯共に洪水 御城下一軒として損せずと言ふ事なし

元祿九年九月九日 (一六九六年一〇月四日)

讃岐國並京都、江戸 風雨

讃岐災異年表 大風雨

續史愚抄 暴風發屋

元祿寶永珍話 九日夜 大風雨 松平安藏守赤坂上屋敷跡 南西之方高き所十四五間程崩

に強吹 雨も降 暮に及大雨大風也 暮六ツ時過 御能相濟 御能過 彌風強 退出之節傘不被用 五ツ時より暴風頻り也 屋根之瓦飛落 八ツ時風止 所々殊之多破損 夜に大風有 米穀熟せざりしかば 其年の冬 大倉の米價 百苞三十五石を金五十兩に被定

御當代記 夜之大風 國々田損す 就中關東筋大飢饉と云

宇都宮市史 夜より翌朝に至るまで大風雨あり それが爲めに不作となりて金一分に秬三斗二升米一斗八升となりければ町民困難を來せり

十八日又大風雨ありて民家 町家 山林悉く吹き倒され一戸だも満足の家はあらざると云ふ

編者註(本記事ハ十三年八月十五日トセルモノナレド「日本因災史考」ハ十二年八月十五日ニ探レリ 今ソレニ從ヘリ)

飛騨編年史要 飛州大風あり

大聖寺藩史談 大聖寺大水

(備考) ○元和日記 東京市史稿 農家心得調

福岡縣災異誌 八月 大風傷禾 江都大倉米七斗 直小版一金 秋月直部四分 慶長以來米價踊貴是爲始 秋月藩財政史料

元祿十三年七月十九日 (一七〇〇年九月二日)

江戸 大風

譜持院隆光僧正日記 十九日 二百十日 九ツ時俄に大風吹出 爰惑之災災無心元 風止火滅之祈禱抽丹精 大風忽に止

武江年表 大風

一一一

元祿十四年七月二十一日 (一七〇二年八月二四日)

下總國 大風、高潮

香取郡誌 北風強く變じて東南風となり海水暴漲して干潟地方多少の損害あり

元祿十四年八月十二日 (一七〇二年九月一四日)

山陰諸國 風雨、洪水

因府年表 十二日前夜子の刻頃より大風吹起り大雨頻りに沃ぎ因伯一圓洪水

元祿十四年八月十七日 (一七〇二年九月一九日)

四國、近畿、東海道、關東、奥羽諸國 大風雨

颱風調査報告 十六日 十七日 洪水ありて損毛十萬餘石に及んだ吾川郡上八川村清水に山崩あり死人八人 伊豆年表附記一七九  
月堂見聞集 八月十七、八日 松平佐渡守様御在所勢州長島洪水にて堤押切 御城中へ水押入 御家中の家居 床の上より五尺程 押上げ候に付 男女御本丸邊へ立退申候山 人は損不申候由 畑田損毛大方皆無にて若し一郷も相残り可申哉の山 尤昨日御用養方へ御届け在之候  
一、板倉周防守様御領分も同日大風雨にて 勢州龜山嶺は洪水堤數百間損じ 田畑大分水押 損毛高未知  
一、三州岡崎大風雨にて 矢矧川邊五百間餘切 高二萬石餘水入 流家卅二軒 潰家五十二軒 往還の小橋三ヶ所落  
一、秋田信濃守様御在所 奥州三松嶺 十八日大風雨にて損毛田畑高七千石餘 倒家民家三百廿五軒 吹折木二千本の餘 山林の内委細は未知 怪我人十五人 死人六人

一、馬一匹 流死

前田氏家乘 大風雨あり 諸川暴漲す 就中常願寺川 馬瀬口村の堤を破壊し 稲田七百五十餘石を損し熊野川に浸入す 八月十七、十八兩日 又馬瀬口村堤を破り熊川へ注入し富山へ浸水して寺院を流失す 田面の害せられしもの七千四百三十九石 破壊の堤は一萬七百三十五間と云ふ

天享吾妻鑑 十九日 一昨日の風雨にて増上寺御殿間少々破壊有之

元祿十五年七月二十八日 (一七〇二年八月二日)

四國、中國諸國並北海道 大風雨

颱風調査報告 大風雨ありて民屋耕作の損傷寛文六年より大にして被害甚大であつた 南島誌二七ノ附録

日本災異志 廿八日及晦日 兩回の大風雨により 潮江井に彌右エ門湖田堤切れ損亡高 十六萬石餘 永荒地高二千餘石 常陸年表

讃岐災異年表 大風雨

松山叢談 松山大風 御本城號落る 城山松木三百十八本風折根起潰家侍屋敷二十三軒 町家二十軒 百姓家二千三百八十

九軒 死人男女十六人

因府年表 大水

岡山市史 二十八日 備前 備中 暴風雨洪水 高潮にて 其の八月十九日江戸へ申渡左の如し 關東 岡山縣水害史

一、二千五百八十六軒潰家 城下並に在共

一、九千五百八十間軒餘 川堤退く

一、一萬二千六百七十間餘 潮堤破損

一、四百二十間餘池堤破損

一、三十三 橋大小損じ

一、石川主殿頭様御領分 淀 去る十八日洪水にて 侍屋敷町家にて水乗堤所々切 田畑水下に成 未水引不申 主殿様御所務已後無之高水に付 御用番様へ御届有之候由

名古屋市史 八月九日より十八日まで雨降り續きて諸川氾濫し枇杷島は水量七合二勺に上り 成瀬準人正を初め老中諸奉行參集して警戒せしが二ツ杓 法界門の堤防決壊して河水西方一面の田畑を浸潤す 木曾 長良 揖斐 牧田 四川の堤防破損するもの凡五十三箇所 關東年表附記 編年大略

大垣市史 八月十二日大雨 十七日より十八日まで風雨甚しく 十七日より大水出で 十八日西の刻前 柿之木戸堤切(一)に大島堤引沙にて切(二)大垣家中町共に床の上に浸水(竹島町丁子屋邸床の上二寸浸水)二階に居ること三日 損害左の通り

一、高九萬二千八百九十二石餘 田畑水入 但郡數七郡之内 村數二百二十九ヶ村

一、三萬三千五百五十二石餘 水押田畑

一、三千八百七十八間 堤切所百七十一ヶ所

一、八千四百七十六間 堤所々破損

一、二千七百七十一間 川除水割切所五十三ヶ所

一、六百八十一軒 潰家

一、七十二軒 流家

一、三人(内二人男 一人女)溺死

一、一萬千八百間餘 川筋堤所々破損

一、四千九ヶ所 川除波止損

一、五千二百七町 田畑當芟水入潮入共

一、千三百間餘 石堰所々破損

一、五人 死人

岡山縣通史 美作大風洪水 津山封内家屋五百二十を變じ耕地高八百六十石を流し一萬五千石を害す 松平記録 風光類書

護持院隆光僧正日記 廿九日 昨夜より大風 雨時々降

蝦夷年代記 廿八日 大風

新北海道史 廿九日 大雨逆浪 東部龜田村洪水 毀壞民家甚多

北海道史 二十九日 大風雨

三十日 洪水 龜田村畑作皆無となれり

元祿十五年八月六日 (一七〇二年八月二八日)

北海道 大風雨、洪水

新北海道史 大風大雨洪水 溺死者四十七人 破壊船數百隻

元祿十五年八月十三日 (一七〇二年九月四日)

陸中國 大風

自然未聞記 八月初頃よりそろ／＼永あれせしが 十三日夜より辰巳大風震動して街道の並木倒 人馬の通用無之 田畑大損す

元祿十五年八月十九日 (一七〇二年九月一〇日)

飛騨國並北海道 大風

飛騨編年史要 飛州大風あり 晚稻に被害少からず

是秋大風 千貫橋の橋臺木を吹折る

一、一三

蝦夷年代記 七月廿八日 八月十九日 十月十日大風 波高山崩前  
代未聞の飢饉なり

元祿十五年八月二十九日 (一七〇二年九月二〇日)

九州、中國、山陰、奥羽諸國 大風雨、洪水

福岡縣災異誌

夜半より晦日曉迄 大雨 石原軍記

子の刻より北東の風大風 翌晦日辰刻迄吹 五十年以來  
無之大風 上座郡下座郡百年以來無之洪水の由 倒家一萬  
千八百九十三軒 田畠二十九萬五千五百石損毛 倒木一  
萬八千三百餘 流死五人 福壽縣誌  
子の刻より御國大風 翌晦日辰刻迄吹 倒家一萬千八百九  
十軒餘 今年田畠損毛 綜合福岡縣年表  
大風大湧 上災狀 租額一萬三千八百石 決堤二千四百  
十二武 倒屋千五百十 顛木五千四百九十株 秋月郡誌  
國中大風吹く 倒家凡一萬千三百三十五軒 六百四十一軒  
は土宅 百七十四軒は福岡博多商家 九千三百四十二軒は  
郷村 九百七十八軒は海濱 福岡縣志  
會所 大風にて破損仕候に付於松原松木願事 博多法要誌  
二十九日再び暴風雨あり 同晦日迄吹き 荒み 破損多く旭  
川増水 城内水入り町中家屋浸水せり 其の被害左の如  
し 福岡縣志  
一、城内並に曲輪所々破損  
一、壹萬八千六百六十七間 川堤退く  
一、二萬二千二百六十六 間瀬除破損  
一、千五百町餘 潮入  
一、五百三十九間 池堤破損  
一、六千三百三十三間 往還路損じ  
一、三十軒 渡家城下並に在共

一、十六艘 破損船  
一、壹萬三千三百九十八間 堤所々破損  
一、七十八ヶ所 川除波止損じ  
一、三百八十四町餘 流失  
一、七千三百八町 水入  
一、二千八百六十間 石堰損じ  
一、千九百三十九軒 渡家城下並に在共  
一、百十橋大小損じ  
一、一人 死人

因府年表

卅日 北西の風強く吹き 大雨沃ぐが如くにして出水す  
一記に云ふ 此日人屋流失し牛馬溺死す 御兩國の損亡凡  
そ十萬四千九百三十六石四斗と載せたり

香川縣史

晦日 大風洪水

謄持院隆光僧正日記

晦日 彌勒寺へ參 大風 寺中迄水差入

八戸藩史稿

夏季以來天候良からず 加之秋節に至り大風大雨の害  
甚しくて終に大飢饉となれり 其の損毛高左之通

一、高二萬石之内

一、九千石餘 三戸郡之内

一、七千石餘 九戸郡之内

一、千八百石餘 志和郡之内

都合一萬七千八百石餘損毛

内八百石餘 山崩水災

九百石餘 川欠

一、田地水堰 九ヶ所破損

一、山崩 三十五個所 一、川欠 三十七個所 一、潰家十三軒

一、落橋 三十二個所 一、溺死馬 九頭

右之通私領分當六月初旬頃より天氣惡數殊之外冷稻一切  
實入不申不作と相見得申候處 八月廿三日より大雨降同晦

岡山市史

二十九日再び暴風雨あり 同晦日迄吹き 荒み 破損多く旭  
川増水 城内水入り町中家屋浸水せり 其の被害左の如  
し 岡山縣志

一、城内並に曲輪所々破損

一、壹萬八千六百六十七間 川堤退く

一、二萬二千二百六十六 間瀬除破損

一、千五百町餘 潮入

一、五百三十九間 池堤破損

一、六千三百三十三間 往還路損じ

一、三十軒 渡家城下並に在共

日大風雨洪水仕候に付 爲相改候得者右の通 田畑共に悉  
損毛仕候來春百姓共飢饉可仕と無心奉存候 何卒相續候  
様可仕與候得共大分之損毛に御座候 南部右近

(備考)

名古屋市史 八月洪水のために海東郡三越村の大杖壞れて河水郡中  
に溢る 名古屋

元祿十五年閏八月十四日 (一七〇二年一〇月五日)

江戸 大風雨

謄持院隆光僧正日記 大風雨

元祿十五年十月二日 (一七〇二年十一月二〇日)

江戸 風雨

東武編年錄 二日夜 江戸大風雨

謄持院隆光僧正日記 三日 昨夜中より大風不止 八ツ時過漸止 所  
々破損多也

○元和日記

元祿十六年八月十九日 (一七〇三年九月二九日)

江戸並越中、陸奥諸國並北海道 大風雨

謄持院隆光僧正日記 大風雨

富山市史 南風猛烈 市内被害多し

内山御用留錄 一、百十九軒

當る十九日之大風にて潰れ家大小 此外半潰に相成申候  
家過分に御座候

一、貳十本 御福村より花木村往還並木吹きたをし申候

御寄合所

新北海道史 大風大雨 逆浪甚矣

元祿十六年九月六日 (一七〇三年一〇月六日)

陸前國 風雨、洪水

東藩史稿 封内 風雨洪水 溺死二十餘人 田を害す

元祿十六年九月九日 (一七〇三年一〇月一九日)

北海道 大風雨

新北海道史 大風暴雨 溺死者八十九人 毀壞家十三戸 破船貳百五  
十五隻 夷人死者亦甚多矣

寶永元年七月一日 (一七〇四年八月一日)

土佐國 風雨、洪水

日本災異志 朔 四日 十七日風雨洪水 損亡地高八萬石 土佐國實業年  
表

○颱風調査報告

寶永元年八月十一日 (一七〇四年九月九日)

讃岐國 大風、洪水

高松市史 八月十一日 九月十二日 大風洪水 民饑ゆ

寶永元年八月二十五日 (一七〇四年九月二三日)

筑後、豊前諸國 大風雨、洪水

福岡縣災異誌 暴風 秋實損毛 久留米史大災記

城内外大洪水 小倉市史

大風雨潰家百五十一戸 柳河野誌

寶永元年九月十二日 (一七〇四年一〇月一〇日)

讃岐國 大風、洪水

高松市史 八月十一日 九月十二日 大風洪水 民饑ゆ

寶永二年六月二十六日 (一七〇五年八月一五日)

三河國並江戸 大風雨

名古屋市史 廿六日 廿八日 三河寺部二十箇村に風雨の難あり堤防田畑の損害甚多し 寺部は渡邊氏の領地にして(中略)是時の損害甚しく渡邊氏の獨力にては到底其復舊に堪へざりしかば藩より總工費の半額金千二百五十兩餘を給して之を資け同年に限つて堤銀を寺部諸村に課す(中略)七ツ時より風雨止

寶永三年六月二十五日 (一七〇六年八月三日)

九州、四國諸國 大風雨

福岡縣災異誌 大風雨 浸水家屋五千二百五十五戸 破損の船七十五

溺死者十四人 柳河野誌

大風雨に付 御領分中御損毛の由御届 秋月野志誌

大風雨 上災狀 租額四一六〇餘 什屋七九〇 顯木三

二〇株 秋月野志誌

颱風調査報告 風雨甚大にして損毛八萬餘石に及んだ 寶永年代略記二ノ三

三貨圖彙 六月 九州筋大風雨これあり 肥後洪水たりといへども

中國筋又東北の國々は其沙汰なし

寶永三年七月二十七日 (一七〇六年九月三日)

江戸 大風雨

護持院隆光僧正日記 大風雨也 永代浦 増福院へ波打入 表長屋表

門破損 其外板塀垣等破損

(備考)

前田氏家乘 七月 大風雨あり 稻田の被害多し

寶永三年八月十五日 (一七〇六年九月二日)

對馬國 大風

日本災異志 夜至翌朝對馬大風 本州編四

寶永三年八月二十日 (一七〇六年九月二六日)

陸奥國 大風

津輕凶歉記録一紙 大風稀成大風故 田畑に障り申候て不作に相成

申候 米直段二十七匁

寶永三年九月十一日 (一七〇六年一〇月一七日)

越中國 風雨

富山市史 南風烈しく大雨被害多し

寶永三年十一月十五日 (一七〇六年二月一九日)

攝津國 大風

續史愚抄 昨今 攝津大風 大坂川口船破 人多死云 年代略記

寶永四年七月九日 (一七〇七年八月六日)

北海道 大風雨、洪水

蝦夷年代記 七月九日 九月十九日 大風雨洪水 村々破損

寶永四年七月十九日 (一七〇七年八月一六日)

東海道、陸奥諸國 大風

續史愚抄 此日 伊勢 尾張 三河等大風 年代略記

津輕歷代記類 十九日 江戸大風 弘前は同十七日 十九日 二十三

日大風 御城中廻り其外御家中町在共破損不少 誠に昔よ

り無之大風に而御郡中不殘破損 中々不遠記 依之田畑

損害大不作となる

(備考)

和歌山市史 五月 七月 紀ノ川溢る

寶永四年八月十九日 (一七〇七年九月一四日)

九州、四國、中國、北陸、奥羽諸國並江戸 大風雨

福岡縣災異誌 十八日 大風 續史愚抄

第一編 暴風雨 寶永元年—寶永四年(西曆一七〇四—一七〇七年)

松山叢談 松山大風雨 破損數々 二萬百七十九石 御損毛有之

讚岐災異年表 大風

谷陵記 大風雨

和歌山市史 大風

因府年表 大風雨

岡山市史 寶永四年兩度の大風雨 洪水あり

一は八月十九日 他は九月十二日に起る 江戸申候の破

損覺左の如し 續史

八月十九日領内大風洪水高潮破損覺

一、天守北の方櫓少折申候二重目南の方櫓折申候

一、二萬六千三百六十間餘 川筋築破損並に池堤共

一、三千二百五十間餘 川除波止損並に堤共

一、二千九百六十間餘 往還道損並に岸崩谷川砂入

一、二千九百四十軒 潰家内宮六軒寺七軒

一、六十六艘 破損船内五十五艘領内船十一艘他國船

一、六千八百間餘同石垣 破損

一、二萬六千二百九十間 潮堤並に鹽濱堤破損

一、五千八百四十八本 風折木

一、三軒 潰家

一、七人死 内五人男 二人女

富山市史 午の刻より南風猛烈 富山城内外及び市内の樹木倒れたる

もの多く人家の破損せざるもの殆ど稀なり

飛騨編年史要 飛州大風あり 稲作に被害多し

文書叢 坤大風雨 深川 鐵砲洲高沙

東藩史稿 十九日及二十一日 封内大風 家屋四百五十八を破倒し歴

死男女三人 馬一頭

(備考) 攝陽奇觀 八月 五畿内 勢州大風

一一七

寶永四年九月十二日 (一七〇七年一〇月七日)

土佐、讃岐、紀伊、備前、武藏、越中諸國 大風雨、洪水

鵜風調査報告 藩内大風雨があつた (南島誌七三ノ七)

讃岐災異年表 大風雨 往々海濱堤防毀潰 漂民屋損禾稼甚

因府年表 十一日洪水

和歌山市要 大風

岡山市史 九月十二日 領内大風雨洪水破損覺

- 一、一萬二百五十五間餘、川筋堤破損
- 一、二千四百五間餘、瀬田堤破損
- 一、千二百九十六町九反餘田島水砂潮入當荒
- 一、六十八軒 潰家
- 一、二十二艘 破損船
- 一、二千四百六十間餘 石垣波止并に瓦手破損
- 一、千四百十五間餘 往還道破損並に岸崩れ
- 一、九ヶ所橋樑損
- 一、五軒潰家

中村雜記

十二日 大風

十三日 朝五ツ時風止 大風故所々破損 當寺表通堀不  
殘吹倒 永代浦 増福院裏門吹倒 表町家々床水に而流去  
板塀も吹倒 過半流去 海端之石垣大方崩候也

富山市史

十三日 子の刻より北風強く市内處々家屋破損す

寶永四年九月十九日 (一七〇七年一〇月一四日)

北海道 大風雨、洪水

蝦夷年代記 七月九日 九月十九日大風雨洪水 村々破損

新北海道史 十八日 風雨遊浪 破損船多矣

寶永四年十二月七日 (一七〇七年一二月三〇日)

江戸 大風

護持院隆光僧正日記 風強 富士之降砂吹立 東西不見

寶永五年六月二十二日 (一七〇八年八月八日)

備前、山城諸國 大風雨、洪水

岡山市史 大風洪水あり 東西兩川常水より一丈五尺八寸増水し決

- 潰 汎溢の箇所甚だ多し 即ち左の如し
- 一、岡務院南角土手崩れ上の町の橋際土手榮町西側土手岡町東裏
- 一、同崩れ下の町東裏崩落
- 一、町潰家十二軒石垣四ヶ所死人一人土手處々破損
- 一、同堤退く百一ヶ所長千二百八十五間
- 一、同石垣損十七ヶ所長三百二十八間
- 一、同堤退く七百八十七ヶ所長一萬九千二百五十七間
- 一、同堤止損十八ヶ所長四十七間
- 一、同堤退く八ヶ所長五十四間
- 一、用水器水溝堤切口埋損共九百二十ヶ所長八千二百九十八間
- 一、池堤切口退く瓦手損共二百四十四ヶ所長二千三百八十四間
- 一、往還道筋損四百四十六ヶ所長八千五百七十間
- 一、山崩百二十一ヶ所
- 一、六千九百四十町四反二十歩水入
- 一、潰家二軒
- 一、倒木十三本
- 一、橋損じ大小九十八ヶ所
- 一、大川堤切口四十三ヶ所長延て千四百六十六間
- 一、同堤止損四十三ヶ所長百七十一間

寶永五年八月四日 (一七〇八年九月一七日)

讃岐國 大風、洪水

香川縣史 大風洪水 穀登らず

寶永六年三月八日 (一七〇九年四月一七日)

越中國 大風

富山市史 八日より九日に至り南風烈しく城中を始め市内被害多し  
龍田道的上屋敷長家の箱棟吹落つ

寶永六年七月四日 (一七〇九年八月九日)

近畿諸國 大風

續日本王代一覽 京都及五畿内近國大風吹て 民家を破倒する事夥

續史愚抄 此日 烈風 諸國通船多壞云

月堂見聞集 四日大風 江戸廻船三百余艘荷打乗捨 西國船大分員  
數不分明候  
就中小笠原備中守殿入國に付 小豆島にて御損じ上下八  
百人余入水 殿も溺死被遊由 御死骸はあがり申候由

○攝陽奇觀

(備考)

柳河年表 此歲秋大風雨 領内海嘯起り沿岸被害多し

琉球藩史 七年 去歲屢々大風 五穀實らず

寶永七年八月三日 (一七〇九年八月二七日)

土佐、讃岐諸國 大風、洪水

寶永五年七月二日 (一七〇八年八月一七日)

京都並近江、伊勢諸國 大風

續史愚抄 大風 折木或倒壊廣舎 或倒小屋 飛瓦礫者 内侍所假殿

板屋壞雨漏因懸雨皮於屋上云 平野社廻廊倒 上御靈社内  
木倒 壇小社三所 又北野社邊木多倒 京畿 近江 伊勢  
等同 但當國甚云 三十年以來 甚長雨記 故神等記 御代略記  
永有雨記 永有雨記 御代略記 永有雨記

續日本王代一覽 巳刻より酉刻に至て 京師及五畿内大風 神社佛閣

多破倒す

○攝川實紀 野史 攝陽奇觀

寶永五年七月二十五日 (一七〇八年九月九日)

北海道 大風雨

蝦夷年代記 大風雨 船多く破る

第一編 暴風雨 寶永四年一寶永七年(西曆一七〇七—一七一〇年)



日本災異志 三日 土佐風雨洪水 土佐御書堂代略記  
讃岐災異年表 四日 大風雨  
高松藩記 四日 大風雨洪水 登不登

寶永七年 八月十九日 (一七一〇年九月二十二日)  
九月十二日 (一七一〇年九月二十二日)

尾張國 風雨

撫 尻 夏の土用の中西風多きとはは必秋大風吹といふ事諸國いにしへよりいふなる本州海邊の俗諺に葦の葉節の間折たることき筋ある年は秋風甚し一筋あれは一度の大風二つあれは再び暴風ある兆なりといふ ことし丁亥の夏葦のくき折目二すちあり五月の頃より六月末まで西風たえず吹しかは如何さま風あるへしと語りはへりし されとも時令の變は夫によるへくもなしなんと我人等閑に過侍りしか八月十九日のまた明かたより巽風吹初て午時にや夥しく吹つり侍りて屋を破り木を折なるといとすさましや、暮過る頃より空もはれて静になり侍りし其後も涼しからずして長月七日八日の頃にはかたひらなんと着はへりしも時ならぬ事に思ひ侍りし十二日の朝より打くもりて雨よりくそきて雲のあし早く見え侍りしか日入はてし頃東風多く吹て雲むくつけく色かはりて北をさしてはしり侍りしか速く吹まよふ風の音は海潮のひくく如く次第にあらけく吹渡りしかは ずはや暴風になりぬとひしめきあへり木をぬき ふき板をまくる程なりとよみて雨さへ いみしうふりける 屏たふれ家くづれ侍るも有けるに彼声のよの兆もありと覺え侍りし 夜中過行頃漸く風しめりて暖かた西風またあらく吹侍りし されと星はれて明る空もしつけくなりし次のゆふへは名にしおふ

十三夜にて侍りしか空すみ月明らかにはれわたりにと面白かりしかは  
さためなきよはうき雲の跡きえて  
きのふには似ぬ夜半の月かけ  
(よ、ママ)

正徳元年七月二十二日 (一七一一年九月四日)

西國 大風雨

徳川實紀 廿二日 西國このほど大風雨あり 朝鮮副使の供船 洋中にて破れたるよし 宗對馬守義方より注進す

正徳元年七月二十九日 (一七一一年九月二日)

東海道諸國 大風雨

徳川實紀 この頃 東海道大風雨にて舟船并に橋杭 假橋などのこりなく流失すといふ

正徳元年八月二日 (一七一二年九月一四日)

紀伊國 大風

熊野史 夜大風 宮殿を破り籠所等崩 社木大杉根かへり七十六本代銀八貫七百目 鳥死すること數を不知 石破風と云ふ前代になきこと也 右に付周練若山へ訴訟に上る

正徳元年八月九日 (一七一二年九月二日)

紀伊、伊勢諸國 大風雨

紀州災異年表 夜大風雨 田邊にて屋を破り樹を倒すこと多し田邊大坂 續日本王代一覽 大風  
宇治山田市史 大風雨によりて外宮の大樹が倒れた 續紀伊年

武江年表 大風

正徳元年八月二十四日 (一七一一年一〇月六日)

江戸 大風

金地院雜記 一、大風に付 所々破損有之(中略)  
破損之覺  
一、書院前圍笠木塀五六間吹倒 並新方丈前塀重門兩扉破損仕候  
一、右方丈屋根吹破 其外所々屋根破損仕候  
一、町屋塀破損 其外所々塀破損仕候  
去廿四日 大風雨に付 右之通破損仕候間 御見分被仰付被下候様奉願候

正徳二年七月二日 (一七二二年八月三日)

京都並備前、攝津諸國 大風雨、洪水

月堂見聞集 京都大風 同夜曉に至る迄大雨  
七月二日 大風にて兵庫川尼崎迄洪水田島四万程損毛仕候 人も五百人怪我有之候 丹波路も大雨にて人馬通無之 桂川も二日程通ひ無之候 江戸廻船も餘程破損仕候 江戸道中川々洪水  
(万、ママ)

岡山市史 二日 大風雨洪水あり 其の八月朝日關東へ申渡左の如し 題記

- 一、岡山城内外御土居少々落申候得共書載申程之義無御座候
- 一、潰家四軒何れも町家にて尤情家
- 一、大川小川堤切七三十五ヶ所長延て一萬四千四百六十七間
- 一、大川小川堤退き四百一ヶ所長延て一萬九百八十七間
- 一、波止六十七ヶ所指長延て三百五十四間

第一編 暴風雨 寶永七年—正徳二年(西曆一七〇一—一七二二年)

神戸市史 二日 大風 兵庫川尼崎邊大洪水 田畑の損毛多し 大和氏所藏文書 夜前の洪水に破損仕候御注進

- 一、田地凡四反三畝餘 内
- 三反六畝餘 本田

三畝斗 本畑  
四畝斗 新田  
右之田地へ砂石流込申候 其外川筋の田地がまち少々宛  
崩申候

一、池四箇所 山崩 埋り申候  
一、御林之内十八ヶ所崩申候  
一、右十八ヶ所に有之松木凡大小百本斗御座候  
一、水防に伐り懸け申候松木小松四十五本  
一、井手く不残落申候  
正徳二年七月三日

尼崎志 七月三日大雨 武庫水東決 洪水方湯々 難波村當水衝  
人家盡被水 至波其擔 衆皆運乘屋 僅以身脱 考之宅  
地比他最高 水深僅尺許 加島氏家譜記

正徳二年八月十日 (一七二二年九月一〇日)  
加賀、越中諸國 大風

政隣記 十日 大風拔木發屋 不拔木も葉は悉く落 大に傷禾稼  
四月より此節迄不雨 有此風災 此後桃櫻櫻花咲如春  
受已難志 北國筋は八月十日に大風 倒木も士と町とを除 寺社方  
那方に五千本計 是も格例有て 算の内へ不入て不算揚  
は此外なり 家々も恒格之通に算入たる三千軒に及んで  
壊潰たる也 土方の屋破不知數 田方は始の程さまでの  
事ならぬ様に云けるが 畢竟、四十万石に可及程の高の  
損因 邦主の御爲笑止なる事なり(中略)  
三ヶ國の内も當地 河北郡石川兩郡別而風損 他不及此  
邊

平尾 きれなし 少し損  
屋敷 一ヶ所 流家六軒 田作絶作なし  
かはた きれなし  
玉水 二ヶ所 流家廿軒計 但し出町計  
高 二ヶ所 流家はなし 田作絶作なし  
なし島 三ヶ所 流家はなし 田作絶作なし  
富野 二ヶ所 流家百軒計 死人数不知 大分  
東西水主 なし  
ひわの庄 なし  
八町 なし  
上津屋 一ヶ所 死人数不知  
島田 同

賀茂 一村家一軒も不殘 死人数不知  
木津 二ヶ所 流家七十軒計 死人三百六十八人許  
はせ なし 田作絶作なし  
すかい 一ヶ所 家は不損  
観園 二ヶ所 流家廿軒計 雨側の人残り少  
下柏 一ヶ所 流家六軒 田作絶作なし  
越津 三ヶ所 家はそんなに  
山本 三ヶ所 流家六軒  
飯岡 一ヶ所  
草地 一ヶ所 長さ百間許  
東村 一ヶ所 在所迄水入  
川原村 一ヶ所 右同  
天神森 二ヶ所 家は不損  
但し木津川表樋二つ抜 是は大分の事に候  
野村 一ヶ所 此は少計の事に候 八幡領方迄少し損じ不  
申候 淺堤十八ヶ所切申候處より四五町二三町廣狭御座候身許  
し御座候 小倉堤六ヶ所切  
○穂川實紀 野史 三貨圖彙 續日本玉代一覽

石埭舊記 晝より七ツ時迄大風  
年代記 大風 御領國潰家二千二百七軒 損木一万八千九十一  
本

正徳二年八月十八日 (一七二二年九月十八日)  
紀伊、伊勢、攝津、山城諸國 大風雨、洪水

紀州災異年表 大風 田邊 新熊野社華表吹倒 巨松折る 田邊百家史  
宇治山田市史 大風雨あり 宮城の被害多し 神領遺文  
續史愚抄 今夜 暴風雨 木津淀洪水 本郷淀橋上可四尺  
攝陽奇觀 夜 大風雨 城州淀 伏見 木津邊大洪水 農家人住なが  
ら流れ 其外つぶれ家多く 死人数不知 牛馬多く死す  
月堂見聞集 夜曉に至る迄 大風雨に付 膳所淀の御城水入 此外  
所々の堤一時に切れ候に付 木津川筋人家は大半潰れ  
作毛一切無之 宇治の邊 鳥羽海道玉水橋木の邊悉く損ず  
伏見高水にて町は舟にて往來仕り 京橋豊後橋の上へ三  
尺余も水あがり申候 中務島は二階迄水突申候 在々家  
潰家流家其の數不知 依之死人等何千人とも不分 明日  
伏見より淀堤の水廿一日迄不落往來留り候  
是れは今夜北風甚敷近江の湖水一時に吹込候に付 川  
津浪と申候にて候由 少々水つき候事は在之候へ共今度  
の如くなる義は百年以來無之由古老申傳候(中略)  
去る八月十八日夜 風雨に付洪水  
木津川筋合  
東 見かの原 きれ一ヶ所 流家五十軒計 人少々損  
しんとうじ村 きれ二ヶ所  
上柏 きれ二ヶ所 流家七十軒 長さ大分

正徳二年九月二十一日 (一七二二年一〇月二日)  
北海道 大風

新北海道史 大風 倒北門

正徳二年十一月三日 (一七二二年二月一日)  
仙臺 烈風

東藩史稿 仙台烈風 處々破損あり

正徳三年一月十四日 (一七二三年二月八日)  
北海道 大風雨

新北海道史 蝦崎廣武日記 正月十四日 大風暴雨 海陸毀壞多矣

正徳三年七月四日 (一七二三年八月二日)  
京都並紀伊、因幡諸國 大風雨、洪水

京都並紀伊、因幡諸國 大風雨、洪水  
月堂見聞集 夜四ツ過より五日晝五ツ時迄大風雨 尤三日の朝より  
余程風吹候へ共 四日の夜に入殊に甚敷候 江戸道中天  
龍川を初め所々洪水 往來留り北國舟五六艘荷打在之候  
東山滿願寺の俊寛松も風に吹折れ申候 田高にはさのみ  
あたり不申候  
熊野史 四日 大雨大風大水  
因府年表 子刻過 巽の方より大風吹起り 曉更に及んで益々烈し  
くそれより長に轉じ翌朝に至り乾に吹變り雨氣を催し已  
刻に及んで大風雨となる  
讀破災異年表 七日 暴風發屋折木  
編者註(七日 全ヶ別個ノモノナランモ他書之ヲ書カズ 今簡略ノ

爲メ併記セリ

正徳三年七月十二日 (一七一三年九月一日)

九州諸國 大風雨、高潮

長崎年表

夜 大風雨 翌日に至る  
十三日申刻高潮来る 市街破損多し 海邊の家屋床上を  
浸すこと三四尺

福岡縣災異誌

十四日 市民米商の占買を憤り其家を毀つ  
十三日七ツ時分より大風 夜に入り殊に烈しく 家  
大木倒 此節柳河領黒崎土井切 肥前大記間 大野島邊  
人馬多く死す 此度の高潮にて御領内櫻津 浮島 青木島  
其外人馬六百七十余死 此已前の高潮より六十四年に成  
る 石原某記

因府年表

大風雨 海嘯起る 堤防破損六十三箇所 浸水家屋五  
千七百七十三戸 溺死人三百四十九人 馬二百二十八頭  
柳河城大手前五尺潮浸入す 柳河某記 山田某記  
十三日 此日二百十日なり 今晚より南風大いに吹き盡  
夜休止せず  
翌十四日晴天に及んで大風雨となり黎明に至つて風止む  
農民愁眉最も甚だし  
此大風 四國九州殊に甚しく農作損亡 多かりし由

正徳三年八月十七日 (一七一三年一〇月六日)

筑後國 大風、高潮

福岡縣災異誌

大風 海嘯起る 柳河某記

鳥宮若野犬等不可勝計

又積實聞集 夜 大風に而 天野御社山際之大杉吹折 一宮神殿に  
倒掛り 及大破候付爲御修理 下遷宮早々可然候と行人  
方へ九日に申遣候

紀州災異年表

田邊大風雨 激浪 潰家 難破船あり 田邊某記  
八日 夜九ツ時より七ツ時迄大風雨 潰家破損家木折  
等夥敷候 風吹候間は少し内にて候へ共風強く在之候故  
物あたり申候如此に候 大坂堺の破損奥に記之  
大風 大坂川口隨見山邊より江の子島迄水一丈餘指入  
大船町中へ走り上り家々多く破損 死人も在之候 大坂  
より北池田迄の在之家大分破損 風の最中に今宮の前町  
八九軒焼申候 さまつ大浪打込 東安部野の山際迄の沙  
指込申候是にても人死在之候 住吉の神木百本餘倒申候  
堺惠比須島大沙にて 家引とられ死人在之候 濱手百軒  
餘つぶれ申候 綿作一圓無之候 京都も禁裡を初め所司  
代屋敷町奉行屋敷兩門跡其外寺社大分損じ申候 依之米  
一石十匁の相場にて在之候

攝陽奇觀

夜大風大雨 大坂川口の大船破損 遺頼堀橋々落る 在々  
所々の民家吹倒さるゝ事數不知

名古屋市史

暴風雨のために庄内川増水し 熱田に高潮を生ず 天和  
以來の暴風雨と云ふ 美濃の諸川また汎濫して流木七十  
萬本に及び 神戸 鳥ヶ池 甚兵衛 傳馬等の新田 堤防  
破損して水災を蒙る

鹽尻

八月八日の暴風  
前夜大雨 海中沙ひかりて鳴動し 八日の朝より雲北に飛  
び申刻より風あらく子刻甚し 凡そ石を飛ばし木を抜く其  
鳴とよむ雷のことく 駛用電々として窓壁すべて破れ倒

第一編 暴風雨 正徳三年一正徳五年(西曆一七一三—一七二五年)

紀伊國 大風雨、洪水

紀州災異年表

大風雨 紀ノ川洪水 浸水一晝夜 堤防破る 備見某記  
(備考)  
野 史 八月 是月攝津水 風暴

正徳四年四月二十二日 (一七一四年六月四日)

江戸並東海諸國 大風、洪水

月堂見聞集 廿二日暮より翌廿三日九ツ過迄 江戸大風 殊に岡崎よ  
り東海中筋 大風大水甚敷一日往還留る

正徳四年七月八日 (一七一四年八月一七日)

紀伊國並京都 大風雨、洪水

熊野史 八日夜大風 十二社宮廻大破損 自力難叶若山へ飛脚を  
以願書上る 早速御辯被爲仰付

月堂見聞集

八日夜入 翌九日八ツ時迄大風雨 北しぶき甚敷家々壁  
悉くぬれ落つ 依之所々川々洪水出来 堤の切れ候所も  
ありて往還も難遊仕候 賀茂川の水六尺餘出申候 鳥物  
にはあたり候へども稻はさのみあしく無之由

攝陽奇觀

正徳四年八月八日 (一七一四年九月一六日)

近畿、東海道、奥羽諸國 大風雨、高潮

高野春秋編年輯錄 八日夜 大風水雨 水浦山崩 倒樹傾屋 此時  
奥院持經塚下大杉傾懸 破毀拜殿坤角木 又於天野一宮  
損壞 是依官山大木倒壓也 降水重至四五寸 或五六  
百匁 自入相比比尼上嶽邊 雷電水雨和紀兩州 或打殺宿

る 屋舎さながら轉覆しておのづから壓死するもの間々  
多かる 市井村落是が爲にまよひ さげふ聲くいふば  
かりなし 田園の損毛亦幾ばくぞや 熱田のかたは高沙灘  
り來りて陸をひたし堤をひたし堤を破る 船みだれて波  
溺し 家流れて財を沈む 川々亦洪水激して神嘯聲潰ゆ  
巽二萍號情なしや 人民の愁聲今朝も街頭の恨話となり  
て聞もいたまし 扱も聞まどふ辨殿に動せられて己か心  
をくだくもありなき蝸蟻の爲にそなやまされ侍る(中略)  
甲子文月九日のおしたより 野分いみしう吹て物騒しくれ  
たる程風しつまりしか雲猶北に行て心よからす侍りし三  
河遠江は以の外の雨風にて洪水おひたしく數日旅人の  
通ひも絶侍る民家の愁さこそと覺侍るに漁人は此風を待  
得て悦ひあへり 南風に依て沖遠くありし魚は磯近くよ  
るものを何をか執して深く歎きあなちによるこび侍る  
べきやは袖ふく秋の初風しばしすしく覺え侍りしまゝ  
物に書付侍りし  
鎮遠畑村老樹幽 雨暗雲嶺夕陽收  
素風林下微涼夢 喚起一聲蘆荻秋

登米郡史

八月九日 大風  
(備考)  
飛騨編年史要 八月某日 飛州大風あり

正徳五年五月十七日 (一七一五年六月一八日)

尾張國 大風雨

名古屋市史 夜中の大風雨のために諸川水量を増し材木を流失し堤  
防を破損す 高須 立田輪中 津島等損害最も多し 此節日記

正徳五年六月四日 (一七一五年七月四日)

駿河國 大風

慶 尻 六月駿府大風四日 木曾路洪水十九日頃御領倉三十九戸

正徳五年八月十七日 (一七一五年九月二四日)

筑後、筑前諸國 大風

福岡縣災異誌 大風雨 浸水家屋五百九十三戸 溺死四人 御領諸國  
大風傷禾 上災狀 租額闕 其月御領米料

享保元年六月八日 (一七一六年七月二六日)

因幡、備前諸國 大風雨、洪水

大風雨 所々破損多し  
袋川出水 海上難船少からず

岡山市史

封内 大風雨洪水あり

其の七月二日 關東申候左の如し 聖書

- 一、壹萬四千六百十四間 大川小川堤切
- 一、千三百六十三間 川筋堤破損
- 一、四百九十五間 潮堤破損
- 一、五十八ヶ所 池崩切
- 一、九萬七千九拾石餘 田畑荒手潮入砂入
- 一、二百二十一ヶ所 橋落損じ
- 一、五百四軒 潰家
- 一、壹匹死馬 十一匹死牛
- 一、五千十五間 川筋石垣破損
- 一、三萬三千七百八十二間 用水廻水谷川筋砂埋り
- 一、千八百三十間 池堤荒手切
- 一、八千七百九十八間 往還道損

享保二年二月十四日 (一七一七年三月二六日)

江戸 大風

月堂見聞集 十四、十五日江戸大南風 十八、十九日北大風 近年無  
之大風 町家店を指し商賣一切相止み候 併出火無之候

享保二年八月十五日 (一七一七年九月一九日)

東海道、關東、奥羽諸國 大風雨

月堂見聞集

十五日朝より雨降り候て夜に入七ツ時より風雨甚敷罷  
成ふしぶき強く屋根破損し申候 翌十六日晝九ツに止む  
加茂川桂川淀橋本津川邊 水大分出申候  
八月十五日 江戸道中美濃尾張路より雨ふり 夜中不止  
辰刻より午刻迄 辰巳大風にて 町々屋根破り所々小  
屋掛け吹つぶし 午未の刻未中に風替り 是又大風にて  
所々破損仕候 岡崎邊の松の並木 百年以來在之ども大  
方吹倒申候 此外いせの邊も大風にて候 大坂はさのみ  
風吹不申候 依之江戸道中洪水甚敷 飛脚等通ひ一切無  
之候

柳營日記

十六日 關東大風雨 所々田畑損毛 江戸屋敷民屋大  
破潰家死人多  
十八日 新大橋 一昨日之大雨に付 川筋天水故 橋危  
に付往來留候由(中略)  
廿五日 上野御宮 惣御佛殿 御門跡 其外山中不殘

福岡縣災異誌 大風雨 領内潰家四十九戸 作毛の被害多し 立花家文書

享保三年六月二日 (一七一八年六月二九日)

信濃國 大風

月堂見聞集

五月二日 信州大雪降る  
六月二日 大風吹  
右之雪風三十年以來無之程甚敷御座候由

享保三年八月十七日 (一七一八年九月二一日)

筑後國 大風雨

福岡縣災異誌 大風雨 損害多し 流家二十八戸 立花家文書

享保三年九月十二日 (一七一八年一〇月五日)

東海道諸國 大風雨、高潮

月堂見聞集 朝より巽風少々吹候處 八ツ時には風雨強く 後には  
北しぶき甚敷 夜の五ツ時に止む 廻船破損多し  
去る九月十二日の風雨 伊勢路は殊外甚敷 藤堂和泉守  
殿御領地二ヶ所 高沙にて損亡 東海道筋も所によつて  
甚敷候 箱根山風雨故損じ關東御下向の堂上方近衛右府  
殿 梶井殿三日御逗留  
松平三之助殿御領志州島羽 九月十二日の大風にて高沙  
指込 御領内殊外大破之由  
熊野史 十二日 大風宮殿を破る 社中連名にて若山寺社奉行飛脚  
を以て願出

享保四年五月二十五日 (一七一九年七月二二日)

陸奥國 暴風雨

第一編 暴風雨 正徳五年—享保四年(西曆一七一五—一七一九年)

但自坊(合)連に可致修復事

馬場先御門 常磐橋 吳服橋 日比谷 山下 幸橋 虎  
之御門 芝口 赤坂 筋違 井昌平橋木戸内共 淺草  
櫻田御用屋敷 千駄屋御藏屋敷 三浦登岐守御預御櫓  
三御殿  
右は風破十九ヶ所 御作事方に而御修復可仕候  
増上寺惣御佛殿 方丈 其外山中不殘(但自坊)連に可致修  
復事

増田御門 和田倉 一橋 竹橋 雉子橋 清水 田安  
半藏 馬場曲輪御番所共 四ツ谷 市ヶ谷 牛込 小石  
川 西九下御用屋敷 高倉屋敷 竹橋御藏 御春屋 伴藤  
右衛門御殿  
右 風破十八ヶ所 小普請方に而 御修復可仕候

八戸藩史稿 田畑損毛扇書

一、高二萬石之内 五千八百三十五石餘損毛  
内田形三千五百三十五石餘 畑形二千三百石餘 流家十三軒  
山崩百五十個所 堤切十個所 落橋十二個所  
右奥州八戸私領分當八月十六日大風雨 同十七、十八日  
迄打被風雨洪水にて在所居宅並家中町在々大分破損水押  
等有之候 但人馬之損害は無御座候

(備考)

熊野史 八月大風 社堂大破 若山へ願上る

享保二年八月二十二日 (一七一七年九月二六日)

筑後國 大風雨

八戸藩史稿 當五月以後天候不良なるに近日晝夜の暴風雨にて大損害を來し諸作損毛書左上之通

覺

一、高二萬石之内 五千四百四十二石八斗二升餘損毛  
内田形三千四百九十八石五斗五升餘 御形千九百四十四石二斗七升餘 水浦六十五石九斗餘 落橋大小九十六個所 堤切三個所 山崩二個所  
右奥州八戸私領分當五月廿五日より同廿六日迄大風雨洪水に而右之通損毛仕候 人馬之損害者無御座候

享保四年七月二十四日 (一七一九年九月八日)

因幡國並北國筋 大風

因府年表

西の刻 南風 大いに吹起り 子の刻に及び止む 此風甚しく禾稼を損ふ

又京 大阪並九州四國の地は去る十三日稀代の大風雨なりしと聞ゆ  
關者註(十三日、コレニ該當スル記事見當ラズ 或ハ二十三日トスベキカ)

月堂見聞集

廿三、四日 北國筋大風にて廻船廿四、五艘行衛不知米一萬二千石余も積し船共も見え不申候由 問屋方へ申參候 京都も廿三日晝より余程風吹候 夜に入甚敷罷成候 然れども大風と申程之事にも無之 廿四日之曉に止む

享保四年八月二十七日 (一七一九年一〇月一〇日)

奥羽諸國 風雨、洪水

東藩史稿

二十七日、二十八日 大雨 中瀬橋殿橋漂流す 十一月十八日 封内本年八月二十八日の洪水に依り 田畑

十八萬千六百四十石余 其他山崩川缺橋落家流等損害あるを幕府に聞す

覺

一、高二萬石之内 五千四百四十二石八斗二升餘損毛  
内田形三千四百九十八石五斗五升餘 御形千九百四十四石二斗七升餘  
前田氏家乘 四年秋 風水害にて五萬六千七百目余免除  
長崎年表 此年五月以降 霖雨大風三度 農作を害し家屋を壞る三ヶ村人民に米百七十四石九斗を賑す

享保五年二月十一日 (一七二〇年三月一九日)

陸奥國 大風

前田氏家乘

南部大風にて神木を吹倒し 能の棧敷破壊 其外所々大に破損す

享保五年二月十九日 (一七二〇年三月二七日)

京都並江戸 大風

月堂見聞集

十九日 朝七ツ時より乾から風吹 四ツ時に甚敷成 所々やね等破損す 夜に入て風止む 江戸は十七日より廿一日迄風不止

享保五年五月十日 (一七二〇年六月一五日)

陸奥國 大風雨

八戸藩史稿

天災にて諸作の損毛甚しく其高を申報あり

月堂見聞集

江戸風雨甚敷 上州海道洪水利根川切れ候故 如此往來もとまり申候由

伊豫國大州加藤出羽守殿領分 閏七月二日朝より強雨降 續 翌日巳の刻には常の水より三丈程増候 城の内二の丸迄水入  
信濃國松代眞田伊豆守殿領分 閏七月朝日風雨 翌二日洪水  
常陸國土浦土屋左京亮殿領分 閏七月朝日風雨 近邊の川々洪水  
陸奥國中村相馬讚岐守殿領分 閏七月二日洪水

續談海

朝日 大雨降 北風強吹  
二日 江戸 淺草川水増 本所 下谷 深川 千住邊水溢れ溺死する人多し 兩國邊見分として御使番時田讚岐守被遣之 關東筋此ころ洪水

東藩史稿

二日 仙台甚雨大水 澱及び中瀬 評定 下長町 四橋落 十月十八日 封内本年閏七月二日洪水により 田高十四萬五千九百六十五石余 其他家屋 橋梁堤防道路山崩川缺等一萬一千八百十三所あるを幕府に聞す

享保六年閏七月十日 (一七二一年九月一日)

近畿諸國 大風雨

月堂見聞集

松平伯耆守殿領分 閏七月九日より十一日迄 大風雨 備中國庭瀬板倉讚岐守殿領分 七月九日十日大風雨 (七月、閏七月ナルベシ)

但馬國出石仙石備前守殿領地 閏七月八日より十日迄 近江國高島野州兩郡之内 分部左京亮殿御地行所也 閏七月十日大風雨降續

享保四年—享保六年(西曆一七一九—一七二一年)

享保六年閏七月一日 (一七二一年八月二三日)  
伊豫、信濃、常陸、陸奥諸國 大風雨、洪水

享保五年十二月四日 (一七二一年一月一日)  
讃岐國並京都 大風

讃岐災異年表 大風發屋

日本災異志

京都 大風發屋 雜皇代傳記

享保五年九月四日 (一七二〇年一〇月五日)  
江戸 大風

武江年表 大風

武江年表 八月 關東洪水

(備考)

御徒方萬年記 大風雨(中略) 尤上野寶樹院様 御靈屋惣御園驛 南方三十一間余倒申候

享保五年八月十九日 (一七二〇年九月二日)

江戸 風雨

覺

一、高二萬石之内 七千四百七十一石七斗九升損毛  
内田形二百三十三石 川缺水荒畑形千三百九十八石六斗一升 水押當荒畑五千六百一斗七升 水押山崩六ヶ所 山崩潰家二十軒 堤切十五ヶ所 堤切三ヶ所 落橋十六ヶ所 荷打船一艘 破船二艘 溺死二人 鹿馬三頭  
右奥州八戸私領分當五月十日の朝より同十二日朝迄 大風雨洪水に而右之通損毛仕候

八日夜八ツ時より十日八ツ時迄 京師大風 人家屋根破損す 但し稲にはさのみ強くあたり不申候  
岡山市史 閏七月十一日洪水 潰家二千余軒 其の十四日再び洪水あり 諸所の堤防潰して流家二百八十 潰家九百 溺死四十三 城内浸水して舟を行るの有様なりしも以て關東に申渡すに及ばず

享保六年閏七月十五日 (二七二年九月六日)

諸國 大風雨、洪水

因府年表 洪水 十二日より雨天に相成り十三日十四日共 東ヶにて大風雨 又米子にて流家五軒 崩家九十軒 破損百一軒と聞ゆ 又倉吉も水深き事四五尺 河水溢れ 所々土手切れ 御領内の損亡最も甚だし

讃岐災異年表 疾風甚雨 往々堤防潰

松山叢談 石手川洪水に付御出馬あり家中面々過半罷出る

垂憲録云 右洪水の節損毛如左  
長十一萬七千四百四十一間 濱手並池川堤切口欠痛共、田畑三千七百六十六町六反四畝十九歩 本田畑新田畑川成砂入沙入水押共高に直し三萬五千六十五石九升七合 流家八百八十九軒潰家半潰共

月堂見聞集

十四日夜より十五日暮迄大風雨に付 丹波地の家流れ來り 下嵯峨の橋々へ掛り虚空蔵の橋も其外の橋落 角倉屋敷へも水入 材木屋家々々へ水入に付 助け舟二三艘にて家毎に乗り入り人を助け候 桂川の渡りもとまり候 伏見洪水にて町々を舟にて往來仕候 淀堤本津川邊の堤大に切れ損し候 怪我人も死人も牛馬の死候も多く

り翌十五日辰刻迄大雨 洪水常水より二丈三尺程増候 御居屋敷は別條無之 特屋敷は鴨居の上迄水あがり申候 但馬國出石仙石信濃守殿領地 閏七月八日より十日迄 風雨十四日より十五日迄 洪水損亡破損在之程に知れ不申候

近江國高島野州兩郡之内 分部左京亮殿御地行所也 閏七月十日大風雨降被 十五日晝夜大雨 湖水三尺餘込上り 川々堤切れ水押 田畑損亡 左京殿御居屋敷并侍屋敷内迄所々湖水込上り 堤切れ民家へも水押 床の上へ水貳尺計も入申候 田畑其外損亡知れ不申候

近江國志賀郡の内堀田備後守殿領地 同日洪水にて高二千五百六十石皆無之由也  
美濃國大垣戸田采女正殿領分 閏七月十日の雨降 十五日より十六日大雨 城中三の郭迄水押 所々堤切 田畑其外損亡 未知れ不申候  
伊勢國龜山板倉近江守殿領分 閏七月十五日申の刻より翌十六日辰の刻風雨洪水 同十八日夜丑の刻より廿日卯之刻迄大風 所々堤切 たいこじ繩手切百六十間餘押切候得共 廻り道付往來はとまり不申候 田畑損亡未だ相知れず

參河國吉田松平伊豆守殿領分 并に遠州御領分 閏七月四日より風強く吹續 同十五日風雨 十九日大雨  
遠江國濱松松平伯耆守殿領分 閏七月十五日より十七日迄大雨洪水  
相模國小田原大久保加賀守殿領分 閏七月十七日より同廿日迄洪水  
播州大久保加賀守殿領分の内 同廿日大風雨  
河州大久保加賀守殿領分の内 十九日洪水

在之候由 淀御城二の丸迄水馳込候 八幡邊にて水の高さ一丈 或は七八尺五六尺づつの不同在之候 老若共に八幡の坊へ逃籠り或は水高の五六尺程に地の者は二階に住居仕候 淀の御下の百姓水越の者共へは殿より朝夕の食物を送り被下候 先年辰の年八月十八日洪水に候へ共其五双倍も強く御座候由

閏七月十三日 最上海道阿久津川洪水 舟渡しの船破損一船の乗人四十人餘溺死仕候  
同十四日より十五日迄大雨に付 所々の堤切れ 八幡領へ水馳込 凡御役神堂の石塔之上迄水あがり申候 八幡領の百姓溺死四十六人 其外怪我の者數不知候 如此之洪水は六十三以前万治三年五月の洪水以後無之由想て當年東國西國五畿内邊洪水故 稻毛損失之分二萬石餘水損の由 國々は當年は殊外豐年の由なり  
同十二日より十五日迄甚雨 出雲國洪水

同十四日 長崎洪水 町家の床より二三尺水あがり申候 諸方の橋數十ヶ所落 死人も大分之事に候由  
同日 備中松山洪水 所により二丈程も水あがり申候 城下へ水入 足輕屋敷六七軒一所に流れ申候 此外四國の地 殊外洪水  
備中國庭瀬板倉讃岐守殿領分 七月九日十日大風雨 同十四日十五日 大雨洪水 堤切流家田畑損亡 怪我人多し (七月、閏七月ノ説記ナルベシ)

備中國淺口郡貳萬石の場所 松平伯耆殿領分 閏七月九日より十一日迄 同十四日の夜より十五日迄 大風雨 高一萬五千八百五十石餘 堤切口三千五百間餘 潰家七十五軒 人馬損なし  
備中國川上郡伊藤播磨守殿領分 閏七月十四日午刻より

備中國飯山本多若狹守殿領分 閏七月十六日十七日洪水有之 筑摩川常の水に一丈三尺餘増 侍屋敷町家へ悉く水入 御城内は無別條 損亡人馬怪我等不知  
常陸國土浦土屋左京亮殿領分 閏七月朔日風雨 近邊の川々洪水に付 十六日 十七日段々水増し 城下町屋并城内三の丸侍屋敷迄水入 船にて往來次第に水強く成候 侍屋敷は水五六尺押申候 損亡は未相知候

下總國關宿久世隱岐守殿領分 閏七月十八日の夜丑の刻迄に一丈八尺水増申候 御城内二三丸 其外御關所家中町家ともに水入 尤屋根の上迄水入る所あり 本丸は地形高き故 水入不申 一面の大水故堤押切 損亡人馬怪我人大分の事に候 未知候 二三十年以來無之洪水の由也  
下總國佐倉稻葉丹後守殿領分 先頃より雨降續候 閏七月十七日洪水  
下總國香取郡の内井上筑後守殿領分 閏七月十八日洪水損亡 水の高さ常の水に一丈餘増申候

上野國館林松平右近將監殿領分 閏七月十七日晝前より夜中迄大雨 同廿日夜中より風雨洪水損亡  
下野國壬生鳥居丹波守殿領分 閏七月十七日十九日大雨損亡  
名古屋市史 閏七月十五日十六日 洪水のために屋敷藩領の損害田畑 合高十六萬二千石 堤防 猿尾 井桁等の破損二萬五千五百三十間 石籠の破損流失一萬三千九百間 流家七十 潰家六百五十九 枳四十一 砂塵甚多  
○續日本王代一覽 野史 攝關奇觀

越中舊事記 六年秋大風 田畑風損多し (備考)

享保七年六月二十三日 (一七二二年八月四日)

四國、山陰、奥羽諸國 風雨、洪水

松山叢談 六月二十三日 廿四日 松山風雨 水損左の通

長十五萬三千六百三十六間  
堤切口 五千三百六十七ヶ所  
川方川成砂入沙入水押共三千二百七十二町二反七畝  
百姓家流 三百七軒  
潰家 千百七十一軒

高松藩記 六月廿三日 八月十四日 兩次大風洪水

讃岐災異年表 大風雨

因府年表 夜 大雨沃ぐが如し 翌朝土手外洪水

日本災異志 土佐洪水 御宮家代傳記

月堂見聞集

廿三日院方より雨降り 七ツ時北しぶき甚敷 夫より夜に入る 次第に雨は少づつにて風甚敷罷成 廿四日の朝風は止 雨は廿五日迄少づつなり申候 稻にはあたり不申候

依之 八幡堤去年切候處修理在之候へ共 亦々大に切れ損じ平地八尺餘水あがり申候 此外渡鳥羽桂の邊餘程の洪水にて御座候

丹波國ヌカダ村洪水之説

廿三日朝より雨降り候處に夜に至て水かさ上り候 此邊洪水の事例年無之 溝川の如き小川一筋あり 只此度は地より水湧出る様に覺 皆々遁去り候内に資財を片付延引仕候者共は大木の末に上り抱付助り候 此内に水は屋ねの上迄あがり候 翌夜半に至てむかふの在處に小山あり何かは不知 兩眼と覺しき物 松明の如き光り二つ 其跡は色は見兼候へ共 長さ七十間程と見え候物出来 水

をせきとめ候様にいたし其健海の方へ飛行申候 其後水早速退申候 伊田島一圓不殘皆々河原と成申候 彼の小山を見候得ば其長さ百七十間程兩方へ破れ開き申候 ウヘバミ杯と申物かと風説仕候 右は丹波國ヌカダ村に一門親族在之 彼の方より申越候寫也

八戸藩史稿

此日より同月廿九日まで 晝夜東風強く大雨過ます 馬淵川新井田川大洪水にて 昨夜大橋及び新井田橋全部流失し増水一丈五尺に至る

遠野古事記

二十四日の洪水は鶯崎の水門破れ 早瀬の川水御城下へ推來り 來内川へ落加り御城下の大洪水

享保七年八月十四日 (一七二二年九月二四日)

近畿、東海諸國 大風雨

宇治山田市史

大風雨あり 外宮殿舎御垣樹木並月夜見宮鳥居御垣が顛倒し 山田市中の民家倒るゝもの百四十二軒あつた

外宮子良御日録抄

讃岐災異年表

大風雨 終夜大風 折竹木

月堂見聞集

朝より雨降つゞき 夜九ツ時より風雨甚敷罷成 あけ六ツ時にとまる 風筋あしき所々は 人家大分損じ申候 伊勢尾張の國は風雨甚敷候 桑名は津浪打申候 此外東海道筋 餘程及大破候山 美濃國同斷 八月十四日夜 風雨の節 尾張國宮の海邊俄に大堤指御茶屋并御番所其外海手の民家三町餘引墮にとられ人も四五百人程も見え不申候 名古屋御城下 惣て屋根も壁も吹とられ 満足なる家一軒も無之候 堤の並木も中程より吹折申候 大坂川舟も五艘没入仕候

嵐 尻

夜子刻過より海鳴りて沙塵き 雲飛風異より 吹出て空の氣色も只事ならずかゝる程に暴風木を抜き駛雨石を轉す又沖の方に波濤嶺の如く漲り起て俄濱を浸せり 熱田の磯公館吏舎及驛店ことゝく破れ倒る 瀬瀬の男女老少百餘人片時に死て跡なき波に恨を殘せり 是等の事此處にゆつとく今路の末載談橋より 以東戸々こゝかしこ倒れし 東南井戸田うつくしの森のあたり迄漂流す 二名橋の鳥居も跡なく其邊へ大船數艘打あけし 田圃今年は豊登せしに潮にひたりてむなく枯のこる領家も 農人も唯あきれたるさま也

天和元年 七月廿日暴風洪水の時洪濤陸を浸し築出しの民戸は押流し跡かたなし今年四十二年にや

星崎の濱より南のかた大方破れさる里もなく 墟屋のけふり絶て 漂流亦百を以て數ふとかや

大野より南はさのみ荒氣なき事も聞へず 宮より西北數里の邊邊大浪堤を破り家を倒す事限りなし

甚兵衛新田堤南東の方 新茶屋新田初堤 神戸新田南西の方 其外大寶押萩村 四郎左衛門新田 鳥ヶ池市江うくる浦 江砂成川邊 鯉橋下 田本地等堤 凡十九ヶ所破て 田圃ことゝく潮満ひたる其他 北方の諸村風にみたれ潮に犯されざるはなし

宮より北の方一の鳥居轉倒する 名古屋下正徳四年八月八日の大風後かゝる暴風なし 家々押なへて破損せざるはなく聞々たふれて 塵死も所々聞へ侍る世の貴人のなげき大かたならず 勢州桑名府俄然として 湖にひたり 府下近村千六百戸 轉倒漂流東南赤須賀より 富田の村に家流れ人死する事數をしらすとかや

四日市場白子の浦安濃津松坂太淀二見湯同時潮に犯さ

れし 志州鳥羽より以南紀浦大風洪濤と聞ゆ

南紀殊に風強く稻穂ことゝく吹落せしと云 桑名以北大島長島猶甚し

紀州御領堤五萬千四百廿間餘破れ家六千五百五軒轉流橋百四十一破流船三百八十四艘流れ失都て田圃數萬石荒しとなん聞えし 大阪邊は風猶甚しく家を倒し木を折ける 赤坂關ヶ原の西は風強からずとぞ云京の方水口以東風雨に家を倒し並木折侍る 所にては地震なりといへり 京も難波も風雨同じさまながら潮のさはきなりし 故人の恐れも等閑也 (此等) は風甚しからず三州吉田の東は風おとろく計の事もなかりし 三南田原佐久島等民家破れ人漂死し且船われてみたりかはしきとかや あらまし聞し類ひ如此 さて我熱田浦及び築出し町等溺死の骸數日求出しにいたきながら死せるもあり または水中に産して赤子胞衣ながら血にまみれて見ゆるもあり あるいは老女一大事と箱物かゝへなから伏したるもありいと罪深きすかた淺まし辛ふして一身を免れ出しも 妻子をうしなひ家財をすてよるへなきなみに打なげきつる者いくらといふ數をしらすや、潮ひきて己か家々の程に残り埋れし家財あるも入亂れてわく方なく侍るを隣家とあらそひ怒り 打あひてなげきは外なるを見る 井戸田邊のものは流れよるものを我先にとひるひ取俄に得付ける思ひをなして 悦はしけなるも侍るにその愁喜兩つながら 皆安にして 唯一箇の愁のみ盛なり これも又得て幾程の身をかたもつへき夢に愁ひ夢によるこぶ人間の愚かさ今更思ひしられて あわれなれ十五日は 府下廣井縣の祭なれども見る人さへなくして 過ぬ夕つかた殊に霽れてさわる 隈なき月のさし出るさへ何

となく哀れに中秋の會ある家もなくいとさびしおと  
し去年見ざりし月の色ながら年わすらはしくてたれこ  
めて秋のひかりしらぬこよひいと口をし人のかたより文  
おとつれて中秋の月題送り侍りし程に  
峯の雲溪のゆふきりたちさりて  
おもひしよりもすめる月影

亦同じ題にて詩一章

鎮靈雲歸開雲青 邊分清影百憂消  
方明昨夜怨雷走 布洗金波八月潮

名古屋市史

八月十四日 熱田に海嘯あり 夜十二時頃俄に東南の  
方より暴風逆浪 熱田築出町の海岸を襲ひ來り 截斷橋  
以東 井戸田 うつくしの森に至る間 民家悉く流失し  
羽城の内 浮嶋の邊慘害最も甚し 漂流するもの二百五  
十餘人 流家潰家二百四十五軒流舟七艘(中略) 此外領  
内の潰家一萬七千軒 死人八十餘人 而して破損崩壊せ  
る堤防は普請奉行の調査によれば一萬千餘間餘り(中略)に  
亘り田畑の損害三十九萬石 永荒地となれるもの四萬  
五千石に及ぶ(中略) 古澤園遺稿

續談海

十五日 雨降南風強 東海道遠江三河尾張伊勢大風雨洪  
氷之由 尾州宮へ高浪入 溺死百餘人有之よし  
秋關東筋も洪水に付 川々出水 御普請有之 御料私領寺  
社領ともに國役金被仰出候よし

享保七年八月二十三日 (一七三二年一〇月三日)

讃岐國並京都 大風雨、洪水

讃岐災異年表 廿二日 甚雨  
廿三日 大風雨 堤防盡潰 田野如海

高松藩記

廿二日 連翌日復大風洪水 潮海堤防悉潰 田野如海者三  
日山崩谷壘 民之流散溺死者百餘人 牛馬亦然 與民金米  
以振救焉 多大饑

月堂見聞集

廿二日朝より少し雨降り廿三日夜に入風雨甚敷 十四日  
夜程に強く吹候得共九ツ時には静り申候 民家破損多し

享保七年十一月四日 (一七三二年二月二日)

關東諸國 暴風

東海道小田原以東暴風民家轉倒し樹を抜石を飛はす同し  
八日南風強く南湖大磯邊の浦々洪濤漲り回船十餘艘行衛  
なく吹流せし(中略) 雨いみしく降すさ  
ましき事限りなかりし浦人百餘人流れ死せしとそ我府下  
四日には雨寂々として冬の空に似たりし夜に入り大雨ふ  
りて子の刻計に止しか曉前西風つよく吹て晴に屬せし

享保七年十一月八日 (一七三二年二月十五日)

播磨、尾張諸國 大風

明石浦其外所々にて船破損仕候 大形三百餘艘程之様  
に喧仕候 殊の外大風之由也 江戸海道大雨 大井川三  
日逗留 富士川高水 冬の節加様之義珍事

壱 尻

八日南風 秋のごとくあらく 數雨のあし時ならぬ氣色  
なりしか辰の刻過より雷遠く鳴已刻大風屋を破るはかり  
して未の時や、止み晴れて西風甚快く覺えし 熱田の濱は  
潮高く漂來りしより市井亦先の洪濤にこりて器財とりし  
たゞめ老人女子など家をけ出し小船二十餘艘つなける  
まゝに破れし冬風の南よりしてかゝる事白頭の翁もさき  
く聞侍らずなどのしりぬ(中略)

此月八日風雨の後尾城南榮國寺本尊汗流るゝ事おとゝ  
しの冬のごとし亦常念佛所 雷鳴の 大像も汗あり希有の  
事とて僧俗走り行見る者多かりしされと寺々の金箔をし  
ぬる柱なども汗のごとく零落し所敷所なりし冬日に南風  
烈しく雨濕時氣に戻りし故かゝる事侍るにこそむかしよ  
り佛像汗の事古記等にも見ゆされど其同陰晴風雨の事を  
いはす大方打續晴天時候たかひなき頃は斯のごとき事侍  
らざるにや

享保八年一月二日 (一七三三年二月六日)

讃岐國並京都 大風

讃岐災異年表 大風 發屋

○讃岐通史

日本災異志 京都 大風發屋 續皇代略記

享保八年一月十九日 (一七三三年二月三日)

因幡、伯耆諸國 大風

已の刻曇暴風起り 御兩國の海上にても船多く覆没し 溺  
死人凡そ百六十八人なりと云ふ

享保八年八月十日 (一七三三年九月九日)

山陰、關東、奥羽諸國並北海道 大風雨、洪水

因幡年表 大風甚雨にて洪水 伯州の地損亡多しと言ふ  
月堂見聞集 七日より十日迄雨降續申候 依之大坂船路飛脚往來相  
止み淀伏見桂川之邊洪水 江戸近邊大雨洪水  
十日 江戸表風雨甚敷 本庄筋 深川 淺草筋 染井 豊

第一編 暴風雨 享保七年—享保八年(西曆一七三二—一七三三年)

續談海 八日九日十日 大風雨 田安御門土手 四五十間押崩し其  
の外御城廻り所々相崩る

金地院記録 八日 雨 九日 雨 十日 大雨雷

大聖寺藩史談 十日 大聖寺大水  
八戸藩史稿 九日より同十日夜まで大暴風雨の爲 作毛被害夥敷 各  
村引高調左の如し

- 本高千三百二十七石四斗三升七合
- 内引高三百五十六石六斗六升八合 八戸廻
- 本高三千三百七十九石三升九合
- 内引高三百五十七石九斗二升三合 同上
- 本高七百四十八石七斗九升一合
- 内引高百五十八石八斗四升七合 久慈通



本高七百五十一石八斗四升七合  
 内引高百三十三石六斗八升七合 輕米道  
 本高千三百八十六石四斗四升三合  
 内引高五百二十九石五斗四升五合 同上  
 本高千二百六十九石五斗二升九合  
 出来四百八十九石 片馬一斗四升七合 名久井道  
 本高千四百八十五石二斗四合  
 出来五百三十七石 片馬二斗八升四合 苦米地通  
 本高二千五百四十四石六升一合  
 出来七百十四石 長苗代通  
 本高二千二百七十五石七斗五升四合  
 出来八百八十七石二斗四升六合 柳引通

新北海道史 大風 破壊船五十有餘艘

享保九年三月二十八日 (一七二四年四月二日)

北海道 大風雨

新北海道史 續松前年々記曰 春三月八日大風 同月二十八日 大風

暴風 漁舟漁具破壊多矣

享保九年六月二十三日 (一七二四年八月二日)

陸奥國 暴風雨、洪水

八戸藩史稿 廿三日より廿六日迄暴風雨にて 領内諸川漲溢して堤防道路の破壊多く 爲に作毛の被害夥しく因て五代官の報告に係る損毛被害高を幕府へ申報す

覺

一、高四千九百九十九石八斗六升三合損毛(中等)  
 一、潰家五軒 一、潰家三十八軒 一、堤防破壊三十三箇所  
 一、往來道川一箇所

享保九年八月十四日 (一七二四年九月三〇日)

九州並讃岐國 大風洪水、高沙

福岡縣災異誌 風雨洪水 田島水荒其外破壊 綜合編纂年表

大風 石原實記

高松藩記 大風洪水 穀不登 貢米減三萬七千石 奥藩士練止十之三 月堂見聞集 豊後國筋 大風高沙 損亡甚し

享保十年九月四日 (一七二五年一〇月九日)

因幡、讃岐、陸前諸國 風雨、洪水

因府年表 三日 丑の刻大雨 翌四日巳の刻 北風強く吹起り川々出水 又海上破船多し

讃岐災異年表 東西海岸堤防爲海水所激潰

金地院記録 六日 風雨

東藩史稿 六日七日 仙臺大雨洪水 澁橋漂流

(備考)

岡山縣通史 九月 美作國 大風洪水 風水同書

享保十一年一月十五日 (一七二六年二月一六日)

伊勢國 大風雨

月堂見聞集 伊勢津の浦 大風雨にて廻船數十艘破壊 人も餘程損

じ申候由

享保十一年二月二十九日 (一七二六年四月一日)

越前國 大風雨水

日本災異志 越前勝山 大風雨水 田畝陥没 人畜多死 豊年表

編者註(右) 越前國ニ於ケル災害ハ地動的原因ニヨリト見做スガ至

當ナラン「大日本地震史料」ハ右ニ關スル史料ヲ三月十九日

ノ項ニ採レリ 即チ

「享保通鑑」ニ據リ

「同十一年三月十九日 越前國勝山領荒島嶽 豐原 平泉寺

の諸山谷 十四日の夜より地震し 十八日夜に及び國々強ク

修に是日巳刻を以て山谷崩潰し泥水狂湧して田畑人家を蕩盡

せり

ト註セリ

「近世東西略史」「十三朝紀聞」「温故年表」等ハ二月二十九日

ノ事トセルニコノ日附ヲ採用セザリシハ疑多キ故カ

享保十一年十月十九日 (一七二六年十一月二日)

因幡國 大風雨

因府年表 一記に此日 大風雨を載す

享保十二年二月十六日 (一七二七年四月七日)

播磨灘 大風

月堂見聞集 十六日 俄に大風吹 播磨灘廻船損じ死人も餘程在之

候 毛利殿御參府之處に右之風故家中之船行衝不知候 毛

利殿は御別條無之候 破船百七十艘死人二百八十餘人

讚岐災異年表 大風發屋船多破碎 溺死者衆

日本災異志 京都及諸國大風雨 發屋覆船人多死

享保十二年九月十二日 (一七二七年一〇月二六日)

下總國 大風雨

香取郡誌 大風雨 貝塚村崩崖あり 人家頗破す

享保十三年七月八日 (一七二八年八月一三日)

近畿、東海道諸國 大風雨、洪水

月堂見聞集 八日 大風雨 同夜四ツ時に止む 朝の間は異風 晝

後より北風生じ 依之伏見淀八幡の邊は大洪水にて 二階

住居仕候 處によりて家の軒の下迄も水さし申候

享保十一年七月五日 (一七二六年八月二日)

筑後國 大風、海嘯

福岡縣災異誌 夜四ツ時より大風 六日午の刻まで當春類焼小屋掛

不殘吹倒 貫家も大破損 半年の内大變兩度 在方大木

吹倒 石原實記

大風海嘯あり 細河郡役所日記

(備考)

鹽 今年畿内及び濃尾のごとき 八月の末に至る迄風雨の災も

なく田禾豊登せり 然るに九州は所々洪水の聞えありて

七月六日より十一日迄筑後など大雨風雷水大かた平地に

丈餘りたかく四國など盡く損せし 薩摩かたも同しなど

街談まち／＼なる 尾東の地三還は所により日てりに稻

枯し所も多かる 東西風氣同しからず 愁喜も亦異也 浮世

のすかた常に斯のことし 何を見ても深く事に執し侍らん

此夏肥前平戸 日てりして田園あれ八月暴風ことにあら

くしく洪水あふれて稻禾こと／＼く損亡 凡四萬石 粟 の上

大坂夜舟往來も止り申候。木津川の水一丈六尺出申候。六年已前に加様の洪水有之候。已後無之候由。十七年已前。正徳二壬辰年八月十九日洪水より。水三尺餘高く候由。入馬の流れ死候類數不知候。宇治橋豊後橋の上へ水あがり。淀の城の矢狭間より水込入候事。御座候。此外東國海道川々水出。飛脚留り申候。伊勢の國は大風甚敷。近年加様の大風知りたる者なし。

熊野史

熊野 大風雨大水。太神宮も他國へ去り玉ふかと諸人怪み候程に吹申候。早稲にあたり申候。八幡邊は作毛一色皆無にて候。

甲斐史

六月廿七日大雨催し七月八日まで續いた。この時笛吹川日川など大洪水となる。沿岸の家屋田畠を流し人畜を害し死者百五十人。生存者三百餘人。殘存の家屋三十六戸。

東京市史稿

九日 雨 昨夜 暴風雨。全地記録。〔枯木集ニモ〕同年七月八日 八月十三日 大雨 諸國大洪水ト見也。○續日本王代一覽

享保十三年八月四日 (一七二八年九月七日)

關西諸國 大風雨、洪水

月堂見聞集 四日 風雨甚し。尤昨日より雨は降申候。今朝に至て北風強く吹申候に付。賀茂川水出申候。二條四條松原之橋落申候。三日 豊後國日出木下右衛門佐殿御領大風。同日 豊後國臼杵稻葉能登守殿御領洪水。惣て西國邊風雨甚し。三條の假橋へ水ひたし候様に成申候。川幅一面に水出

て水杭のしるし四尺の處迄に満申候。同日七ツの時節に至て靜謐。木津川も水五尺餘出申候。讀岐災異年表 甚雨二日 烈風海濱堤防潰者大半。

享保十三年八月十三日 (一七二八年九月一六日)

江戸並京都 大風雨、洪水

金地院記録 大風雨 午後止。月堂見聞集 十三日夜 伏見 淀 八幡邊洪水。尤當月に入晴天無之。雨降續 十三日夜半に至て俄に水増し伏見淀町中は水六尺餘也。八幡の地藏堂は水軒口に付申候。一の鳥居邊は水五尺餘付申候。七月八日の洪水よりは二尺餘も高く御座候。

攝陽奇觀 八月 五畿内 東國大水

享保十三年九月二日 (一七二八年一〇月四日)

江戸並關東諸國 大風雨、洪水

武江年表 八月廿日夜より 九月二日三日 北大風甚雨にして洪水溢れ 昌平橋 和泉橋 新柳橋 二日の夕方流落る。三日朝 兩國橋中程三十六間切流れ 新大橋西の方四十二間程切る。永代橋は普請の中にて古橋杭流る。下谷淺草の内低き所は軒端水にひたる。小石川龍慶橋 其外小橋流れ 目白山崩れて上水の白堀埋る。筋違御門 昌平橋の二橋流損によつて神田祭禮十一月に延る。武江年表補正略 昔 江戸に鮭魚といふ魚なかりしが 享保十三年九

月堂見聞集

江戸洪水の書付 申の九月初日 卯の刻より 同二日酉刻迄 間合無之風雨烈數降續き所々満水。小日向筋關口の橋落。中の橋落。銅代町橋落。りうけい橋落。せんじ橋。小石川門橋落。水道橋無別條往來あり。昌平橋落。芋洗橋落。筋違橋少々損。和泉殿橋落。新し橋落。淺草橋無別條。柳橋落。兩國橋中五十四間切。新大橋中程三十三間切。永代橋普請中にて是代計。小石川龍慶水高き軒口迄。二階よりやねへ上り浸候由。其外怪俄人在之由其體いまだ不相知候。

- 一、小日向銅代町 關口早稲田目白の下此分過分家潰れ 小石川上水戸橋 不殘流れ申候。水の高き軒口迄右同斷。
- 一、九の内大名小路 愛宕の下の邊 暫の内段迄水高き在之。
- 一、下谷光徳寺前 淺草門跡前 淺草廣小路 竹町御形諏訪町 黒船町 御藏前淺草見付迄。一面に水高き五六尺之由。
- 一、六郷伊賀守御屋敷一面 水高き二階迄。吉原町水の高き土手一面井見の輪さんさき千住大橋落申候。
- 一、山下町御門邊 八官町 加賀町 大橋邊一面に水高き二尺程。右は御割の水出。
- 一、辨慶堀井伊掃部御屋敷前より麹町への道留にて崩れ往來無之候。
- 一、赤坂田町安藝守御屋敷下がけ崩れ家潰れ人損じ候由。
- 一、狸穴肥前守御屋敷邊がけ崩れ右同斷。
- 一、目黒より品川鈴が森品川宿 高名輪は芝増上寺門迄。水高五

尺程の由

右は二日晝八ツ時より水増し三日四ツ時迄に外へ行淺草川次第に満水。本庄深川筋いまだ水落不申候由。水高さ相知れ不申候。已上。

- 一、江戸表八月廿九日夜より大雨。九月二日暮過迄少しくも間合無之風雨にて江戸中溜り水。川々洪水にて候。別而神田小柳町としま町紺屋町 岩井町邊は家々二三尺。所により四尺程づつ水上り皆々二階に上り候。油斷致たる衆は諸道具ぬらし候。目白下よりの流れ川高水にて小石川の川通の小屋敷へ水付候。水戸樓御上やしきは御殿迄水上り。龍慶橋押し流し。水道橋少し損じ候。大水道流れ。御茶の水駿河台の土手押し崩し。立木大木ども流れ筋違昌平橋押し流。筋違御門の橋残り。柳原和泉殿橋并新し橋押し流れ。淺草御門の下柳橋流れ。兩國橋新大橋流れ。小石川邊より流れ來候。村木眞木。其外小家杯大分流れ來候。旅籠町 柳原廣小路 佐久間町邊は一向に川々に成申候。大船に乗り通被申候。其外下谷淺草千壽邊大水。千壽大橋も流れ候。本所深川邊も同斷。水戸樓御水道押し流申候。水のはき道無之。急に上水御屋敷中へおし出し御門前の水と一つに成り。家中の軒口迄水付申候。夫故人死在之由。其外柳原邊川通にては人死餘程在之候。水戸樓御屋敷前より永代橋迄の内は残り候橋は水道橋と筋違橋計にて候。右筋違御門もいまだ水引不申候故。通用無之候。
- 夫故本郷筋下谷淺草本所深川邊のかよひ曾て無之候。淺草筋へ水見舞に參候も。水戸樓御屋敷前迄廻り申されば成不申候。奥筋も大水の由風聞在之候得ども。いまだ

知れ不申候  
 一、兩國橋は中程四十間餘押し流し申候 兩方は残り申候  
 一、新大橋は江戸の半分餘押し流し候 右兩所共に橋杭も残らず右の方おし流し申候  
 一、永代橋は普請故取崩し申候故構無之候 橋杭餘程立掛り候を押し流し候  
 一、淺草御門の橋も普請にて取くづし置候故構無之候 其外は目白下さまよりの橋一ヶ所も残り不申候 皆々押し流し申候 前代未聞の御事に候  
 (さま、ママ)

江戸大水の再書

一、當月江戸大水の事 先書申入候通 中々筆紙に及無之候 水戸様御屋敷より目白下通迄の屋敷方 小石川白山御殿下通 其外小日向邊と申は 町々屋敷方共に家を損じ候事又は押し崩れたる處は數は知れ不申候 人馬の損じ夥敷事に候 水戸様御屋敷にては凡五百人許も人死在之候由 小石川目白下邊は水の高さ八九尺一丈 所により一丈二尺程有之候 下谷淺草邊は二三日已前水有之 三谷千住邊にては家流れ人馬死たる事大分の事に候 山の手にては市谷赤坂邊 芝品川目黒邊 家流候 神田筋橋不殘落申候 柳原兩國大橋共に 此間より舟渡しに成申候 御城内も諸方損じ石垣くづれ高鼻土手崩申候 赤坂溜池は上の屋敷土手崩れ落 溜池半分うち申候 人死大分在之候由  
 當九月江戸洪水の水は江戸より北西に當て古來より大なる沼あり 近來此沼を埋て新田とす 此新田の地の下より洪水湧出て江戸へ流込 新田は跡もなく成て

徳川實紀

九月二日 未の刻ばかり 俄に疾風 暴雨して小日向 小石川 下谷 淺草 本所のほとり 水溢れ出る事 地上丈餘に及べり 兩國橋及神田川の 橋梁残なく落ち 士商の家居も水害かうふるもの多し 大手門下乗橋の溝渠も水あふれて朝参のみちを防しといへり すべて關東の國々 この害にかゝりしとぞ聞えし

江戸洪水記

八月廿九日夜八ツ時分より 雨降出し 段々強く夜中降通 翌朝日朝迄降つゞき 朝日も一降 去年朝日は雨間有といへとも降方多し 朝日夜雨又強くなり 夜中雨間なく大雨降りつゞき 二日四ツ過より北風夥敷出 家々の軒下迄風にてさながら横吹込 風烈敷故 雨煙立て 南向の家などはつよく降こみ北之方は戸障子窓などしぼらくも明れさる位なり 世上の土蔵の壁 又は家々の下見なき壁は微塵に成たるなり 晝頃より雨いよゝ強くさながら洪水のごとし 然る處に 小日向 目白下 關口水道町 古川町 改代町の方より大水いつく共なく急に押來り雨は止み水は段々押し來る(中略) 數萬の男女泣きけり壁北風に響き加賀屋敷 本村邊迄聞へたり 前代未聞の事也(中略)

柳營日錄

水 二日夜に入り夜ふけより そろ／＼と引 夜明方には大水引たるよし 三日には天氣快晴上りたり(中略) 小日向邊の兼中は助船を待受屋根の上より または二階の上より 船に乗り 命助りたる衆多し 前代未聞の事共也 馬をも屋根へ引上げ助けたる衆も有(中略) 馬を屋根へ引上たるも前代未聞の事共也

小石川水道町 牛込赤木下 古川町 改代町邊

男 八十人  
 女 二百三十五人  
 男女子供ともに三百三人  
 目白下關口 中里村邊  
 男 八十五人  
 女 百七十二人  
 男女小供ともに二百三人  
 根津 下谷 金杉 箕輪 淺草橋隨院 鳥越新寺町邊  
 男 百四十七人  
 女 百七十六人  
 男女小供ともに三百七人  
 右は死體受取候分 其外流來り主無之片付候男女子共六百七十八人程 流通り候分數不知 牛馬數不知  
 芝新錢座 金杉邊  
 男 六十七人  
 女 八人  
 右は材木屋眞木屋等之由此分御船手より訴之  
 房州浦に而 三千五百四十人  
 伊豆浦不知  
 川流死人 千九百七十三人  
 右車善七方にて廿四日までに取上る分  
 都合 七千九百八十八人程

東京市史稿

江戸 大洪水有り 江戸川沿岸の小日向 小石川低地被害最も甚しく  
 隅田川沿岸の淺草 本所 深川及下谷等之に次ぐ  
 月堂見聞集 江戸洪水記 月堂見聞集 御徒方萬年記 御徒方萬年記 御徒方萬年記 御徒方萬年記

享保十四年三月十二日(一七二九年四月九日)

江戸 大南風

江戸川 神田川の諸橋多く流失し 隅田川に在りては兩國橋 新大橋大部分壊流す  
 此外市内の低地は 大抵浸水を見ざるなく  
 蓋八月二十九日よりの大雨 九月朝日を経て三日に至り北風之に加りて雨量益増大し 遂に此の出水を見るに至りたりと云ふ  
 ○續日本王代一覽 窓のすまみ

享保十四年七月十九日(一七二九年八月一三日)

紀伊國 大風雨

紀州災異年表 大風雨 田邊團難社叢表倒る 町内浸水多し

享保十四年八月三日(一七二九年八月二六日)

九州諸國 大風

島津國史 大風

本州編略 四日 對馬大風 倒人家  
月堂見聞集 四日 西國筋殊の外大風 長崎表甚敷候由  
福岡縣災異誌 三日―五日 暴風雨 高潮  
夜四ツ時中大風 四日五日迄止まず 石原記

大風雨 綜合編四年表  
大風雨 海嘯あり 御前諸國並京都日記

享保十四年八月十九日 (一七二九年九月二日)

薩摩、備前諸國並京都 大風雨

島津國史 又大風

岡山市史 十九日夜大風洪水あり 翌二十日の曉に至りて益々甚しく  
岡中の被害多かりし模様なるも舊記載する所無し

月堂見聞集 八ツ時分より雨天 少々風吹候處夜に入甚敷 翌廿日朝  
大雨大風 民家破損 今日二百廿日に相當る 廿日の七ツ  
時静まる 水邊の稻は何方も永否

〔水石、ヤマ〕

享保十四年九月十四日 (一七二九年一〇月六日)

四國、山陰諸國並京都 大風雨、洪水

讃岐災異年表 大風雨 民屋多壞

高松藩記 秋大風洪水四次 人家多壞損禾稼

蜂須賀家記 大風雨 傷稼

月堂見聞集 晝七ツ過大風 家々屋根を破り瓦を飛ばし樹木を折り日  
暮に静まる 尤昨十三日より雨降り 今晝に至て殊外に  
大雨に付 鴨川水四尺餘 假橋皆々落 北野社の大木の椋  
根より倒れ 社損じ人一人死す(中略) 丹波路も風甚敷

北野邊 風にて松木餘程倒る 西陣の邊は水床の上へ一尺  
餘あがり申候 西陣邊堤少々切損 橋皆々落 竹田不動堂  
の邊より鴨川の水田地一所に成る 凡川幅四五町程に成  
腰の上迄水つき申候

伊勢海道大風にて堤の並木の松大分倒れ水にては壁の  
土悉く落つ 淀川高水也 宇治川桂川一所に込入 川幅十  
分に水満て 堤も切れ損する程也 淀の町家は所により天  
井際迄水つき申候 随分高みの家にも床上二尺は水  
有之 八幡は淀川より八幡茶屋迄 舟にて往來有之候 八  
幡の入口の餅やなどの茶屋 床の上二三尺程も水つき申  
候 伏見もかたの如く水出 家々へ水馳込申候 近年の洪  
水の由風説在之候

享保十五年三月一日 (一七三〇年四月一七日)

京都 大風雨

月堂見聞集 夜四ツ時(中略) 其後巽風甚敷吹出 七ツ時に雨降り  
大風雨 如此の風は春の時分には六十年來無之事 火事  
繁き所に 京都の者一夜寝たる者なし 翌七ツ時に止む

享保十五年四月二十七日 (一七三〇年六月二日)

筑後國 大風雨、洪水

米府年表 暴風洪水 麥不熟 在方笹實を取り食す

享保十五年七月二十四日 (一七三〇年九月六日)

土佐、讃岐、山城、若狭、加賀諸國 大風雨

室津藩番役久保野氏舊記 夜 大風雨 室津浦御米藏壹軒三間 拾  
間吹潰 地下家敷六拾軒吹潰す 宮地幸六藏 御分一御藏

第一編 暴風雨 享保十四年―享保十五年(西曆一七二九―一七三〇年)

洪水 桂川の水深一丈餘 入流候 行衛不知者多し 加  
茂堤所々切れ損す 淀伏見洪水推て知るべし  
因府年表 連日雨降る 今日巳の刻より北風吹起り大雨沃くが如く  
にし大出水

(備考)

岡山市史 九月又大風雨あり 旭東 塔の山 藥師堂の麓 決潰して  
濁流旭東を襲ひ 餘水網の濱 門田の兩村を浸して 田畑  
多く荒廢に歸す  
其の他國中破損の箇所多數に上りて 藩の收入甚しく減  
じ農民等租税の外に應分の物資献納を願ひ出づる等のこ  
とありしも其の被害額詳ならず 岡山縣水災史

政隣記

閏九月二十四日 當秋風損水損三ヶ國に而四五萬二千  
石餘 倒木二千本餘 崩家二百軒餘 川除損も多候由 今  
日公邊へ御届有之

享保十四年九月二十四日 (一七二九年一〇月一六日)

京都 風雨、洪水

月堂見聞集 卯の刻より雨降り風甚し 朝風也 巳の刻に留る 少之  
間の事なれども大風故 鴨川洪水 六尺餘出 流死するも  
の多し 建仁寺町にては水腰の下へつく 依之此邊の在家  
宮川筋家々水馳込 七條六條新地は床の上三四尺水あが  
り候 日の岡より東の方御廟野邊は馬の脊を水越し申候  
依之往來留り申候 堀川中立賣車の通る石橋中程より倒  
傾く 此外此川筋の上の方 一條あたりの家々破損多し  
清瀧川水一丈八尺餘出申候 橋少々損す 突出之石垣崩る  
釋迦堂の邊迄水つき申候 上賀茂の社邊迄水つき芝の上  
にては乳の上迄あがり候 松の木六十本餘倒る 大徳寺邊

ならび是も吹潰す 尤浪は小浪也 東寺塔堂二重より上  
吹落す 其他伽藍 上總筋 大痛

讃岐災異年表 大雨霖 堤防潰 大風 發屋折損

月堂見聞集 廿五日朝より大風雨 午の下刻に留る 尤廿三日の夜半  
比より雨降り出し廿四日晝夜不晴 依之賀茂川の水二尺  
餘出申候

七月廿四日、五日 若狭國 大風雨 町家大分吹倒 或  
は屋根を吹取 樹木吹折申候

政隣記 二十五日 風雨強 淺野川小橋中程は橋上二尺五寸程上  
へ水の上る 才川は少々出水

享保十五年八月二十九日 (一七三〇年一〇月一〇日)

關東、奥羽諸國 大風雨、洪水

一話一言 廿九日 明ヶ方南大風 晦日晚 北大風 所々家潰申候  
築地大水出る 洪水橋々落申候

武江年表 廿九日 大風雨 深川卅三間堂吹潰す 築地大水出る

金地院記録 廿九日 雨 晦 烈風雨

月堂見聞集 江戸飛脚所より申來候覺  
一、八月廿一日より雨天打續 毎日々々不晴 夜七ツ時よ  
り明け五ツ時 南大風大雨 晦日晝七ツ時より西大風雨  
暮六ツに風雨しづまり所々損じ申候 小屋共吹倒し 深  
川本庄床之上迄水突申候 兩國橋往來なし 六郷並木  
共吹倒し申候 足立事なし 馬入川酒匂川 九月四日迄  
溜水にて往來なし 近年の大風雨にて御座候

東藩史稿 晦日 奥郡及刈田郡洪水 男五人女四人溺死す 登米郡史

享保十六年三月十八日 (一七三一年四月二四日)

若狭國 大風

月堂見聞集 十八日、十九日 若狭國大風 百姓家倒るゝ處多し

享保十六年四月十五日 (一七三一年五月二〇日)

京都並江戸 風雨

月堂見聞集 午刻 大北風

東京市史稿 雨 四ツ時頃大風 全地雨降

享保十六年七月十三日 (一七三一年八月一日)

遠江國 大風

野史 遠江大風 逆浪遽起 商船沈溺者三百九十八艘 人多没

編者註(續)日本王代一覽(ガ享保十七年七月トシテ記ストコロト相似タリ 別ノモノカ成ハイヅレカニ誤記ニアルカ)

享保十六年八月十日 (一七三一年九月一〇日)

諸國 大風雨、洪水

島津國史 十日 諸縣郡 大風洪水

月堂見聞集 十一日夜 戌の下刻より少し風吹 夜半過に至て大南

風大雨 翌十二日五ツに止む

因府年表 十二日 北風烈しく吹き甚雨沃々が如し 袋川満水し人

屋破損少からず

大垣市史 十二日未上刻曾根村下堤 四十五間餘決潰 瀬古村 前田

村堤も決潰入水 庭にて水深一尺五寸許

武江年表 十一日夜より十二日晝八時まで大風

○東京市史稿 一話一言

(備考)

鎌須賀家記 八月 風雨傷禾

岡山縣通史 八月 美作國 大風洪水 陸軍部

享保十六年八月十七日 (一七三一年九月一七日)

江戸 風雨

武江年表 夜風雨

享保十六年八月二十一日 (一七三一年九月二一日)

京都 大風雨

日本災異志 京都 大風雨 陸軍部代官記

享保十六年八月二十七日 (一七三一年九月二七日)

江戸並陸前國 大風雨、洪水

金地院雜記 廿八日 昨廿七日夜七時前より大風雨 今朝六半比止

天候晴明 所々多破損

出水一件 廿七日夜 大風雨に而大川出水有之 東西橋番請負人共

より兩國橋へ重り石差置候處出水落切候

武江年表 廿八日 洪水

東藩史稿 廿七日 仙台 大風雨洪水 中瀬 澁 長町 中田 評定

所諸橋破損す

十一月十五日 本年風雨洪水により封内十二萬二千餘

石田損あるを幕府に聞す

享保十六年九月十七日 (一七三一年一〇月一七日)

江戸 風雨

武江年表 二日 風雨

金地院雜記 十七日 烈風雨

○一話一言

享保十七年六月十六日 (一七三二年八月六日)

遠江近海 大風

月堂見聞集 遠江かけすが沖にて東風強吹候て 又南風に成り夫よ

り東狂風に逢ひ 諸國之船凡そ五百艘荷打又乗捨 大坂表

菱垣廻船十七艘代なし 荷打船船二十七艘 行末不知船も

御座候 乗捨船船頭鹿子大半相果申候 右荷打の船は勢州

鳥羽 安乗 にべ三ヶ所へ戻り候

右之趣は海上前代未聞之事に御座候 遠州灘破船書付 大

坂より参候(中略) 合三十七艘大坂之分

續日本王代一覽 七月 遠江海上大風 商船數百艘破損す

(七月、六月ノ誤カ)

享保十七年七月六日 (一七三二年八月二五日)

肥前國 大風雨

日本災異志 肥前 大風雨 六日より七日に至るまで大風雨 兩五

島氏領所の其の損害は左の如し

五島大和守領 本高一萬二千五百三十石餘の内損亡高

九千三百九十七石七斗餘 高札場二ヶ所 唐船遠見番所一

ヶ所 潰家十四軒 同社堂一ヶ所 倒木十七本

第一編 暴風雨 享保十六年一享保十九年(西曆一七三一—一七三四年)

五島修理領本高三千石の内田畑損亡高二千七百六十六石二

斗餘の損亡

唐船遠見番所一ヶ所 潰家六軒 倒木八本 貞野領毛書

享保十八年八月十四日 (一七三三年九月二一日)

玄海灘 大風、高潮

月堂見聞集 玄海灘 大風俄に起り 大船五艘破損死人多し

享保十八年八月十六日 (一七三三年九月二三日)

筑後國 大風

福岡縣災異誌 戌の刻より夜明迄 大風 石原家記

大風海嘯 損害多し 郡村史

大風あり 海嘯 本地並新田の荒地となるもの二萬三千

七百餘石 山内郡史

享保十八年八月十九日 (一七三三年九月二六日)

江戸 大風

一話一言 十九日晝時より夜に入る迄北大風 所々にて家つぶれ申

候 或人日記抄

月堂見聞集 江戸表 大土風吹て 御屋敷 破損多

續談海 夕方西風 大雨大風

享保十九年七月六日 (一七三四年八月四日)

陸奥國 暴風雨、洪水

八戸藩史稿 六日午の刻より 稀有の暴風雨ありて 諸作散亂狼藉慘狀

を極め 七日に至り 諸川大洪水にて 大橋新井田橋 湊橋共

に流失 其他村落の落橋多し 被害損毛高左の如し  
一、高九千七百三十九石七斗損毛(中略) 落橋大小三百廿九ヶ所 用水堰押切七百八間 往來堰押切五十八ヶ所 流家二軒 破船二艘 材木船荷打一艘 水押土藏家屋共に八十棟 堤切八ヶ所 堰留口五ヶ所 類家四軒 大木折五丈 山崩百七ヶ所 溺死者三人(男) 流死馬三頭 外高六千六百八十七石餘 志和郡損毛(類、犬、マ、マ)

享保十九年七月(一七三四年七月三〇日―八月二八日)

江戸 大風

日本災異志 江戸 大風 宗建記

關者註(宗建記)ガ誌ス大風ノ事不審多キ由「東京市史稿」モ註記スル所アリ

享保十九年八月、九月(一七三四年八月二九日―一〇月二六日)

越中國 大風、霖雨

前田氏家業 八月、九月 大風霖雨 田畠損耗 届出草高一萬二千三百十石なり

享保二十年六月二十一日(一七三五年八月九日)

近畿諸國 大風雨、洪水

續史愚抄 近國風水云 未詳

野 史 畿内 大風雨水 弘長慶寺通記 風雷集

攝陽奇觀 夜五ツ時 淀川筋洪水 切野出口村 高村明

三貨圖彙 二十二日風雨洪水にて 河州枚方堤切れ 覆並八箇村々水亡

高十二萬石

大阪府誌 淀川洪水あり 北河内郡枚方町 大字三矢の堤防を破壊し 播河一圓其の害を破りて 稲作凡五萬石悉腐蝕に歸す 因りて同年の貢税を免す

渡新秘策

六月末つかたより宮腰浦海上へ色々の物漂流いたし候 彌師は業を棄て只海上へ出でひろひ申候 人の死體など 多有之 或は蚊張にまとはれ候も有之候人家の梁棟等 其 外家財種々の物漂流いたし候に付 近國に洪水も候哉 越 前等にて候はゞ相知可申事に候得共未其聞え無之候處 七 月朝日頃より越前近江等大洪水の沙汰有之候 當四日八 幡山新善法寺より本多主水へ迄早飛脚到來 六月二十一 日より廿三日迄大風大雨にて洪水 淀 八幡邊は十五年 前之洪水よりは三尺の水上増申候

風は東風にて候 田地押流或は泥入にて 皆不農に罷成 候由申來候 大和 山城 近江 越前往來之路泥水流出漸 に罷通候

吉徳公之記

七月五日 今江村十村源助より改作奉行中迄相違候趣 は前月廿二日より大雨にて 越前筋山抜出水にて山方 浦 方の内數ヶ所村家過半潰れ 人馬も相損じ 海川へ押流候 由 委く承合候旨に而相違候

○續日本王代一覽

關者註(日本災異志)ハ享保十九年六月二十一日畿内諸國 大風雨 水災甚多トモテトスレド「野史」モ明ニ二十年トス 十九年ハ 誤也

享保二十年七月十七日(一七三五年九月三日)

筑後、因幡諸國並江戸 大風雨

久留米小史 暴風 木を抜き屋を破る

因府年表 晴天 南風吹き申の刻に及び一天赤き事燃ゆるが如し 風 災に轉じ大いに吹起り屋を削ぎ牆壁を倒し加之甚雨沃ぐ が如くにして室中傘を張り徒に休止するを待つもの多か りしとなん

又一記には北風 大いに吹くとあり 實に然らば後には 北に吹きかはしたるか

金地院記録 十八日 從子刻過備風至破 院風雨頗甚 辰刻風止 午 時雨晴

(備考)

野 史 七月 江戸 大風 宗建記

編者註(日本災異志)ハ「宗建記」ニ據リ「七月三日畿内及江戸大風」 トシ「紀州災異年表」ハ同ジク「宗建記」ニヨリ「七月十三日 畿内洪水大風」トセリ不審

元文元年八月十七日(一七三六年九月二日)

近畿、關東諸國 大風雨、洪水

元文世説雜錄 阿部豐後守榎御領分 去る十七日利根川開き 川股御 關所水底に成相見え不申 水かさ一丈七尺之由 人馬之怪 我無之候得共 御損毛之儀は相知れ不申候

秋元但馬守榎御領分 武州川越并騎西領 風雨に付水入 申候

一、高二萬五千六百二十二石四斗二升 川越領村數五十九箇村

一、高六千九百六十四石七斗七升二合七勺 騎西領村數十四箇 村

一、堤四箇所 此間數三十六間餘

一、潰家 十一軒

第一編 暴風雨 享保十九年―元文元年(西曆一七三四年―一七三六年)

右之通御領分の村々田畑へ水押入申候 其外人馬等怪我 無御座候

十七日の夜 安部橋津守榎御領分 武州榎澤郡之内大風 雨にて 利根川其外川々満水にて御損毛の由

同日 水野監物榎御領分 三州岡崎大雨に付 矢作川常 水に九尺六寸水増し候得共 矢作別條無御座候

一、田畑水入二萬二千二百八十七石餘 一、堤切口二百四十二間 一、小堤切口千二百八十五間 一、川缺二百七十箇所 一、潰 家三軒 一、倒木九十二本 一、墜落損百九十箇所 一、御城 内石垣崩二箇所 一、同倒十三間

右之外 御城廻并侍屋敷足輕家等 水入大破の所多く御座 候 山中筋御損毛之儀は未相知候

稻葉内匠頭榎御領分 城州淀 當月十六十七日風雨にて 同夜西刻より川々洪水 別て木津川筋 着々水勢強く致滿 水候

一、御城内水入 御所々土落申候 一、侍屋敷九十軒餘大破 一、奥力小役人長屋大破 長四百九十三間 一、足輕長屋六十 軒餘流失 一、半潰長屋二百九十五軒餘 一、城外之橋六箇所 流失 一、大橋西詰五組目直連之内一本折損し 一、同十一組 目直連之内三本流失 未問數は相知不申候 一、納所村國役堤 之内三箇所缺 未問數は相知不申候 一、東一口村中堤之内一箇 所押切 未問數は相知不申候 一、江口村中堤一箇所缺 未問數 相知不申候 一、市田村國役堤之内一箇所缺 未問數相知不 申候 一、富野村山川堤之内三箇所押切 二箇所缺 未問數相知不 申候 一、町潰家三軒 一、百姓家潰百軒餘 但し半潰共に 一、寺大破三箇所 四箇寺 一、流死人男一人 一、牛馬流死無御 座候 一、増水高凡一丈七八尺程常水共に 但し定杭を水越候 に付 委不相知候

右之通に御座候 御領分之内 山城 攝津 河内 近江共 に損毛高未相知候

一四七

一、備後七十五箇所 井破損二十三箇所 一、堰落百十箇所  
破損九箇所 一、江九切三十一箇所 一、土手切五十三箇所  
一、用水江九切三十七箇所 一、潰家六十軒 一、半潰家九十  
三軒 一、潰家二軒 一、半潰家六箇所 一、半潰家二箇所  
一、死人十六人 内八人 一、怪人二人 一、馬一疋 死失  
一、牛一疋 同前 此間數千二百六箇  
一、沼缺二十七箇所 一、潰家潰家三十八軒 一、潰土藏一箇  
所 一、倒木六十六本 一、小船流失一艘 一、潰土橋二箇所  
一、枳損一箇所 一、流死男一人 一、牛馬怪我無御座候  
同日同日 酒井備後守様御領分 若狭國三郡并近江國高  
島郡之内 越前國敦賀郡之内 風雨洪水にて御損毛左之  
通

田畑高二萬七千五百三十七石餘 水押砂入風痛川餘損共  
一、潰家八軒 一、半潰家四十七軒 一、砂入家九十四軒  
一、土手切五千七百二十四箇 内土手切四百七十六箇  
一、直缺二百九百七十一箇 (二百九百、恐クテ誤植アルベシ)  
一、井溝切九百六十一箇 一、落橋大小百十箇所  
一、山投二十九箇所 一、鹽漬一町四反 一、總設三箇所  
一、倒木根返三千七百五十一本 一、流死男二人  
一、城内家中屋敷別無御座候 一、川堤切所十九箇所  
一、山崩一箇所 一、道崩百四十九箇 一、落橋三箇所  
一、潰家三箇 一、潰家一軒 一、溺死人男一人  
此外牛馬損じ無御座候  
酒井備後守様御在所佐保郡之内 當八月十六日より同  
十八日迄風雨強 利根川満水 常水に一丈五尺増し 田畑  
高三千四百八十二石四斗二升四合餘 水押砂入 右之外所  
御破損多く人馬怪我無御座候由  
土屋左門様御領分 土浦領當八月十七日夜風雨強く洪  
水 其上川満水にて所々水入高三萬三千三百石餘  
保科彈正忠棟御知行所 攝州豊島郡阿部郡有馬郡 能

元文二年六月六日 (一七三七年七月三日)

遠江國 風雨

元文世説雜錄 六日之夜より 同七日之朝迄 本多越中守様御知行所  
遠州相良風雨強く御損毛左之通

- 一、田畑三千八百八十石餘
- 一、堤切所二千箇之餘
- 一、潰家六軒

元文二年七月二十二日 (一七三七年八月一八日)

江戸 大風雨

金地院雜記 廿三日 昨夜子刻より至于曉疾風暴雨 院内所々破損

元文三年八月十二日 (一七三八年九月二五日)

讃岐國並京都 大風雨

讃岐災異年表 大風雨 屋壁壞 堤防潰  
日本災異志 京都 大風雨 屋壁壞潰

元文四年七月十四日 (一七三九年八月一八日)

江戸 風雨

金地院雜記 疾風暴雨

元文四年八月五日 (一七三九年九月七日)

九州、四國、山陰、奥羽諸國 大風雨

米府年表 大風  
讃岐災異年表 大風雨 海濱河涯堤防壞

勢郡之内 當五月より八月中度々風雨洪水御損毛  
松平加賀守様御領元秋中度々風雨にて御收納之節に至  
七十二萬石餘御損毛之由  
金地院雜記 十八日 昨夜 午刻より烈風暴雨 辰刻快晴

元文元年十月六日 (一七三六年十一月八日)

讃岐、因幡、加賀、越中、能登諸國 大風雨

讃岐災異年表 六日大風 屋壁舟碎

因幡年表 五日 大風雨

政隣記 六日強風雨 能州邊別而損家多 伏木放生津津波打 伏木  
五十軒海中へ引入 人十七人行衛不知 放生津家三十軒崩  
れ 磯網等過分に損失

國事雜鈔

當境昨六日戌之刻より 大風に御座候處段々風茂強御座候  
内 俄高波罷成 岡御關所へ浪着申に付私罷出 井當番之  
與力足輕御道具等無相違指除申候 落御關所御番所波に  
而流申候 御縮方の儀に御座候間 早速御作事所へ被仰遣  
可被下候 浪引次第假御番所申付 御番人爲相守可申候  
勿論往還筋境町之内 金剛川橋落申候 尤損じ申所々并足  
輕 小者 町家 百姓等つぶれ損家 別紙之通指上申候  
今七日申之刻より少々波もしづまり申候に付 以飛脚御案  
内申上候 澤田伊佐右衛門

日本災異志 諸國大風雨 屋壁破船 備前代時記

元文元年十一月二日 (一七三六年十二月三日)

讃岐國 大風

讃岐災異年表 大風發屋

松山叢談 松山領大風雨 損毛高一萬四千六十五石餘

因幡年表 六日 巳の刻より大風吹き起り 大雨頻りに降り沃き所々  
に破損多し

江戸藩史稿 七日期より暮に至る暴風の爲め 諸作の被害夥しく幕府  
へ申報の損毛高左の如し

- 一、高三千四百三十五石一斗 八戸廻(中略) 潰家三軒
- 一、高千九百五十九石五斗 長苗代通(中略) 潰家一軒
- 一、高千九百五十六石六斗 名久井通(中略) 潰家一軒
- 一、高千八百七十三石八斗 久慈通(中略) 潰家一軒
- 一、高千九百八十三石五斗 輕米通(中略) 潰家一軒
- 風折大木一本
- 惣高計一萬千二百四石九斗
- 内六千八百八十八石六斗一升 田形風損
- 五千八百六十六石二斗九升 畑形風損
- 潰家斗八軒 破船一艘 溺死者十四人 行衛不明船五艘
- 大木風折二本 行衛不明者十人

(備考)

岡山縣通史 八月 美作國 大風洪水 松平記

元文五年七月一日 (一七四〇年七月二四日)

讃岐國 風雨

讃岐災異年表 風雨洪水

元文五年七月十二日 (一七四〇年八月四日)

江戸 風雨

一四九

金地院記録 風雨

元文五年七月十七日 (一七四〇年八月九日)

讃岐國 風雨

讃岐災異年表 風雨洪水

元文五年七月二十二日 (一七四〇年八月十四日)

大坂 大風

播磨奇觀 大風 大木多折る

元文五年閏七月三日 (一七四〇年八月二日)

大坂 風雨

徳川實紀 大坂 風雨甚しく洪水あり

元文五年閏七月十六日 (一七四〇年九月六日)

京都近國 大風雨、洪水

續日本王代一覽 京都大風雨洪水 三條大橋破損 四條下宮川町石垣

町 東西の民家二階まで満水 又二條河原東新地六尺餘洪水

和州葛城川洪水 五瀬村の民家多漂流す

續史愚抄 大風雨 鴨川洪水 三條橋損 其以南水入人屋 又北山岩

屋山大壊云

野 史 京師 大風雨洪水 大和又水

○泰平年表 徳川實紀

元文五年八月五日 (一七四〇年九月二日)

讃岐、播磨、陸奥諸國並北海道 大風雨、洪水

高松藩記 大風洪水 傷禾稼

播磨奇觀 四日より大雨して六日夜堺北の庄流る 大和川堤切て水

入る

津經歴代記類 七日大風 弘前田茂木町山王神社神木と唱候由茂木

七尋餘廻りの大樹倒れ 藏館村大日堂門前の神木と唱ふ

はきかつらの大木も半ばの大枝折れ倒れ依之田畑作毛大

に損じ申候

飛騨編年史要 六日洪水 益田郡尾崎村の河岸崩れ 往古の橋杭露出

す

堺市史 (備考) 元文五年八月の大和川及び萱田池の暴溢は殊に北郷に災

して我町農人町より北は漸く船にて往返し 毛野史 奉行

所は式台迄 西南中屋敷は床上迄 東屋敷は床上四尺の浸

水を見た云はれ 天野御太史遺書 妙國寺にては溢水の爲め

寶庫を破壊せられ 往古の記録數多流失したと傳へてゐ

寛保元年七月二十一日 (一七四一年八月二日)

薩摩、四國、近畿諸國 大風雨、洪水

西播野史 二十一日封内大風 民家傾倒れ 大木根を抜く

松山叢談 七月二十二日御届 風雨損毛一萬四千八十三石二斗餘 其

後不熟五萬四百八十六石二斗六升 都合六萬五百六十九

石四斗六升餘

熊野史 二十二日 風雨洪水

寛保二年七月二十八日 (一七四二年八月二日)

近畿、關東、北陸諸國 大風雨、洪水

續日本王代一覽 廿七日未刻より 八月初日に至て五畿内大風雨 洛

陽三條大橋流落る 堀川石垣崩れ 湊伏見邊大水

八月 關八州北國筋洪水 江戸赤坂御門水溢れ 本所深

川町支配の諸村家漂流す 砂原藤岡小林落合岩井等の諸

村人民溺死し田畠漂流す

信州川中嶋普光寺邊水高きこと二丈餘 上野下野武藏

等に至て 田畑の水損凡八十萬石餘 東海道 神奈川邊其

外中山道 北陸道筋 田畑多漂流す

十三朝紀聞 八月 自廿七日至朔 畿内大雨風 京城内外大水 破三

條橋東海東山北陸諸道大水 幕府赤坂門下成河 本所深

川傍村及市含瀧墳民多溺死 信濃普光寺前水深二丈餘 上

野下野武藏常陸損稼禾八十萬斛 北陸等亦多損毛云

七月廿八日より雨降續 八月初日 晝八半時より大風雨

夜通し止事なし 近郊大水漲り出 本所深川人家を浸し

大川通り水勢烈しく 兩國橋は御普請中にて杭を流し 永

代橋新大橋損じ 隅田川土手切れ 葛西へ水押入 千住土

手切れる

五日又 利根川堤切れ 次第に水かさ増し溺死多し 官

府よりは御助船を出されて救はれ 小屋を建て食物を賜

はる

青樓年曆考 朝日 大雨東風強 同二日晴 朝吉原道へ水出 暮時に

罷成 日本橋十分水來 衣紋坂上 田町上り口 山谷法性

寺前 下り口 東三ヶ所土手之上へ水上り候を土依にて

筑留 夜四時今戸橋流申候 同五日 晝時より本所大水

利根川堤八方并權現堂と申堤切れ申候由也

宇治山田市史 二十二日 終日風雨 今日申の日 明日二百十日に當

れは人民恐る 夜に入て甚し 子の時風止んで俄に洪水

宮河堤十段餘 小河町北の方堤四ヶ所水すきをとりて甚

危し(中略)

丑の時 堤補の下の堤切れて 京町並木の松を横手に中

川原と下川原の間を流行す その水聲震動して町々に聞

え前代未聞の大水也 翌廿三日午前水大半ひく 寛保災異年表

讃岐災異年表 二十三日 大風雨 折木發屋

日本災異志 二十三日 京都大雨洪水

(備考)

大阪府誌 元年 神崎川暴漲し豊能郡庄内村大字洲止の堤防を決す

寛保二年六月十三日 (一七四二年七月一日)

讃岐國 大風

讃岐災異年表 大風 折木

寛保二年六月十六日 (一七四二年七月一日)

江戸 風雨

金地院日録 十六日 風雨

金地院記録 廿七日 風雨

寛保二年七月十一日 (一七四二年八月一日)

近畿諸國 大風雨

野 史 畿内大風雨 三條橋壞 弘前田茂木町

一五二



寛保之頃迄は水道尻に水戸有之候

(方、戸、マ、)

金地院記録

七月廿八日 雨 廿九日 晴 雨  
八月朔日 雨 午時より寅迄東南烈風  
二日 雨 晴時晴 三日 晴 四日 晴 五日 晴  
六日 晴

一、去る朝日 午時より二日晴時迄風雨之處 利根川土  
手切れ込候由に而 三日四日頃より本所筋満水 流死  
饑渴之者不可勝數之由 公儀より助船毎日數百艘粥飯  
被下之由也 至今日頃未本所三ツ目邊者 船に而往來  
之由也 其先き者如何成行き候哉 未相知之由也

横むさしあぶみ

朝日 明方より小雨降九ツ半時此より大風雨 北東  
風烈 夜四ツ時過より南風彌強 翌二日 小雨午刻より  
風止 江戸中武士屋敷町屋共に風破多し 本庄 深川 淺  
草 鳥越 下谷邊降溜有之 水附之處不吐故 水丈深く大  
鹽故差沙之節は別而水かさ有

出水一件

八月二日新大橋より注進  
兩國橋大川通 昨晝より段々水増 昨日七ツ時前 平日之  
水に一尺餘高御座候得共 出水と申に而者無御座 風宜  
橋杭へ懸り物等も無御座 昨夜中大風雨に付 今晝七ツ  
時分より段々水増 今朝六ツ時過 潮満ち候節平生之水  
に八九尺餘も高く御座候 然共山水に而無御座 夜半より  
辰巳風に成 沙吹き上候故と奉存候由水防之者共申候  
水勢者さのみ強も無御座候 今日五ツ時過より潮引申候  
に付其節懸り物等も可有之哉 水高く御座候に付無心元  
奉存候

荒木留候

二十七日より八月一日迄 大風雨

高田市史

八月一二の兩日 大雨 關 矢代 兩川出水 稻田橋落ち  
近在に至るまで大害を受けたり

○泰平年表 野史 徳川實紀

寛保二年八月八日 (一七四二年九月六日)

江戸 大風雨、洪水

既にして八日 再び烈風雨有り 本所深川邊 皆水量  
を加へたるのみならず 神田川の漲溢甚しく 目白駒井町  
埋樋崩壊し 大洗堀土手潰えて 牛込領に浸水し 普羽町九  
町目の上水堤亦決す 小日向筋 浸水床上五尺に及ぶ所有  
り 出水一件 京橋御前

金地院記録

八日 烈風雨 丑刻止  
徳川實紀 八日 この日また疾風暴雨ありて 淺草下谷の地 平地水  
のたかさ一丈にあまり 官船數多出して溺死をすくはる  
また關東の國々あまた所出水し 淺間山崩れ 松代 小諸  
忍 河越 古河 關宿の城みな大破しぬ

武江年表

八日 九日 又大風雨

(備考)

窓のすさみ 八月 大雨大風 東北より發りて武蔵 下總 上野 下  
野 信濃五州洪水にて 淺間山崩れぬとか 松城 小諸 忍  
河越 岩附 古河 關宿の城皆大破し 殊に松城小諸は  
甚だしとぞ  
下谷 淺草 千住邊 平地水一丈に越え 本所は元より  
海の如く 東北二里が間 溺死者かぎりなく 公儀より  
援舟を命ぜられ 其外にも諸人船を出し 食事をはこびて  
急を救ひ 大名或は町人などよりも 食事をととのへ 漂泊  
のものをたすけし 東北の地堤悉く破れて 川と平地と一

大風 総合編年表

大風山内古野にて八尺五寸其以下木數六本風折仕候

延享元年八月十日 (一七四四年九月一日)

九州、四國、山陰、奥羽諸國 大風雨、洪水

日向國史 十日 大風雨洪水あり 領内損害高二百十町 三千七百八  
十九石一斗八升 畑六百七十六町三反三畝 高四千五十石  
七斗八升 倒屋三百二十七 破船九 死人八 佐土原被  
害殊に甚しく 倒屋三百餘 死者四十三人を算す

高松藩記

十日 大風洪水 夜中海水溢至城市 漂流毀牆壁 潮海堤  
防多壞 禾稼大傷

松山叢談

七日 松山領 依風損毛高二萬六千五百石餘の旨御届有  
之

因府年表

十日 辰の刻より大風起り 御天守の大榎を吹折る 其他  
所々破損多し 夜半に及び漸く靜まる

八戸藩史稿

八日より十日迄 風強く稻枯れ九月十八日より同廿三  
日迄 大雨常水より高きこと一丈三尺餘 諸川洪水 堤防  
崩壊及び田畑水損落橋調書(中略)

一萬二千八百四十三斗  
落橋大小十三ヶ所

(備考)

徳國公世家 今秋風災

新北海道史

八月 大風迅雨雷電 於福山海口溺死者三十人 破壞船  
四十二隻  
編者註(北海道史)ニテ八月ヲ明記セズ又(大風迅雨)トス

つになりしかば大名十一人に仰せ付けられて 堤を築く  
事半年あまりにしてやみぬ  
信濃小室の山より大石飛出で 其元より大水出しと沙  
汰しぬ  
皆之近年新田をひらく事を 諸役人中規模のやうに成  
りて 水道をかへ 古池を埋め 山をあらし 樹を伐り出  
し山々はけ山に成りぬ かゝる事の一つりて 江戸開けし  
より以來 聞きも及ばぬ大水 たびく〜に及べり 移りか  
はる世のならひにこそ  
○香取郡誌

寛保三年五月二十一日 (一七四三年六月二日)

讃岐國 風水

讃岐災異年表 五月二十一日 風雨 海水騰躍 堤防多破

七月七日 八日 大風洪水

寛保三年七月二十九日 (一七四三年九月一七日)

陸前國 暴風雨

登米郡史 暴風雨

(参考)

金地院記録 大雨

寛保三年八月十三日 (一七四三年九月三〇日)

筑前、筑後諸國 大風

福岡縣災異誌 大風破損 此の節破損に付 風積り國中損失の事 四  
萬三千五百軒 一軒に付八匁充入用三百四十八貫目石原史記

第一編 暴風雨 寛保二年一延享元年(西曆一七四二—一七四四年)

延享元年九月二十二日 (一七四四年一〇月二七日)

江戸 風雨

金地院記録 既至辰刻 大風雨

延享二年八月十日 (一七四五年九月五日)

讃岐國 大風雨、洪水

讃岐災異年表 風雨洪水 人馬溺死

(備考)

野 史 八月 宇治川大水 風雨甚

福岡縣災異誌 延享二年 暴風雨あり 作毛損害多く村民餓死するものあり 御所書史料

延享二年九月十四日 (一七四五年一〇月九日)

江戸 大風

武江年表 大風 家屋を損ず （備考） 延享二年九月十四日 八幡の御所古御殿の事

延享三年二月十九日 (一七四六年四月九日)

京都 大風

續史愚抄 烈風 禁裏平唐門倒 （備考） 延享三年二月十九日 禁裏西御門の事

延享三年七月二十三日 (一七四六年九月八日)

因幡國 大風

續史愚抄 因幡 大風

因府年表 大風雨

延享三年八月二十四日 (一七四六年一〇月八日)

四國、山陰諸國並江戸 大風雨

鵜風調査報告 二十三日 藩内大風雨があつた （備考） 延享三年八月二十四日 御所書史料

讃岐災異年表 廿四日 風雨洪水 大漂稻田

因府年表 廿四日 大風吹き屋を剥き家を倒し破損最も甚だし 此日 怪我人等は即死せる者ありと言ふ

金地院日録 念四日 風雨

(備考)

蜂須賀家記 八月 風雨 傷禾

新北海遺史 八月 大風大雨 溺死六十人 民家破壊者五十戸 漂流者廿五戸 破船三百六十隻

（備考） 編者註（北海遺史）ニテ八月ヲ明記セズ 因ニ「日本災異志」ノ「北海遺史」ニ據リ本記事ヲ延享四年八月トス誤記ナルベシ

延享四年八月十九日 (一七四七年九月二三日)

讃岐、攝津、武藏、加賀、越中、越後諸國 大風雨、洪水

讃岐災異年表 大風 洪水

西成郡史 大風雨あり 江口村外島 作毛水流 （備考） 延享四年八月十九日 江口村の事

金地院日録 晚 風雨

謙徳公年表 金澤雨風強く 淺野川洪水に候 越中富山大北風大雨 前代未聞之大荒に而町中も満水 いたち川切込 此川筋 橋落家土蔵押流 田地損毛夥數候

政隣記 十九日 廿日 諸國雨風強 川々満水 損毛等夥者追々 相知 金澤も兩川水出 才川も橋桁迄水付 橋杭二本流失 越後筋別而水災多與云々

高田市史 十九日より大風雨 關 矢代兩川氾濫 堤防破壊し洪水 城の南門繩手を越して表堀に注ぎ 稲田橋落ち浸水家屋川 原町 寄町裏より陀羅尼新田 鍋屋町 直江町に及び潰家 十四軒 流失拾三軒 溺死者を出したり 築城以來未曾有の大水害なりと云ふ

佐藤家記 晚より大風雨 駒越町戸々床の上水浸四五尺許 材木流失 數十萬本 所々橋々流れ落 廣田赤田の兩新田 稲葉水中 七八尺の底に没し申候

(備考)

三貨圖彙 八月 攝河并關八州洪水これ有り

東藩史稿 十一月二十七日本年六月以後風雨洪水にて封内田畑十六 萬八千三百石餘損害あるを幕府に開す

延享四年八月二十七日 (一七四七年一〇月一日)

京都 風雨、洪水

續史愚抄 廿八日 依昨風雨所々洪水故 木津川増一丈六尺云

讃岐、攝津、武藏、加賀諸國 風雨

讃岐災異年表 風雨洪水

西成郡史 五日 神崎川出水

六日朝方 下新庄領堤防決潰水入 江口村人皆堤上に難を 避く 但淀川南岸北河内郡牧野村大字上島 落等の堤防延 長五十間決潰す 江口村の事

金地院雜記 陰 晚大風雨

大野木克寬日記 五日 自今晚甚風雨 至日中不止 淺野川才川滿水

第一編 暴風雨 延享元年—寛延元年(西曆一七四四—一七四八年)

延享元年九月十六日 (一七四八年一〇月二四日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 二日 大風洪水

中淺野川洪水に而小橋落流 其餘小橋共皆落流 在郷馬二 正流 死亡人一人 溺死者も有之由 所々水損多及 晚休止

寛延元年七月二十一日 (一七四八年八月一四日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 二十一日 二十二日 大風洪水

江戸 風雨

金地院記録 八日風雨 從戌刻至曉大風雨 小書院西方屋根瓦破損

因幡國 大風

因府年表 大風吹く 此日辰の刻後 魚鱗の如き雲霞き漸く曇りて 細雨も施し 午後及んで南風大いに吹き起り 申刻頃 最も甚しく爰刻に及んで稍々衰ふ 又夜半過ぐる頃 烈風 再び吹き起り茅舎を穿ち板屋を卷く 家々之を防がん爲 め巨石材木など持運べる聲嘩し 御天守の側なる舊樹 其 外巨松多く倒る 諸樹の葉皆吹損じ散じて恰も風の後の如し 禾稼の損 亡 人屋の破壊算へ難し

寛延元年九月十六日 (一七四八年一〇月二四日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 二日 大風洪水

第一編 暴風雨 延享元年—寛延元年(西曆一七四四—一七四八年)

十六日 大風洪水

寛延元年九月十八日（一七四八年九月二日）  
廿四日

江戸 風雨

金地院日録 十八日 風雨  
廿四日 夜風雨

寛延元年九月（一七四八年九月二日—一〇月二日）  
肥後國並北海道 大風

熊本市史 九月には熊本地方に「岩起」と稱する暴風が吹いた  
新北海道史 九月 大風迅雨 溺死者十人 破家九十二戸 破船三百  
十六隻

寛延二年六月二十六日（一七四九年八月八日）

讃岐國 風雨、洪水

讃岐災異年表 風雨洪水

寛延二年七月二日（一七四九年八月一日）

山陰、近畿諸國 大風雨、洪水

因府年表 三日 夜前よりの烈風大雨にて巳の刻頃出水

因伯難記

三日 大水にて袋川筋向の家々難儀申候 今日江戸御目付  
衆へ御家中の諸士御會ひの由まかり出で候様御觸の處水  
邊に罷在る西の大方患に致し罷出申候事 尤も諸國共に  
大水 別して播州姫路見付共流れ其外流死の人数七八千  
許と有之由沙汰に候

續日本王代一覽 三日 播州姫路大水 千餘人死す 丹後但馬大風雨  
播磨鑑 三日 大洪水 加古川堤破れ人家に溢れ田畑損壞す 姫路  
市川筋同洪水 京口外門壊れ 西川筋船場川溢れ 町家流  
れ 溺れ死する者三千餘人と云 御城始つてより以來無  
双の風水大破也

姫路市史 朝日 早朝より大雨あり三日夜に至るまで止まず 船場川  
筋水量二丈許 姫路城下大約浸水し 船場方面は特に甚し  
く其床上に及ばざりしもの本徳寺及明石家のみなりしと  
云ふ 此時潰家四百七十五軒 流死者三百三十七人 領内  
の死者 三千人に及べり

寛延二年七月二十五日（一七四九年九月六日）

江戸 大風雨

武江年表 大風雨

寛延二年八月一日（一七四九年九月二日）

江戸並陸奥國 大風

武江年表 大風起る

津輕國數記一編 七月晦日 夜 西南の大風に吹付られ 翌日西  
風吹き 此風にて凶作に相成申候

寛延二年八月十三日（一七四九年九月二日）

江戸 大風雨、洪水

武江年表 曉より北風 大風となりて牛込小日向出水 下谷 淺草邊  
迄溢れ出 高田關口邊家を流し人を溺す  
江戸川通り橋々押流し 小石川通大水 神田上水掛樋流れ

百餘人に及んだ（續日本王代一覽）

讃岐災異年表 十九日 大風洪水

寶曆元年七月二十五日（一七五一年九月一日）

江戸 風雨

金地院雜記 廿五日 陰 夜風雨  
廿六日 風雨

寶曆二年七月四日（一七五二年八月二日）

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 大風洪水

寶曆二年八月九日（一七五二年九月一日）

薩摩、讃岐、因幡諸國 大風雨、洪水

鳥津國史 大風洪水  
讃岐災異年表 九日 十日 大風洪水

因府年表 十日 夜 大風雨洪水

寶曆三年三月五日（一七五三年四月八日）

江戸 大風

傳法院日並記 四日 風吹  
五日 同斷（中略）

金龍山聖天境内鳥居今日之大風に付 八半時相倒申候  
六日 夜入風吹

寶曆三年六月十八日（一七五三年七月一日）

昌平橋 筋違橋其外 神田川橋々流る  
兩國橋大橋悉なし 本所 深川水乗らず 九月にいたり  
漸晴天となる

金地院日録 十三日 大雨疾風 申刻快霽 小石川邊出水 所々橋落  
候由 水戸殿表御門脇高崩崩 水一丈餘之由也

江戸洪水記 今晚より西風強 四ツ時より別而大雨北風強 九ツ半時  
頃より小日向 牛込御門邊 日白下 小石川邊大水 深  
所は床上四尺餘水付

東京市史稿 江戸大風雨大水 牛込 小石川 下谷 淺草を襲ひ牛込  
小石川兩地 被害最も甚し 江戸川及下流神田川の水勢激  
烈を極め 之に架する諸橋大半流失し 其全きは僅に一  
二を算するに過ぎず 大川の出水亦少量ならずと雖 水  
防宜しきを得て兩國橋辛うじて事無きを得たり

而して從來 出水地と目されたる本所 深川は殆ど浸水  
を見ず 蓋是年夏季以來降雨多し 七月尙霽す 八月に及で秋  
霖愈甚しく 遂に是日に至り 早曉北風激烈 大雨之に加里  
たるを以て此結果を生じたる者也

○徳川實紀 青橋年解考 續史愚抄

寛延三年四月十三日（一七五〇年五月一日）

京都 烈風

續史愚抄 烈風破屋云

寶曆元年閏六月十九日（一七五一年八月十三日）

四國 大風

颱風調査報告 十二日 暴風雨 海上波浪荒れ 船數十艘破損死者一

薩摩國 大風

島津國史 大風

寶曆三年 六月二十六日 (一七五三年八月二日) 八月十八日 (一七五三年九月二日)

陸奥國 大風雨、洪水

八戸藩史稿 六月廿六日より同廿九日迄北風にて降雨強く常水より一丈三尺餘水増

同八月十八日より同十九日迄大風雨 常水より一丈餘水増 同月廿五日より度々霜降被田畑川欠青立及風損水損毛之覺

一、高二萬石之内 一萬千八百五十二石三斗二升五合餘  
一、潰家四十三軒 一、半潰家六十九軒 一、倒木大小千七百五十三本 一、山崩五十五ヶ所 一、落橋大小二十七ヶ所  
右之通御座候 尤人馬怪我無御座候

(備考)

東藩史稿 十一月二十九日 此年秋封内洪水あり十八萬四千餘石 田損あるを幕府に聞す

寶曆四年七月十一日 (一七五四年八月二日)

紀伊國 大風雨、洪水

熊野史 七八九日 大洪水 石橋一つ殘 船町四辻へ水入 古座高川原 古田民屋流 人四十人餘流死す

紀州災異年表 十一日 大風雨 日高川洪水 堤防欠潰 田邊にて破家五七〇

(備考)

日本震災凶謹放 七月 土佐 大風雨海嘯 土佐年代略

寶曆五年八月二十四日 (一七五五年九月二日)

九州、山陰、四國諸國 大風雨

石原家記 夜九ツ頃 月の出に大風吹く 一百四十三軒倒家 七十軒貫家 七十三軒掘立 二百七十三軒馬屋土屋

有吉記録 晝七ツ時より東風又西風にて夜通し 前代未聞の大風雨にて取分け小倉より木屋瀬邊迄 嘉麻 穂波 遠賀 夜須 御笠 上座 下座邊大風にてころび家木夥敷人牛馬事所  
\*にて多し

凶年歳土禮 (上略) 其上二十四日五日の大暴風にて作毛不殘 大木古木吹潰し 大凶年に相成候

續史愚抄 此日 九州大風 殊豊前甚云

因府年表 晚 大風雨と成り翌朝に越えて止まず府下潰家多し 之に依て今年は三十六年以來無之大凶作と成れり

岡山縣通史 津山大風 玉置家記  
松山叢談 松山大風

寶曆五年九月四日 (一七五五年一〇月九日)

京都 大風雨

續史愚抄 愛宕山 大風雨云

寶曆六年二月 (一七五六年三月一日一三〇日)

北海道 大風

新北海道史 大風 海陸破損多

寶曆六年九月十六日 (一七五六年一〇月九日)

近畿、東海諸國 大風雨、洪水

續史愚抄 今夜 烈風大雨 淀川大洪水 因淀橋 宇治橋及浮島十三重石塔橋短柱等流亡

近江 伊賀 伊勢 美濃 尾張 三河等亦大水云

岡山縣通史 美作 大風雨 風水同害

攝陽奇觀 十六日夜 大風雨洪水

伏見淀川 大洪水に而大橋落ち浮島流る 大坂會根崎新地 梅田大仁野田 福島浦江不殘水つき死人多し 大坂より野敷旅行をひく大和木津川高水 木津の里流れ 死人多し 三笠山崩れ 春日の杜梅の木千本餘枯る、山城近江伊賀 伊勢美濃尾張三河大洪水 紀州若山紀の川より切込み 死人多く有之

南紀徳川史 若山暴風大雨に而紀の川出水 御城下浸水す 紀の川筋出水就中甚敷

十七日 名草郡栗林に而一丈四尺六寸の高水と云 同郡八軒家其外所々の堤切れ御城下へ浸水 所々橋々流失 屋宅潰溺死も有之 勢州御領分も風雨に而損亡に付公儀へ御達有之

熊野史 朔日より雨降り始十六日の夜 大風雨大水 石垣五つ殘る 庵主不明門損亡す 其外寺井外廻り大破損 同夜 三輪崎にて廻船十艘破人も損失

十六、十七日 若山御城下へ大水入橋三つ落る 古座大水 戊年より五寸ひくし 十七日大水 城州宇治橋流落る 同所橋供養の石塔流倒三百年來未曾有の事也 是始也 江州水損家流入死不知其數 諸國一同の大水損 前代未聞也

第一編 暴風雨 寶曆三年一寶曆七年(西曆一七五三—一七五七年)

大阪府誌 十七日淀川暴漲し其の北岸三島郡大冠村大字大塚番田等の植賣を破壊し其の南岸は北河内郡牧野村大字上島外三ヶ大字に係る堤塘延長五十二間を決す 尙 安成に在りては三島郡味生村大字別府の堤防を破り 同村一圓その浸水を被る 同日 河内國石川亦暴漲し南河内郡道明寺村大字國府の堤防を決して家屋の流失二十戸に餘り 死亡者三十六人を出だせり

西成郡史 十日頃より降雨打續き 十七日に至りて遂に洪水あり 而して中津川筋光立寺村領字城村堤防損所 同夜四ツ半決潰し 南中島の地大部分水浸す 南河内郡道明寺村 十日頃より雨度々降り續き 十七日ころ風洪水にて同夜四ツ半光立寺村堤塘より切込水漲へ 十八日九ツ時手前床より一尺二三寸相成候 村長所傳記

寶曆七年七月二十五日 (一七五七年九月八日)

紀伊、土佐、讃岐諸國 大風雨

熊野史 二十五日 風雨強水 木の本浦大浪 民家四十軒流 大狗子通右疊浪にて崩

龍風調査報告 二十六日大風雨ありて 浦々激浪襲來し損害多かつ

讚岐災異年表 二十六日 風雨

寶曆七年九月五日 (一七五七年一〇月一七日)

讃岐、紀伊諸國 風雨

讚岐災異年表 風雨 牛馬有死

紀州災異年表 大風雨 南部にて破船十一隻

寶曆七年九月二十六日 (一七五七年一月七日)

京都 大風

續史愚抄 京師大風云

寶曆九年八月二十九日 (一七五九年十月十九日)

江戸 大風雨

金地院記録 陰午雨 夜中大風雨 地震

寶曆十年七月十七日 (一七六〇年八月二七日)

江戸 烈風

金地院日録 十七日 晴烈風

十八日 霽 微雨 晴且陰 晚微雨 子刻過降雨風烈

寶曆十一年三月 (一七六一年四月五日一五月四日)

陸奥國並北海道 大風雨

續日本王代一覽 三月 奥州 松前大風雨 船七十艘破損

備考註(日本災異志)「續皇年代略記」ヲ參據トシ四月ノ事トシ「泰平年表爲三月」ト註記ス

寶曆十一年八月十七日 (一七六一年九月一五日)

江戸 大風雨

金地院記録 雨子刻至寅 大烈風雨

寶曆十一年十一月二十三日 (一七六一年十二月一八日)

下野國 大風

德川實紀 下野國大風ふき 日光山堂社破壊

(備考)

香取郡誌 十一年大風雨 貝塚村人家類損するもの廿餘軒

寶曆十二年二月二十二日 (一七六二年三月一七日)

若狹國 大風

續日本王代一覽 若州大風

寶曆十二年五月二十六日 (一七六二年七月一七日)

播磨國 大風

續史愚抄 此日 播磨赤穂大風

(參考)

西成郡史 大津浪あり 新田瀬海の地堤塘決潰す 中島新田人家大に

損し了願寺什器並に書物の類流失せんとし 辛じて全きを

寶曆十二年六月二十五日 (一七六二年八月一四日)

美作國 大風

岡山縣通史 美作大風 加茂諸村害多し

寶曆十二年七月八日 (一七六二年八月二七日)

九州諸國 大風

續史愚抄 九日 昨今九州大風云 年代略記

寶曆十二年七月十五日 (一七六二年九月三日)

筑前、因幡諸國 大風雨

福岡縣災異誌 大風 損毛御届 家中碌を滅す 續合編國年表

因幡年表 夜大風雨

寶曆十二年七月二十三日 (一七六二年九月一一日)

陸奥國 大風

八戸藩史稿 當年四月上旬より五月中旬迄旱魃 同下旬より中旬迄

冷風吹續水雨度降 七月二十三日廿四日共に大風に而旱損

風損左に

一、高二萬石之内 一萬六千九百九十六石九斗餘

内六千七百八十五石八斗 田形

三千九百一十一石一斗 畑形

寶曆十二年八月八日 (一七六二年九月二五日)

九州、山陰諸國 大風雨、洪水

福岡縣災異誌 八日夜四ツ時より大風 翌九日四ツ時迄 大木倒家倒

下の町家七家横丁より出行當に有漬る 石原家記

肥前佐嘉藩の船十一艘 田の浦にて風波の難に遭ひ 肥前

入三十二人 長門人二十一一人溺死す 西司事

大風御損毛御届 田島高八千五百五十石餘 倒家百軒餘

倒木四千五百五十餘 死牛一疋 右は朝五ツ時過より其の

風烈しく九日四ツ時迄大風吹續き 御家中破損長屋等 所

★崩れ候也 澤田傳

因幡年表 九日 雨天 丑刻頃より西風強く吹き大雨頻りにして午

後頃 嵐に吹き轉じ 洪水となり 府下床を浸す所あり

夜半頃に至り水勢減す

因伯雜記

九日 鳥府亦洪水

第一編 暴風雨 寶曆七年一寶曆十三年(西曆一七五七—一七六三年)

去る享保十四四年 鳥取大洪水と云へる 以來の水と云ふ

寶曆十三年 四月二十日 (一七六三年九月二二日)

陸奥國 大風

寶曆年中八戸御領大地震并洪水略記 四月二十日 西大風發て下民の

居宅破損する事不少

六月二十六日の夜翌二十七日迄大雨東風に替る

二十九日より七月大の三日まで 晝夜雨 東風にて寒き

事九月のさま也

寶曆十三年七月十九日 (一七六三年八月二七日)

飛騨國 大風

飛騨國年史要 飛州大風あり

寶曆十三年八月十五日 (一七六三年九月二二日)

陸奥國 大風雨、洪水

八戸藩史稿 五月下旬より雨降續冷氣強く諸作不熟之處 八月十五

日夜より同十六日夜中迄東北風烈しく大雨にて所々山崩

山水川々増水常水より二丈餘洪水

一、二萬石之内 一萬九千七百八十一石損毛(中略)

流家二百九十八軒 禿家百六十二軒 半禿家五十三軒

埋家二十七軒 大小山崩二百二十七ヶ所 落橋大小三百七

ヶ所 堤押切二十八ヶ所 流失土藏十八軒 流失漁船大小

五十三艘 倒木四百六十七本 溺死三人 流失牛馬四十三

疋

(參考)

金地院記録 十五日 烈風迅雨 日誌(暴風雨)二卷

寶曆十三年九月三日 (一七六三年一〇月九日)

近畿、北陸、關東諸國 大風雨

續史愚抄 大風 大坂通船塢 溺死者及千人 又播磨東國同云

攝陽奇觀 大風つなみ 夜八ツ時より大風雨に而五畿内近國所々家をたをし 大木を倒す 別而大坂川口安治川木津川へ大船とも夥しく吹よせ 橋八ヶ所落人も損ず 津なみのよし南海にも破船多く 播州の海にても 行方知れざる船多しといふ 又東國も同じ

泰雲公御年譜 四日 曉天雷鳴三聲 強風有之 大風相成 所々破損多野田道松十四本吹折 或は根返 寺町邊倒木にて損家二軒 御殿橋倒木にて老女一人相果候 其外御園扉損 門等吹倒 多有之候 曉天之雷三度目殊外強 其光り長さ十間餘幅 五間程之物空中を通り 其後大風吹出申候

正徳二年八月十日 横山風與中鳴候 大風よりは今一篇強 羊角風杯にても候哉 御城下破損夥敷 金澤廻り并近在潰家三百六十軒餘 浦々獵船損失無限候 小松御城も破損夥敷 大正持三國邊も同斷に候 京 大坂 近江 越前 若狭等同事之由 京 大坂邊 爰許より時刻少早く九時半時より吹出八時半時吹止候由 大坂は別而強 川口に繋置候大船川上へ吹上 橋に障り橋落 川端潰家も有之 其外繋船損夥敷由 越前船橋も吹落往來留相成旨 上道小松邊並松五百本餘吹倒候 惣體山方は風當無 海邊夥敷 當申候 能州は御城下よりは格別強 壘を吹上庭へ吹出申 體也 一宮本社及大破候

(參考)

住用郡誌 三日より三日間洪水 千草川決潰す

(備考)

蜂須賀家記 八月 風雨傷禾

明和元年八月十一日 (一七六四年九月六日)

筑前國 大風

有吉記録 申の刻より大風 終夜吹

明和二年六月十六日 (一七六五年八月二日)

筑後國 大風雨、洪水

福岡縣災異誌 大風雨 洪水あり 潰家千三百七十四戸 内侍屋敷二十五戸 立花家文書

明和二年七月三日 (一七六五年八月一九日)

近畿諸國 大風雨

攝陽奇觀 山城 近江 河内 播磨 伊勢 大和 紀伊近國大風雨

續日本王代一覽 五畿内 近江 伊勢 紀伊 播磨 其餘諸州大風雨

續史愚抄 五日 大雨 伏見洪水流入家 稻荷社邊平地水三許尺大津邊山崩埋走井驛人馬死 近江 河内 播磨 伊勢大和 紀伊等 大風雨云

編者註(五日、日附へ備記セルモノト二日違へり「泰平年表」「野史」等執レモ三日トセル故三日ヲ採レリ 何レガ正シキカ未詳ナルモノ一聯ノ記事ト解サル、故 茲ニ併記セリ)

明和二年八月二日 (一七六五年九月一六日)

第一編 暴風雨 寶曆十三年一明和三年(西曆一七六三—一七六六年)

大聖寺藩史談 四日 大聖寺大風

金地院記録 三日 大雨至夜 大風徹曉

四日 朝大風雨 午後晴

明和元年六月三十日 (一七六四年七月二八日)

紀伊國 大風雨

熊野史 晦日 大風雨大水 本宮町家坊方へ水入る 大橋へ材木八百本かゝる 新宮領浦々へ材木寄る 奥筋夥敷材木を流す

紀州災異年表 晦 田邊 大風雨 田邊町誌

攝陽奇觀 大風雨に而西國難船多し

(參考)

東京市史稿 晦日 晴且陰 時々疾風暴雨

明和元年七月十四日 (一七六四年八月二日)

紀伊國 大風雨、洪水

熊野史 十四、五日 大風雨大水出る

(備考)

前田氏家乘 七月大風 稻害多く一萬石を免除せらる

明和元年八月三日 (一七六四年八月二九日)

陸奥國 大風

八戸藩史稿 當二月下旬より七月月上旬迄旱魃 其上八月三日大風にて田畑損毛覺

一、高二萬石之内一萬千三百五十四石八斗損毛 潰家七軒 半潰家二十五軒 倒木五十二本

四國、近畿、關東諸國 大風雨、洪水

讃岐災異年表 二、三日 大風洪水 海潮漲溢 八日又大風洪水

熊野史 二日大風雨 三日大水也 川原家流す 石階五つ残る也

近年大水也 本宮別て大水禮殿階流る 若山浦々津浪入る

攝陽奇觀 三日 又もや大風雨同斷

續史愚抄 三日 自昨暴風 此日南都大風 春日社稻垣前杉木倒懸第

四寶殿上及被戸社 御供所邊大木倒 堅横絶人路 其外山

木已下倒不知數 希有風云

名古屋市史 二日 三日 七日の大雨に依りて 熱田 名古屋の市中

一面に水に浸り 本町筋の町家も床板を撤するに至れり

而して東は奥田町より 濱街道に至り 西は佐屋街道より

津島に至る間 一時皆水中に没す 首領日記

武江年表 三日 大風雨 深川邊其餘床上へ水乗る

金地院記録 三日 雨烈風 至夜中風靜 近年之大風 表門夜中ま

明和二年八月二十八日 (一七六五年一〇月二日)

陸奥國 大風雨

八戸藩史稿 私領分奥州八戸當四月下旬より七月迄旱魃 八月廿八

日廿九日之兩日 大風雨に而田畑損毛高

一、二萬石之内一萬七百八十五石四斗損毛

明和三年七月二十八日 (一七六六年九月二日)

江戸並陸奥國 大風雨

金地院記録 雨風 (續記) 暴風雨 同日二日

續談海 雨天 小日向筋又々出水

八戸藩史稿 四月下旬より七月迄旱魃 八月廿八日 廿九日兩日

大風雨に而田畑損毛高  
一、二萬石之内一萬七百八十五石四斗損毛(中略) 潰家  
十五軒 半潰家三十七軒 山崩三ヶ所 落橋五ヶ所 倒  
木百五十本 尤人馬怪我無御座候

明和三年十二月九日(一七六七年一月九日)

京都並播磨國 大風

日本災異志 京都及播磨大風 破船六七百艘 備前代時記

明和四年七月二十一日(一七六七年八月一日)

讃岐國並大坂 風雨、洪水

讃岐災異年表 廿日 廿一日 風雨洪水

攝陽奇觀 二十一日 大風雨 木津川高水 淀大橋落る

明和四年八月十六日(一七六七年九月八日)

江戸 大風雨

金地院日録 大風雨(記録) 中略(七作)

明和五年七月二十一日(一七六八年九月一日)

四國、近畿、山陰諸國 大風雨、洪水

讃岐災異年表 洪水 堤防破池多破潰 國民賦役之數五十六萬七千  
餘人云

續史愚抄 大風雨 折木發屋 櫻町殿南面假門倒

攝陽奇觀 大風雨 木津川高水 淀大橋落る

宇治山田市史 風雨洪水の爲 宮川中川原口堤十間餘切れた高松元光

因府年表 洪水 所々破損少からず  
因伯難記 夜洪水 此日 二百十日也 諸家破損多し

明和五年八月十九日(一七六八年九月二九日)

攝津國並江戸 大風雨

西成郡史 大風あり 新田方面高浪にて堤防損所多し 其西新田支配  
人小兵衛より廿五日堤方奉行へ届出は左の如し

堤崩所十五間 五十間 八十間の三箇所 切所二十五間  
右は當十九日より大風に御座候處昨二十一日の夜高沙高  
浪にて御園役堤崩所間敷相改書付申上候 乍恐御見分の  
上急々御普請被爲仰付被下候は難有奉存候 以上西成郡史

東京市史稿 二十一日 風雨 金地院日録

明和六年八月一日(一七六九年八月三十一日)

筑後、伊豫諸國 大風

米府年表 大風

松山叢談 松山領大風 損毛有之

明和七年五月五日(一七七〇年五月二九日)

江戸 大風雨

金地院日録 晴 午後 大風雨

明和八年七月二十二日(一七七一年九月一日)

近畿諸國 大風雨、洪水

續日本王代一覽 大風雨 京 大坂 伊賀 伊勢洪水 山州淀大橋落  
水車破損す

八戸藩史稿 六月 陰 午前烈風雨

七日 晴 昨日暴風 洲崎邊之海上 船八艘覆 四十人餘  
溺死之由

安永元年六月十八日(一七七二年七月一八日)

筑後國 大風雨洪水、高潮  
福岡縣災異誌 風雨洪水 柳河領津浪人家數多潰 米府年表  
柳河領内大風雨す 海嘯起りて堤防破損多し 幕府に救  
助を乞ふ翌年に至り救助として金五千兩を貸與し之を  
十ヶ年賦に返金す 山門郡誌

(参考)  
飛騨編年史要 二十日 強雨出水 就中益田川筋所々山抜け川缺け  
多し

安永元年七月三日(一七七二年八月一日)

九州諸國 大風雨

續日本王代一覽 肥前肥後筑後大風雨洪水 人多死亡す  
長崎年表 二日夜半 大風雨 翌朝に達す 家屋船舶破損多く 唐船  
破損五艘

福岡縣災異誌 大風雨 海嘯起り堤防破損す 山田文書  
成徳院文書

安永元年八月二日(一七七二年八月三〇日)

東海道、關東諸國 大風雨

續史愚抄 東國大風雨 江戸壞屋 倒民家 永代橋中央三十間流亡  
入道一品公遊親王 爲再住下向于武藏於路次 續江 遇風

明和八年八月十八日(一七七二年九月二六日)

江戸 大風雨

金地院雜記 大風雨

明和八年八月十八日(一七七二年九月二六日)

江戸 大風雨、高潮

武江年表 大風 人家倒れ廻船もやひ切れて 永代橋へ當り大橋前に  
て止る 又一艘側島と石川島の間へ吹上 人部を以て出す  
武江年表補正略(八月 大風 廻船もやひきれて 永代橋へあたり  
云々)

當るのみに非ず 永代橋を突破りたるにこそ 兩國橋  
左右の欄干を吹倒す 又三千七百兩にて出来しといふ東  
本願寺御堂も梁やぶれて柱倒れ平地に狼藉たりと云へり  
芝浦津浪 本所邊風雨つよく 死人数を知らずと云ひ傳  
ふ

八月朝日大風 翌二日の事なり  
備考註(本記事中ニハ安永元年八月ノ大風ト混同セル部分アリ)

明和八年八月十八日(一七七二年九月二六日)

江戸 大風雨

金地院雜記 大風雨

明和八年十月六日(一七七二年十一月二日)

江戸 烈風雨

第一編 暴風雨 明和三年—安永元年(西曆一七六六—一七七二年)

一六五

難 從者多死（人妻四也） 亦參河殊甚云（風神記）

武江年表

朝日二日 大風雨 家屋を吹潰す  
徳川實紀 二日 酉の刻 辰巳の方より風つよくふきいで戌刻にいたりてはいよ／＼はげしく雨さへそひて 大木をぬくばかりなり

この春の災後 家々の邸宅やうやう替作とゞのひしに屋舎 塀垣など のこりもなく吹潰し 此夜 永代の橋もかたぶき 深川地には潮をしのぼり 近年にはいと稀なる事とぞ聞えし

半日閉路

朝日風雨 登城之諸侯長柄傘悉く吹折る  
二日夜 六時半頃より九時半迄 大風雨木を吹折り 人家を壊つ 永代橋へ海上の 元船を吹付 橋の中程を破り 兩國橋は兩側の欄干を吹倒す 火災の後新に建られし諸侯の屋形 大手前假御腰掛悉く吹潰す 殊に三千七百兩にて出来しと云ふ 東本願寺御堂壊れて柱倒れ 平地に狼藉たり 芝浦へは津浪をあげ 本所邊には出火並出水有りて 水火の苦を受け 近にも處によりて風雨強く死人数を知らず 堺町中村座曾請出来し處 兩さじき切落悉く吹潰す 尤舞臺櫓は恙なし 江戸難風大騒 一枚摺出る

寶曆現來集

二日は南大風雨にて家藏餘多吹潰ける中にも下谷淺草邊は當春の出火此方 新家作故に潰家多く 此年は何作に依らず 木芽花實に至る迄宜からず 誠に凶年なり

續日本王代一覽

朝日遠州より武州に至るまで大風雨 翌日三日 江戸巽方より大風吹大雨降る 樹木を倒し民家破 舟覆人多死 永代橋流落る

編者註（翌日「泰平年表」へ同日ニ作ル 恐ラク「翌日二日」ノ誤カ）

社破損

龍耳集 廿日夜より京大風吹候へ共翌廿一日は曇天ながら風も吹止有之所祇園之御旅所に大昔より有之榎の大木南側に二本北かには堂本有之所朝之五ツ時分風もなく自然にたをれ申候（中略）大坂は格別の事なし

續史愚抄

二十一日大風 折木發屋 祇園旅所大木折 因惡王子小社及石鳥居倒

攝陽奇觀

十二日より廿日迄大雨 同二十日 京都大風

西成郡史

廿日夜 大風高浪を起し新田多く被害を受けたる旨 西島新田支配人善助代治郎兵衛より 此月廿二日を以て奉行所へ注進に及ぶこと左の如し

乍恐口上  
一、神崎川筋西島新田海表御園役堤畔廿日夜九ツ半時より東風強く明六ツ時より南風にかはり 大風高浪高浪にて大破仕候に付 乍恐御注進申上候 已上  
西島新田の損所堤防七ヶ所 決潰又は崩れ 大崩七十二間 崩所其他六ヶ所 三百四十七間 西島新田御記

因府年表

二十一日 洪水  
佐用郡誌 二十三日 洪水あり

安永元年九月十七日（一七七二年一〇月一三日）

江戸 大風雨

續談海 雨天夕方より北風吹 夜に入大風になり又々所々破損す 近にも同断之山

金地院年中臨時事務摘要記

巳刻より申刻迄 大風雨 半日閉路 大風雨 北風降 朝より暮迄

第一編 暴風雨 安永元年—安永三年（西曆一七七二—一七七四年）

香取郡誌 朝 東南風烈しく 同二日 南風尤も強く 禾稼を損すること多し

（参考）

龍耳集 八月初日二日兩日 大風也 京大坂は靜也

安永元年八月十七日（一七七二年九月一四日）

江戸 大風雨、洪水

續史愚抄 此日 亦武藏大風 殊征夷大將軍（幕府内）城内壊 或倒舎（幕府）  
武江年表 大風雨 再度小屋を覆す 本所 深川出水 床上迄乗る 大船 永代橋を損す

武江年表補正略 八月初日二日の大風雨 亦十七日の大風雨にて吹潰したる民屋 御府内は數しれず 伊奈氏支配の關東筋 土民の家四千餘軒と云

後見草

是は朝より北風強く 過し二日の風雨のことくいとすさましく吹けるに 其勢をくらふれば 先のあらしにはおとりしか其節に助かりし家居の分は南の方へ倒れしなり

（参考）

攝陽奇觀 十二日より廿日迄 大雨

安永元年八月二十日（一七七二年九月一七日）

四國、近畿、東海道諸國 大風雨、洪水

續被災年表 廿日 廿一日 大風洪水 家屋崩壊するもの一萬九千餘戸 船を破る大小一百四十二艘 溺死する者男女四十六人 牛馬七十四頭

續日本王代一覽 二十一日 東 美濃近江 西 備前讃岐等大風雨 民家を倒し 樹木折れ人多死 京都も大風雨 祇園惡王子

安永二年六月十九日（一七七三年八月七日）

伊勢國 大風雨

續史愚抄 十九日烈風 此日伊勢大風 外宮北鳥居倒及五丈殿九丈殿末社（三）等壊 是大木倒故云

宇治山田市史 二十九日大風雨あり 外宮大楯數株並に北鳥居が倒れた 行金（伊勢）書

編者註（記事相假テ日附ニ十日ノ相違アリ 今 正否未詳ナリ）

（備考）

泰平年表 六月 伊勢路 桑名邊洪水 美濃路土砂降 淀伏見洪水

安永二年七月十一日（一七七三年八月二八日）

攝津、山城、加賀諸國 大風雨、洪水

泰平年表 八日より十二日迄 大風雨 山州及諸州洪水 十五日迄往來止る

攝陽奇觀 八日より十二日迄 大風雨 淀川洪水

續史愚抄

頭書日記 今日夕方より雨 夜中雨風強 犀川淺野川満水 殊淺野川洪水にて堀川邊より小橋邊町屋 侍中屋敷へも川縁之家々は水付候 小橋は彦三町之方 半分流落也 同夜九時過より段々水引候

安永三年五月五日（一七七四年六月一三日）

京都 風雨

續史愚抄 此日 雲覆愛宕山 大風暴雨 山鳴巖顛 大木倒所々崩 鳴瀨邊 忽平地水二尺餘云 鳥神



安永三年六月二十三日 (一七七四年七月三十一日)

京都、大坂、江戸 大風雨、洪水

續史愚抄

大風 技木何屋 愛境内侍所假殿 倒平唐門 發四脚門亦  
五條三條等橋高欄飛 寶永五年已降事云

續日本王代一覽

晝八時より暮方に至て大風雨 瓦石を飛ばし樹木を  
倒す 京都三條高欄倒れ 醒か井通 五條南 義經の月見  
松 凡そ三圓半の大木吹倒す 諸所の民家皆吹倒さる 大  
坂川口泊る所の船覆り溺死する者千二百餘人 播州 江州  
山州殊に甚し

龍耳集

大風雨有之 ハツ頃は雨止み只風のみ強く我等始め店に  
居候に向ひ鴻庄之やね東郷上田之借屋屋根之五吹ちり申  
候事誠に木の葉の如くひら／＼として吹ちり風見廻市中  
往來皆陣笠を着し申候 川口邊船々數千石舟かちあひ  
碎け 御番所邊迄數艘吹込 市岡邊都て堤之内へ千石舟吹  
入れ五六日船出不申大難義 其外安治川邊打潰れ申候家數  
不知と申候 京攝河江州播州邊皆々同様のよし

西成郡史

大風雨あり 高沙高浪にて大切大崩を生じ 西島新田支配  
人善助より堤方奉行所へ左の通願出でたり  
大切所百五十一間 切所百八間 崩所百七十八間  
右は六月二十三日 大風雨高沙高浪御國役堤切られ 御  
田地一面の沙入に相成歎ケ數奉存候 西島新田郡史

武江年表

大風雨 家を損じ樹木を倒す  
十三日 けふ 大坂堺大風雨して海あれ舟多く覆溺せし  
と云ふ

徳川實紀

編者註(十三日、二十三日ノ誤記ナルベシ)

大梁公御年表

十八日大雨に而淺野川筋水溢 馬場邊等之水五十ヶ

安永五年七月二十六日 (一七七六年九月八日)

因幡國 大風雨

因府年表

大風雨

安永五年八月二十一日 (一七七六年一〇月三日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表

大風洪水

安永五年九月 (一七七六年一〇月一十一日一〇日)

陸前國 大風雨、洪水

東瀆史稿

十二月三日 六月、九月 大風雨 四十萬石餘田穀損害あ  
るを幕府に聞す

二十四日 今秋 大雨洪水にて 流亡損害の數 溺死九人  
居家百三十五棟 橋梁及び道路五百八十四所 船五十二艘  
堰堤樋水門石垣等 三千七百九十五所 山の崩壊六百六十  
二 大小の摧折 二千六百六十二棟 麥流失五十一萬千四百  
十三束 米粟廿九萬六千九百四十七束 雜穀二千四百五十  
六石あり之を幕府に聞す

安永六年七月二十五日 (一七七七年八月二七日)

筑後、筑前諸國 大風

福岡縣災異誌

大風潰家あり 柳河郡役所見記  
巳刻 東南大風 午の下刻より西風 約合編年表

安永六年八月二十五日 (一七七七年九月二六日)

長崎 大風、高潮

第一編 暴風雨

安永三年—安永八年(西曆一七七四—一七七九年)

年以來之大水之由

袖裏雜記 十八日より廿三日迄大雨 御領國之内洪水に而入川 御田  
地水込に成 御損毛高大概六十萬石計 且所々川除井人家  
等破損 人馬怪我も有之

安永三年七月二十八日 (一七七四年九月三日)

江戸 風雨

金地院記録 雨 入夜風雨

安永三年八月二十六日 (一七七四年一〇月一日)

江戸 風雨

東京市史稿 夜來より風雨 午陰晚晴

安永三年八月 (一七七四年九月六日—一〇月四日)

北海道 風雨

新北海道史 八月 大風暴雨 破船二十三 燒亡船三隻

安永三年九月二日 (一七七四年一〇月六日)

丹後、但馬諸國 大風

續史愚抄 此日 丹後 但馬等大風 壞廢倉

安永四年七月一日 (一七七五年七月二七日)

陸奥國 大風

承記録 當六月各方野邊地廻材木 朝日大風に而野邊地近濱に而  
筏切拂則平内御領白砂濱へ流寄 取集野邊地御廻之處右振  
合並に諸入方割合双方相片付不申

續史愚抄 此日肥前長崎大風 揚洪浪 人多死云 年代略記

安永七年七月十日 (一七七八年八月二日)

日向國 大風雨

日向國史 大風雨あり 楠間御手炭山崩壊し死者六人 分知損害高千  
九百五十石 潰家二十九あり 領内損害高田畑一萬八千九  
百三十四石五斗餘

(參考)  
續史愚抄 十一日 淀川洪水 橋傾云

安永七年八月八日 (一七七八年九月二八日)

筑前國 大風雨

福岡縣災異誌 大風雨 晝迄大雨 未の刻より南風俄に吹出 西の刻  
より西に廻り戌刻鎮る 田畠損毛 大木倒民屋崩 死人  
多 香椎宮崎杉折る 約合編年表

(備考)  
續日本王代一覽 八月 勢州白子浦大風 渡海の船多破損す

安永八年七月 十一日 (一七七九年八月二三日)

近畿諸國 大風雨

攝陽奇觀 一日 五畿内 大風雨

日本震災凶謹攷 十二日 畿内 大風雨洪水

編者註(出典 不詳ナレド「續日本王代一覽」ノ如シ 但シ編者閱讀  
ノモノニハコノ記事ナシ)

安永八年七月十五日 (二七七九年八月二六日)

京都並江戸 風雨

龍耳集 十五六兩日 大風雨に而大文字火燃へ不申 依之翌十七日に相成申候

續日本王代一覽 十六日 畿内洪水破損

金地院記録 十七日風雨 薄暮催晴

安永八年七月二十三日 (二七七九年九月三日)

近畿諸國並江戸 大風雨、洪水

續日本王代一覽 五畿内 大風雨洪水

孫陽奇觀 大水

金地院記録 雨 西刻比より大風雨 戌刻過歇

(参考)

高知市誌 二十二日より二十五日まで大雨洪水 天神の森役地堤切る

泰平年表 四月より七月に至 畿内洪水

(備考)

安永八年八月二十四日 (二七七九年一〇月三日)

東海、關東、奥羽諸國 大風雨、洪水

續日本王代一覽 廿日より大雨連日 廿四日廿五日 大風雨 奥州仙

台 羽州盛岡 常陸 下野 上總等洪水 東海道筋は參州

岡崎清水 城下近郷民家悉く漂流 船を以て陸路を往來す

田島四十萬石餘を漂流す 尾州大石川洪水 鳴海驛洪水

木曾川流れ溢れ美濃尾張一圓洪水 所々橋落る

廿五日 野州日光山 大風雨

名古屋市史 廿四、五兩日の大風雨のために庄内川の水量加はり一

升の出水となり志段味上條 味噌 比良 大野木に於て

堤防潰決し 南は小田井堤を限り東は木津川 西は五條川

北は小牧邊に至る間 一面に海の如く所々民家の屋宇出

没す 二ツ帆破れて清須 津島の通路なく天白川の水浸入

して熱田 八町吸 鳴海の往來杜絶す 人畜の漂没屋舎の

流失 亦跡からず 續日本王代一覽

武江年表 廿五日 大風雨洪水 和泉橋落 日向下水道掛橋の岸廿間

程崩る 續日本王代一覽

續談海 廿五日 前日より大雨 今夕方より風雨強

因府年表 廿五日 大風

天明元年七月二日 (二七八二年八月二二日)

九州諸國 大風雨

續日本王代一覽 薩摩 大隅 日向大風

(備考)

日向國史 十二日 封内 大風雨あり 洪水海潮並に到り 農桑

を害すること甚しく 民大に飢ゆ

天明元年七月十一日 (二七八二年八月三〇日)

江戸 風雨、洪水

東京市史稿 十一日、十二日 江戸風雨す 十四日隅田川大水 千住

大橋假橋及新大橋 永代橋の一部流失し 大川橋亦損破す

(金地院記録) 十二日 雨午後暴風 諸所漏瀉 庭際作川 夜

二更風雨 雨音に「森山孝盛日記」如キモ 十二日大風雨 本

所邊洪水之由 永代橋大橋中之間損破由 大川橋モ道路止ルト

津輕凶敵記録一斑 大風 所々痛も御座候

天明二年五月四日 (二七八二年六月一四日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 四日、五日大風洪水 苗を漂する數千町 民屋崩壞

及流亡するもの二百卅三戸

(参考)

因府年表 五日 前日より大雨出水

(備考)

日本災異志 五月下旬 伊勢大風雨 松坂洪水 泰平年表

續日本王代一覽 五月 勢州松坂 大雨洪水

徳川實紀 六月 さてことし春のほどより夏にいたり淫雨やます 諸

國洪水の患少からず そが中にも伊豫 土佐の地は別て風

雨はげしく人畜 田畝 水患にかゝる事多し 海洋は風波

常よりつよく船破るゝこと百をもて數へつべし

又關東も日ごとに曇陰して五月の末より暑氣蒸がごとし

人みなくるしめりといふ

天明二年七月十八日 (二七八二年八月二六日)

江戸 風雨

金地院雜記 時々驟雨 午後陰 西刻頃より風雨 丑刻過歇 古方

大榎重門吹倒 其外無別條

(参考)

颱風調査報告 大雨洪水があつた 南島七ノ三

天明二年七月二十二日 (二七八二年八月三〇日)

記セバ七月十二日ノ風雨ニ依リ出水シタルヲ知ル可シ 雨モ其出

水シタルハ隅田川ニシテ是日直ニ出水セズ十四日ニ至リ初テ漲溢

シタルヲ觀レバ利根川上流地方ノ大風雨ニ基キタル者ナルコト明

カ也

天明元年七月二十七日 (二七八二年九月一五日)

近畿諸國 大風雨

續日本王代一覽 五畿内近國大風雨 大木多折る

孫陽奇觀 五畿内大風雨 大坂通船十六艘水入

熊野史 木の本浦大風雨 家百十六軒潰る 怪我人あり

(参考)

金地院記録 細雨 夜中沛然 曉天暴雨

天明二年二月二日 (二七八二年三月一五日)

近畿、加賀諸國並江戸 大風

續日本王代一覽 五畿内大風 北野下森大樹松二三株を吹倒す

孫陽奇觀 三日 五畿内大風雨 大坂通船破損 十六人死 川口渡

海船多く破損す

政隣記 三日 今朝之覚風に長大隅守殿奥向之方二間計倒れ 村井

又兵衛殿武具土蔵二つ崩れ 書院も及大破 深美兵庫三

十間續之長屋吹倒し 其内既存之に付馬籠 犀川馬場邊並

松も十三本吹倒し 其外諸方并松木等之破損夥敷有之

久松日記 三日 雷雨烈風 終日同然 到晚風歇

四日 翌 烈風晴

天明二年二月十八日 (二七八二年三月三一日)

陸奥國 大風

第一編 暴風雨 安永八年一(天明二年)(西曆一七七九一)七八二年)

土佐國 大風雨、洪水

日本災異志 土佐 大風洪水 比島山崩人死 御書家代略記

の往來を停禁せらる  
東京市史稿 五日より七日まで大雨し隅田川増水 新大橋永代橋損所  
を生ず 御書家代略記 金堀日記

福岡縣災異誌 二十一日 曉より大雨 二十二日大洪水 五六年来之洪水 村々破損 當村は川堤無難なり 有吉記

天明三年六月十七日 (一七八三年七月一日)

紀州災異年表 二十三日 紀ノ川洪水 備見村郷土誌

京都並關東、奥羽諸國 大風、洪水

天明二年八月二十日 (一七八二年九月二六日)

筑前、筑後、伊勢諸國並江戸 大風

久留米小史 暴風家を破り禾稼を損す

一話一言 下總國通治郡香取郡海上郡之内 去十四日夜中より十八日の夜迄大風雨にて 耕地一丈餘之洪水にて稻草腐 畑方は立枯れに相成候 其上當月六日より同七日迄 折々細成る 燒砂降候

有吉記録 夜 爰刻大風 初北より起る 暫時の間にして世上轉家多 地動する事一時半也 風止も雨頭也

武江年表 十六日大雨降續 十七日別て大雨 千住 淺草 小石川邊 出水 大川橋 柳橋墮る 小日向 大洗堰 石垣崩れ 神田上水切る

宇治山田市史 廿日夜暴風雨あり 外宮御垣御門等が顛倒し 町家にも破損があつた 高林五光日記

續日本王代一覽 十七日 關東諸州洪水 十八日より大井川及其餘川々往來止る 京師大風 四條納涼休止す

東京市史稿 廿一日 江戸風雨す 多少の被害有り 金堀日記

平山日記 十八日 大風 作物吹ちらし捨り候所も多御座候

政隣記 廿一日 今朝之風雨に而江戸中破損夥 此方三御邸并深川御蔵屋敷 且兩御寺等之損所 當分之御修費代銀四十貫餘之御費與云之

天明三年六月二十八日 (一七八三年七月二七日)

(備考) 堺市史 天明二年 此年は大風屢起つて廻三箇村等 木綿の檢見に實綿一つもなしと云はるゝ程の慘めさであつた

北國並西國海上 大風

天明二年九月九日 (一七八二年一〇月一五日)

續日本王代一覽 北國西國等の海上 大風 市舶多破損す

江戸 大風雨

天明卯辰築 廿八日 北風大冷 廿九日 東北風大雨 東京市史稿 陰雨 夜中沛然 颯風 暮雨 金堀日記 廿九日 大風雨 備見村郷土誌

徳川實紀 このほど暴風雨あり 大川の水溢る よつて新大橋永代橋

天明三年七月二十三日 (一七八三年八月二〇日)

筑後、陸奥諸國 大風

福岡縣災異誌 大風 夜四ツ時より起り八ツ時鎮る 潰家多し 金堀日記

天明三年十月十日 (一七八三年二月四日)

天明年度凶歳日記 廿三日大風 病脊東風のことにて作毛不殘損し申候 尤も東根通り並に野木 木筒 廣田 龜田邊 赤石の澤目病脊の當らぬ村所三四歩迄の稔りも有之候得共 青森四ヶ組金木より下並に三新田は皆無にて一粒一杯の贈足なり兼(下略)

隱岐國 大風 凶年歳土穂 十日四時より大風起り 諸作不殘暴作となりぬ

日本災異志 二十四日 北陸西海 大風雨洪水 野史 風俗誌

天明四年八月一日 (一七八四年九月一五日)

天明三年八月一日 (一七八三年八月二八日)

筑前、陸奥諸國並北海道 大風

鎌倉 大風 天明紀聞 朝日 相州鎌倉海邊大荒にて光明寺門前之人家五十軒跡かたなし 又漁船二十六艘空中へ巻きあげられ悉く破損しはなれくゝに相成近邊へ落散 補陀落寺之伽藍并境内之人家 是又同様まき揚げ 或はつぶれ僅に一棟遺れるよし注進あり

福岡縣災異誌 大風 天明年度凶歳日記 夜八ツ時より大風 翌二日の夜半まで吹き通し候 長濱通りは 別して強く 出来島など粟 大豆は言ふに及ばず 岡作は残らずもぎとられ 秋田種は最中花の時分なれば是又残らず吹き散らされ 一粒の稔も之れ無く 打穀き凡そ三ヶ年の不作

天明三年九月二十五日 (一七八三年一〇月二〇日)

北海道史 二日 大風 福山港にて破船四十四艘あり

北國海上 大風 日本災異志 北國海上大風 船船多損壞 御書家代略記

陸奥國 大風雨、洪水 八戸藩史稿 夜 戌の刻より非常の暴風雨吹荒み大木を倒し人家を破壊す 其猛勢言語に絶へたり 爲に殿中大破南御門吹倒れ 家中町家の家屋垣屏の損害數ふるに遑あらず 柱屋根は袖より吹抜けて飛散し人々呆然爲す所を知らず 婦女幼者は恐懼して戰慄するのみ 同爰の刻に至 諸川溢れて湊新町の民家全部流失す 橋梁の被害最多く 湊橋大橋新井田橋十日市橋 赤味堂橋黒板橋新井田少橋共に大小十八ヶ所落橋せり 是川村に於ては風浪橋妻の神橋金ヶ坂橋堀田ノ袋橋中居橋嶋守橋の七橋落 松館にて三ヶ所落つ田代村にては晴山通橋晴山澤橋金山澤橋落つ 新井田川の洪

天明三年十月二日 (一七八三年一〇月二七日)

天明四年八月二十四日 (一七八四年一〇月八日)

北國、九州海上 大風 續日本王代一覽 北國九州洋中 大風

一七三

水にて類家村下迄浸水せり 其他溜池堀溝等の缺壊夥しく八戸附近村落の神嶋(嶋とは神粟を刈取り七把を結束したるもの一嶋と云) 三萬八千九百九十九嶋 粟二百十二嶋を流す 津村にては船蓋十一口破損 漁船船小網船共に十八艘 長苗代通の落橋十ヶ所 用水堰破損十三ヶ所 稗一萬四千五百嶋 粟百嶋 櫻米通 橋廿一 堤防一ヶ所破損 流家五軒 稗千七百二十嶋 道路大破四ヶ所 久慈通落橋 大小百三十八ヶ所 道路十十七ヶ所 潰家七軒 流家五軒 船流失大小二十九艘 稗四萬五千三百四十四嶋 粟三百十二嶋 諸作物大方は浸水して收穫皆無之如風水害は過去百年來未曾有の慘狀なりし 損毛高の報左に  
一、高二萬石之内 一萬五千三十石七斗八升  
(十、誤記カ)

天明四年九月十八日 (一七八四年一〇月三十一日)

陸奥國 大風

天明年度凶歳日記 十日より十七日迄風雨大雪

十八日の夜大風 處々風折樹木等多く潰れ家も之れあり候

天明五年七月十一日 (一七八五年八月一五日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 大風洪水

天明六年五月六日 (一七八六年六月二日)

讃岐國 大風、洪水

讃岐災異年表 大風洪水

天明六年六月二十六日 (一七八六年七月二日)

大風、大雨

攝陽奇觀 大風雨 淀川通船二艘覆る 十六人死す

天明六年八月二十九日 (一七八六年九月二日)

山陰、近畿、北陸諸國 大風雨、洪水

因府年表

洪水 乾の風強く 大雨降り翌朝に及んで千代川満水し 諸所土手切れ圓通寺村の人家一軒流失す 府下川外の水嵩 地の高下に因り五尺より一丈に及べる 所あり

因伯難記 西北風強く 九月朝日 大洪水

日本災異志 若狭丹後大風 續長元代書記

岡山縣通史 美作洪水 水害書

攝陽奇觀 大風

佐用郡誌 各地に大洪水を起す

西成郡史

大廣村多賀川洪水 被害九町七反歩 山崩十五ヶ所に及ぶ 大風高沙高浪ありて新田方面損所多し 是に由て西島新田支配人善助 和助の兩人より九月某日堤方役所に左の通願出でたり

一、堤防腹崩れ 三百廿間餘

一、堤防大崩れ 七十三間餘

右者去る八月廿九日 大風高沙高浪にて御國役堤大破損 仕候に付 御普請御願奉申上候 西島新田書記

宇治山田市史 大風雨あり 内宮瑞垣等壊れた

飛騨編年史要 飛州大風 稻作被害多し

越中書事記

未の刻頃大風雨 近來無之事 西風甚雨也 御領神通川 井田川 山田川洪水 野飼村より南の方川除押切凡間 數一萬五千間餘 入川數十ヶ所 野積谷之内山中民家轉倒 大木倒山崩流入人馬死亡 有水損風損 都而損毛正米に而 一萬三千餘石と云々

(備考)

堺市史 八月 大風あり 作物の損害夥し  
富山市史 八月 神通川大に出水したり

天明六年九月六日 (一七八六年九月二七日)

因幡、伯耆、讃岐、伊勢諸國並江戸 大風、洪水

因府年表 大風雨 國安村の農家其外在々の小家多く流失し 人民溺死者者少からず

因伯難記 六日の夕 西北風強く國安村の農家流れ 其他小家流亡す

讃岐災異年表 七日 洪水 潮汐犯平地

宇治山田市史 七日又風雨洪水あつて板垣が倒れた 神延年

東京市史稿 七日 烈風 全境毀滅記

原結風土年表 急雨烈しかりしか釜野澤奥に明和にくつれ藪敷町の中は立木の梢端に見ゆる量に満有て長沼の如を押破 其洪水の來れる也 新町より役所前へ舟にて通し 下新町番屋流れ或は大石に繋有し七八十石船も汐逆強 古道川迄押上り 小目名の島へ方面四五尺の石を揚 材木春木棚は勿論山々よりは枯木は素より生木は根を曳 釣屋濱より正津川迄漂木山を築て累備たり

天明七年二月 (一七八七年三月二〇日一四月一七日)

第一編 暴風雨 天明四年一天明八年(西曆一七八四一七八八年)

越中國 大風

富山市史 夜半より南風強烈 翌日に涉りて止らず家屋破損甚しく 市内の家三戸吹潰さる

備考註(日附、關脫カ又ハ誤記アルモノ歟 又天明八年二月十四日 二大風アリテ潰家三戸トアリ成ハ重複セルモノカ)

天明七年三月二十二日 (一七八七年五月九日)

伊勢國 大風雨

宇治山田市史 大風雨あり 内宮古殿瑞垣等が顛倒した 神延年

天明七年八月二十九日 (一七八七年一〇月一〇日)

若狭國 大風

後見草 又北陸道若狭國小濱といふ所にて西北の風朝より烈しく 雨頻りに降けるか午の刻過北空すこし晴かたにて風は止 すと覺しきにさわなくして 同半刻又黒雲おひ重なり山 鳴海荒く波の高さ一丈餘りに打上て俄に西風どつと吹立 並ぶ家々の妻戸をしむる間もなく屋根をまくり垣を倒し 小家の限りは吹潰し沖に繋く船共は碇を切て陸に吹付小 き哨船の類ひは屋の棟までも上たるよし かつる風勢成し に寄地卑の方に水おし入 田島もあまた損せしと也 凡此 一國にても二尺廻りの立木より五尺に至る大木を十四五 萬餘本まで打折侍りし由其外五畿の間の國々大風吹ぬ所 なく田作の害と成けるよし

天明八年二月十四日 (一七八八年三月二二日)

越中、加賀諸國 大風